

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第34集

中西遺跡Ⅱ

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅺ－

2019

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第34集

なか にし い せき
中 西 遺 跡 II

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書XI－

2019

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、熊谷市では市民が暮らしやすく、生活環境の豊かさを実感できる土地利用を図ることを目的に土地区画整理事業を進めており、市内上之を中心とした地区で進めている上之土地区画整理事業もその一つであります。事業地内には事前の試掘調査により、原始・古代から中世に至るおびただしい遺跡が確認されました。熊谷市教育委員会では遺跡の重要性に鑑み、関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりましたが、土地区画整理事業上やむを得ず計画等の変更ができない街路築造工事等に関しては、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることとなりました。

本書は、平成22～24年度に発掘調査を行った中西遺跡（旧箱田氏館跡）について報告するものであります。中西遺跡の調査報告は、前年度に続き二回目となりますが、今回は縄文時代後・晩期の遺物包含層と出土遺物について、その成果をまとめました。遺物包含層からは、土器など大量の遺物が出土し、熊谷市東部では、諏訪木遺跡とともに最古段階となる縄文人たちの痕跡が確認され、大変貴重な成果を得ることが出来ました。今後、本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護の趣旨を尊重され、御理解、御協力を賜りました熊谷市都市整備部都市計画課、土地区画整理中央事務所、並びに地元関係者に厚くお礼申し上げます。

平成31年3月

熊谷市教育委員会
教育長 野原 晃

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市中西四丁目2400番1他に所在する中西遺跡（埼玉県遺跡番号59-114）の発掘調査報告書であり、二分冊に分けたうちの『中西遺跡Ⅱ』として縄文時代後・晩期の遺物包含層編を収録したものである。なお、土偶については、『中西遺跡Ⅰ』で報告済である。
- 2 本調査は、熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。
- 3 本事業の組織は、第Ⅰ章3のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、下記のとおりである。
平成22年度：平成23年1月5日～平成23年3月31日
平成23年度：平成24年1月10日～平成24年2月29日
平成24年度：平成25年2月1日～平成25年3月15日
整理・報告書作成期間は、平成25年4月1日から平成31年3月22日まで断続的に実施した。
- 5 発掘調査の担当は、蔵持俊輔が、本書の執筆・編集は、熊谷市文化財保護審議会委員小野美代子氏による御指導のもと、松田 哲が行った。
- 6 発掘調査における写真撮影は蔵持が、遺物の写真撮影は、松田が行った。
- 7 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。
- 8 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略、五十音順）

青木克尚 阿部常樹 磯崎 一 市川 修 内田勇樹 大井教寛 大賀克彦 大島安子
大谷 徹 大屋道則 小勝幸夫 小川正之 柿沼幹夫 梶ヶ谷真理 金子直行 小林 高
坂本和俊 佐藤康二 澤口和正 島野美乃里 清水康守 菅谷浩之 知久裕昭 蛭間健吾
福田 聖 細田 勝 武藤博士 山岸良二 吉田 稔 渡辺清志
埼玉県教育局文化資源課 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡 例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

- 1 調査区全測図及び出土状況などの挿図縮尺は、次のとおりであるが、それ以外のものについては、個別に示した。

調査区全測図… 1 / 500

出土状況図… 1 / 600

- 2 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

縄文土器復元… 1 / 5

縄文土器破片… 1 / 4

赤彩土器… 1 / 3

土製耳飾り… 1 / 2

土製円盤… 1 / 4

石器・石製品… 1 / 2 ・ 1 / 4

- 3 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。なお、各遺物番号下にある数字及び文字は、出土位置を表している。

赤彩：

- 4 遺物拓影図のうち、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。
- 5 写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
I 発掘調査の概要	1
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	2
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	3
II 遺跡の立地と環境	5
III 遺跡の概要	10
1 調査の方法	10
2 検出された縄文時代後・晩期の遺物包含層と遺物	10
IV 縄文時代後・晩期遺物包含層出土状況と遺物	14
1 加曽利B式精製土器	14
2 高井東式精製土器	17
3 後・晩期安行式精製土器	19
4 粗製土器	22
5 底部・接合～台部・壺形土器・注口部他	28
6 赤彩土器	29
7 ミニチュア土器	30
8 土製耳飾り	30
9 土製円盤	31
10 石器・石製品	32
V 調査のまとめ	126

挿 図 目 次

第 1 図 埼玉県の地形	5
第 2 図 周辺遺跡分布図	7
第 3 図 調査地点位置図	11
第 4 図 年度別調査区割図	11
第 5 図 調査区全測図・縄文時代後・晩期遺物包含層出土状況	12
第 6 図 加曽利B式精製土器出土状況	33
第 7 図 高井東式精製土器出土状況	33
第 8 図 後・晩期安行式精製土器出土状況	34
第 9 図 粗製土器出土状況 (1)	34
第 10 図 粗製土器出土状況 (2)	35
第 11 図 底部・接合～台部・壺形土器・注口部出土状況	35
第 12 図 ミニチュア土器・土製耳飾り・円盤出土状況	36
第 13 図 石器・石製品出土状況	36
第 14 図 出土土器 (1)	37
第 15 図 出土土器 (2)	38
第 16 図 出土土器 (3)	39
第 17 図 出土土器 (4)	40
第 18 図 出土土器 (5)	41
第 19 図 出土土器 (6)	42
第 20 図 出土土器 (7)	43
第 21 図 出土土器 (8)	44
第 22 図 出土土器 (9)	45
第 23 図 出土土器 (10)	46
第 24 図 出土土器 (11)	47
第 25 図 出土土器 (12)	48
第 26 図 出土土器 (13)	49
第 27 図 出土土器 (14)	50
第 28 図 出土土器 (15)	51
第 29 図 出土土器 (16)	52
第 30 図 出土土器 (17)	53
第 31 図 出土土器 (18)	54
第 32 図 出土土器 (19)	55

第 33 图	出土土器 (20)·····	56	第 67 图	出土土器 (54)·····	90
第 34 图	出土土器 (21)·····	57	第 68 图	出土土器 (55)·····	91
第 35 图	出土土器 (22)·····	58	第 69 图	出土土器 (56)·····	92
第 36 图	出土土器 (23)·····	59	第 70 图	出土土器 (57)·····	93
第 37 图	出土土器 (24)·····	60	第 71 图	出土土器 (58)·····	94
第 38 图	出土土器 (25)·····	61	第 72 图	出土土器 (59)·····	95
第 39 图	出土土器 (26)·····	62	第 73 图	出土土器 (60)·····	96
第 40 图	出土土器 (27)·····	63	第 74 图	出土土器 (61)·····	97
第 41 图	出土土器 (28)·····	64	第 75 图	出土土器 (62)·····	98
第 42 图	出土土器 (29)·····	65	第 76 图	出土土器 (63)·····	99
第 43 图	出土土器 (30)·····	66	第 77 图	出土土器 (64)·····	100
第 44 图	出土土器 (31)·····	67	第 78 图	出土土器 (65)·····	101
第 45 图	出土土器 (32)·····	68	第 79 图	出土土器 (66)·····	102
第 46 图	出土土器 (33)·····	69	第 80 图	出土土器 (67)·····	103
第 47 图	出土土器 (34)·····	70	第 81 图	出土土器 (68)·····	104
第 48 图	出土土器 (35)·····	71	第 82 图	出土土器 (69)·····	105
第 49 图	出土土器 (36)·····	72	第 83 图	出土土器 (70)·····	106
第 50 图	出土土器 (37)·····	73	第 84 图	出土土器 (71)·····	107
第 51 图	出土土器 (38)·····	74	第 85 图	出土土器 (72)·····	108
第 52 图	出土土器 (39)·····	75	第 86 图	出土土器 (73)·····	109
第 53 图	出土土器 (40)·····	76	第 87 图	出土土器 (74)·····	110
第 54 图	出土土器 (41)·····	77	第 88 图	出土土器 (75)·····	111
第 55 图	出土土器 (42)·····	78	第 89 图	出土土器 (76)·····	112
第 56 图	出土土器 (43)·····	79	第 90 图	出土土器 (77)·····	113
第 57 图	出土土器 (44)·····	80	第 91 图	出土土器 (78)·····	114
第 58 图	出土土器 (45)·····	81	第 92 图	出土土器 (79)·····	115
第 59 图	出土土器 (46)·····	82	第 93 图	赤彩土器·····	116
第 60 图	出土土器 (47)·····	83	第 94 图	土製耳飾 <small>り</small> ·····	116
第 61 图	出土土器 (48)·····	84	第 95 图	土製円盤·····	117
第 62 图	出土土器 (49)·····	85	第 96 图	出土石器·石製品 (1)·····	118
第 63 图	出土土器 (50)·····	86	第 97 图	出土石器·石製品 (2)·····	119
第 64 图	出土土器 (51)·····	87	第 98 图	出土石器·石製品 (3)·····	120
第 65 图	出土土器 (52)·····	88	第 99 图	出土石器·石製品 (4)·····	121
第 66 图	出土土器 (53)·····	89	第 100 图	出土石器·石製品 (5)·····	122

挿表目次

第 1 表 周辺遺跡一覧表…………… 8	第 4 表 土製円盤観察表……………123
第 2 表 検出遺構時代・時期一覧表……………12	第 5 表 石器・石製品観察表……………124
第 3 表 土製耳飾り観察表……………123	

図版目次

図版 1 調査区全景（上が北西 H23年度調査）	図版 6 176-145 G No.66出土状況（H22年度 B 区）
調査区遠景（北東方向 H23年度調査）	180-148 G No.81出土状況（H22年度 A 区）
調査区遠景（南西方向 H23年度調査）	180-148 G No.139出土状況（H22年度 A 区）
調査区全景（北東から H22年度 A 区）	176-145 G No.178出土状況（H22年度 B 区）
調査区全景（南西から H22年度 A 区）	178-145 G No.229出土状況（H22年度 A 区）
図版 2 調査区全景（南西から H22年度 B 区）	181-148 G No.251出土状況（H22年度 A 区）
調査区全景（上が北西 H23年度 A 区）	178-148 G No.297出土状況（H22年度 A 区）
調査区全景（上が北西 H23年度 B 区）	
調査区全景（南西から H24年度調査）	
遺物出土状況	
図版 3 177-181-145-148 G 遺物出土状況（H22年度 A 区）	
180-148 G 付近遺物出土状況（H22年度 A 区）	
181-148・149 G 遺物出土状況（H22年度 A 区）	
図版 4 178-146 G 遺物出土状況（H22年度 A 区）	
175・176-146・147 G 遺物出土状況（H22年度 B 区）	
176-144・145 G 遺物出土状況（1）（H22年度 B 区）	
図版 5 176-144・145 G 遺物出土状況（2）（H22年度 B 区）	
181・182-148・149 G 遺物出土状況（H23年度 A 区）	
169・170-141・142 G 遺物出土状況（H23年度 B 区）	
図版 6 176-145 G No.65出土状況（H22年度 B 区）	
	遺物
	縄文土器・土製耳飾り・土製円盤
	図版 7 出土土器（1） 第14図1～5・7・8
	図版 8 出土土器（1） 第14図9～11
	出土土器（2） 第15図12～14
	図版 9 出土土器（2） 第15図15～20
	図版10 出土土器（2） 第15図21・23
	出土土器（3） 第16図24～26・28
	図版11 出土土器（3） 第16図29～32・34・35
	出土土器（4） 第17図36
	図版12 出土土器（4） 第17図37～44
	図版13 出土土器（4） 第17図45・46
	出土土器（5） 第18図47～50・52・53
	図版14 出土土器（5） 第18図54～59・62・63
	図版15 出土土器（5） 第18図64～69
	図版16 出土土器（6） 第19図72～78

- | | | | | |
|------|-----------|------------------|-----------|----------------------------|
| 图版17 | 出土土器 (6) | 第19图79·80 | 出土土器 (21) | 第34图242·244~247 |
| | 出土土器 (7) | 第20图81~85 | 图版37 | 出土土器 (22) 第35图249~254 |
| 图版18 | 出土土器 (7) | 第20图86~90 | 图版38 | 出土土器 (22) 第35图256 |
| | 出土土器 (8) | 第21图91 | | 出土土器 (23) 第36图263~268 |
| 图版19 | 出土土器 (8) | 第21图93~100 | 图版39 | 出土土器 (24) 第37图270·271·274· |
| 图版20 | 出土土器 (9) | 第22图102·105~110 | | 278·281·283· |
| 图版21 | 出土土器 (9) | 第22图111·112 | | 285·287·288· |
| | 出土土器 (10) | 第23图113~117 | | 292 |
| 图版22 | 出土土器 (10) | 第23图118~124 | 图版40 | 出土土器 (25) 第38图296·297 |
| | 出土土器 (11) | 第24图126 | | 出土土器 (26) 第39图327·328·330· |
| 图版23 | 出土土器 (11) | 第24图128~133 | | 331·333·334 |
| 图版24 | 出土土器 (11) | 第24图134~136 | 图版41 | 出土土器 (33) 第46图538~574 |
| | 出土土器 (12) | 第25图138~141 | | 出土土器 (34) 第47图575~604 |
| 图版25 | 出土土器 (12) | 第25图142~145·147 | 图版42 | 出土土器 (35) 第48图605~628 |
| | 出土土器 (13) | 第26图152~154 | | 出土土器 (36) 第49图629~657 |
| 图版26 | 出土土器 (13) | 第26图155·156·158· | 图版43 | 出土土器 (37) 第50图658~680 |
| | | 161~164 | | 出土土器 (38) 第51图681~703 |
| 图版27 | 出土土器 (13) | 第26图165~167 | 图版44 | 出土土器 (39) 第52图704~730 |
| | 出土土器 (14) | 第27图168~170 | | 出土土器 (40) 第53图731~758 |
| 图版28 | 出土土器 (14) | 第27图171~173·175 | 图版45 | 出土土器 (41) 第54图759~786 |
| | 出土土器 (15) | 第28图177·178 | | 出土土器 (42) 第55图787~821 |
| 图版29 | 出土土器 (15) | 第28图179~182·184· | 图版46 | 出土土器 (43) 第56图822~852 |
| | | 185 | | 出土土器 (44) 第57图853~874 |
| 图版30 | 出土土器 (15) | 第28图186·187 | 图版47 | 出土土器 (45) 第58图875~903 |
| | 出土土器 (16) | 第29图188~193 | | 出土土器 (46) 第59图904~921 |
| 图版31 | 出土土器 (16) | 第29图194·196·197 | 图版48 | 出土土器 (47) 第60图922~946 |
| | 出土土器 (17) | 第30图203~205 | | 出土土器 (48) 第61图947~968 |
| 图版32 | 出土土器 (17) | 第30图206·207·209~ | 图版49 | 出土土器 (49) 第62图969~986 |
| | | 211·213 | | 出土土器 (50) 第63图987~1006 |
| 图版33 | 出土土器 (18) | 第31图214~220 | 图版50 | 出土土器 (51) 第64图1007~1031 |
| 图版34 | 出土土器 (18) | 第31图221·222 | | 出土土器 (52) 第65图1032~1060 |
| | 出土土器 (19) | 第32图223~225·227· | 图版51 | 出土土器 (53) 第66图1061~1092 |
| | | 228 | | 出土土器 (54) 第67图1093~1109 |
| 图版35 | 出土土器 (19) | 第32图229·230 | 图版52 | 出土土器 (55) 第68图1110~1142 |
| | 出土土器 (20) | 第33图232~236 | | 出土土器 (56) 第69图1143~1179 |
| 图版36 | 出土土器 (20) | 第33图237 | 图版53 | 出土土器 (57) 第70图1180~1211 |

出土土器 (58) 第71図1212~1233
図版54 出土土器 (59) 第72図1234~1260
出土土器 (60) 第73図1261~1285
図版55 出土土器 (61) 第74図1286~1312
出土土器 (62) 第75図1313~1343
図版56 出土土器 (63) 第76図1344~1373
出土土器 (64) 第77図1374~1403
図版57 出土土器 (65) 第78図1404~1432
出土土器 (66) 第79図1433~1455
図版58 出土土器 (67) 第80図1456~1478
出土土器 (68) 第81図1479~1505
図版59 出土土器 (69) 第82図1506~1521
出土土器 (70) 第83図1522~1538
図版60 出土土器 (71) 第84図1539~1555
出土土器 (72) 第85図1556~1581
図版61 出土土器 (73) 第86図1582~1603
出土土器 (74) 第87図1604~1622
図版62 出土土器 (75) 第88図1623~1637
出土土器 (76) 第89図1638~1654
図版63 出土土器 (77) 第90図1655~1675
出土土器 (78) 第91図1676~1694

図版64 出土土器 (79) 第92図1697・1700・1702・
1708・1715・1716・
1721・1724・1735・
1742

赤彩土器 第93図1746~1761

土製耳飾り 第94図1~12

図版65 土製円盤 第95図1~60

石器・石製品

図版66 出土石器・石製品 (1) 第96図1~16

出土石器・石製品 (2) 第97図17~21

図版67 出土石器・石製品 (2) 第97図22~31

出土土器・石製品 (3) 第98図32~39

図版68 出土石器・石製品 (3) 第98図40・41

出土石器・石製品 (4) 第99図42~47・
49・50

出土石器・石製品 (5) 第100図51~64

図版69 出土石器・石製品 (4) 第99図48

出土石器・石製品 (5) 第100図65~68

遺物包含層出土辰砂

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

昭和61年6月6日付け61熊都発第148号で、熊谷市長より上之第一土地区画整理事業（現上之土地区画整理事業）地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いに関する照会が提出された。これを受け、熊谷市教育委員会は、事業地内全域に弥生時代から平安時代の遺跡が所在する地域であり、工事に先立って発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、平成7年11月13日から平成8年1月19日にかけて遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、弥生時代から近世にかけての集落跡及び墓が広範囲に分布することが確認された。この結果を踏まえて、平成8年2月9日付け熊教社発第865号で熊谷市教育委員会教育長から熊谷都市計画事業上之区画整理事業代表者熊谷市長あてに次のように通知した。

事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（前中西遺跡、藤之宮遺跡、諏訪木遺跡、箱田氏館跡、上之古墳群）が所在する。当該地は現状保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること、なお、発掘調査の実施については、教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。文化財保護法第94条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、代表者熊谷市長より平成21年11月17日付け熊土中発第81号及び平成23年6月7日付け熊土中発第40号で提出された。このことを受けて、平成22年1月5日付け教生文第4-969号及び平成23年8月15日付け教生文第4-495号にて埼玉県教育委員会教育長より発掘調査実施の通知があった。

発掘調査は、平成23年1月から3月まで、平成24年1月から2月まで、平成25年2月から3月までの計3回に分けて熊谷市教育委員会が実施した。発掘調査に関わる熊谷市教育委員会及び埼玉県教育委員会からの通知は、以下のとおりである。

平成21年度 平成21年12月15日付け熊教社発第320号
平成22年1月5日付け教生文第5-969号
平成22年度 平成22年12月27日付け熊教社発第1661号
平成23年度 平成23年7月29日付け熊教社発第1332号
平成23年8月15日付け教生文第5-495号
平成23年12月27日付け熊教社発第1640号
平成24年度 平成25年1月28日付け熊教社発第1727号

なお、上記の通知・届出には、「箱田氏館跡」の名称が使用されている。しかし、発掘調査の成果と遺跡名称のイメージが不一致であり、混乱が生じたため、その状況を鑑みて「箱田氏館跡」とほぼ重複する範囲で「中西遺跡」を新たに設定し、本発掘調査の成果は「中西遺跡」に帰属するものとして整理を図った。そのため、発掘調査は「箱田氏館跡」として実施したが、本報告は「中西遺跡」として報告するものである。

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は、平成23年1月から平成25年3月まで、計3回にわたって断続的に実施した。調査期間及び調査面積は、以下のとおりである。

第1次調査 期間：平成23年1月5日～3月31日 面積：800㎡

第2次調査 期間：平成24年1月10日～2月29日 面積：290㎡

第3次調査 期間：平成25年2月1日～3月15日 面積：240㎡

調査の手順は、原則として重機により遺構確認面まで表土を掘削し、その後人力による遺構確認作業を行った。検出した遺構は、順次掘り下げていき、遺構平面・断面図の作成、完掘作業、個別の写真撮影を行った。なお、これらの成果については、『中西遺跡Ⅰ』（熊谷市教育委員会2018）として報告済である。

各遺構の調査終了後、今回報告する縄文時代後・晩期の遺物包含層の調査に着手した。遺物はグリッド毎にドット図を作成し、取り上げ、写真撮影を行った。そして、最後に調査区全景の写真撮影を行い、器材等を撤収して現場における作業を終了した。

第1次調査については、排出土の置き場等を確保する都合から、調査を前期（南西側：A区）と後期（北東側：B区）に分けて、南西側から実施した。後期調査については、平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、被害はなかったものの、余震による危険が懸念されたため、安全面を考慮して限定的な調査とせざるを得なかった。第2次調査は、調査地点が2つに分かれていたことから南西側をA区、北東側をB区として同時に実施した。

本遺跡では、『中西遺跡Ⅰ』で報告した第2号周溝墓の溝内土坑から副葬品などが検出されたこと、第1次調査で多大な成果が得られていたことなどから新聞発表を行い、平成24年2月26日に遺跡見学会を実施したところ、200名を超える見学者が来跡し、市内外の文化財に対する関心の高さを窺い知ることができた。

(2) 整理・報告書作成作業

整理・報告書作成作業は、遺構編として報告済の『中西遺跡Ⅰ』と今回報告する縄文時代後・晩期遺物包含層編である本報告も含め、平成25年度から平成30年度まで断続的に実施した。

本報告の整理・報告書作成作業は、平成29年度までに遺物の洗浄・注期・復元・選別が終了し、平成30年度は、実測・拓本の一部が残っていたため、その作業から開始した。遺物の実測・拓本作業終了後は、トレースに着手し、トレース終了後、時期別に分類し、版組を行い、あわせて出土状況図の作成も行った。図版作成後は、遺物の写真撮影、写真図版の割付け、原稿執筆、編集作業を行った。そして、印刷業者選定の後、報告書の印刷に入り、数回の校正を行い、3月中旬に報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市教育委員会

(1) 発掘調査

平成22～24年度

教育長	野原 晃
教育次長	藤原 清 (平成22年度)
	鯨井 勝 (平成23年度～)
社会教育課長	斉木 千春 (平成22・23年度)
	岩上 精純 (平成24年度)
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	小林 英夫 (平成22年度)
	根岸 敏彦 (平成23年度～)
社会教育課副課長兼文化財保護係長	新井 端 (平成22年度)
	森田 安彦 (平成23年度～)
社会教育課文化財保護係主幹	吉野 健
主査	鯨井 敬浩 (～平成23年6月)
主査	杉浦 朗子 (平成23年度～)
主査	松田 哲 (平成23年度～)
主任	松田 哲 (平成22年度)
主任	蔵持 俊輔
主事	山下 祐樹

(2) 整理・報告書作成事業

平成25～30年度

教育長	野原 晃
教育次長	鯨井 勝 (平成25年度)
	米澤ひろみ (平成26～28年度)
	正田 知久 (平成29年度)
	小林 教子 (平成30年度)
社会教育課長	岩上 精純 (平成25・26年度)
	山崎 実 (平成27・28年度)
	鶴田 敏男 (平成29年度～)
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	根岸 敏彦 (平成25年度)
	森田 安彦 (平成26～28年度)
	吉野 健 (平成29年度～)
社会教育課副課長兼文化財保護係長	森田 安彦 (平成25年度)

	吉野 健 (平成26～28年度)
	新井 端 (平成29年度)
社会教育課文化財保護係長	松田 哲 (平成30年度)
社会教育課文化財保護係主査	杉浦 朗子 (平成25・26年度)
主査	松田 哲 (平成25～29年度)
主査	星 祥子 (平成29年度～)
主査	小島 洋一 (平成26年度～)
主査	蔵持 俊輔 (平成27年度～)
主任	蔵持 俊輔 (平成25・26年度)
主任	山下 祐樹 (平成26年度～)
主任	腰塚 博隆 (平成26年度～)
主任	金子 正之 (平成27・28年度)
主任	新井 端 (平成30年度)
主事	山下 祐樹 (平成25年度)
主事	腰塚 博隆 (平成25年度)
主事	武部 喜充 (平成29年度～)
主事	島村 範久 (平成29年度～)
主事	大野美知子 (平成29年度～)
事務員	武部 喜充 (平成28年度)
事務員	島村 範久 (平成28年度)
事務員	大野美知子 (平成28年度)
発掘調査員	原野 真祐 (平成25・26年度)
事務嘱託	原野 真祐 (平成27年度)
事務嘱託	山崎 和子 (平成28・29年度)

II 遺跡の立地と環境

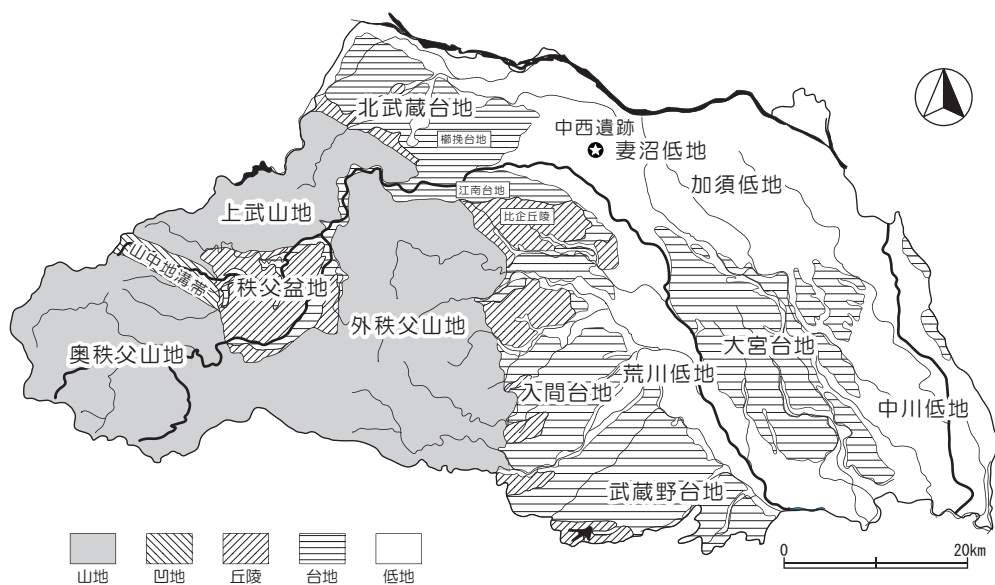
熊谷市は、埼玉県北部に位置する総面積159.82km²の市であり、県北最大の人口を有する。市の北側には利根川、南側には荒川がそれぞれ西から南東方向に流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には、西側に櫛引台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第1図）。

櫛引台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東はJR高崎線籠原駅から北へ約2kmの西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mを測り、妻沼低地に向かって緩やかに下る。櫛引台地の東側には沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新期荒川扇状地が広がる。新期荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

今回報告する中西遺跡は、その新期荒川扇状地の扇端部、標高24m前後に立地している。遺跡は、熊谷市中西四丁目に所在し、JR高崎線熊谷駅からは北東へ約1km、荒川からは北へ約2km、利根川からは南へ約7kmの距離にある。

次に中西遺跡周辺の歴史的環境について概観する（第2図）。

本遺跡周辺では、縄文時代後期から遺跡が確認されている。本遺跡の東約1kmに所在する諏訪木遺跡（5）では、熊谷市遺跡調査会による調査（熊谷市遺跡調査会2001）や埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002・2007）により、本遺跡と同じく後期中葉の加曽利B式期から晩期中葉の安行3d式までの遺構・遺物が確認されている。特に後者の調査では、遺構に伴って大量の遺物が出土し、集落跡の存在が明らかとなっている。当段階の遺跡は、この他にも市北部の妻沼低地上に西城切通遺跡（37）、場違ヶ谷戸遺跡（42）などがある。晩期中葉以降は、遺跡が途絶えてしまうが、櫛引台地北端に立地する深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）では、晩期最終末の浮線文土器が多数検出されている。遺構からの検出ではなかったが、次代へのつながりがみとれる資料である。



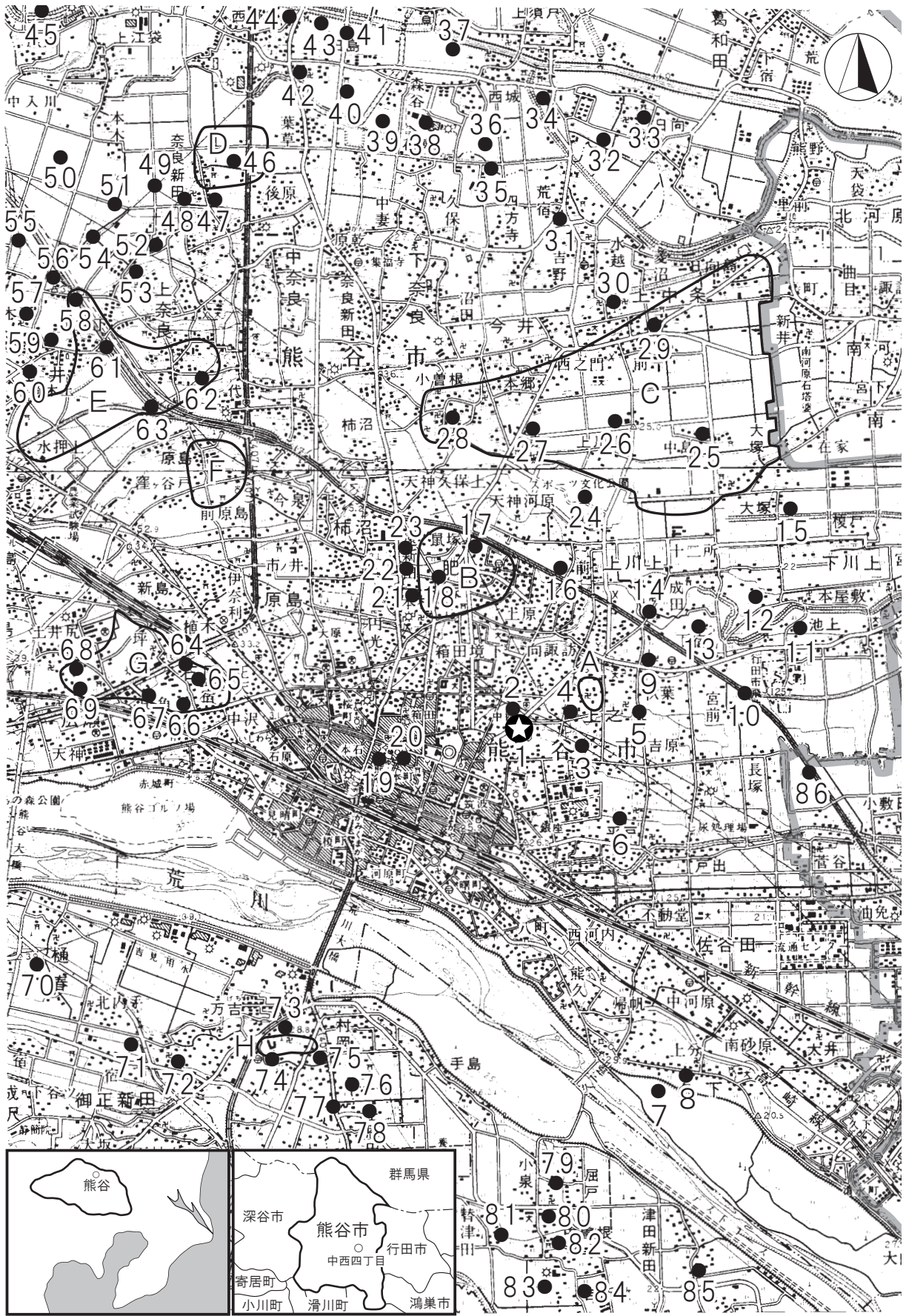
第1図 埼玉県の地形

弥生時代は、まず初期段階の前期末から中期前半は、隣接する藤之宮遺跡（4）で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。当段階の遺跡は、櫛引台地直下、ないし妻沼低地北部の低地上に集中し、横間栗遺跡、飯塚遺跡、飯塚南遺跡、先の深谷市上敷免遺跡（いずれも地図未掲載）などで再葬墓が確認されているにすぎない。なお、上敷免遺跡では包含層からであるが、県内初の遠賀川式土器の壺の胴部片が出土している。

中期中葉になると、これまでの状況と一変して集落が本遺跡周辺に集中して出現する。東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡（10）、その墓域とされ、最古段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡（86）、後期前半まで長期間続く前中西遺跡（3）などが出現し、本格的な農耕集落が展開される。中期後半は、前段階に続いて営まれる前中西遺跡の他に諏訪木遺跡や北島遺跡（24）などが出現する。特に前中西遺跡は、これまでの成果から当地域における拠点集落であることが判明しており、中期後半以降、長野県北部を中心とする栗林式土器文化圏の影響を強く受けるようになり、長野県外では初の事例となった礫床木棺墓や大阪湾型銅戈を忠実に模倣した全国初の石戈などが確認されている。北島遺跡では、大規模集落の他に水田や水路、堰などの生産域も確認されており、前中西遺跡とともに東日本屈指の遺跡として注目されている。後期以降については、遺跡数が急激に減少し、前中西遺跡以外確認例がなく、遺跡は台地や丘陵へと移っていく傾向にある。

古墳時代になると、再度低地上への進出が活発化し、前期の遺跡は、近年確認例が増加している。本遺跡もその一つであり、本報告地点の北側に集落跡が存在することは過去に実施した試掘調査により把握していたが、前方後方形周溝墓が確認されたことは驚きであった。周辺では、前代に続いて前中西遺跡、諏訪木遺跡、北島遺跡で集落跡が確認されており、方形周溝墓による墓域も確認されている。諏訪木遺跡では、県埋蔵文化財調査事業団により行われた調査で河川跡から大量の木製品が出土しており、注目すべきは板倉造り建物の「樋部倉矧」と呼ばれる特殊な加工が施された壁板材が検出されたことが挙げられる（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008）。中条遺跡（29）では、木製の農具が検出されており、行田市小敷田遺跡では畿内や東海地方の外来系土器が多数出土している。この他にも古墳時代前期は、たくさん確認例があるが、遺跡は主に利根川流域沿いの自然堤防上に分布する傾向にある。中期は確認例が少ないが、前段階に続いて前中西遺跡や中条遺跡などで集落跡が確認されている。また、5世紀末頃の鎧塚古墳や女塚1号墳（C：中条古墳群）、市指定史跡の横塚山古墳（D：奈良古墳群）などの古墳も築造されている。鎧塚古墳は、全長43.8mの帆立貝式前方後円墳であり、墓前祭祀跡2箇所から須恵器高坏型器台（県指定文化財）が出土している。女塚1号墳も帆立貝式前方後円墳であり、全長46mを測る。二重周溝を持ち、盾持武人埴輪などの人物埴輪が出土している。横塚山古墳はB種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。

後期になると、遺跡数が爆発的に増加する。集落は規模が大小あるが、多数営まれる。そして、これらは奈良・平安時代へと継続するものが多い。古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地及び低地上に築造され始める。低地上では、上之古墳群（A）、肥塚古墳群（B）、中条古墳群（C）、奈良古墳群（D）、玉井古墳群（E）、原島古墳群（F）、石原古墳群（G）などがある。これらは概ね6世紀から7世紀末、ないし8世紀初頭にかけて築造された古墳群である。市内の古墳群で特筆すべきことは、利根川流域に近い古墳群（中条古墳群など）では埋葬施設に角閃石安山岩、荒川流域に近い古墳群では川原石を使用



第2図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
	熊谷市		49	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安
1	中西遺跡	縄文後・晩、弥生中、古墳前	50	別府条里遺跡	奈良・平安
2	箱田氏館跡	平安末～中世	51	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世
3	前中西遺跡	弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世	52	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
4	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安、中世	53	奈良氏館跡	平安末～中世
5	諏訪木遺跡	縄文後・晩、弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世	54	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安
6	平戸遺跡	弥生中、古墳後、平安、中・近世	55	寺東遺跡	縄文前～後
7	久下氏館跡	中世	56	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安
8	市田氏館跡	中世	57	玉井陣屋跡	平安末～中世
9	成田氏館跡	中世	58	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
10	池上遺跡	弥生中、古墳、平安	59	水押下遺跡	古墳後
11	古宮遺跡	縄文、弥生中、古墳前、奈良・平安、中・近世	60	稲荷木上遺跡	古墳後
12	上河原遺跡	奈良・平安、中・近世	61	下河原中遺跡	奈良・平安
13	宮の裏遺跡	古墳後	62	本代遺跡	古墳後、近世
14	成田遺跡	古墳後	63	下河原上遺跡	近世
15	中条条里遺跡	古墳前・中、奈良・平安	64	天神前遺跡	古墳中・後、中世
16	河上氏館跡	中世	65	兵部裏屋敷跡	中世
17	八幡山遺跡	古墳	66	御蔵場跡	
18	出口下遺跡	古墳後	67	田角遺跡	平安
19	熊谷氏館跡	中世	68	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世
20	宮町遺跡	奈良・平安、中世	69	不二ノ腰遺跡	奈良・平安
21	肥塚館跡	中世	70	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
22	出口上遺跡	奈良・平安、中・近世	71	宿遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
23	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世	72	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世
24	北島遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安、中世	73	村岡館跡	平安末
25	上中条中島遺跡	古墳後、奈良・平安	74	村岡北西原遺跡	平安
26	女塚遺跡	古墳後、奈良・平安、中世	75	北西原遺跡	奈良・平安
27	赤城遺跡	古墳、奈良・平安	76	塚本遺跡	古墳、奈良・平安
28	東浦遺跡	古墳前、平安	77	西浦遺跡	奈良・平安
29	中条遺跡	古墳、奈良・平安、中世	78	腰廻遺跡	奈良・平安
30	中条氏館跡	中世	79	北方遺跡	奈良・平安
31	光屋敷遺跡	古墳後、奈良、中・近世	80	宮前遺跡	奈良・平安
32	先載場遺跡	古墳後、奈良	81	西浦町遺跡	奈良・平安
33	八幡間遺跡	古墳後、奈良	82	宮前町遺跡	奈良・平安
34	東城館跡	平安	83	宮町遺跡	奈良・平安
35	長安寺遺跡	古墳後、奈良・平安	84	仲町遺跡	奈良・平安
36	西城館跡	平安	85	旭町遺跡	奈良・平安
37	西城切通遺跡	縄文後・晩		行田市	
38	鶴森遺跡	弥生後、古墳後、奈良・平安	86	小敷田遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安
39	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安		古墳群	
40	鷺ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良・平安		熊谷市	
41	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	A	上之古墳群	古墳後～末
42	場違ヶ谷戸遺跡	縄文後	B	肥塚古墳群	古墳後～末
43	宮前遺跡	奈良・平安	C	中条古墳群	古墳中期末～後
44	実盛館	平安	D	奈良古墳群	古墳中期後～末
45	道ヶ谷戸条里遺跡	縄文後、奈良	E	玉井古墳群	古墳後
46	横塚遺跡	古墳前、平安	F	原島古墳群	古墳後
47	東通遺跡	古墳後	G	石原古墳群	古墳後
48	西通遺跡	古墳後	H	村岡古墳群	古墳後

しており、肥塚古墳群ではその両者が混在することが挙げられる。

奈良・平安時代は、前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多い。規模は大小あるが、概ね大規模なものが多くみられ、通常の集落とは思えない遺跡がいくつか存在する。その筆頭が北島遺跡である。第19地点の調査では、二重の堀が巡る台形区画内から建物跡が検出されており、他地点でも軸の揃った掘立柱建物跡が多数確認されている。また、遺物では「篁」の文字が刻まれた緑釉陶器をはじめ、多くの施釉陶器が検出されており、有力者層を想定させる遺物が数多く出土している。北島遺跡以外では、池上遺跡で整然と配置された9世紀代の大型掘立柱建物跡が確認されたこと、小敷田遺

跡では「出挙」の文字が書かれた木簡が検出されたこと、諏訪木遺跡では区画溝内に四面庇の付いた大形掘立建物跡や軸の揃った掘立柱建物跡が多数検出されたことや旧河川跡で土器や木製品、玉類などを使った水辺の祭祀が行われたことなどが挙げられ、官衙を彷彿とさせる遺跡が集中する。

集落以外では、北島遺跡や池上遺跡の東側に中条条里遺跡（15）、行田市南河原条里遺跡（地図未掲載）などの条里遺跡が広がっている。ほぼ東西南北に区割されており、現在もその痕跡が残る。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる時期であり、市内でも館跡が多数みられる。成田氏館跡（9）、久下氏館跡（7）、市田氏館跡（8）、河上氏館跡（16）、熊谷氏館跡（19）、肥塚館跡（21）、中条氏館跡（30）などがある。このうち、本遺跡に最も近い成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が15世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされており、隣接する諏訪木遺跡では、成田氏関連と思われる遺構や遺物が相次いで確認されている。県事業団による平成13年度の調査では、館跡から南に約300mの所で中世の居館と思われる変形方形区画が検出されており、『新編武蔵風土記稿』に成田氏の一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002）。同じく県事業団による平成14年度の調査では、井戸枠に器高70cmを超える常滑大甕を使用した井戸跡が確認されており、常滑大甕は13世紀中頃のものとして推定されている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008）。そして、熊谷市教育委員会による平成20年度の調査では、埴輪を持つ6世紀代の古墳の周溝が埋没した後に掘削された長方形の土坑から大量の埋蔵銭が検出されている。埋蔵銭は、おそらく15世紀前半を上限とし、枚数が5,000枚以上と膨大な数であることから成田氏に関連するものであることは間違いない。なお、埋蔵銭を含む平成20年度調査については、来年度に報告書を刊行する予定である。

中世段階については、館跡を中心にその一端が明らかになりつつあるものの、依然として資料が不足している状態である。そして、近世段階についても同様であり、諏訪木遺跡をはじめとしていくつか確認例があるが、不明な点が多いというのが実状である。

Ⅲ 遺跡の概要

1 調査の方法

今回報告するのは、遺跡範囲南側にあたる1,330㎡についてである（第3図）。本地点は、区画整理による県道熊谷羽生線拡幅用地であるが、以前は株式会社東京電力所有の電柱置場として使用されており、重量物を安置するための架台が設置されていた。そのため、コンクリートによる巨大な独立基礎が多く埋没しており、全面的に遺構確認面ぎりぎりまで攪乱されている状況であった。

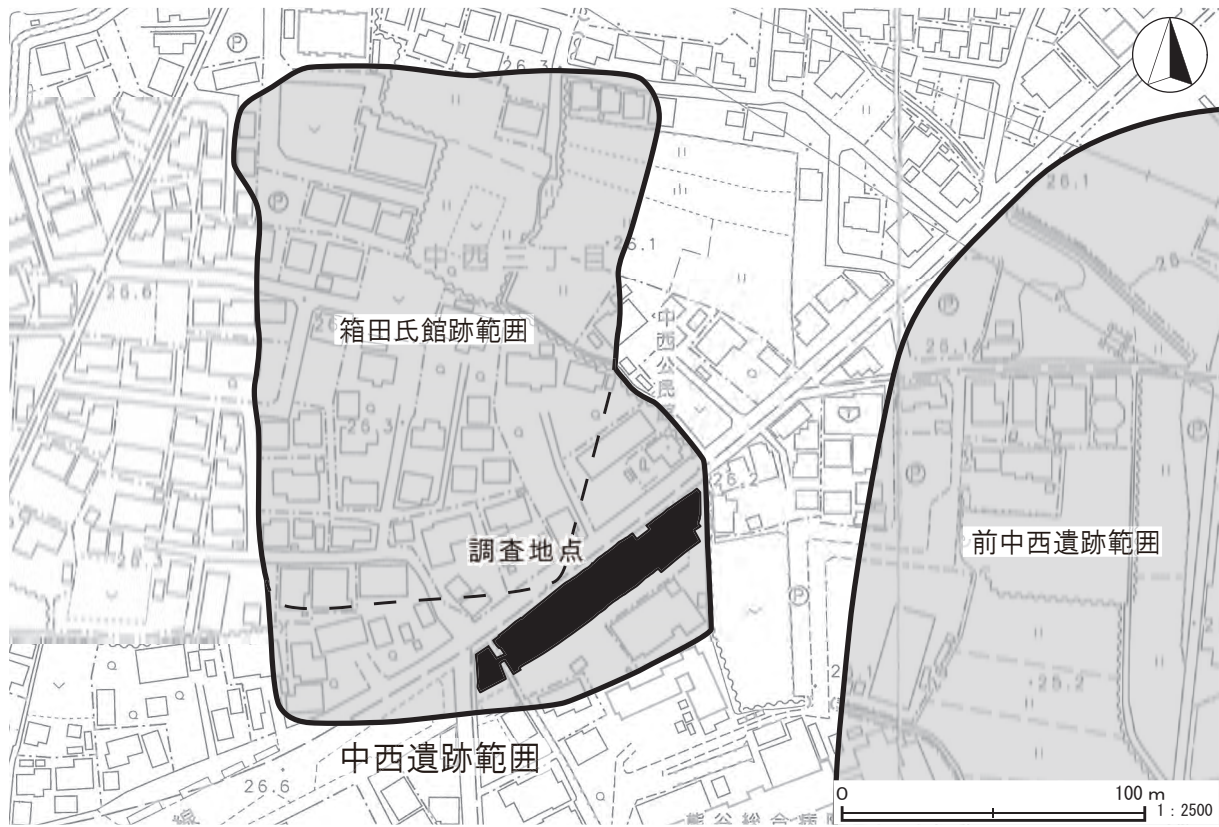
発掘調査は、重機により遺構確認面まで表土剥ぎを行った後、グリッドの設定を行った。座標は、周辺地における過去の調査事例と整合させるため、日本測地系を用いた基準点測量による。グリッド設定後は、人力による遺構確認作業を行い、検出された各遺構は各々手掘りを行った。遺物は必要に応じて写真撮影・実測後、慎重に取り上げを行い、遺構についても必要に応じて写真撮影を行った後、実測を行った。遺構の調査終了後は、今回報告する縄文時代後・晩期の遺物包含層の調査に着手し、必要に応じて出土状況の写真撮影を行い、遺物ドット図の作成、取り上げを行った。そして、最後に全体の写真撮影を行うといった一連の流れを各年度とも実施した。平成22年度は、調査区を二分して調査を行う反転の手法を用いて、南西側（A区）、続いて北東側（B区）の調査を実施した（第4図）。調査開始当初は、調査区の半ば付近が遺跡範囲の隣接地といった状況であったため、遺構・遺物が薄くなるエリアとの認識があり、遺跡範囲の確認も兼ねて調査を実施するという趣であったが、表土剥ぎを開始して大量の遺物が出土し、縄文時代の遺物包含層が確認されたことにより状況は一変した。また、第I章でも述べたが、北東側のB区調査の際に東日本大震災が発生したため、調査を継続することに危険があり、早急に埋め戻す必要があったことから、縄文時代の調査については、トレンチのみの限定的な調査とせざるを得なかった。平成23年度調査は、南西側（A区）、北東側（B区）の2地点を同時に実施したが、南西側のA区で埋没した大きな土留めの擁壁が確認され、撤去すると残存している遺構の破壊が免れない状況であったことから撤去せずに調査を行った。

なお、本報告で示すグリッドについては、過去に刊行された『前中西遺跡Ⅱ』（熊谷市教育委員会2002）及び『前中西遺跡Ⅲ』（熊谷市教育委員会2003）において、上之土地区画整理地内全体を一辺5mとするグリッドが設定されていることから、これを基に設定した。今回報告する調査地点のグリッドは、東西が168～183、南北は138～151である。

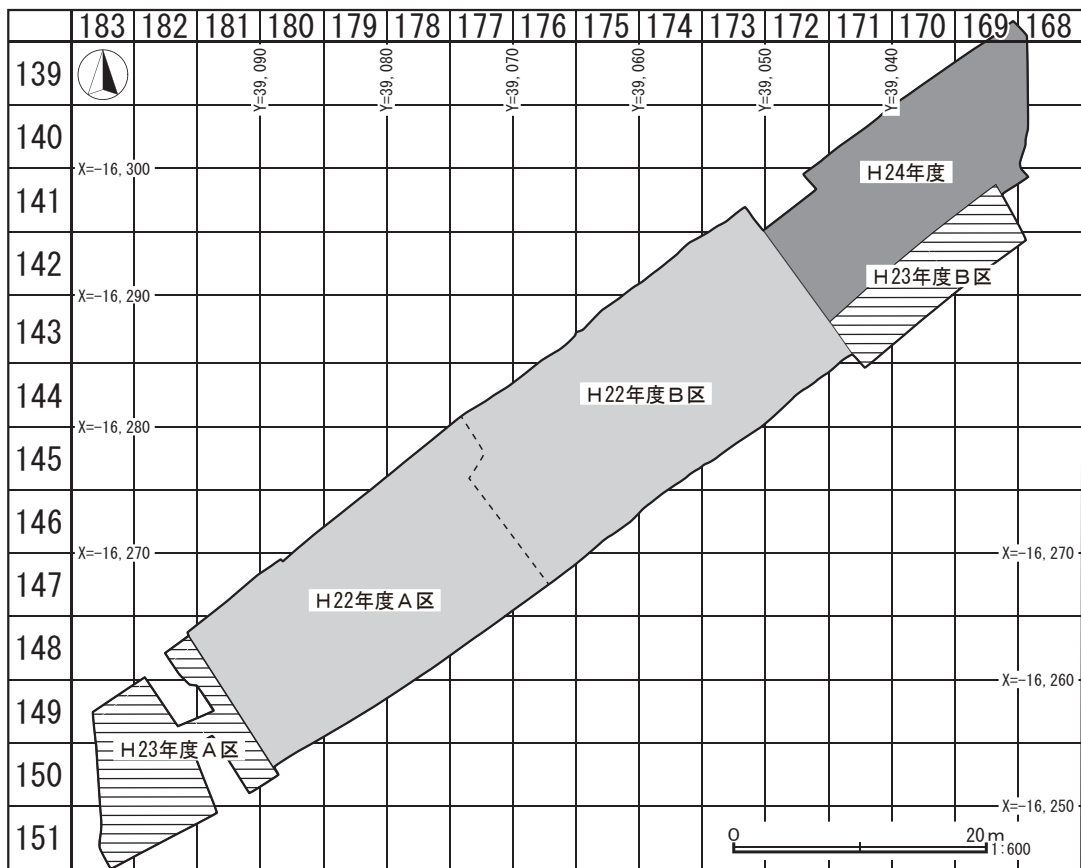
2 検出された縄文時代後・晩期の遺物包含層と遺物

本遺跡で検出された遺構と遺構出土遺物、そして縄文時代後・晩期の土偶については、『中西遺跡Ⅰ』（熊谷市教育委員会2018）で報告済であることから、ここでは上記以外の縄文時代後・晩期の遺物包含層と出土遺物について述べる。

縄文時代後・晩期の遺物包含層は、前述のとおり、平成22年度B区の調査に制約があったが、主に遺構が分布する箇所以外で確認されている（第5図）。遺物包含層が確認された箇所は、①調査区北東の169・170-141・142グリッド、②調査区ほぼ中央の175～177-144～147グリッド、③調査区ほぼ中央からやや南西の177・178-145～147グリッド、④調査区南西の179～181-146～148グリッド、⑤調査区南



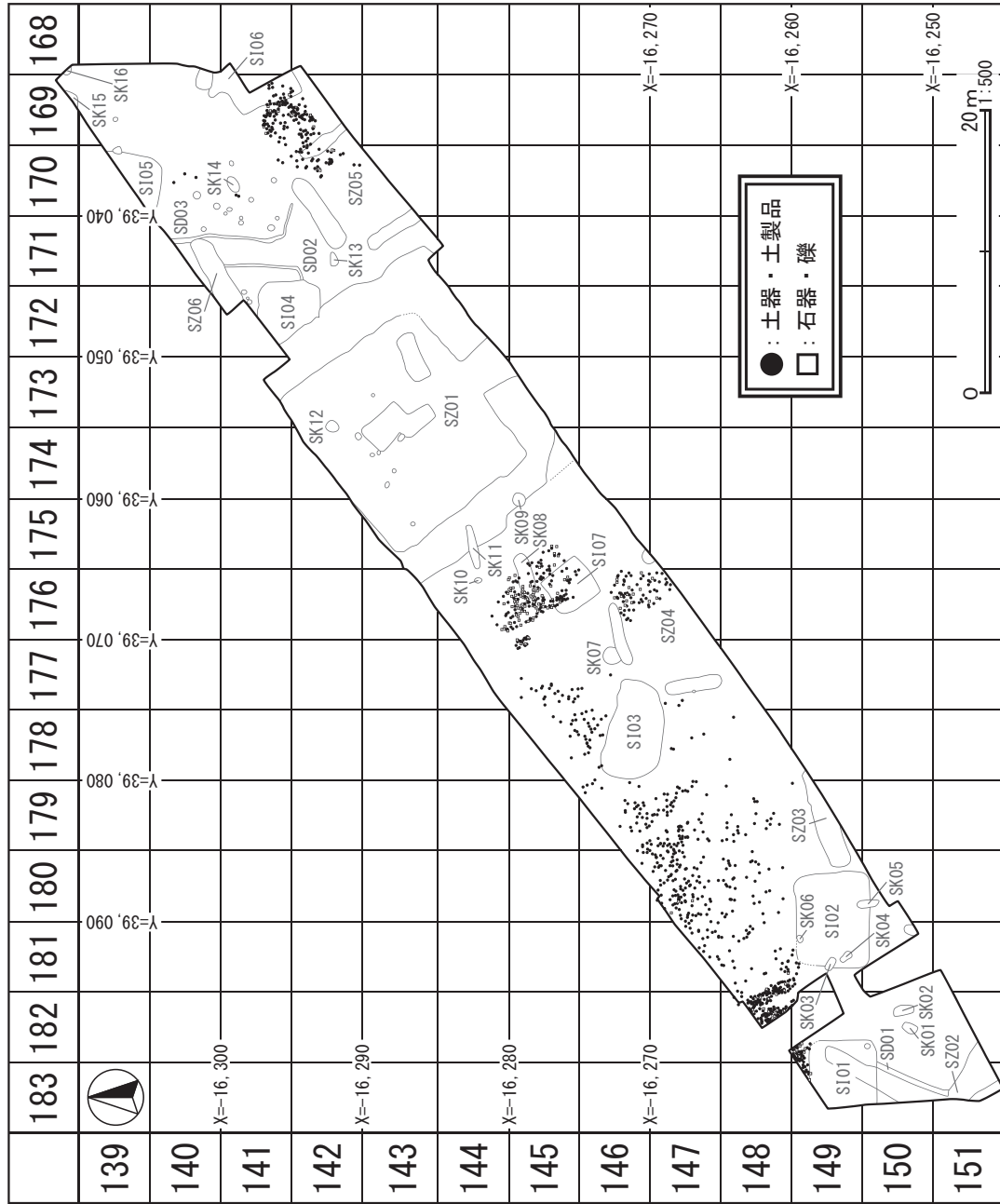
第3図 調査地点位置図



第4図 年度別調査区割図

第2表 検出遺構時代・時期一覽表

No.	遺構名	時代・時期
1	S I 01	縄文時代後期後葉～晚期前葉
2	S I 02	縄文時代後期後葉～晚期前葉
3	S I 03	縄文時代後期後葉～晚期前葉
4	S I 04	弥生時代中期後半
5	S I 05	弥生時代中期後半
6	S I 06	8世紀前半
7	S I 07	時期不明
8	S Z 01	古墳時代前期
9	S Z 02	古墳時代前期
10	S Z 03	弥生時代中期後半
11	S Z 04	弥生時代中期後半
12	S Z 05	弥生時代中期後半
13	S Z 06	弥生時代中期後半
14	S D 01	古墳時代前期以降
15	S D 02	縄文時代晚期前半
16	S D 03	縄文時代晚期前半
17	S K 01	時期不明
18	S K 02	時期不明
19	S K 03	縄文時代後期後葉以降
20	S K 04	縄文時代後期後葉以降
21	S K 05	縄文時代後期後葉以降
22	S K 06	縄文時代後期後葉以降
23	S K 07	縄文時代後期後葉
24	S K 08	縄文時代後期後葉
25	S K 09	古墳時代前期以降
26	S K 10	時期不明
27	S K 11	縄文時代後期後葉
28	S K 12	古墳時代前期以降
29	S K 13	時期不明
30	S K 14	時期不明
31	S K 15	時期不明
32	S K 16	時期不明



第5図 調査区全測図・縄文時代後・晚期遺物包含層出土状況

西端の182・183-148・149グリッドの計5つに大きく分けられ、①②⑤は集中して分布するのに対して、③④はやや点在する傾向が窺える。遺物包含層出土遺物は、縄文時代後期中葉から晩期中葉までにわたるが、各時期によって出土位置に違いが見られた。

今回報告する縄文時代後・晩期遺物包含層出土遺物は、土器、土製耳飾り、土製円盤、石器・石製品である。

土器は、遺物包含層が確認された箇所ほぼ全面から出土している。精製と粗製があり、いずれも出現期となる縄文時代後期中葉の加曾利B式から、後期後葉の高井東式、後期後葉～末の安行1・2式、晩期初頭～中葉の安行3a～3d式まで絶え間なく続く。なお、本報告では、後期後葉の型式名に「高井東式」を使用しているが、これについては報告済の『中西遺跡Ⅰ』で使用している「曾谷・高井東式」と同義語であると解釈してもらいたい。器種は、深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、台付鉢形土器、壺形土器、注口土器、ミニチュア土器などがあり、破片も含め、深鉢形土器が最も多く出土している。粗製土器として扱った一群は、時期の判別が困難なものもあるが、出土位置や器形などから精製土器と同じく、縄文時代後期中葉から晩期中葉までに収まるものと思われる。

土器は、出現期である加曾利B式期が上記の器種に異形台付土器や香炉形土器なども加わり、最も多く検出されているが、高井東式以後は、徐々に減少していく傾向にある。

土製耳飾りは、出土数が少ないが、大半が調査区南西半分から出土している。法量や形態から2つのタイプに分けられる。文様のあるものが少ないため、時期の特定が困難なものが多い。

土製円盤は、遺物包含層が確認された箇所ほぼ全面から出土しており、調査区南西の179・180-148グリッドでの出土が多い。約半分は無文であるが、時期の分かるものは、加曾利B式から後期安行式までに収まり、特に高井東式が多い。

石器・石製品は、そのほとんどが調査区中央から南西にかけての範囲で出土している。種別による出土状況に偏りなどは見られない。石器は、打製石鏃、石匙、スクレイパー、打製石斧、磨製石器、磨製石斧、磨石、敲石、石皿、台石、砥石、石錘などがある。石製品は、石剣や石棒と思われるものが出土している。

IV 縄文時代後・晩期遺物包含層出土状況と遺物

1 加曽利B式精製土器

出土状況 (第6図)

縄文時代後期中葉の加曽利B式期は、本報告で確認された縄文時代において出現期となる。当期の精製土器は、遺物包含層が確認された箇所ほぼ全面から出土しており、調査区中央からやや南西の177・178-145・146グリッド付近が最も多い。器種別による出土状況は、深鉢形土器や鉢形土器、浅鉢形土器は、ほぼ全面から出土しているが、注口土器は、180・181-147・148グリッド付近、異形台付土器や香炉形土器などの特殊な土器は、176-145グリッド付近での出土が目立つ。当期の土器は、後述する粗製土器も含め、本報告の縄文時代後・晩期において出土数が最も多い。

なお、第6～11図の出土状況で示した遺物の個体数は、複数のグリッドに跨るものは若い方のグリッドに含めている。また、複数の土器片で明らかに同一個体と思われるものは、1個体で数えている。

出土土器 (第14～18・46～57図)

当期は、加曽利B 3式が主体となるが、2式も若干検出されている。小振りの鉢形土器以外、全形の分かるものはない。

第14図1～11、第46・47図538～571・575～599は、受け口状を呈する口縁部に3単位の突起を持ち、胴部が括れる深鉢形土器である。1～11は口縁部から胴下部までに収まる部位、538～571は突起及び突起を含めた口縁部片、575～599は口縁部から胴上部までに収まる破片である。2は、内面に赤彩が残る。597・598は、口縁部が波状を呈する。突起は、カブトムシの角のような形状を呈するものが多いが、半円状に出っ張る形状のものもある。内外面に円形の刺突が施され、外面は直下に縦長の凹みが伴うものが多い。また、突起下両脇には、円形の刺突が配されるものもある。口縁部は、円形、ないし半円形の刺突列が巡るものが多いが、横位の沈線文のみ巡るものもある。また、横位の状線文は、口縁部内面に複数巡るものもある。刺突列は、沈線文区画内に施されるものと無区画のものがあり、口唇部に施文されるものもある。口縁部の刺突列、ないし横位の沈線文下には、括れる胴部まで羽状文が施文されるものが多いが、横・縦位の沈線文が施文されるものもある。同タイプの深鉢形土器は、そのほとんどが加曽利B 3式に相当するが、1・578については、横・縦位の沈線文が描かれた口縁部の文様などから加曽利B 2式に相当し、本報告では最も古い部類に入る。

第15・16図12～21・24・25、第47・48図600～628、第50～53図658～747は、羽状文が描かれた深鉢形土器である。12～21は口縁部から胴下部までに収まる部位、24・25は胴上部から底部までの部位、600～602・605～626・658～694は、口縁部から胴部中段までに収まる破片、603・604・627・628・695～747は、口縁部以下の破片である。口縁部は、12・13・16・600～602・605～617・619～626が平口縁、14・15・17～21・658～694は波状口縁であり、後者には波頂部が丸みを帯びたものと尖ったものがある。また、口縁部は、受け口状を呈するもの、やや内湾気味に開くもの、直線的に開くものなどがあり、口唇部が肥厚するものもある。胴部は、いずれも括れる。羽状文は、口縁部から胴部にかけて1段、ないし2段施文されるものがあり、後者については、胴部の括れ部に横位の沈線文が巡るものがある。24・25の底部は、網代痕が残る。同タイプの深鉢形土器は、当期の深鉢形土器では、最も多く検出されてい

るが、破片資料には次の高井東式期や粗製土器の部類に入るものもあるかもしれない。

第15図22、第53・54図748～765は、無文の波状口縁深鉢形土器である。22は口縁部から胴上部までの部位、748～765は口縁部から胴上部までに収まる破片である。口縁部の波は、大小あるが、法量的に大波が大型、小波が小型のものである可能性が高い。口縁部は、受け口状を呈するもの、内湾するもの、口唇部が肥厚するものがある。

第15図23、第54図766～770も波状口縁深鉢形土器である。23は口縁部から胴上部までの部位、766～770は口縁部片である。上記の無文波状口縁深鉢形土器と同じく、口縁部の波は大小あるが、法量的に大波が大型、小波が小型のものである可能性が高い。波頂部は、尖ったものと丸みを帯びたものがあり、前者の766は内面、768・769は外面に円形の凹みを持つ。小型の22は、口縁部がやや受け口状を呈するが、その他の大型のものは内湾する。文様は、23・766～768が口縁部に沿って沈線が巡り、766は直下に弧線文内に磨消縄文が施文されている。769・770も口縁部に沿って沈線が巡るが、全面に縄文が施文されている。

第16図26～29、第49図629～657は、口唇部や口縁部、胴部に刻み目を巡らせた深鉢形土器である。26～29は口縁部から胴下部までの部位、629～643・645～648・653～657は口縁部から胴下部までに収まる破片、644・649～652は胴部中段の破片である。27と瓢形を呈する29・645～648、653～657は平口縁、その他は5単位の波状口縁である。波頂部は、丸みを帯びたものと尖ったものがある。瓢形を呈するものは、口縁部が直立、ないしやや内湾する。波状口縁のものは、口縁部が受け口状を呈するものと内湾するものがある。いずれの口縁部も口唇部が肥厚するものが若干みられた。胴部は瓢形も含め、括れる。文様は、口縁部と胴部刺突列下に沈線文で区画された磨消縄文を施文するものが主体となるが、27・28・637・642は、条線文が施文されている。また、653～656は、上下に巡る横位の刺突列間に斜位、ないし弧状の刺突列が施文されている。639は、内外面に赤彩が施されている。649・650は、円形の突起が付く。

第16・17図30～37、第54・55図771～796は、算盤玉状を呈する深鉢形土器である。30～34は口縁部から胴下部までに収まる部位、35・36は胴部、37は胴上部から底部までの部位である。771～774は口縁部から胴上部までに収まる破片、775～796は胴部片である。短い口縁部が逆ハの字状に開き、胴部は算盤玉状を呈するが、角張るものとやや丸みを持つものがある。口縁部は無文であり、胴部は、弧線文と磨消縄文、連結部に円形の刺突が施文されている。胴下部は、無文のものと条線文が施されるものがあるが、後者の30は、胴下部に羽状文が施文されていることから加曾利B2式に相当し、本報告では最も古い部類に入る。

第17・18図38・39・41～53、第55～57図797～863は、鉢形土器である。法量・文様・器形がバラエティに富む。38・39・41～45・47・49・51・52は、口縁部から体部下位までに収まる部位、46・48・53は全形の分かる個体、797～863は口縁部から体部下位までに収まる破片である。38・39・797～852・858・859は、口縁部が内湾し、胴部はくの字状を呈するものと丸みを持つものがある。38・39・825～852は、口縁部に半円形の突起が付く。突起は、外面に円形の刺突が施されるものが多く、直下に縦長の凹みを持つものもある。また、この他にも縄文のみ施文されるもの、隆帯状の突起が貼り付けられたものなどがある。859は、口縁部が小波状を呈する。文様は、口縁部から体部上位に磨消縄文、沈線文、刺突列、

体部下位に条線文が施文されるものが多い。802は、体部の最大径に横長の突起、803・804は、体部に円形の突起が付く。814は、口縁部に円形の孔が設けられている。41・853～857は、口縁部がほぼ直立し、体部は直線的に下るものとやや内湾するものがある。口唇部に斜位の刻み目を施し、口縁部と体部の境に横位の沈線文が巡るもの、口縁部に縄文、以下に羽状文が施文されるもの、縄文地に複数の沈線文が巡るものがある。これらについては、台部が付く可能性もある。43～49・860～863は、口縁部が内湾し、口唇部が肥厚するものが多い。体部は丸みを持ち、底部は丸底である。文様は、口縁部から底部まで横位の沈線文と縄文が施文されるものが主体となるが、48は沈線文が弧状を呈する。44・46・47は、口縁部に突起が付く。小振りの51は、口縁部が直立し、体部が出っ張る。口縁部に縄文が施文され、体部の出っ張りに刻み目が施されている。52・53は、口縁部が逆ハの字に開き、口縁部と体部の境に括れを持つ。52は底部を欠くが、おそらく丸底であり、53は平底であるが、平面形が四角形を呈し、四方に低い突起が付く。52は、口縁部内面及び括れ部外面に横位の沈線文が巡る。53は摩耗が著しいため、部分的な表現になっているが、全面に縄文が施文されており、括れ部外面に横位の沈線文が巡る。

第17・18図42・50・71、第57図864・865は、台付鉢形土器である。42・50は台部を欠き、71は体部下位から台部までの部位、864は口縁部から体部下位まで、865は台部の破片である。42は、上位の器形は浅鉢に近い。短い口縁部がやや開き、体部はほぼ直線的で器壁が厚い。口縁部は無文で、体部との境に刻み目が巡り、突起が付く。下位は、斜位の条線文が施文されている。50・864は、口縁部が緩やかに開き、体部は括れる。50は、口唇部が肥厚する。文様は、50が口唇部と体部の稜に刻み目が巡り、間の上位は横位の沈線文と縄文帯が施文され、下位は無文である。864は、口縁部に縦位の条線文が施文され、以下は沈線文区画による無文部を挟んで体部の稜に刻み目が巡る。865は、丸みを持つ台部である。外面に横位の条線文が乱雑に巡る。71は、本部類に入れて良いものか疑問も残るが、台部が低い。体部下位に横位の沈線文と縄文帯、台部に円形の刺突列が巡る。

第17図40は、壺形土器である。口縁部から胴上部までの部位である。口縁部は、逆ハの字に開き、胴部は中段以下を欠くが、おそらく算盤玉状を呈すると思われる。口縁部外面は無文であるが、口唇部内面に沈線状の凹みが巡る。頸部以下は、横位の沈線文、蛇行懸垂文、縄文が施文されている。文様のある壺形土器としては、唯一の出土例である。

第18図54・55は、瓢形土器である。54は口縁部、55は口縁部から体部下位までの部位である。54は、やや内傾気味に立ち上がる。口唇部に刻み目、直下に横位の沈線文と小さい半円形の刺突列が巡り、無文部を挟んで、横位、ないし菱形状に沈線文が巡る。沈線が細い。円形の小さい突起が複数付く。55は、短く尖った口縁部がやや内湾し、胴部は算盤玉状を呈する。文様は、口縁部から体部上位に沈線文や弧線文、縄文が施文され、胴部の出っ張りに刺突列が巡る。胴部下位は、斜位の条線文が施文されている。

第18図56～61、第46図572～574、第57図866～869は、注口土器である。56・57は、口縁部から頸部まで、58・59は頸部から体部上位までの部位、60・61は体部、572～574は口縁部の突起部分、866・867は口縁部、868は頸部、869は体部上位の破片である。56～60・61・868は、口縁部が逆ハの字に開き、直下はほぼ直立、ないし中段がやや膨らむ。体部は算盤玉状を呈する。口縁部は無文、直下は横位の沈線文と縄文帯が施文されるものと条線文や沈線文が施文されるもの、体部の出っ張りに刻み目が巡り、突起が付くものがある。沈線文は、いずれも細い。60は、外面に赤彩が若干残る。572～574は、短い口縁部に半円形の突

起が付き、外面に円形の刺突、ないし縦長の凹みを持つ。文様は、突起下に円形の刺突列が巡るもの、縦・横位の沈線文が施文されるものがある。574は、口唇部に縄文帯が巡る。口縁部は、ほぼ直立するもの、逆ハの字に開くものがある。これらについては、加曾利B 2式の可能性がある。866・867は、口縁部がほぼ直立する。いずれも条線文が横位に複数巡る。いずれも二個一対の突起が付く。869は、円形刺突が施文された隆帯が垂下し、脇に複数の沈線文が巡り、円形の突起が縦位に付く。

第18図63は、器種不明であるが、小振りで胴部が算盤玉状を呈する土器である。口縁部を欠く。文様は、角張った胴部に刻み目、上位に細い沈線文が横位に巡る。

第18図62・64～66・68・70、第57図870は、異形台付土器である。いずれも体部付近の部位である。62は、丸みを持つ体部に縄文が施文されている。64は、体部がやや角張る。弧状文と縄文が施文されており、体部の出っ張りに円形の突起が付く。65は、両側に短い注口状の突出部を持つ。突出部の間は、沈線状の刻み目を持つ円形の突起が付き、両脇に円孔が設けられ、その上下に小さい円形の突起が付く。66は、欠損箇所が多いが、丸みを持つ体部の対角線上に短い注口状の突出部と把手状の小さい突起が付くと思われる。外面は、木葉状の沈線文と磨消縄文が施文されており、全面に赤彩が施されている。把手状の突起は、両縁に細かい刻み目が施されている。中心は貫通せず、円形に凹んでいる。68は、体部が二方向に突出する。体部の上下は、円形の刺突列が巡り、突出部には小さい突起が付く、その脇は横位の沈線文が巡り、上下に縄文が施文されている。70は、ハの字状に開く台部である。接合部に刻み目が巡り、台部は全面縄文が施文されている。裾部には、沈線文が横位に巡る。870は、短い注口状の突出部を持つ体部片である。突出端部に細かい刻み目が巡り、周囲は細い沈線文が横・斜位に施文されている。外面に赤彩が若干残る。

第18図67・69は、器種不明の土器である。67は平面形態が四角形状を呈し、底部は平底である。文様は、体部が刺突列による区画内、底部は木葉状の沈線文内に磨消縄文が施文されている。69は、口唇部に二個一対の突起が付く、体部は楕円形の透かし孔の両脇にやや間隔を空けて小さい円孔が設けられ、周囲に円形の小さい突起が付く。

第57図871～873は、香炉形土器の把手である。いずれも縦方向に貫通する沈線状の溝を持つ。871・872は1本、873は3本である。871は、上下に刻み目が巡り、下位は幅広の突起状を呈し、貫通する溝の両脇に短い沈線文が垂下する。872は、下位の隆帯状を呈する突起に横位の短い沈線文と脇に円形の刺突が施文されている。873は、上下に隆帯が巡り、間に縄文が施文されている。

第57図874は、器種不明の土器の破片である。平面形態は、三角形状を呈し、把手状を呈する。細い沈線文と円形の刺突が施文されている。

2 高井東式精製土器 出土状況 (第7図)

縄文時代後期後葉の高井東式精製土器は、遺物包含層ほぼ全面から出土しているが、加曾利B 2期とやや異なり、調査区南西の179・180-147・148グリッド付近での出土が最も多い。器種別による出土状況は、深鉢形土器や鉢形土器、浅鉢形土器は、ほぼ全面から出土しているが、注口土器は176-145グリッド、179-147グリッドに限定される。出土数は、加曾利B 2期に比べて減少する。

出土土器（第19～23・58～67図）

第19・20図72～85、第58～64図875～1016は、胴部が括れる大波状口縁深鉢形土器である。当期の深鉢形土器では、最も多く出土している。72は、当タイプの深鉢形土器で唯一全形の分かる個体、73～85は口縁部から胴下部までに収まる部位、875～914は突起部分、ないし突起の付く口縁部片、915～1016は突起の付かない口縁部片である。口縁部は、逆ハの字に開くもの、内湾するもの、受け口状を呈するものがある。波頂部は、丸みを帯びたものと尖ったものがあり、波頂部に突起が付くものと付かないものがある。突起の形態は、容器状、板状、円柱状を呈するものなど様々である。また、突起が付くものは、波底部に把手状を呈するやや縦長の突起が付く。文様は、大波状口縁に沿って隆帯、沈線文、刺突列が巡り、胴部は、羽状文や稲妻状の文様が施文されるものが多い。波状口縁部以外、無文のものもあるが、これらについては、同タイプの深鉢形土器の中で新しい様相を呈すると思われる。901は、内外面に赤彩が施されている。

第20図86は、口縁部と胴部に沈線文が複数巡る平口縁深鉢形土器である。口縁部から胴部中段までの部位である。口縁部は受け口状を呈し、胴部は僅かに括れる。沈線文と同箇所やや縦長の突起が等間隔に付く。

第20・21図87～92、第64図1017～1023は、口縁部に隆帯が巡り、胴部がやや括れる平口縁深鉢形土器である。87～89は口縁部から胴下部まで、90・91は全形の分かる個体、92は口縁部、1017～1023は口縁部から胴上部までに収まる破片である。口縁部は、直線的に開くもの、やや受け口状を呈するもの、内湾するものがある。胴部の括れは、強いものと弱いものがある。隆帯は、楕円形状に巡り、刺突列が伴うものが多い。また、円形の突起が付くものもある。口縁部以下は、すべて無文である。このうち、1021・1022は、胴部の屈曲が強いことから鉢形土器の可能性はある。

第21・22図93～106、第64～66図1024～1066は、口縁部が内傾し、胴部が括れる深鉢形土器である。93～99・101～106は口縁部から胴下部までに収まる部位、100は胴部から底部までの部位、1024～1066は口縁部から胴部中段までに収まる破片である。口縁部の内傾は、強いものと弱いものがあるが、前者が古く、後者が新しい様相を呈すると思われる。文様は、主に口縁部と胴部に施文され、口縁部はバリエーションがあるが、胴部は、羽状文が施文されるものが多い。口縁部の文様は、沈線文のみのもの、縄文のみ施文されるもの、沈線文と縄文が施文されるもの、突起が付くもの、刺突列が巡るものなどがある。胴部は、稲妻状の沈線文が垂下するものもある。100の底部は、網代痕が残る。

第22・23図107～114、第66・67図1067～1096は、鉢形土器である。107～114は口縁部から体部下位までに収まる部位、1067～1096は同部分の破片である。当期の鉢形土器は、器形・文様から大きく2つに分けられる。1つは口縁部がほぼ直立、ないし緩やかに開き、体部はほぼ直線的に下るもの、もう1つは口縁部が内湾し、体部は球形を呈するものである。前者については、体部中段がやや括れるものもある。いずれのタイプも口唇部が肥厚するものがある。前者の文様は、口縁部に縦長の突起が付き、沈線文が複数巡るものが多い。後者は、弧線文、ないし菱形文の連結部に円形や半円形の突起が付くものが多く、縄文が施文されたものもある。

第23図115～119、第67図1097～1109は、台付鉢形土器と浅鉢形土器である。115は口縁部から台部上位まで、116・118・119は口縁部から体部下位までの部位、117は全形の分かる当期唯一の浅鉢形土器、

1097～1109は口縁部から体部下位までに収まる破片である。117のみ浅鉢形土器であるが、その他は台付になる可能性もある。いずれも短い口縁部が内傾、ないしほぼ直立するものが多く、体部は、ほぼ直線的に下る。115の台部は、ハの字に開く。117の底部は、平底であり、網代痕が残る。文様は、口縁部のみ施文されるものがほとんどであり、口縁部が内傾する深鉢形土器や内湾する鉢形土器と同じく、バリエーションがある。体部は、1105のみ羽状文が施文されているが、これについては加曾利B式期に下る可能性もある。

第23図120～124は、注口土器である。120は口縁部から頸部まで、121・122は口縁部から体部上位までの部位である。123・124は底部を欠くが、ほぼ全形の分かる個体である。120のみ形態が異なるが、いずれも口縁部が内傾することから当期のものとして判断した。文様は、口縁部から体部上位までに施文されている。沈線文が多用されており、いずれも細い。円形の突起が付くもの、縄文や刺突列が施文されるものなどがある。

3 後・晩期安行式精製土器

出土状況 (第8図)

縄文時代後期後葉～末の安行式精製土器(1・2式)は、遺物包含層ほぼ全面から出土しているが、高井東式期と同じく、調査区南西の179・180-147・148グリッド付近での出土が多い。器種別による出土状況は、深鉢形土器がほぼ全面から出土しているが、鉢形土器や浅鉢形土器、注口土器は、調査区南西からの出土が多い。当期の出土数は、高井東式期よりもさらに減少する。なお、晩期との区別が困難なものについては、当期に含めた。

晩期初頭～中葉の安行式精製土器(3a～3d式)は、出土数自体少なく、後期安行式よりさらに減少する。出土位置は、調査区北東が1点のみであり、調査区ほぼ中央の175-144グリッド付近と南西の181・182-148グリッド付近で多く確認されている。器種別による出土状況は、深鉢形土器や鉢形土器、浅鉢形土器は、主に上記の両グリッド付近から出土しているが、注口土器は南西端の182-148・149グリッドに限定される。

出土土器 (第24～26・68～72図)

第24・25図125～144、第26図152～161、第68～70図1110～1209は、安行1式である。

125～130・1110～1123は、内湾する平口縁深鉢形土器である。125～129は口縁部から胴下部までに収まる部位、130は当タイプでは唯一全形の分かる個体、1110～1123は口縁部片である。肥厚した口縁部が内湾し、胴部は中段付近が膨らむ。小振りのものについては、瓢形土器の可能性もある。文様は、口縁部に縄文帯と横位の沈線文、刺突列が巡るものが多く、刺突列は胴部中段に施文されるものもある。胴部は、弧線文や連弧文、縄文が施文されるものが多い。126・128・1119は、口縁部に円形の孔を持つ。

131・1124～1133は、大波状口縁深鉢形土器である。131は口縁部から胴下部までの部位、1124～1133は口縁部から胴上部までに収まる破片である。口縁部は緩やかに開き、胴部の括れは弱い。口唇部が肥厚するものもある。波状口縁の波頂部と波底部には、等間隔に凹みの施された縦長の突起が垂下する。口縁部以下に縄文帯と横位の沈線文が重畳し、括れる胴部に刺突列が巡るが、131は胴部の刺突列上に斜位の条線文が施文されている。1130は、波頂部下に円形の孔を持つ。

132～144・1134～1199は、平口縁深鉢形土器である。後期安行式の深鉢形土器では、最も多く検出されている。139のみ砲弾形を呈する。132～142・144は口縁部から胴下部までに収まる部位、143は胴部中段から胴下部までの部位、1134～1174は口縁部から胴部中段までに収まる破片である。1175～1199は、口縁部以下の破片であるが、これらについては、安行2式の可能性もある。139以外は、口縁部が緩やかに開くものとはほぼ直立するものがある。胴部は、大波状口縁深鉢形土器同様、括れるが、強弱がみられる。砲弾形を呈する139は、器形が内湾する平口縁深鉢形土器に似る。いずれの深鉢形土器も肥厚した口縁部にやや縦長の突起が等間隔に付く。口縁部以下、縄文帯と沈線文が重畳し、括れる胴部に刺突列が巡り、その上下に弧線文や連弧文、縄文が施文されるものが多い。134・1172は内面、138は外面に赤彩が施されている。

152は、瓢形土器の口縁部から体部下位までの部位である。口縁部が内湾し、体部の中段の出っ張りが角張る。口縁部以下、体部の出っ張りまで縄文帯と沈線文が重畳し、口唇部と体部上位にやや横長の突起が付く。

153・154・1200・1201は、鉢形土器である。153・154は口縁部から胴下部までの部位、1200・1201は口縁部片である。口縁部は内湾し、体部は球形を呈する。口縁部以下、体部の膨らみまで縄文帯と沈線文が重畳する。体部下位は羽状文、ないし斜位の条線文が施文されている。口縁部から体部上位にかけて縦長、ないし円形の突起が付く。

155～157・1202～1205は、台付鉢形土器である。ただし、台部を持つものは確認されてない。155～157は口縁部から体部下位までに収まる部位、1202～1205は口縁部片である。口縁部は緩やかに外反し、体部下位に稜を持つ。文様は、口唇部及び体部下位の稜に刺突列が巡り、間に縦位の条線文が施文されている。156は円形の小さい突起が付く。

158・1206～1209は、浅鉢形土器である。158は口縁部から体部下位までの部位、1206～1209は口縁部片である。口縁部から体部は、やや内湾気味に立ち上がるものと直線的に開くものがある。文様は、縄文帯と沈線文が重畳するものが多いが、158は口縁部に弧線文も加わる。158は体部に把手状を呈するやや縦長の突起、1206・1209は口唇部に二個一対の突起が付く。1206は、内外面に赤彩が施されている。

159～161は、注口土器である。159・161は口縁部、160は口縁部から頸部までの部位である。いずれも口縁部は、逆ハの字に大きく開く。160の頸部は、ほぼ直立する。文様は、口縁部以下、縄文帯と沈線文が重畳し、159・160は、口縁部にやや縦長の突起が付き、160は頸部下位に円形の小さい突起が縦位に複数付く。

第70～72図1210～1226・1233・1234は、安行2式の深鉢形土器である。1210～1213・1217・1218・1233・1234は口縁部から胴上部までに収まる破片、1214～1216・1219～1226は口縁部以下の破片である。

1210～1226は、波状口縁深鉢形土器である。このうち、1210～1213・1217・1218は大波状口縁である。器形・文様ともに安行1式の同深鉢形土器と同じものが多いが、突起は豚鼻状を呈する。また、胴部の文様は、羽状文や稲妻状を呈する沈線文、蛇行する懸垂文が施文されるものがある。1221は、外面に赤彩が施されている。1224～1226は、同一個体である。体部の屈曲度から鉢形土器の可能性もある。

1233・1234は、砲弾形を呈する平口縁深鉢形土器である。1233は口縁部、1234は口縁部から胴部中段までの破片である。1233は、内湾する口縁部が肥厚する。縦長の楕円形を呈する沈線文脇に沈線文が2

段巡り、下に豚鼻状の突起が付く。1234は、口縁部が緩やかに開き、胴部はやや丸みを持つ。口縁部は棒状の縄文帯、胴部は斜位の条線文が施文されている。

第25図145～151は、安行1式、ないし2式と思われる深鉢形土器の胴下部から底部までの部位である。文様は、弧線文や縄文帯が施文されるものと斜条線文が施文されるものがある。146・147・151の底面は、網代痕が残る。

第26図162～165、第71・72図1227～1232・1235～1237は、安行2～3 a式と思われる。

162・163は、平口縁深鉢形土器の口縁部から胴下部までの部位である。肥厚する口縁部がやや受け口状を呈し、胴部はやや括れる。文様は、安行2式と同深鉢形土器とほぼ同じであるが、豚鼻状突起の刻み目が2つ以上あり、弧線文は大振りのものに小振りのものが加わる。胴下部は、斜位の条線文が施文されている。器形・文様から両者は出土位置がやや異なるが、同一個体の可能性が高い。

1227～1232は、波状口縁深鉢形土器である。口縁部から胴下部までに収まる破片である。口縁部に付く縦長の突起は、刻み目が複数になる。文様は、沈線文が主体となり、1227の胴下部には渦巻き状の文様が施文されている。

164・1235・1236は、鉢形土器である。164は、口縁部から体部中段までの部位、1235は口縁部から体部下位まで、1236は体部上位の破片である。口縁部は内湾し、体部は球形、ないし算盤玉状を呈する。164は、口唇部に刻み目の施された半円形の突起、口縁部外面には小さい突起が付く。突起脇及び下には横位の沈線文や刻み目の施された低い隆帯が巡り、所々にやや大きめの円形の凹みが施文されている。円形の凹み下には、刻み目が複数ある豚鼻状突起が付く。口縁部に円形の孔を持つ。1235は、口唇部と体部の出っ張りに横長の突起が付き、口縁部から体部下位まで入組文状を呈する沈線文と縄文帯が施文されている。1236は、横位の沈線文と刻み目の施された低い隆帯が重畳し、上下に豚鼻状突起が付く。上の突起は刻み目が2つ、下は6つである。

165・1237は、注口土器である。165は体部上位から底部までの部位、1237は体部上位の注口部付近の破片である。いずれも注口部は、比較的短い。165は球形を呈する。文様は、注口部のある体部上位にやや太めの沈線文が横位、ないし弧状に巡り、所々に縄文が施文されている。体部の出っ張りに付く注口部下をはじめ、等間隔に刻み目が3つある豚鼻状突起が付く。体部下位は、斜位の粗い条線文が施文されている。1237は、注口部脇に刻み目の施された低い隆帯が横・斜位に巡り、連結部と注口部下に刻み目が5つある豚鼻状突起が付く。

第72図1238～1245は、後期安行式に伴う精製土器である。

1238～1240は、精製深鉢形土器の口縁部片である。やや縦長の突起脇にやや細かい条線文が横・斜位に施文されており、1238・1239は地文に縄文が施文されている。

1241～1243は、瘤付土器の口縁部片である。横位の沈線文と刻み目が複数施文されている。1241は外面にやや大きめの突起、1242は口唇部に二個一対の突起が付く。

1244・1245は、新地式の注口土器、ないし壺形土器の胴上部片である。1244は菱形文、1245は横位の沈線文が巡り、小さい円形の突起が付く。1245は、沈線文間に縄文が施文されている。1244は、内面に赤彩が施されている。

第26図166、第72図1246・1247は、安行3 b式である。

166は、口縁部が小波状を呈する深鉢形土器である。口縁部から胴下部までの部位である。短い口縁部がやや外反し、胴部は上位が括れ、下位の膨らみは弱い。文様は、胴部上位が入組文状、下位は沈線文と縄文帯が幅広く施文されている。

1246・1247は、小振りの壺形土器である。いずれもやや球形を呈する胴部中段の破片である。上下に巡る複数の幅広沈線文間に渦巻文が施文されている。いずれも地文に縄文が施文されている。

第72図1248・1249は、安行3c式である。1248は深鉢形土器、1249は浅鉢形土器か。いずれも口縁部片である。1248は、口唇部に刻み目が施されている。いずれも細い菱形文が施文されており、周囲に刺突が伴う。

第26図167、第72図1250～1259は、安行3d式の深鉢形土器である。167は、口縁部から胴下部までの部位、1250～1255は口縁部、1256～1259は口縁部以下の破片である。短い口縁部が、ほぼ直立するもの、逆ハの字に開くもの、やや受け口状を呈するものがある。胴部は上位で括れる。文様は、口縁部から括れる胴上部にかけてやや太めの沈線で三叉文などが施文されている。167は、口唇部に突起が付く。

第72図1260は、東北地方大洞系の深鉢形土器である。口縁部から胴上部までの破片である。口縁部の開きが弱く、胴部はやや膨らむか。文様は、口縁部に工字文状の文様が施文されている。

4 粗製土器

粗製土器とした一群は、精製土器と同じく、縄文時代後期中葉の加曾利B式から晩期中葉の安行3d式までのものと思われる。これらについては、以下のとおりに分類した。

第1群土器：時期を問わず、いわゆる紐線文系の深鉢形土器を一括。第27～29図168～199、第73～78図1261～1312・1315～1324・1339～1409が該当するが、文様・器形などから以下6つに分類した。これらの詳細については、後述する。

第1群土器①：第27図168～176、第73・74図1261～1312

第1群土器②：第28図177～181、第75図1315～1324

第1群土器③：第75・76図1339～1348

第1群土器④：第28図182～184、第76・77図1349～1352・1388～1391

第1群土器⑤：第28・29図185～192・198・199、第76・77図1353～1371・1397～1400

第1群土器⑥：第29図193～197、第76～78図1372～1387・1392～1396・1401～1409

第2群土器：縄文施文の深鉢形土器を一括。第75図1313・1314が該当。

第3群土器：斜条線文施文の深鉢形土器を一括。第75図1325～1328が該当。

第4群土器：斜格子文施文の深鉢形土器を一括。第75図1329～1338が該当。

第5群土器：口縁部がやや内湾気味、ないし直線的に立ち上がり、胴部が括れる深鉢形土器を一括。第30～32図203～226、第78～80図1410～1478が該当。

第6群土器：口縁部が内傾する高井東式精製土器と同じ器形の無文深鉢形土器を一括。第32・33図227～240、第81図1479～1505が該当。

第7群土器：第5群と第6群の口縁部以下の無文深鉢形土器を一括。第36図257～262、第82～84図1506～1555が該当。

第8群土器：口縁部から胴部が直線的、ないしやや内湾気味に立ち上がる無文深鉢形土器を一括。第33図241、第85図1556～1572が該当。

第9群土器：口縁部が内湾する無文深鉢形土器を一括。第34・35図242～256、第85～89図1573～1642が該当。

第10群土器：輪積痕を残す無文深鉢形土器を一括。第36図263、第89図1643～1647が該当。

第11群土器：製塩土器の可能性のある無文深鉢形土器を一括。第36図264・265、第89図1648～1654が該当。

第12群土器：鉢形土器、浅鉢形土器、台付鉢形土器を一括。第29図200～202、第37～38図266～297、第90・91図1655～1692が該当。法量・器形ともにバリエーションがあることから、以下、16種類に分類した。これらの詳細については、後述する。

第12群土器①：第29図200～202

第12群土器②：第37・38図266・267・291

第12群土器③：第37図268～270・278、第90図1667～1669・1672～1675

第12群土器④：第37図271・273～276、第90・91図1659～1665・1670・1683・1684

第12群土器⑤：第37図272

第12群土器⑥：第37図277・279～281、第90・91図1666・1676・1677

第12群土器⑦：第37図282、第90図1671

第12群土器⑧：第37図283・284、第91図1678～1682

第12群土器⑨：第37図285

第12群土器⑩：第38図286・287

第12群土器⑪：第38図288

第12群土器⑫：第38図289・290、第91図1685～1690

第12群土器⑬：第38図292

第12群土器⑭：第38図293～295、第91図1691・1692

第12群土器⑮：第38図296・297

第12群土器⑯：第90図1655～1658

出土状況（第9・10図）

第1群土器は、①～⑥まで全体で見ると、遺物包含層ほぼ全面から出土しており、調査区中央からやや南西の177・178-145・146グリッド付近が最も多い。分類別では、①はほぼ全面から出土しているが、178-146グリッドと180-147グリッドが多い。②～④は出土数自体少ないが、②は177-145グリッド付近、③は174-144グリッドと178-146グリッド、④は177-145グリッドでの出土が多い。⑤は、ほぼ全面から一定量出土している。⑥もほぼ全面から出土しているが、調査区南西からの出土が目立ち、特に179-148グリッドが多い。

第2群土器は、計2点と非常に少ないが、年度別の一括分である1314も含め、調査区中央の176-146グリッド付近で出土している。

第3群土器も出土数が少ないが、調査区中央の175-145グリッド、南西の180・181-147・148グリッ

ドで出土している。

第4群土器も出土数が少ないが、調査区北東を除いた遺物包含層ほぼ全面から出土している。

第5群土器は、遺物包含層ほぼ全面から出土しているが、調査区南西の178-146グリッド付近と180-147グリッド付近が多い。

第6群土器は、調査区南西半分から出土しており、179・180-147グリッド付近が多い。

第7群土器は、遺物包含層ほぼ全面から出土しているが、調査区南西の179・180-147グリッド付近が多い。第5・6群土器に付随するものであり、出土位置がほぼ合致している。

第8群土器は、出土数が多くないが、主に調査区ほぼ中央の175-178-144-146グリッドで出土している。

第9群土器は、遺物包含層ほぼ全面から出土しているが、調査区南西の180・181-147・148グリッド付近で多く出土している。

第10群土器は、出土数が少ないが、年度別の一括分も含め、調査区中央の176-144グリッド付近で多く出土している。また、南西端でも1点のみ出土している。

第11群土器も出土数が少ないが、調査区南西の179-182-148・149グリッドで出土している。

第12群土器は、①-⑯まで全体でみると、遺物包含層ほぼ全面から出土している。このうち、調査区中央の176-145グリッド付近と南西の178-180-146・147グリッド付近で多く出土している。①-⑯の分類別にみても出土位置に偏りは見られない。

出土土器 (第27~38・73~91図)

第1群土器

第1群土器①とした第27図168~176、第73・74図1261~1312は、口縁部に太い隆帯が巡る深鉢形土器である。168~173は口縁部から胴下部までに収まる部位、174~176は口縁部、1261~1312は口縁部から胴部中段までに収まる破片である。口縁部が内湾するもの、胴部がやや括れるもの、ほぼ直線的に立ち上がるものなどがある。168~170・1261~1288は、隆帯に指頭圧痕が施されている。胴部は、無文が主体となるが、条線文や沈線文が施文されたものもある。①の時期は、精製土器の出土位置などから加曾利B式期と思われる。

第1群土器②とした第28図177~181、第75図1315~1324は、口唇部に刻み目、胴部に羽状文や横位の沈線文が施文された深鉢形土器である。177・178は全形の分かる個体、179~181は口縁部から胴下部までの部位、1315~1324は口縁部片である。最大径を持つ口縁部は、逆ハの字状に大きく開く。胴部は括れるが、強弱がある。177・178の底部は、平底である。177は網代痕が残る。②の時期は、精製土器の出土位置や文様・器形から加曾利B式期と思われる。

第1群土器③とした第75・76図1339~1348は、口縁部に指頭圧痕や刻み目が施された深鉢形土器である。すべて口縁部から胴部中段までに収まる破片である。口縁部が内湾するもの、ほぼ直線的に立ち上がるもの、胴部が括れるものなどがあり、口唇部が肥厚するものもある。③の時期も②と同じく、精製土器の出土位置や文様・器形から加曾利B式期と思われる。

第1群土器④とした第28図182~184、第76・77図1349~1352・1388~1391は、口縁部と胴上部に細かい刻み目を持つ細い隆帯が巡り、間に条線文が施文された深鉢形土器である。182~184は口縁部から胴

下部までの部位、1349～1352は口縁部、1388～1391は括れる胴部中段の破片である。口縁部の開きが緩やかであり、胴部の括れが③より弱い。条線文は、口縁部下が横位、胴下部は斜位に施されており、地文に縄文が施文されているものもある。183は胴部の隆帯が沈線化しており、新しい様相を呈するが、器形から④に含めた。④の時期は、精製土器の出土位置や文様・器形から加曾利B式～高井東式期と思われる。

第1群土器⑤とした第28・29図185～192・198・199、第76・77図1353～1371・1397～1400は、口縁部と胴上部に半円形の細かい刻み目が巡り、ほぼ全面に斜・縦位の条線文が施文された深鉢形土器である。185～192は口縁部から胴下部までに収まる部位、198は胴部中段、199は胴部中段から底部までの部位である。1353～1371は、口縁部から胴上部まで、1397～1400は、胴部中段付近の破片である。口縁部の開きが④よりもさらに弱く、胴部の括れも弱い。肥厚した口縁部は、ほぼ直立、ないしやや内湾するものがあるが、前者が古く、後者が新しい様相を呈すると思われる。刻み目は、沈線文を伴うものがある。187・1354は、刻み目を持つ隆帯が巡り、192は刻み目を持たないが、いずれも器形から⑤に含めた。⑤の時期は、精製土器の出土位置や文様・器形から後期安行式と思われる。

第1群土器⑥とした第29図193～197、第76～78図1372～1387・1392～1396・1401～1409は、肥厚した口縁部が内湾し、胴部がやや張る深鉢形土器である。193～197は口縁部から胴下部までに収まる部位、1372～1387・1407～1409は同部分に収まる破片、1392～1396・1401～1406は胴部中段の破片である。口縁部と胴部中段に刻み目を持つ隆帯が巡り、全面に斜・縦位の条線文が施文されたものが多い。193は、隆帯間の条線文が横位に施文されており、古い様相を呈する。197・1407～1409は、隆帯を持たないが、器形から⑥に含めた。⑥の時期は、精製土器の出土位置や文様・器形から晩期安行式と思われる。

第2群土器

第75図1313・1314は、口縁部から胴下部までL R単節縄文が施文された深鉢形土器である。1313は口縁部から胴下部まで、1314は口縁部から胴上部までの破片である。口縁部がやや内傾し、口縁部直下が僅かに括れる。時期は、その器形から加曾利B式～高井東式期と思われる。

第3群土器

第75図1325～1328は、口縁部から括れる胴部まで斜位の条線文が乱雑に施文された深鉢形土器である。すべて破片であり、口縁部から胴部中段までに収まる。時期は、精製土器の出土位置や文様・器形から加曾利B式期と思われる。

第4群土器

第75図1329～1338は、斜格子文が施文された深鉢形土器である。すべて破片であり、口縁部から胴下部までに収まる。1329のみ紐線文土器であり、口唇部に刻み目を持つ。1332は、円形の孔を持つ。時期は、文様や器形から加曾利B式期と思われる。

第5群土器

第30・31図203～214、第79図1437～1440は、口縁部が内湾する深鉢形土器である。203～208・210～214は口縁部から胴下部までに収まる部位、小型の209は全形の分かる個体、1437～1440は口縁部から胴部中段までに収まる破片である。縦・斜位の沈線文が施文されたものがある。

第31・32図215～226、第78～80図1410～1436・1441～1478は、口縁部が直線的に開く深鉢形土器であ

る。215・217～226は口縁部から胴下部までに収まる部位、216は全形の分かる個体、1410～1424・1441～1465・1467～1478は口縁部片、1466は口縁部から胴下部まで、1425～1436口縁部以下の破片である。口縁部が内湾するものと同じく、縦・斜位の条線文や沈線文が施文されたものがある。216の底部は、網代痕が残る。225は、口縁部下位に焼成後穿孔が認められた。これらの時期は、精製土器の出土位置や器形から加曾利B式期と思われる。

第6群土器

第32・33図227～240、第81図1479～1505は、口縁部が内傾し、胴部が括れる無文の深鉢形土器である。227は同タイプでは唯一全形の分かる個体、228～240は口縁部から胴下部までに収まる部位、1479～1505は口縁部から胴上部までに収まる破片である。高井東式精製土器と同じく、口縁部の内傾が強いものと弱いものがあるが、前者が古く、後者が新しい様相を呈すると思われる。特に後者は、丸みを帯びるものが目立つ。時期は高井東式期と思われ、精製土器の出土位置とも合致する。

第7群土器

第36図257～262、第82～84図1506～1555は、無文の深鉢形土器の口縁部以下である。257は胴部中段、258～262は胴上部から底部までの部位、1506～1555は口縁部以下の破片である。258・262の底部は、網代痕が残る。当群土器は、第5・6群土器のいずれかに付随すると思われるが、胴部が括れるもの以外については、第8・9群土器に付随するものもあるかもしれない。

第8群土器

第33図241、第85図1556～1572は、口縁部から胴部が直線的、ないし内湾気味に立ち上がる無文の深鉢形土器である。241は口縁部から胴部中段までの部位、1556～1560・1562～1572は口縁部片、1561は口縁部から胴下部までの破片である。口唇部が肥厚するものがあり、口縁部内面に稜を持つものが多い。時期は、器形から加曾利B式期と思われる。

第9群土器

第34・35図242～256、第85～89図1573～1642は、口縁部が内湾する深鉢形土器である。242～246・248・249・250・252～255は口縁部から胴下部までの部位、247・251・256は全形の分かる個体、1573～1642は口縁部から胴部中段までに収まる破片である。口縁部は、素口縁と断面が玉状を呈するものがあり、胴部はほぼ直線的なものやや丸みを持つものがある。251・256の底部は、平底であり、網代痕が残る。256・1620は、口縁部に円形の突起が付き、256は脇に二個一対の円孔を持つ。1621は口縁部が小波状を呈し、1622は小さい突起が付く。時期は、大半が晩期安行式期と思われる。

第10群土器

第36図263、第89図1643～1647は、口縁部に輪積痕を残す深鉢形土器である。263は口縁部から胴部中段までの部位、1643・1644・1646・1647は口縁部片、1645は口縁部から胴部中段までの破片である。口縁部は、ほぼ直線的に開くものやや内湾するものがある。胴部は、ほぼ直線的に下る。口縁部の輪積は、1段と2段のものがある。時期は、調査区中央出土のものは、精製土器の出土位置と合致しないが、晩期安行式期と思われる。

第11群土器

第36図264・265、第89図1648～1654は、製塩土器の可能性のある深鉢形土器である。器壁が薄く、器

面が粗い。264・265は、口縁部から胴下部までの部位、1648～1653は口縁部から胴部中段までに収まる破片、1654は胴部中段付近の破片である。口縁部は、内湾するもの、ほぼ直線的に開くものがあり、胴部はやや丸みを持つ。時期は、精製土器の出土位置などから晩期安行式期と思われる。

第12群土器

第12群土器①とした第29図200～202は、小振りの鉢形土器である。200・201は口縁部、202は胴下部から底部までの部位である。肥厚する口縁部が内湾、ないしほぼ直立する。胴下部はやや外反し、底部は平底である。いずれも横位の条線文が施文されており、200・201はやや粗いが、202は密である。

第12群土器②とした第37・38図266・267・291は、無文で深身の鉢形土器である。いずれも全形の分かる個体である。短い口縁部がやや外に開き、体部はほぼ直線的、底部は径が小さく、平底である。大きさは、大型と中型のものがある。

第12群土器③とした第37図268～270・278、第90図1667～1669・1672～1675は、無文でやや浅身の鉢形土器である。268・278は全形の分かる個体、269・270は口縁部から体部までの部位、1667～1669・1672～1675は同部分の破片である。口縁部から体部まで内湾しながら立ち上がり、底部は丸底に近い。大きさは、大中小ある。

第12群土器④とした第37図271・273～276、第90・91図1659～1665・1670・1683・1684は、無文で深身の鉢形土器である。第12群土器では最も多く出土している。271・273・274は全形の分かる個体、275・276は口縁部から体部までの部位、1659～1665・1670・1683・1684は、同部分の破片である。底部は、丸底である。大きさは、中型と小型のものがある。1683・1684は、口唇部に突起が付くが、1683は二個一対である。

第12群土器⑤とした第37図272は、無文で深身、中型の鉢形土器である。ほぼ全形の分かる個体である。口縁部が僅かに内湾し、体部は直線的、底部は径が大きく、平底である。

第12群土器⑥とした第37図277・279～281、第90・91図1666・1676・1677は、無文で深身、小型の鉢形土器である。277・279・280は口縁部から体部までの部位、281は全形の分かる個体、1666・1676・1677は口縁部から体部までの破片である。口縁部は内湾、ないしほぼ直立し、体部は丸みを持つ。底部は丸底に近い。

第12群土器⑦とした第37図282、第90図1671は、無文でやや深身、小型の鉢形土器である。282は、ほぼ全形の分かる個体である。口縁部から体部までほぼ直立し、底部は径が大きく、平底に近い。

第12群土器⑧とした第37図283・284、第91図1678～1682は、無文でやや浅身の鉢形土器である。283はほぼ全形、284は全形の分かる個体、1678～1682は口縁部から体部までの破片である。口縁部は外反し、体部は丸みを持つ。底部は平底、ないし丸底に近い。大きさは、大型と小型のものがある。

第12群土器⑨とした第37図285は、全形の分かる浅身で小型の鉢形土器である。口縁部から体部まで逆ハの字に開き、一部が片口状を呈する。底部は平底であり、網代痕が残る。器壁が厚い。

第12群土器⑩とした第38図286・287は、口縁部が波状を呈する浅鉢形土器である。いずれも全形の分かる中型の個体であり、口縁部から体部が内湾しながら立ち上がる。底部は286が丸底、287が平底である。波状口縁は、286が大波で波頂部と波底部が肥厚する。287は、小波で細かい。

第12群土器⑪とした第38図288は、口縁部に刺突の施された突起の付く中型の鉢形土器である。全形

の分かる個体であり、口縁部は内湾し、体部は丸みを持つ。底部は平底である。口縁部に縄文が施文されており、精製土器として扱った方が良いかもしれない。

第12群土器⑫とした第38図289・290、第91図1685～1690は、無文で大型の浅鉢形土器である。いずれも底部を欠くが、台部が付く可能性もある。289・290は口縁部から体部までの部位、1685～1690は同部分の破片である。口縁部から体部が直線的に大きく開く。290・1688は口唇部に二個一対の突起、1689・1690は口縁部内面に突起が付く。

第12群土器⑬とした第38図292は、無文で大型の台付鉢形土器である。全形の分かる個体であり、口縁部から体部まで内湾しながら立ち上がる。台部はハの字状に短く開く。

第12群土器⑭とした第38図293～295、第91図1691・1692は、口縁部が大きく開き、体部が括れる無文の台付鉢形土器である。293は口縁部から体部まで、294は体部付近、295は体部から台部上位までの部位、1691は体部付近、1692は口縁部から体部までの破片である。大きさは、大型と中型のものがある。

第12群土器⑮とした第38図296・297は、口縁部と体部の境に括れを持つ無文の鉢形土器である。いずれもほぼ全形の分かる個体である。296は器高が低く、297は高い。口縁部は受け口状を呈するが、体部は296が球形、297はやや丸みを持つ。底部は296が丸底、297は平底に近い。296は、体部に孔を持つ。

第12群土器⑯とした第90図1655～1658は、口縁部と体部の境に段を持つ鉢形土器である。すべて口縁部から体部までに収まる破片である。口縁部は、やや外に開くもの、ほぼ直立するもの、内湾するものがある。1657は段に刻み目が施されており、精製土器として扱った方が良いかもしれない。

第12群土器の時期については、①②①が加曽利B式期かと思われるが、その他は時期の特定が困難であり、縄文時代後・晩期としか言えない。

5 底部・接合～台部・壺形土器・注口部他

出土状況（第11図）

底部は、主に精製・粗製の深鉢、ないし鉢形土器のものと思われ、遺物包含層が確認されたほぼ全面から出土している。底面は、無文のものと網代痕が残るものがあるが、後者が多い。出土位置は、前者が調査区南西の180～148グリッド、後者も南西の179～147グリッドで多く出土している。

接合～台部は、主に精製・粗製の台付鉢形土器に伴うものと思われる。遺物包含層はほぼ全面から出土しているが、調査区南西の179～181～147・148グリッドで多く出土している。

壺形土器は、出土数自体少ないが、調査区南西の179・180～146～148グリッドで出土している。

注口土器の注口部は、遺物包含層ほぼ全面から出土しているが、調査区南西の178・179～146・147グリッドで多く出土している。

器種不明の第39図330は、調査区南西の181～148グリッドで出土している。

出土土器（第38～45・91・92図）

第40～45図337～537は、主に精製・粗製の深鉢、ないし鉢形土器の胴下部から底部までの部位である。底面は、第40・41図337～423が無文、第42～45図424～534は網代痕を残す。いずれも器形から以下5つに分類した。

Aタイプ：胴下部が丸みを持つ。第40図337～349、第42図424～442

Bタイプ：底部が円柱状を呈する。第40図350～357、第42図443～450

Cタイプ：胴下部が直線的なもの。第40・41図358～388、第42～45図451～529

Dタイプ：底部が小さいもの。第41図389～414、第45図530～533

Eタイプ：底部が出っ張るもの。第41図415～423、第43図534

上記5つタイプのうち、最も多く出土しているのは、Cタイプである。網代については、経の条に対し、緯の条が「2本越え、1本潜り、1本送り」に編まれているものが多い。537は、深鉢形土器ではないが、器種不明の底部である。底面の対角線上に棒状突起が付き、内面は赤彩が施されている。

これらの時期については、特定するのが困難であるが、器形や出土量からCタイプは、加曾利B式、A・Dタイプは、高井東式～後・晩期安行式の可能性が高い。なお、木葉痕も2点（537・538）出土しているが、これらは弥生時代以降のものである可能性が高い。

第38・39図298～326は、主に精製・粗製の台付鉢形土器の接合～台部である。接合部は、隆帯が巡るものもみられ、299は刺突列が伴う。298は、外面に赤彩が施されている。台部は、器高が高いものも多く、ハの字状を呈するもの、やや丸みを持つものがある。時期を特定するのは困難であるが、加曾利B式～高井東式が多いと思われる。

第39図327～329は、壺形土器の口縁部である。いずれも無文であり、口縁部が短い。逆ハの字に開くもの、やや受け口状を呈するものがある。時期を特定するのは困難であり、縄文時代後・晩期としか言いようがない。

第92図1695～1745は、注口土器の注口部である。長さや形態は様々である。無文のものが多いが、円形、ないし半円形の低い突起が付くもの、刺突が施文されたもの、隆帯が巡るものなどがあり、これらについては、加曾利B式～高井東式である可能性が高い。無文のものについては、時期を特定するのは困難であるが、注口部の長いものは加曾利B式～高井東式、短いものは後・晩期安行式である可能性が高い。

第39図330は、器種不明の土器である。上位は挿鉢状を呈し、底部は対角線上につまみ状の突起を持ち、横方向に孔を持つ。内面は、赤彩が施されている。この土器については、本調査地点から赤色顔料となる辰砂がいくつか検出されていることから、土器に赤彩を施すために使用された可能性がある。「パレット状土器」とでも称すべきか。

6 赤彩土器

出土状況

出土位置は示さなかったが、時期を問わず、年度別の一括分も含め、遺物包含層ほぼ全面から出土している。なお、掲載した遺物は、時期不明のものを主体とするが、時期の判別が可能なものについても縮尺の都合から本項で扱った。

出土土器（第93図）

第93図1746は、精製深鉢形土器の胴部片である。斜位の沈線文脇の縄文施文部に赤彩が若干残る。1747は、精製鉢形土器の口縁部片である。横位の沈線文が複数巡り、下位の沈線文間に縄文が施文されている。内外面に赤彩が残る。1748は、精製深鉢形土器の肥厚した口縁部片である。主に外面の沈線文

に赤彩が残る。1749は、算盤玉状を呈する精製深鉢形土器の胴部中段の破片である。縄文、沈線文、円形の凹みが施文された外面に赤彩が施されている。1750・1751は、精製深鉢形土器、ないし鉢形土器の口縁部から胴上部までに収まる破片である。いずれも内外面に赤彩が施されている。1750は、胴上部に横位の沈線文が複数巡る。1752は、精製鉢形土器の口縁部片である。斜位の沈線文と円形の小さい刺突列が施された外面に赤彩が施されている。1753は、精製深鉢形土器の肥厚した口縁部片である。内面一部に赤彩が残る。1754は、精製鉢形土器、ないし注口土器の体部片である。沈線文で木葉状の文様と磨消縄文が施文されている。外面の沈線文に赤彩が残る。1755は、精製鉢形土器、ないし注口土器の体部片と思われる。外面に複数の沈線文が巡り、小さい円形の突起が付く。外面の沈線文に赤彩が若干残る。1756は、器種不明の精製土器の胴部片である。外面下位に横位の沈線文が複数巡る。内外面に赤彩が施されている。1757は、精製鉢形土器、ないし注口土器の体部片と思われる。赤彩は、外面上位が僅かに残り、内面は全面施されている。1758は、精製鉢形土器の口縁部片である。細い横位の沈線文と刻み目が施された外面の所々に赤彩が僅かに残る。1759は、小型の精製鉢形土器の口縁部片である。横位の沈線文と縄文帯が巡る外面に赤彩が施されており、円形の孔が設けられている。1760・1761は、精製深鉢形土器の口縁部片である。1760は、口縁部に付く突起と横位の沈線文が巡る外面の所々に赤彩が僅かに残る。1761は、刻み目が施された波状口縁と外面の所々に赤彩が僅かに残る。

これらの時期については、文様のあるものの大半は加曾利B式、1759のみ安行1式と思われるが、その他については、縄文時代後・晩期としか言いようがない。

7 ミニチュア土器

出土状況 (第12図)

出土数自体少なく、また出土位置の明確なものも少ないが、年度別の一括分も含め、ほぼ全面からまばらに出土している。

出土土器 (第39図)

第39図331は、スプーン形土器である。完形品。椀状を呈する容器の片端に把手が付く。器壁が厚い。332・333は椀状、334は袋状、335・336は猪口状を呈するミニチュア土器である。全形の分かる333以外は、口縁部から体部までの部位である。器壁が厚いものと薄いものがある。

これらの時期については、縄文時代後・晩期としか言いようがない。

8 土製耳飾り

出土状況 (第12図)

計12点出土しており、出土位置の明確なものは3点のみであるが、年度別の一括分も含め、調査区南西半分から出土しているものが多い。

土製耳飾り (第94図)

完形品が少なく、大きさ・形態ともに様々であるが、形態はドーナツ状を呈するもの(1・2・4・6・8・10・11)と中央に孔を持たないもの(3・5・7・9・12)の二者に大別される。文様のあるものが少ないため、時期の特定が困難なものが多い。

ドーナツ状を呈するもののうち、中型ないし大型の1・6・8は、断面形が三角形状を呈する。最も大きい11は三角形状を呈するが、裏面に挟りが巡る。また、11の表面には、小さい円形の突起や細かい刻み目の施された低い隆帯が貼り付けられている。小型の2・4・10の断面形は、中央がくびれ、両端は外に広がる。一方、中央に孔を持たないもののうち、中型の3・9及び小型の12は、表面中央及び縁辺に突起ないし隆帯を持ち、裏面は中央が表面より浅く窪む。小型の5・7は、表面中央がやや深く窪むが、裏面は5が出っ張る形状であるのに対し、7・12は中央が浅く窪む。7は表面の2箇所細かい刻み目の施された突起が付く。

各遺物の法量などについては、第3表を参照のこと。

9 土製円盤

出土状況 (第12図)

計60点が出土している。年度別の一括分も含め、遺物包含層が確認されたほぼ全面から出土しており、時期を問わず出土状況を見ると、179・180-148グリッドでの出土が多い。また、時期別による出土状況に偏りなどは、見られない。

土製円盤 (第95図)

最大長5cm、最大幅4cm、重量15g前後のものが多い。約半分は無文であり、時期の特定は困難である。時期の分かるものについては、加曽利B式から後期安行式までに収まり、特に高井東式が多く出土している。

1～6・8・11・12・14・15・18・21～23・25・28・31～34・37・41・43・46・47・49・50・52・53・56・57・59は、精製及び粗製土器の無文部片である。

7は、精製深鉢形土器、ないし鉢形土器の破片である。円形の刺突列が巡る。9も精製深鉢形土器、ないし鉢形土器の破片である。縄文が施文されている。10は、加曽利B式の粗製深鉢形土器の破片である。分かりづらいが、斜格子文が施文されている。13は、安行1式の精製大波状口縁深鉢形土器の波頂部を含む口縁部片である。縄文が施文されており、中央に円形の孔を持つ。16・19・42・48・55は、粗製深鉢形土器の胴部片である。分かりづらいものがあるが、条線文が施文されている。17・24・26は、粗製深鉢形紐線文系土器の胴部片である。17は、沈線文と刺突列が巡る。24・26は、横位に巡る沈線文と刺突列の上下に斜位の条線文が施文されている。20は、高井東式の精製深鉢形土器の口縁部に近い破片である。隆帯が貼り付けられ、縄文が施文されている。27は、精製深鉢形土器の破片である。円形の突起が2個付く。加曽利B式か。29・30・35は、高井東式の精製深鉢形土器の口縁部片である。いずれも隆帯が貼り付けられており、35は縦長及び円形の突起が付く。36も高井東式の精製深鉢形土器であり、口縁部に近い破片である。隆帯が貼り付けられており、沈線文が施文されている。38は、粗製深鉢形紐線文系土器の胴部片である。刻み目が施された隆帯が巡る。39は、精製深鉢形土器の破片である。分かりづらいが、幅広の沈線文が施文されており、突起が欠けている。40は、沈線文が施文されている。44は、高井東式の精製深鉢形土器の口縁部片である。横長の突起が付く。45は、安行1式の精製深鉢形土器の胴部片である。横位の沈線文と縄文帯が巡る。51・54は、高井東式の精製深鉢形土器の口縁部片である。51は、隆帯が貼り付けられている。54は刻み目が施された隆帯が貼り付けられており、円形の凹みが施

文されている。58は、安行1～2式の精製深鉢形土器の胴下部片である。縄文が施文されている。60は、安行1式の精製深鉢形土器の胴部片である。刺突列、沈線文、縄文帯が施文されている。

各遺物の法量などについては、第4表を参照のこと。

10 石器・石製品

出土状況（第13図）

磨石1点が調査区北東で出土している以外、すべて調査区中央から南西にかけての範囲で出土している。種別による出土状況に偏りなどは見られない。

出土石器（第96～100図）

第96図1は、黒耀石製の有茎打製石鎌である。完形品。第96図2は、粘板岩製の石匙である。上位が把手状に出っ張る。完形品。第96図3・4は、スクレイパーである。幅が異なるが、いずれも粘板岩製で撥形を呈する。完形品。第96・97図5～24は打製石斧である。長さは10cm、幅は7cm、厚さは3cm、重量はバラツキがあるが、200g前後のものが多い。形状は、分銅形を呈するものが多いが、22・23のような短冊状を呈するものもある。石材は、粘板岩、ホルンフェルス、頁岩などがあるが、粘板岩が圧倒的に多い。6・19は刃部、10・18・22・23は基部を欠くが、その他は完形品である。このうち、24は、加工痕が少なく、未製品の可能性がある。

第97図25～27は、磨製石器である。25は、小振りて一部を欠く。両面研磨されており、一辺以外に刃が付く。砂岩製である。26・27は、石斧の刃部である。26は短冊形、27は撥形を呈すると思われる。26は凝灰岩、27は蛇紋岩製である。

第97図28～31は、磨石である。28・31は厚手、29・30は扁平である。28は閃緑岩、29は砂岩、30は凝灰岩、31は蛇紋岩製である。

第98図32は、敲石兼磨石である。棒状を呈し、片端に敲打痕、両面に擦痕が残る。片岩製である。

第98・99図33～47は、石皿である。欠損するものが多い。35・41・42・46は、凹みを持つ。石材は、閃緑岩、砂岩、安山岩、雲母片岩、緑泥片岩、凝灰岩などがあるが、閃緑岩と緑泥片岩が多い。

第99図48は、台石である。片端を欠く。表面が反っている。砂岩製である。

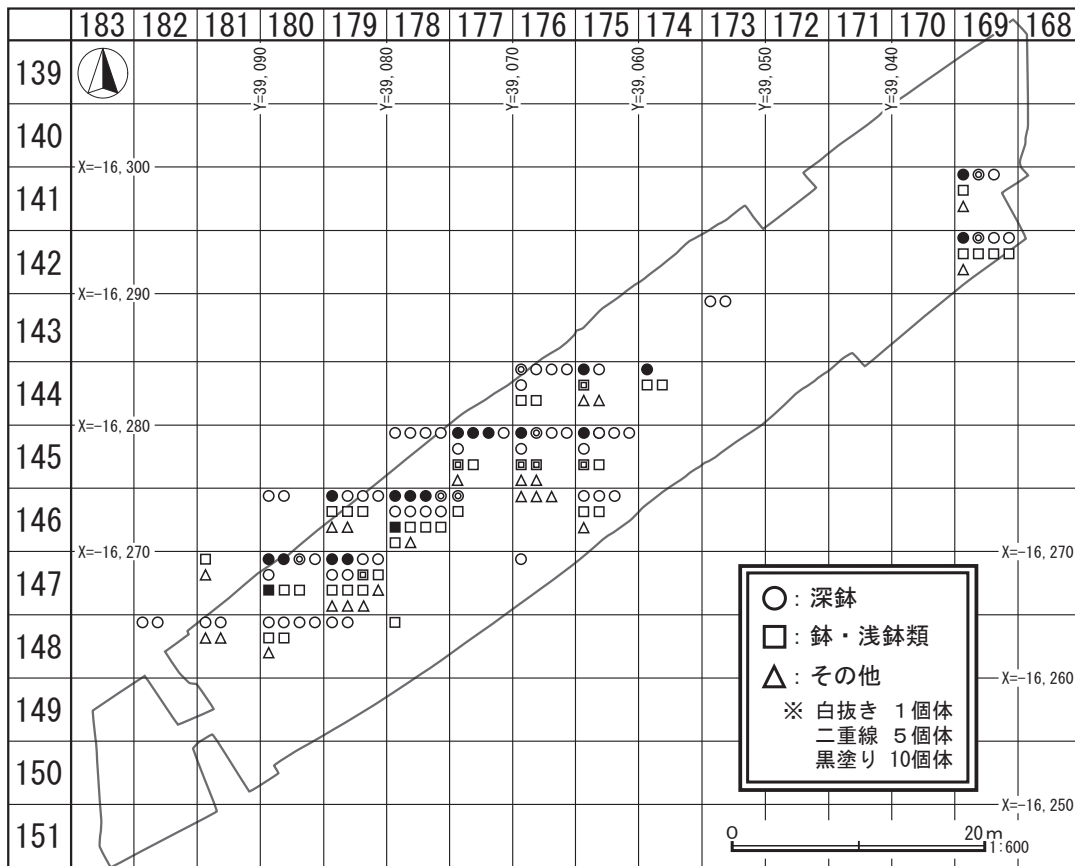
第99・100図49～64は、砥石である。欠損するものが多いが、形状は様々である。溝状の研ぎ痕を持つものが多い。石材は、砂岩、凝灰岩、軽石、緑泥片岩、花崗岩などがあるが、砂岩と凝灰岩が目立つ。

第100図65・66は、石錘である。両側面中央に抉りを持つ。65は砂岩、66は粘板岩である。

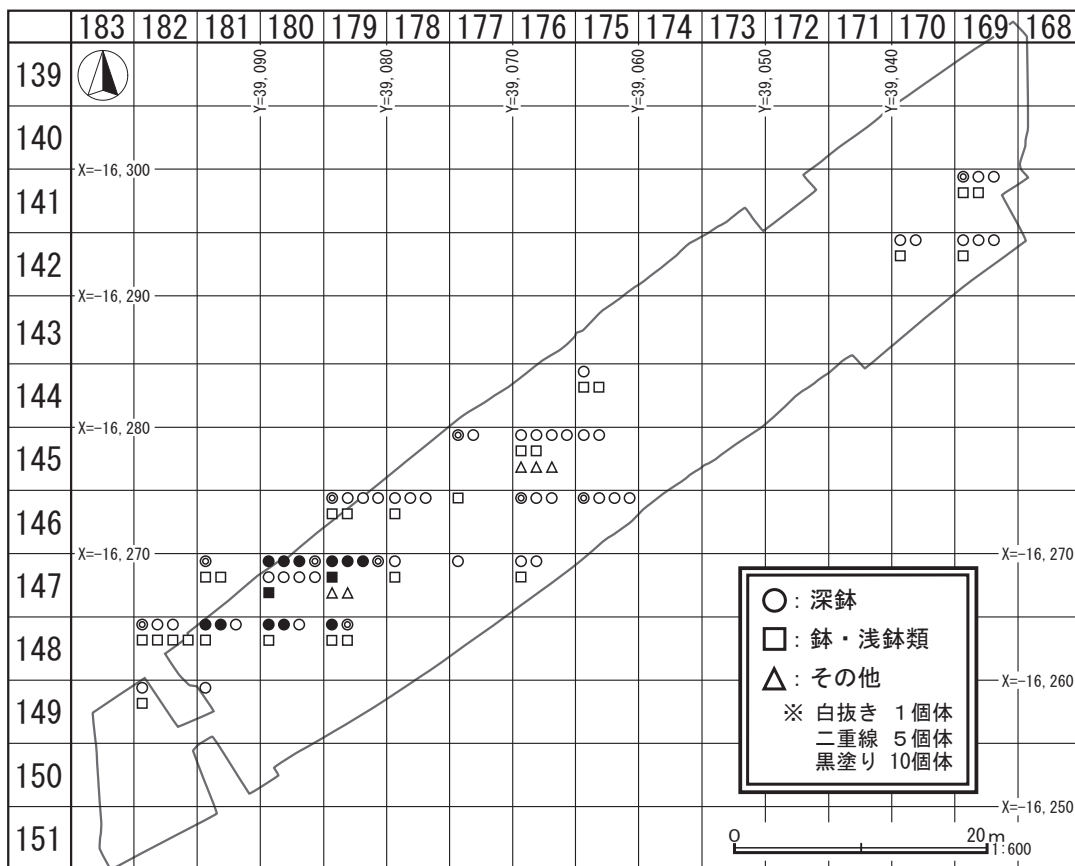
第100図67は、石剣の一部か。棒状を呈し、表面が研磨されている。粘板岩である。

第100図68は、石棒か。欠損箇所が多い。円柱状を呈する。石材は、雲母片岩である。

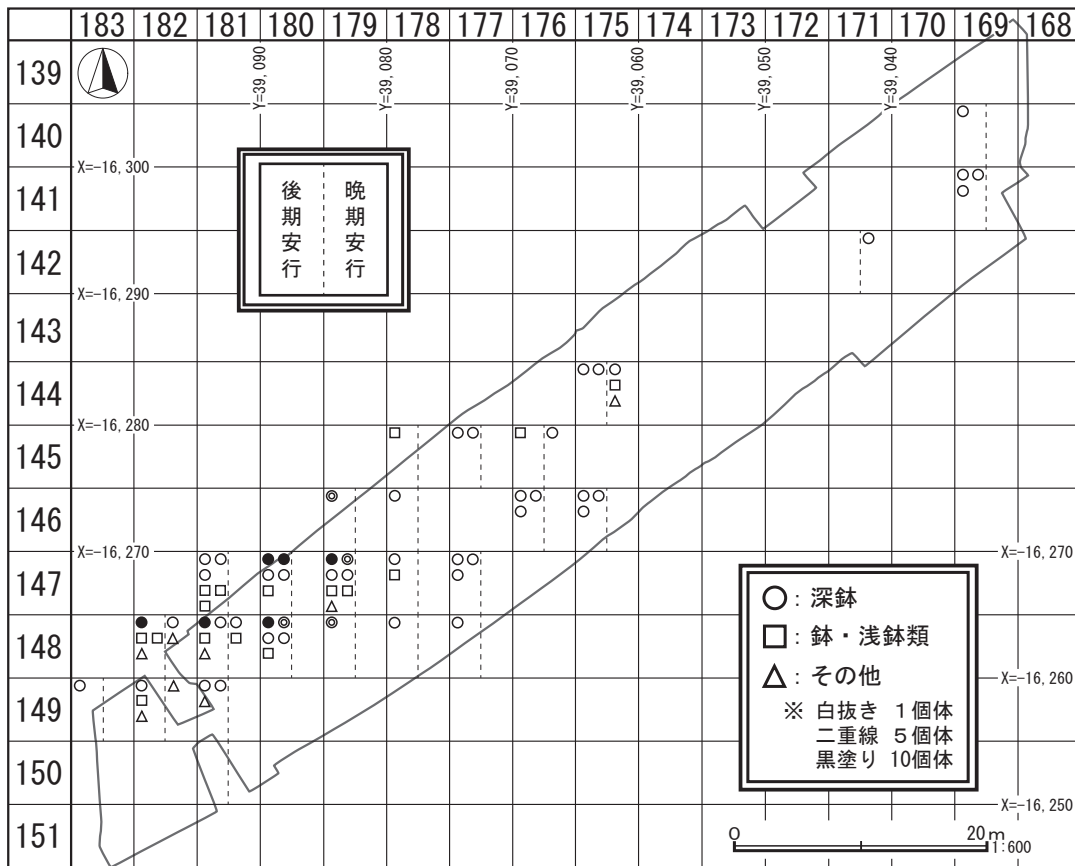
各遺物の法量などについては、第5表を参照のこと。



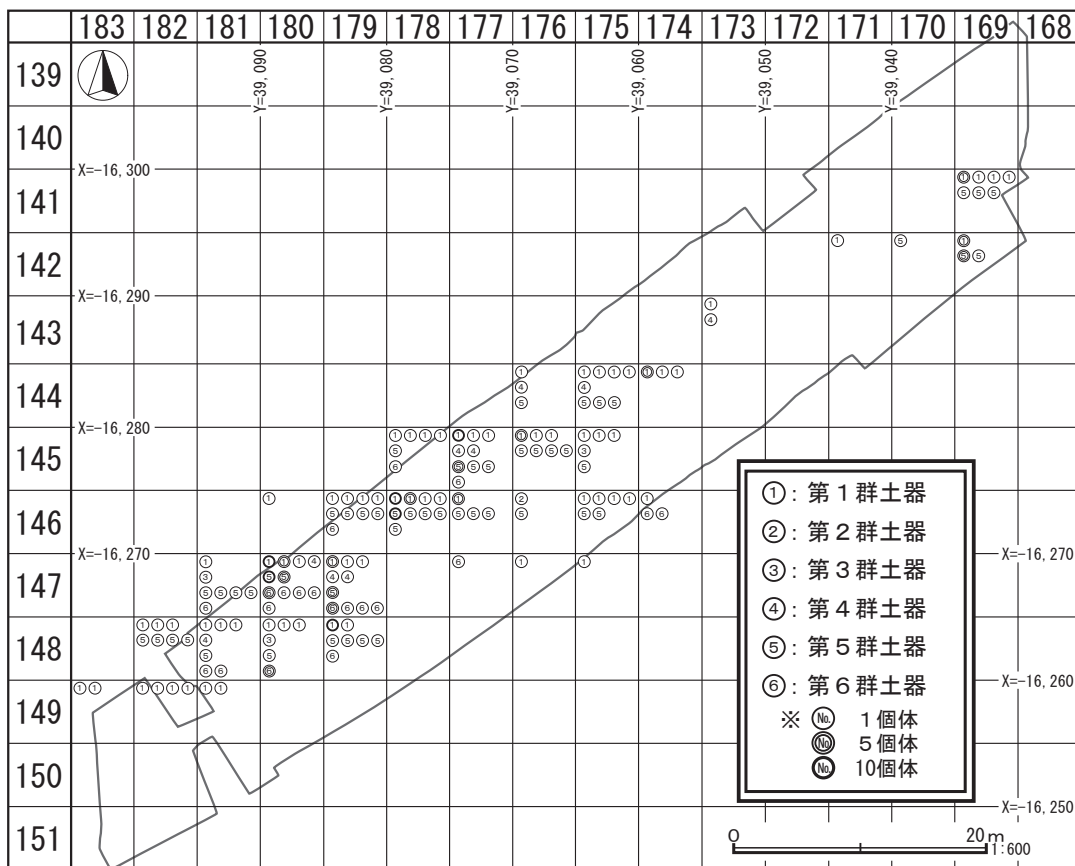
第6図 加曾利B式精製土器出土状況



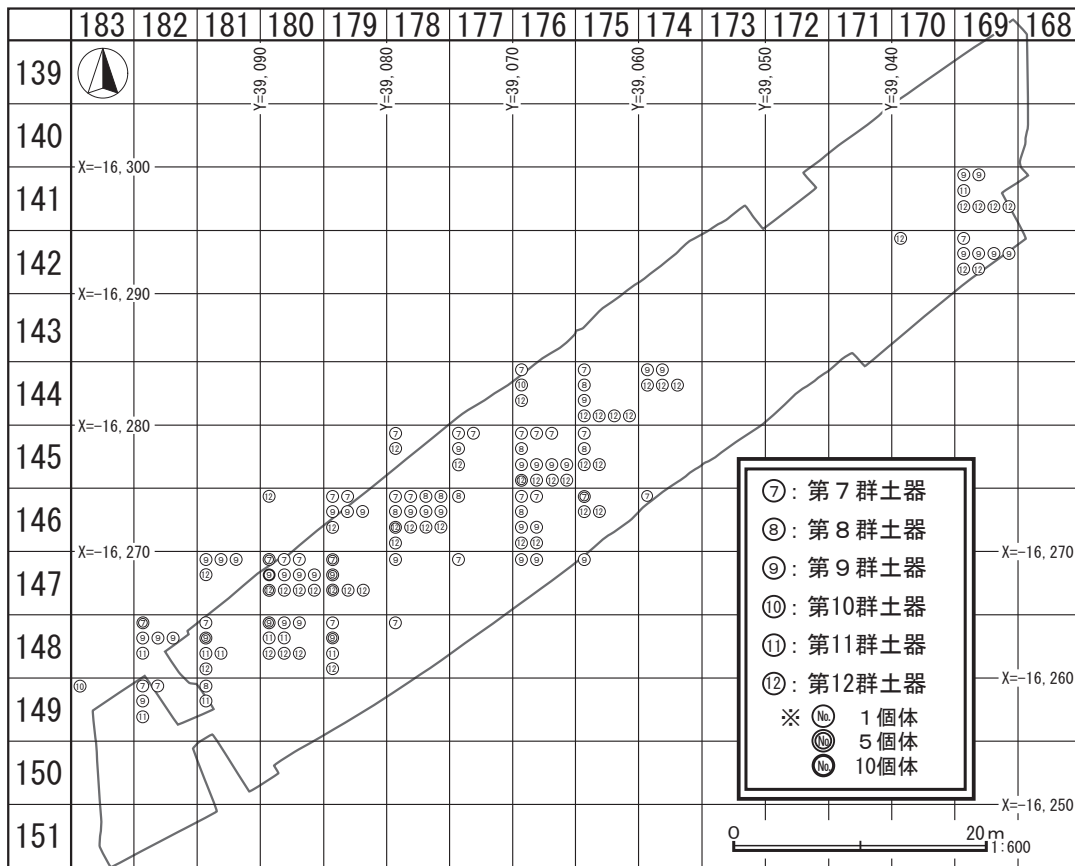
第7図 高井東式精製土器出土状況



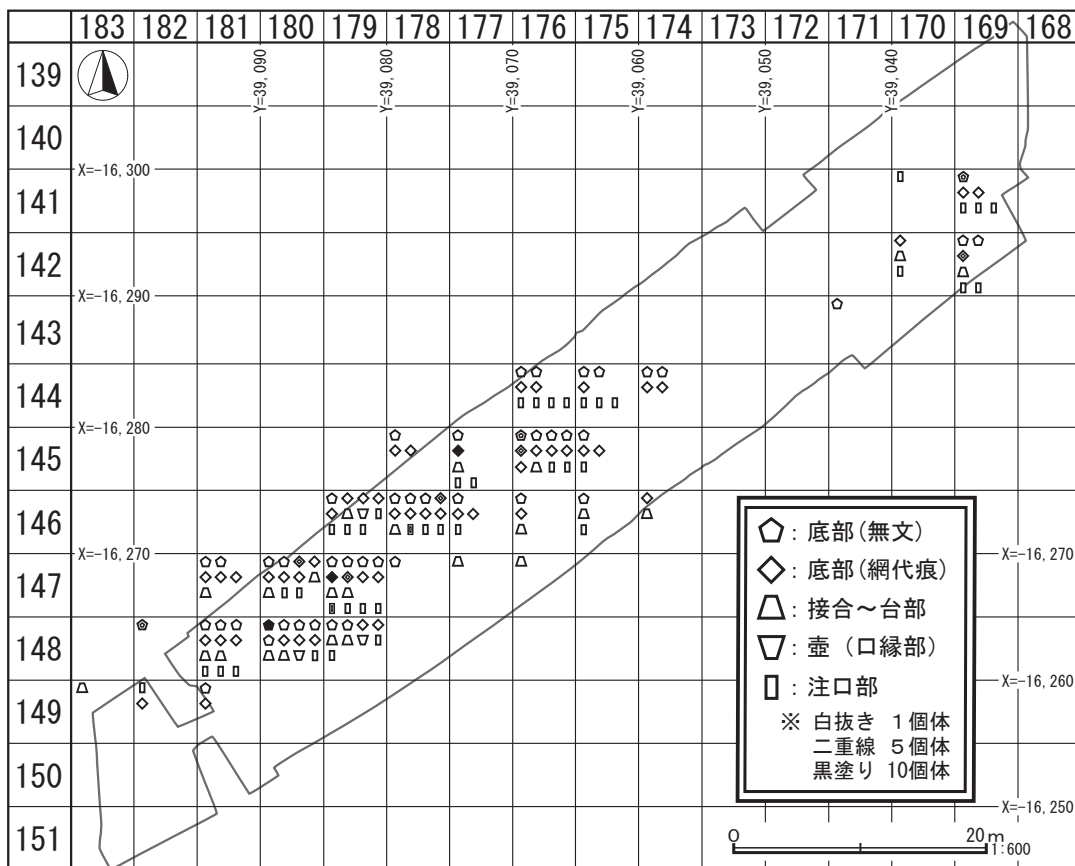
第8図 後・晚期安行式精製土器出土状況



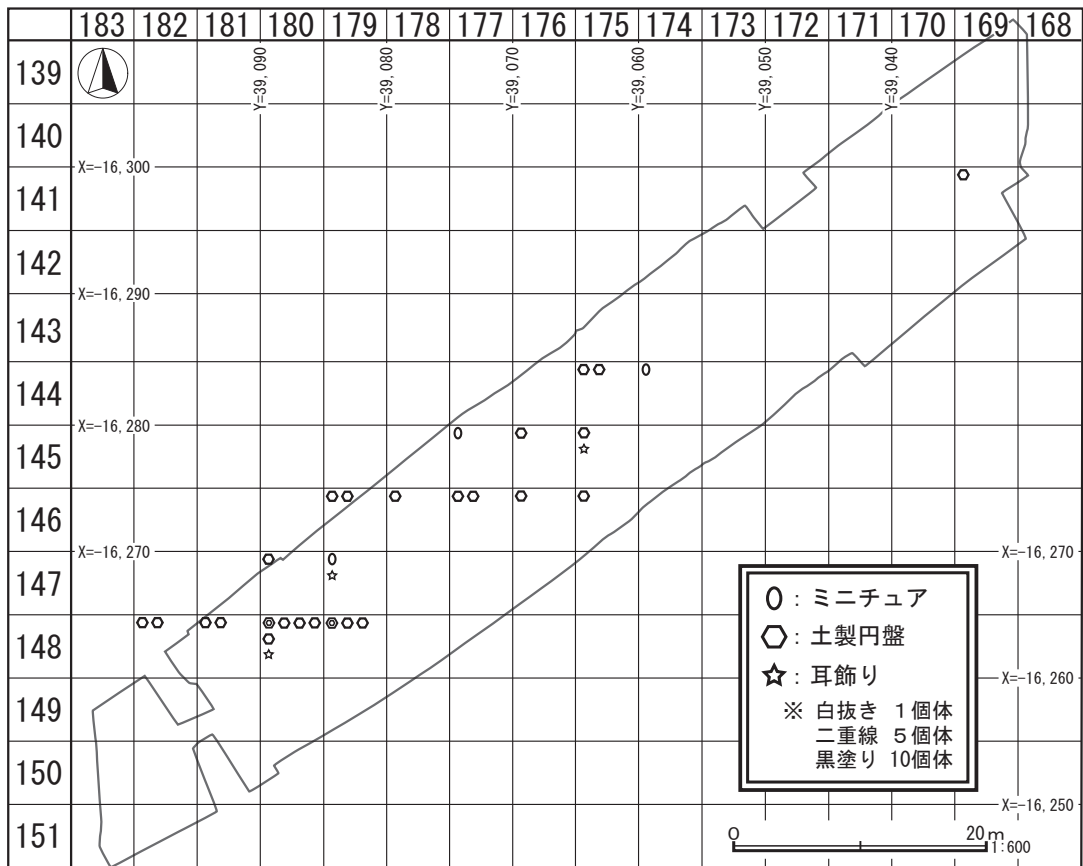
第9図 粗製土器出土状況(1)



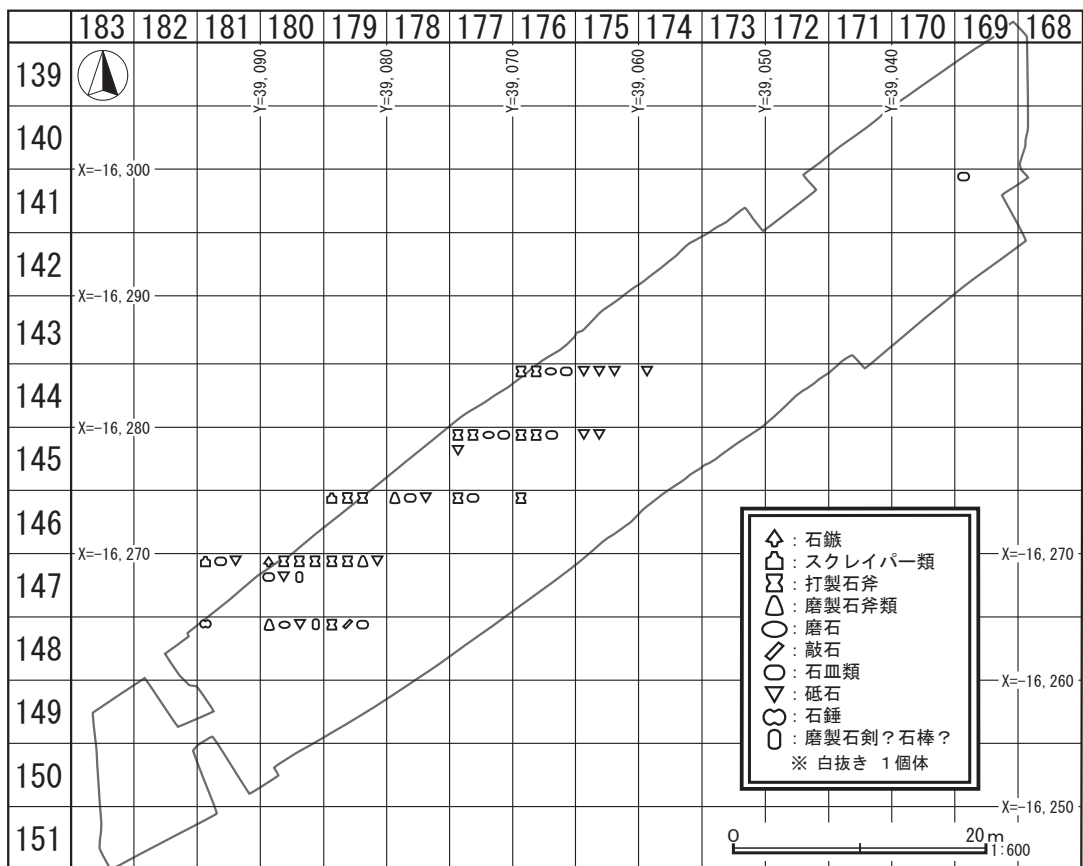
第10図 粗製土器出土状況 (2)



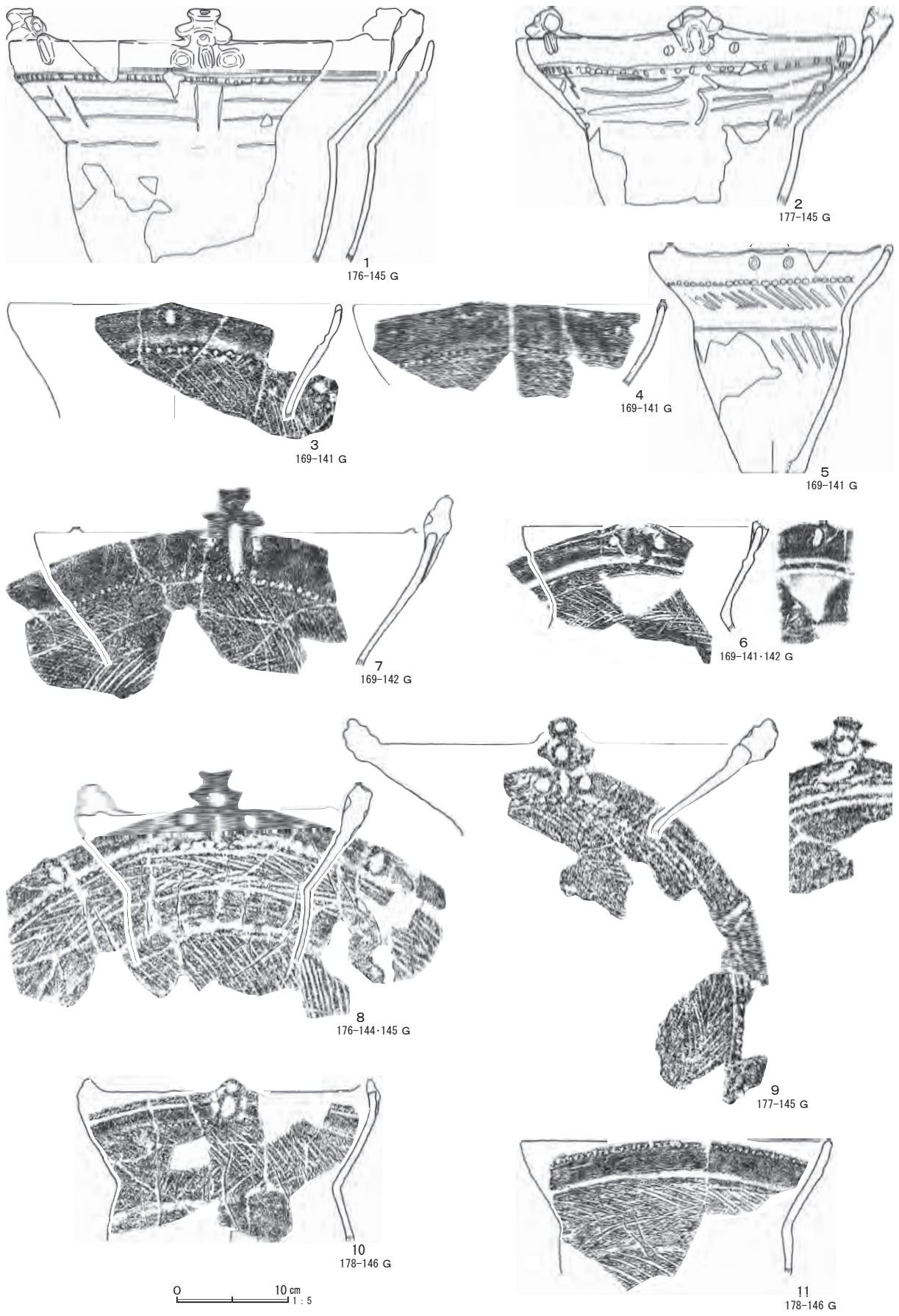
第11図 底部・接合～台部・壺形土器・注口部出土状況



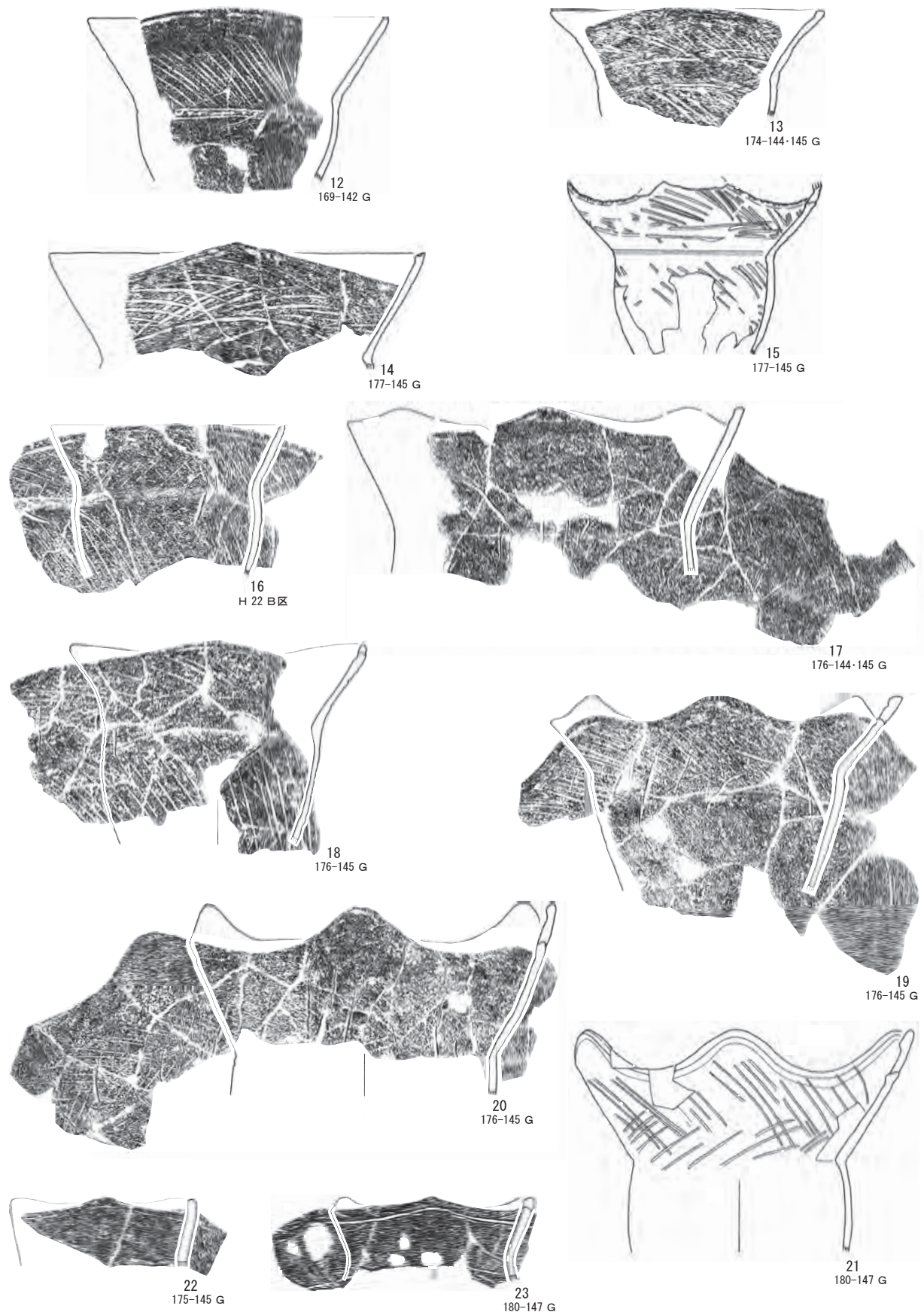
第12図 ミニチュア土器・土製耳飾り・土製円盤出土状況



第13図 石器・石製品出土状況

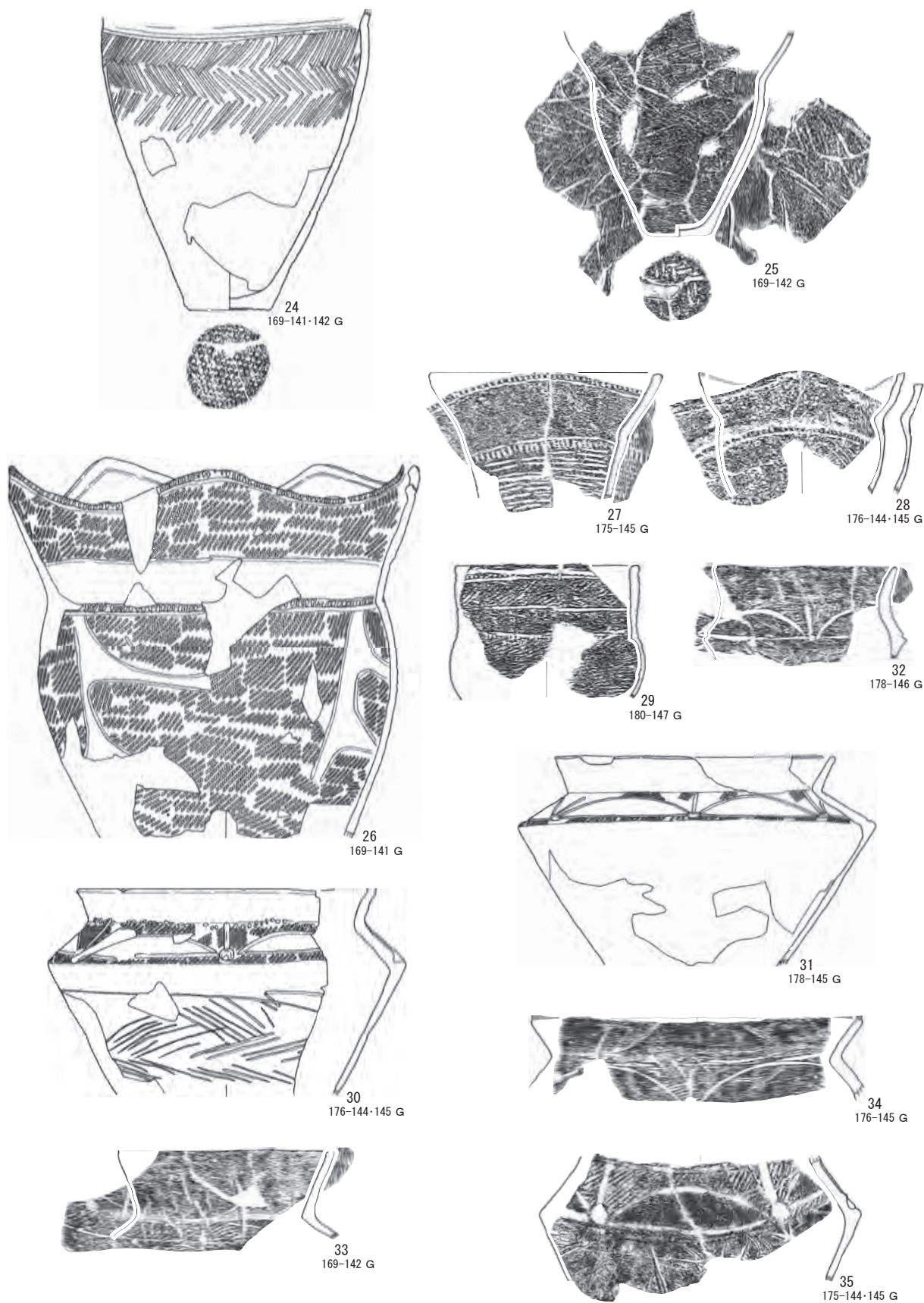


第14図 出土土器（1）

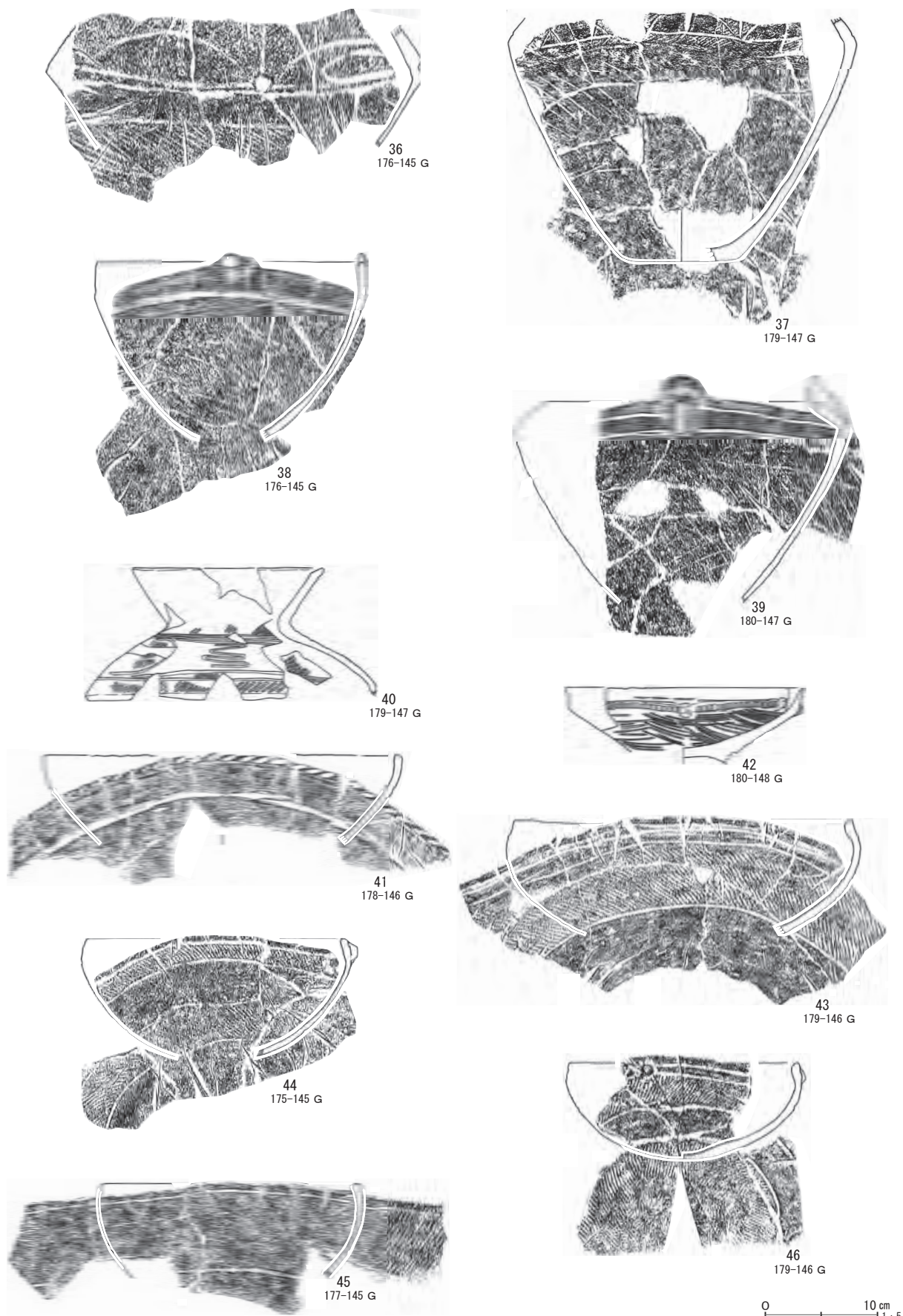


0 10 cm
1:5

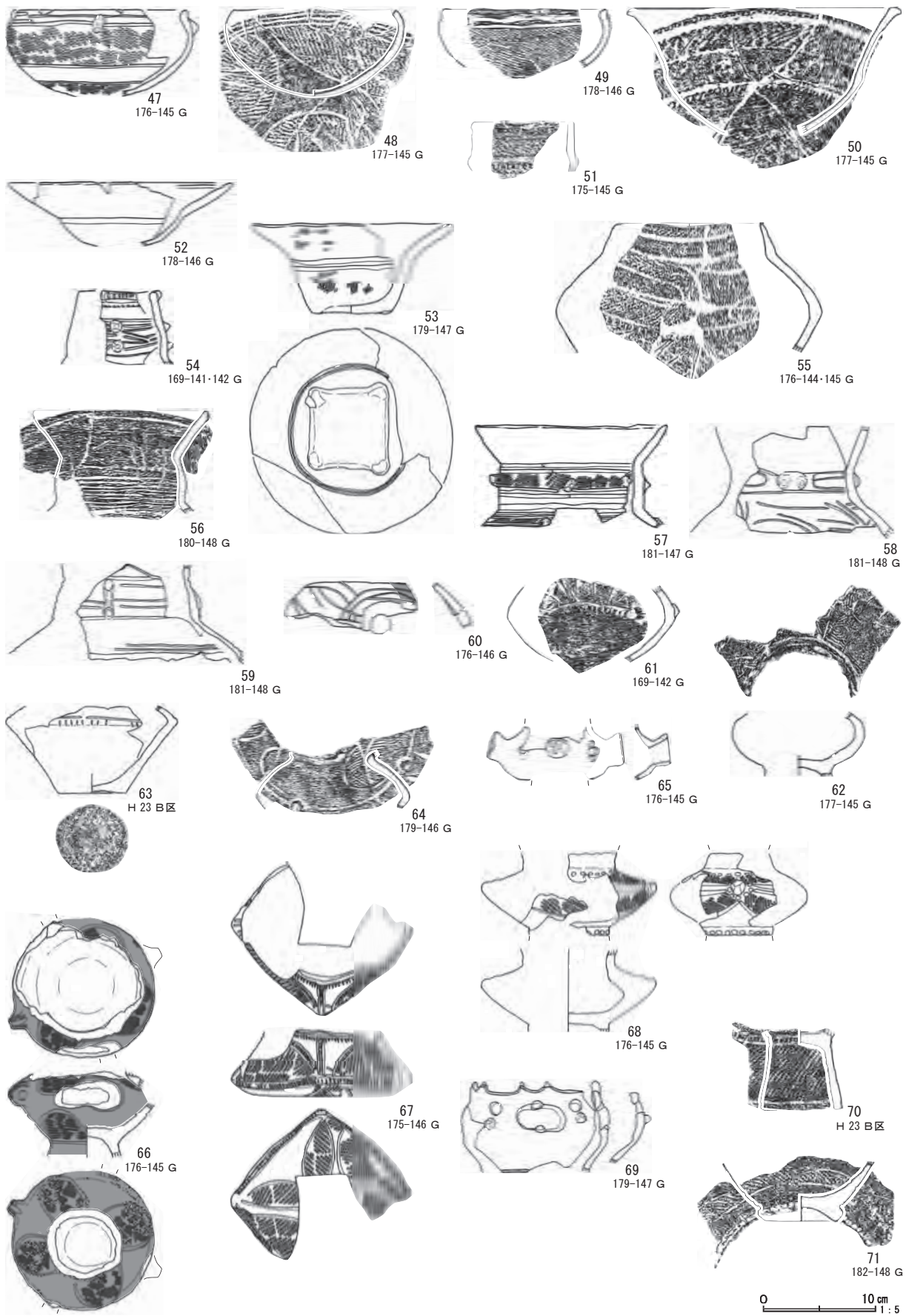
第15図 出土土器 (2)



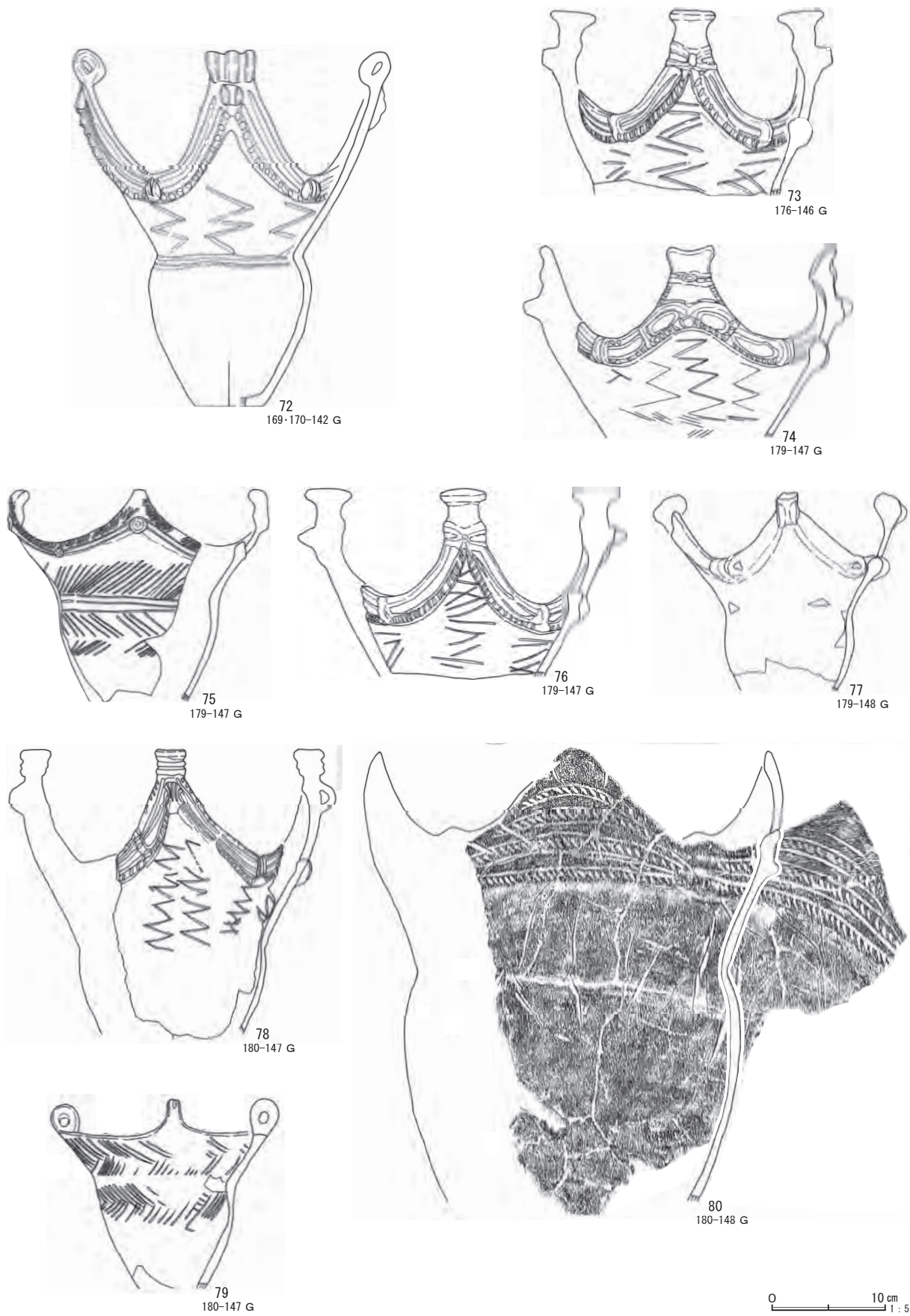
第16図 出土土器 (3)



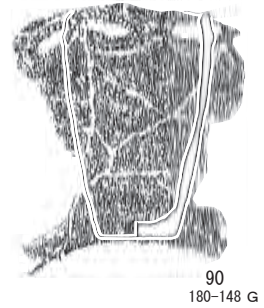
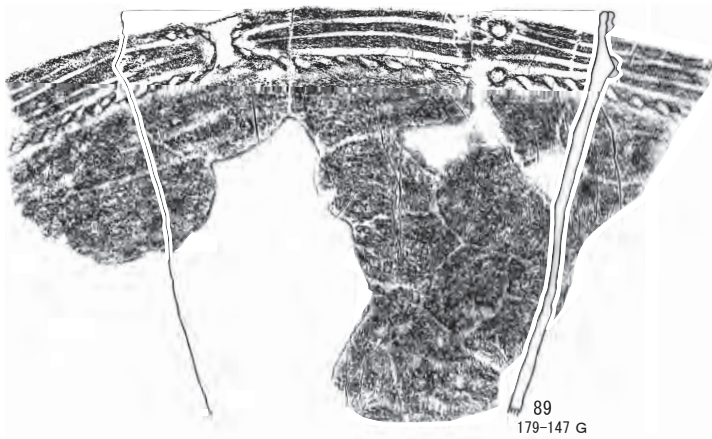
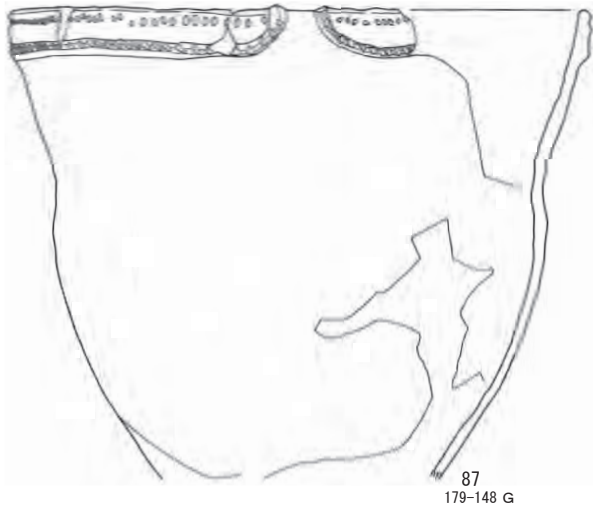
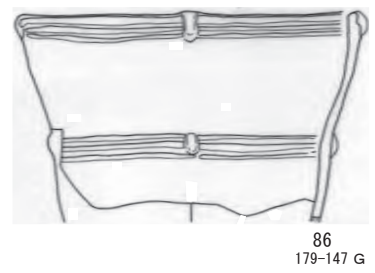
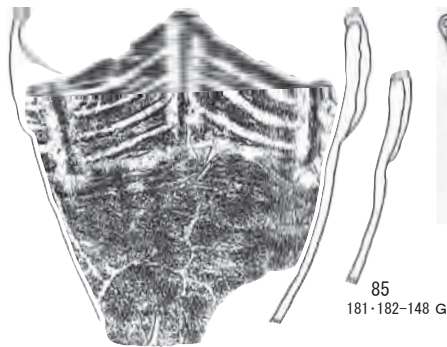
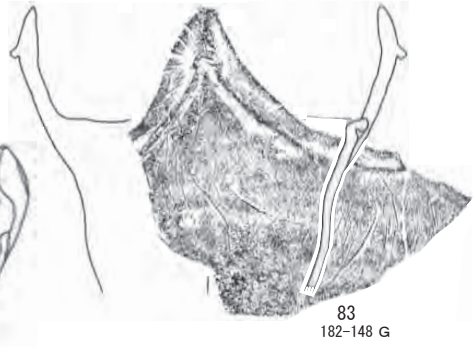
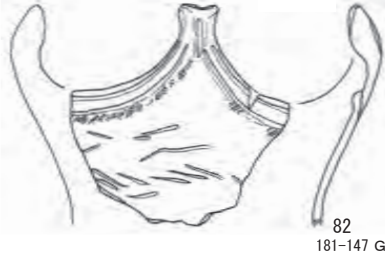
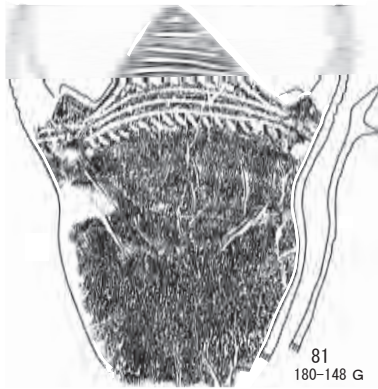
第17図 出土土器 (4)



第18图 出土土器 (5)

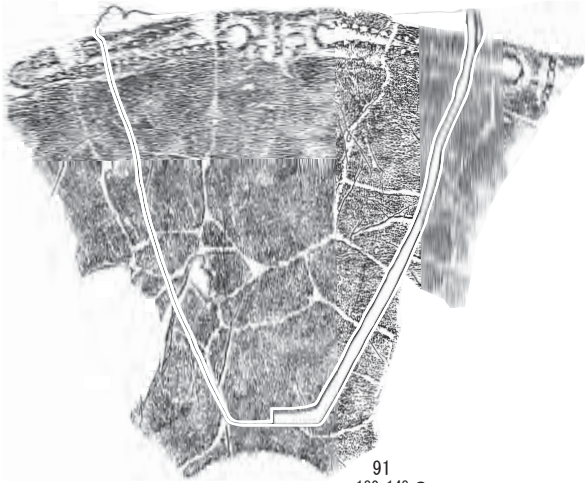


第19図 出土土器 (6)

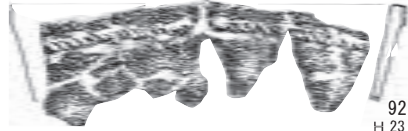


0 10 cm
1:5

第20図 出土土器 (7)



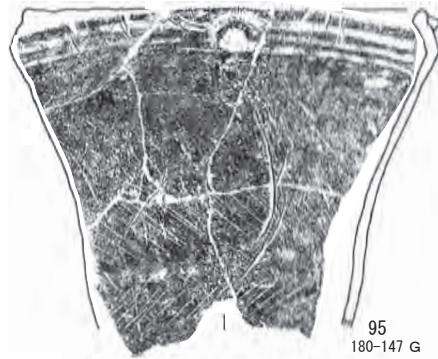
91
180-148 G



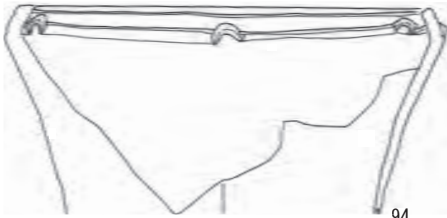
92
H 23 B区



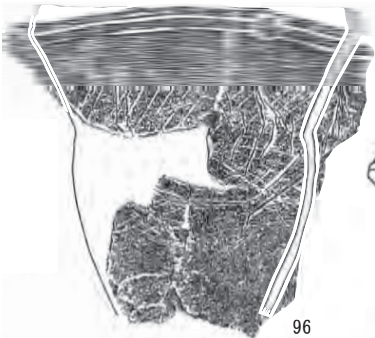
93
177-145 G



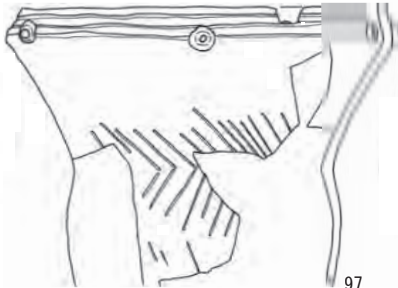
95
180-147 G



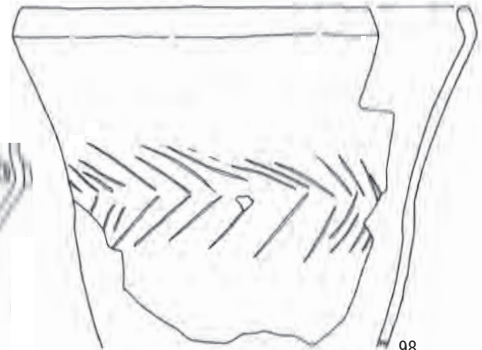
94
179-147 G



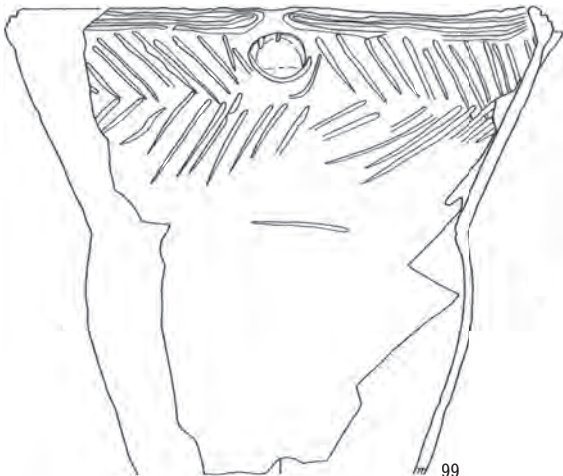
96
180-148 G



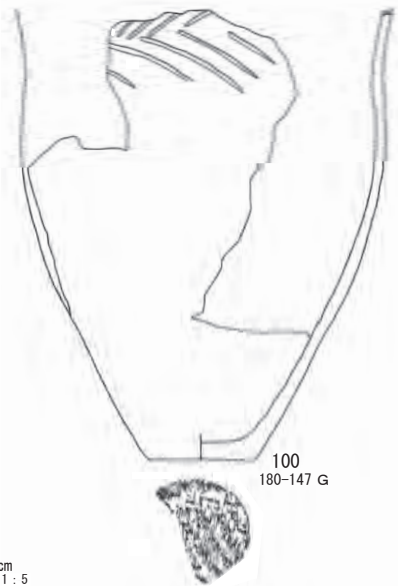
97
181-147 G



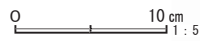
98
181-147 G



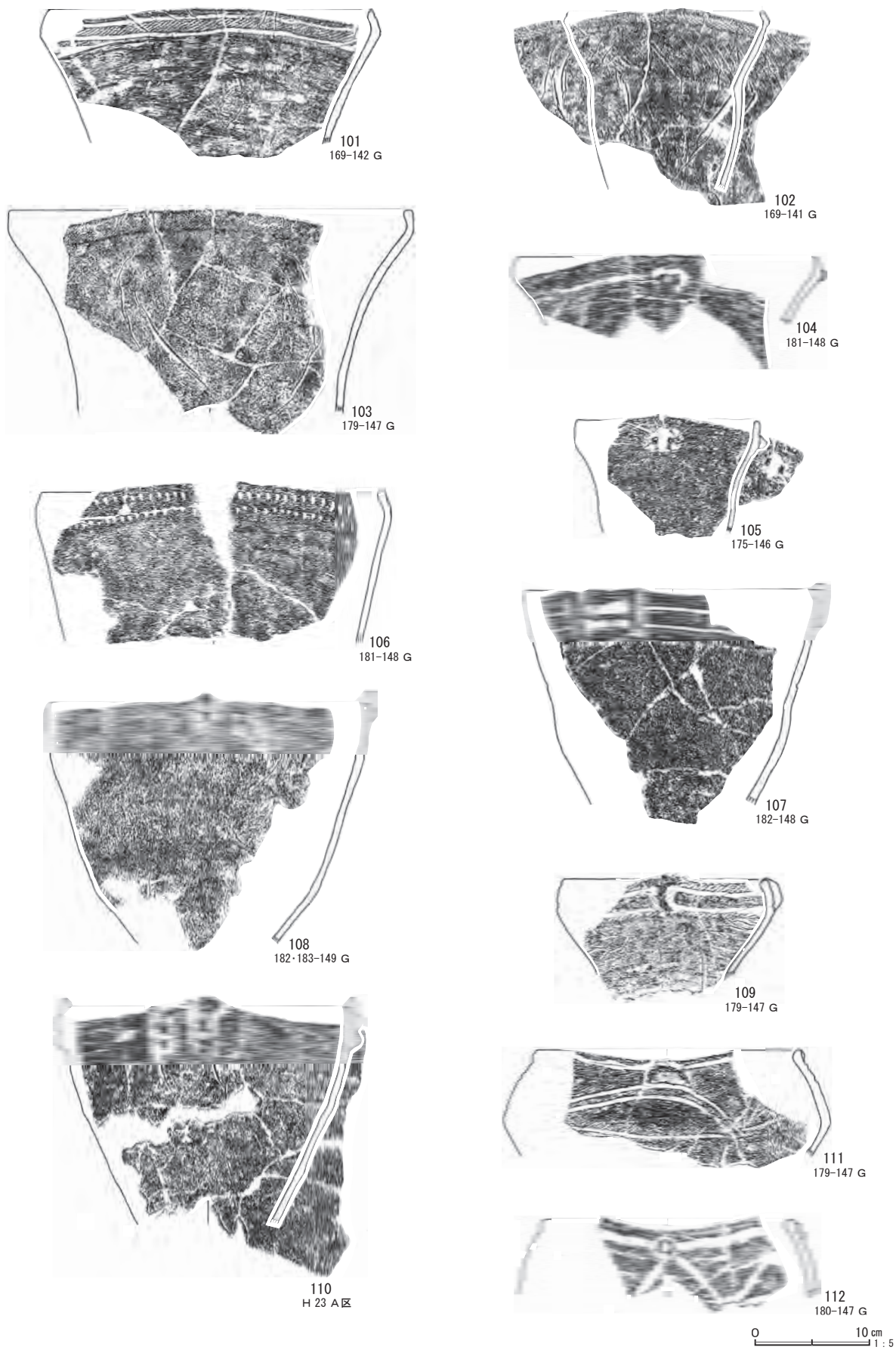
99
182-148 G



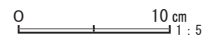
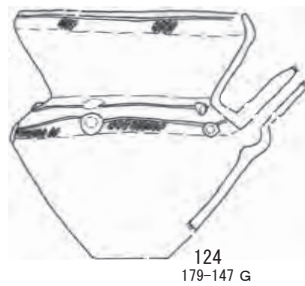
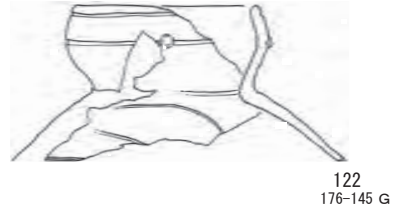
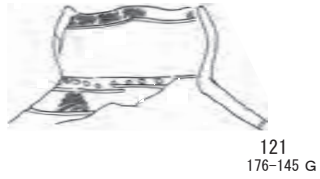
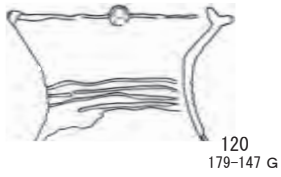
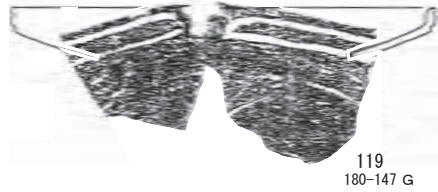
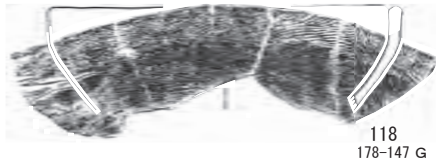
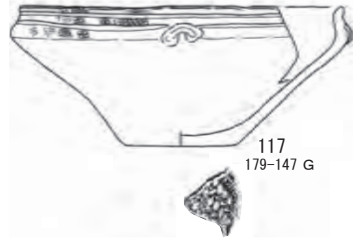
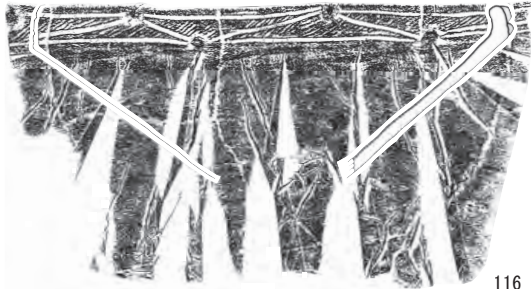
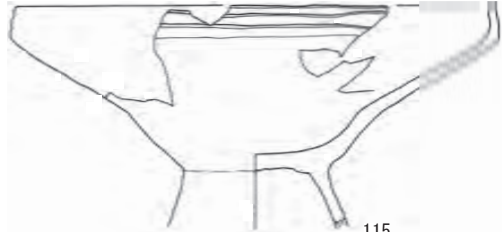
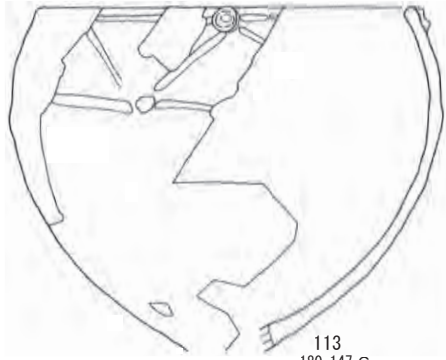
100
180-147 G



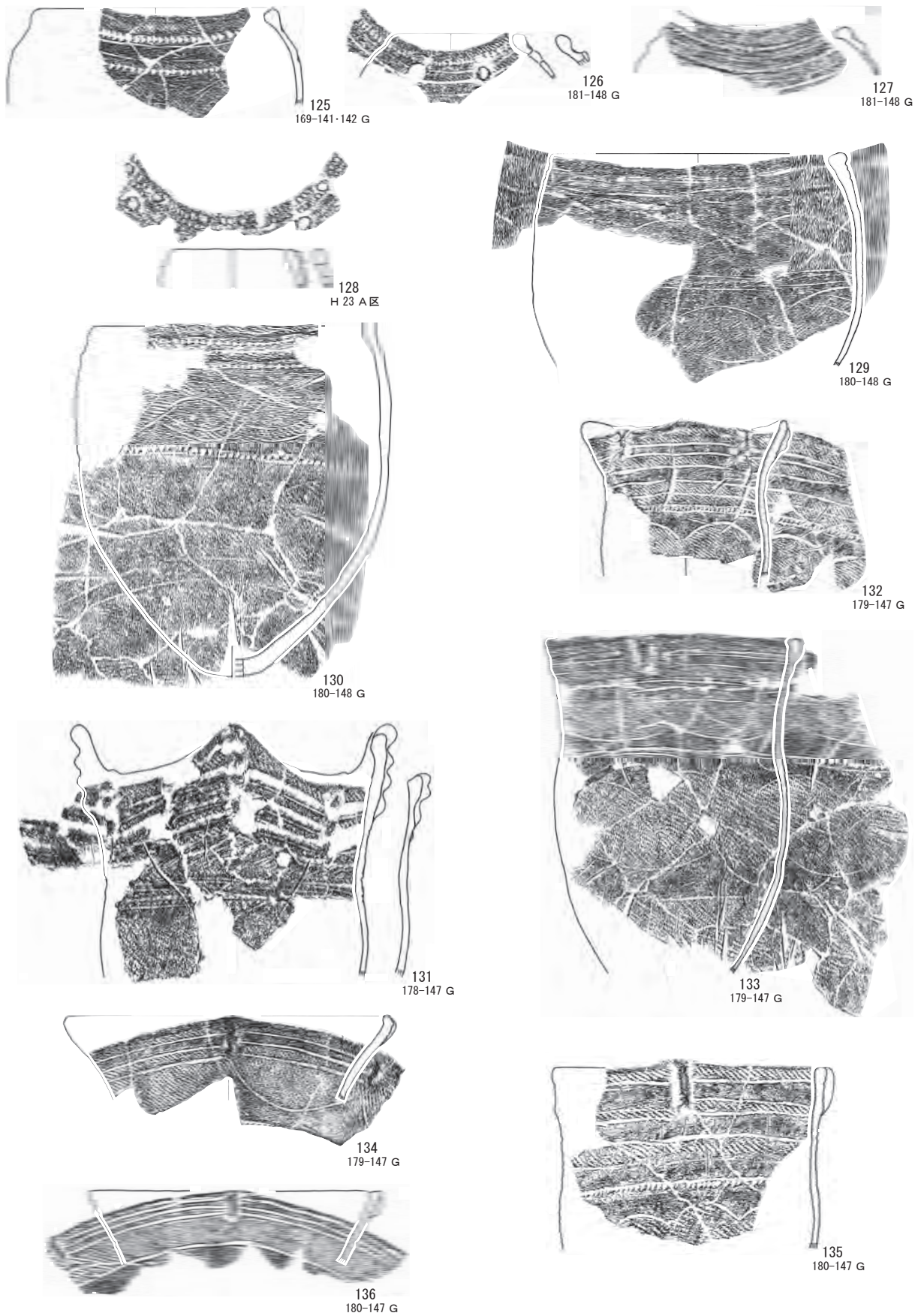
第21图 出土土器 (8)



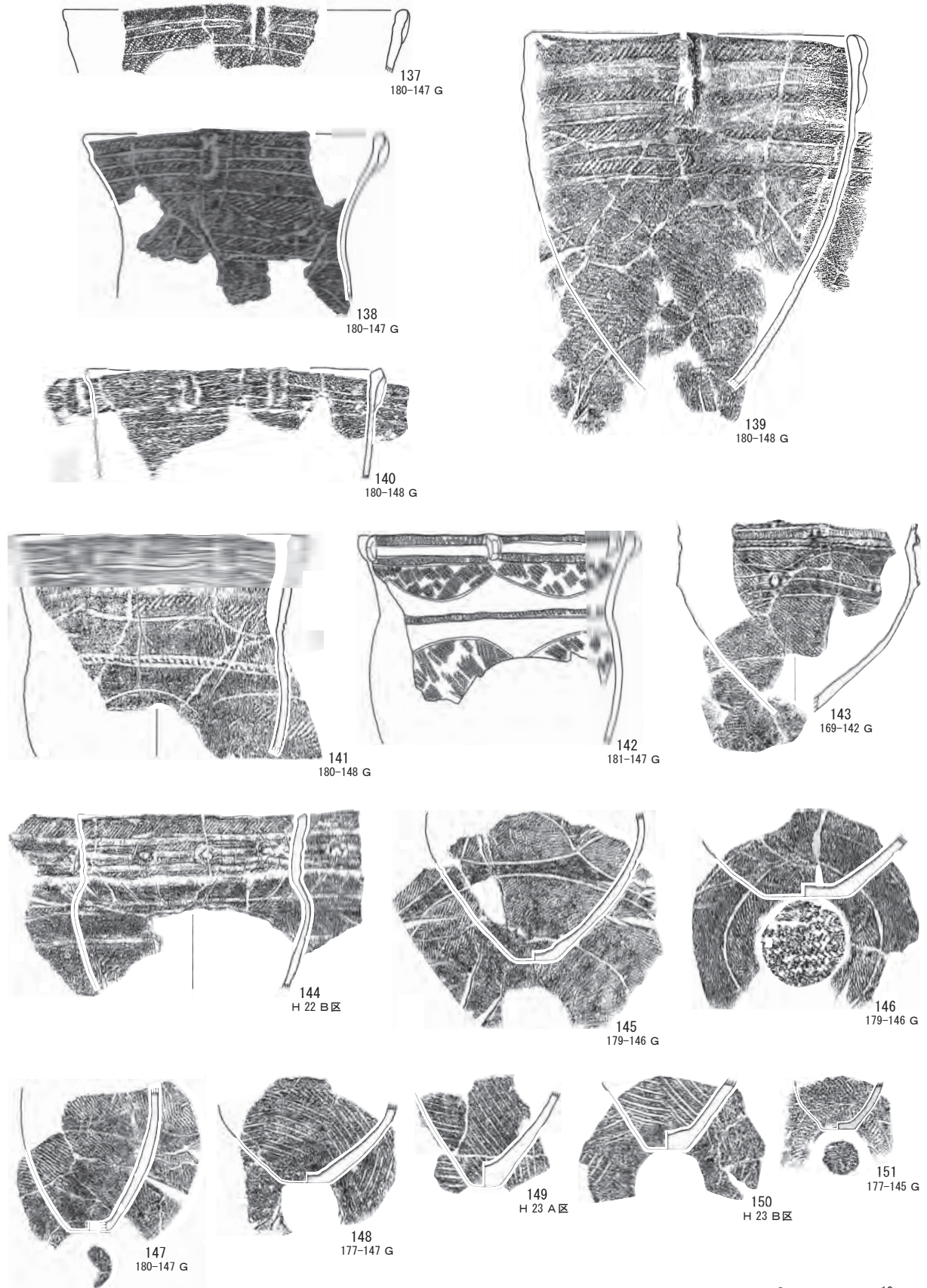
第22図 出土土器 (9)



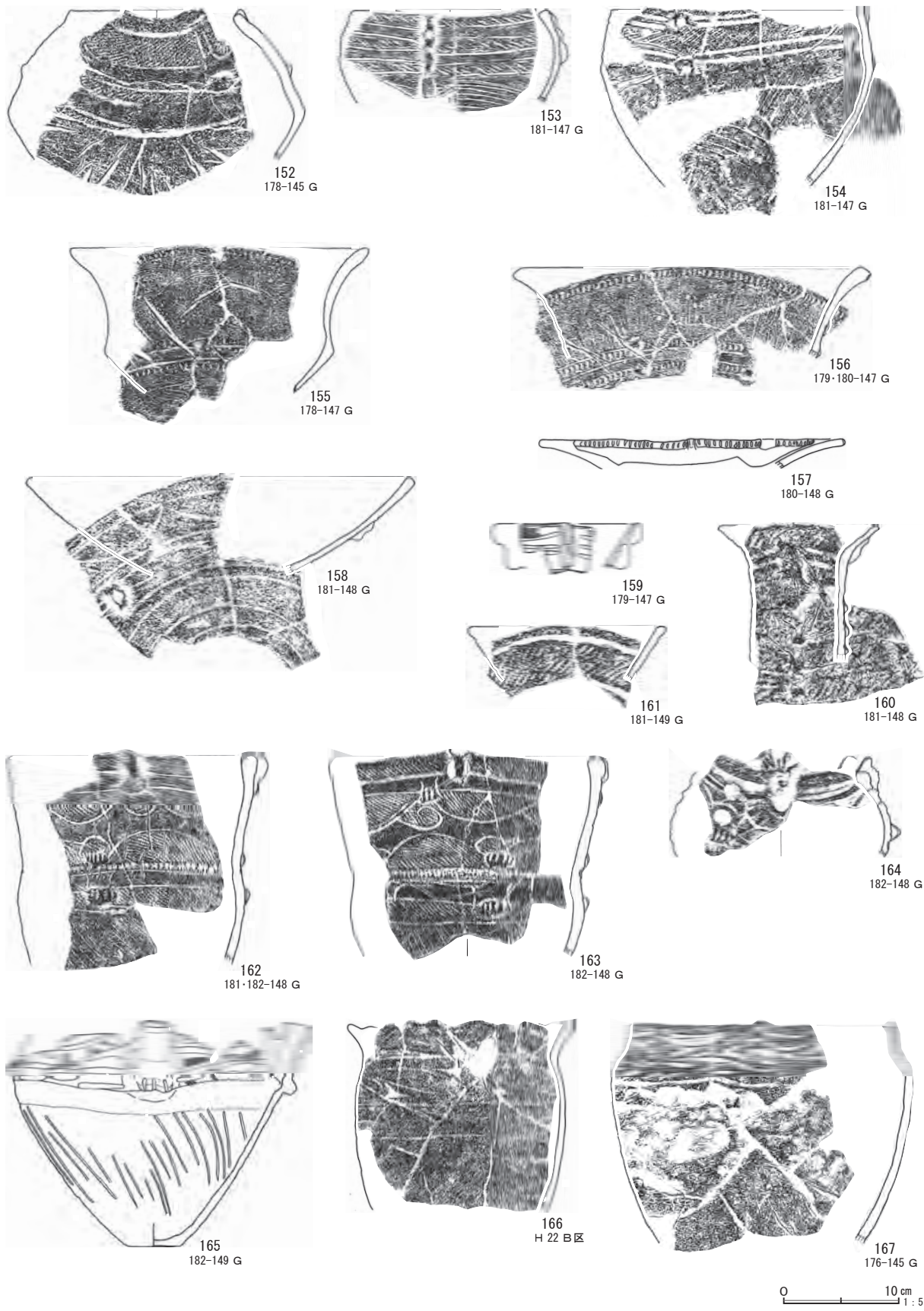
第23図 出土土器 (10)



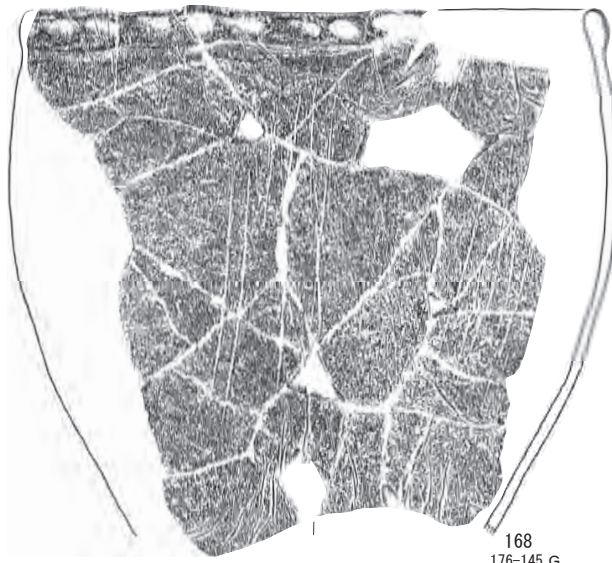
第24図 出土土器 (11)



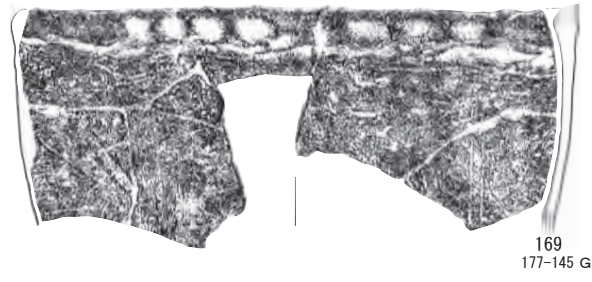
第25図 出土土器 (12)



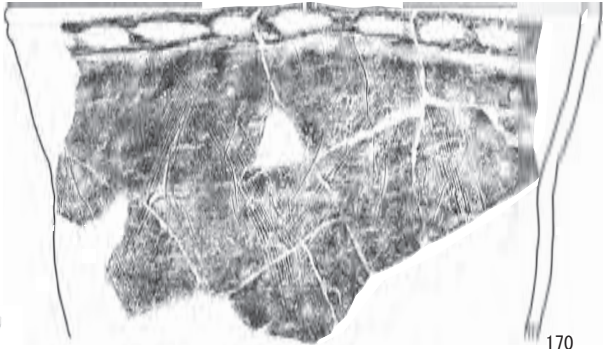
第26図 出土土器 (13)



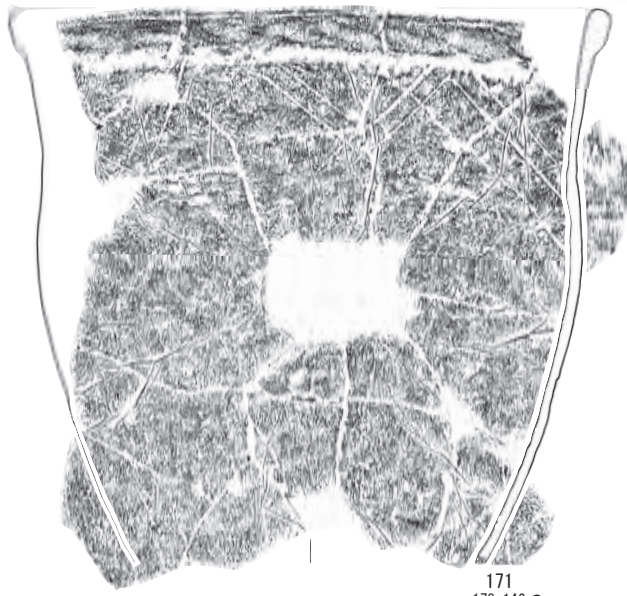
168
176-145 G



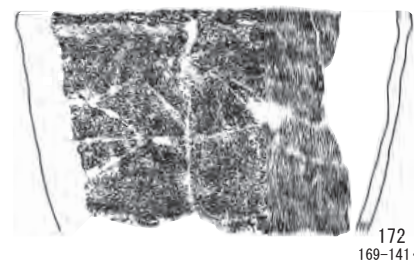
169
177-145 G



170
178-146 G



171
178-146 G



172
169-141-142 G



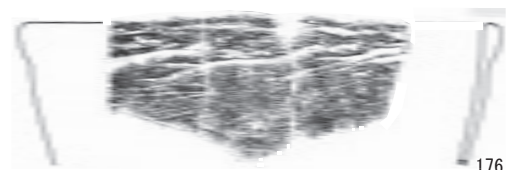
174
180-147 G



173
178-146 G



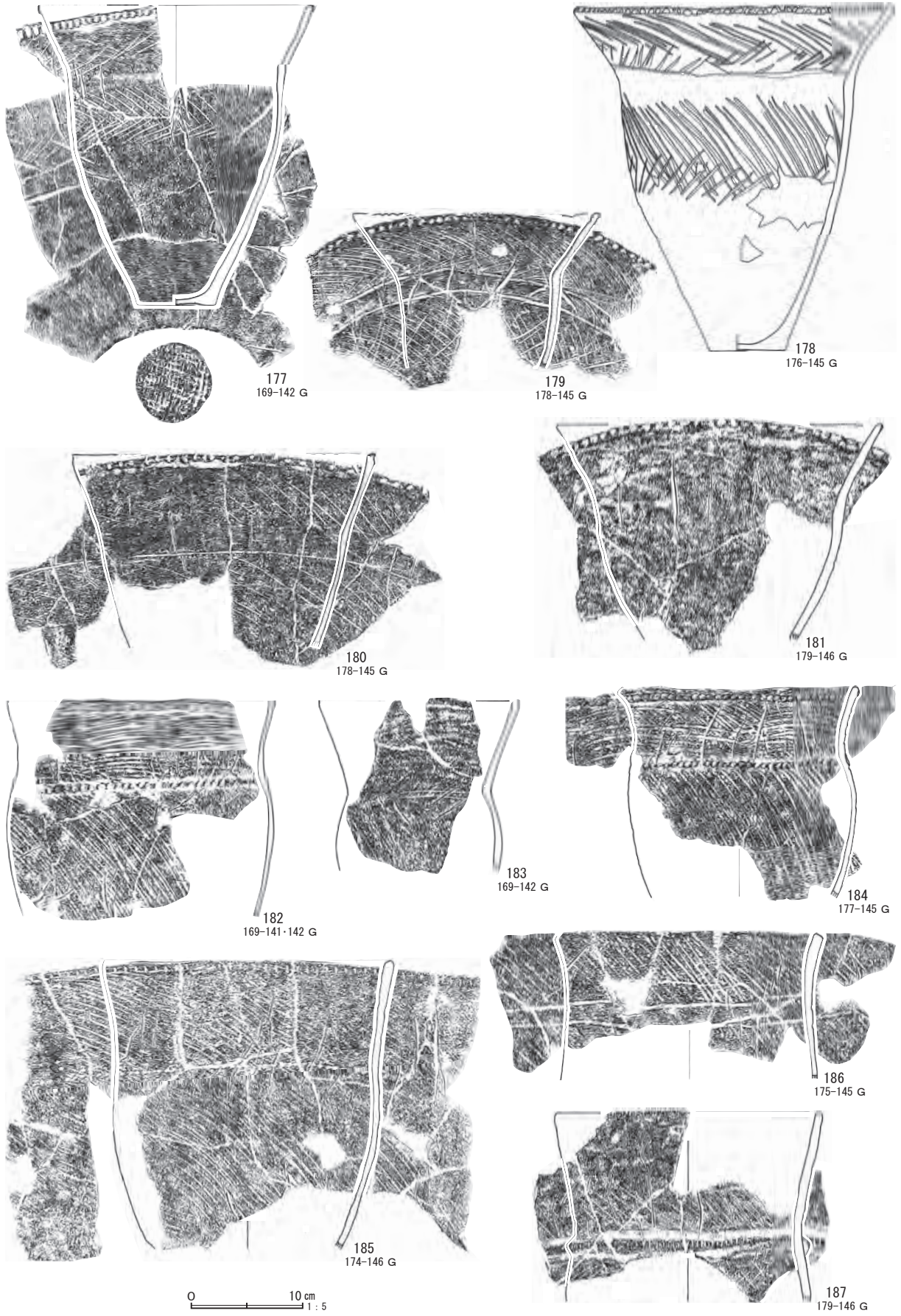
175
180-147 G



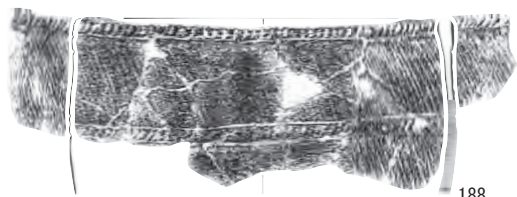
176
181-148 G



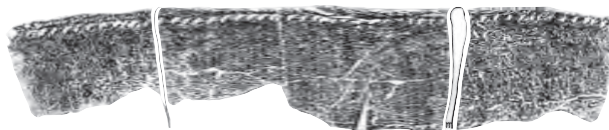
第27图 出土土器 (14)



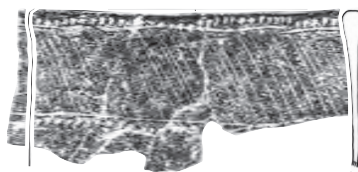
第28図 出土土器 (15)



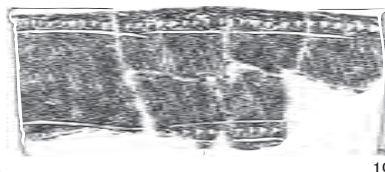
188
169-141 G



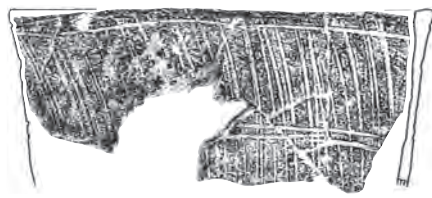
190
177-145 G



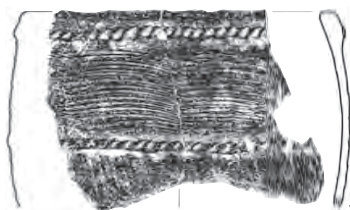
189
169-141-142 G



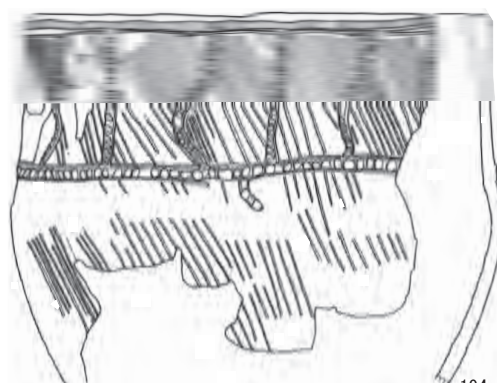
191
181-148 G



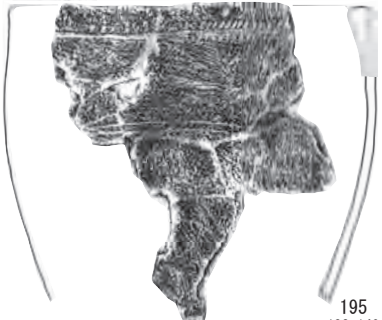
192
181-148 G



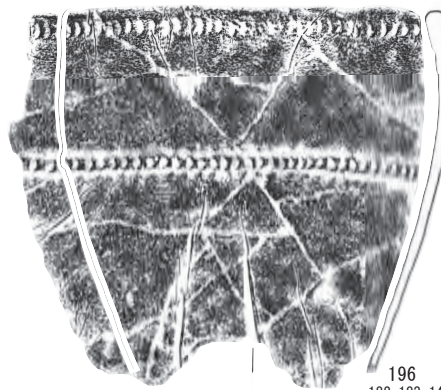
193
169-141 G



194
179-148 G



195
182-149 G



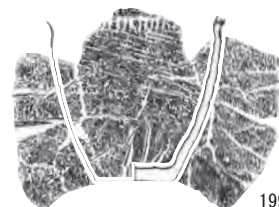
196
182-183-149 G



197
179-148 G



198
H 23 B区



199
176-145 G



200
180-147 G



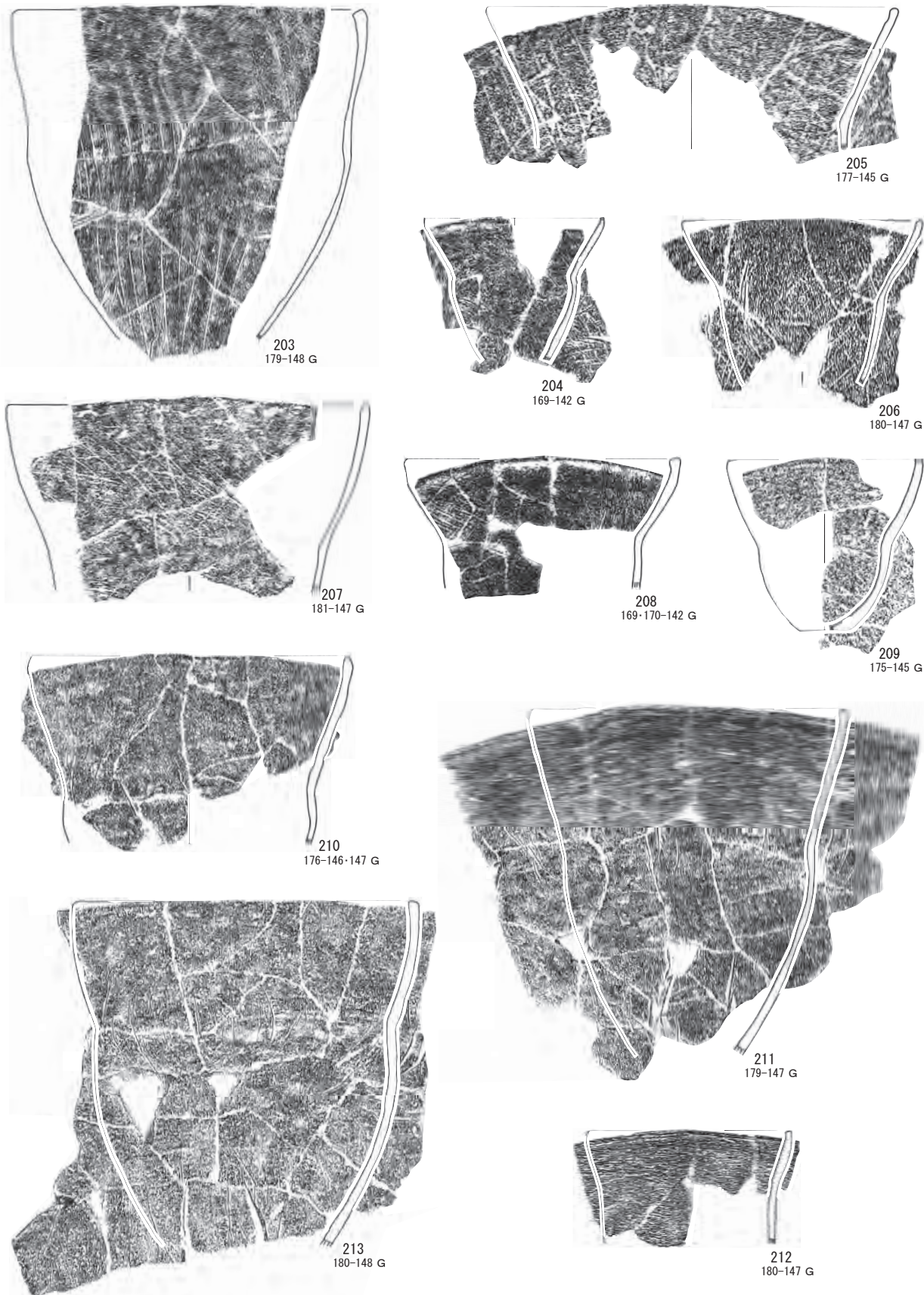
201
181-148 G



202
180-147 G



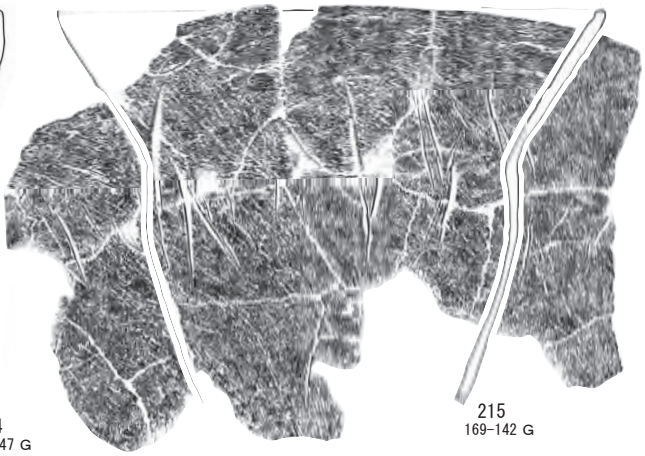
第29図 出土土器 (16)



第30図 出土土器 (17)



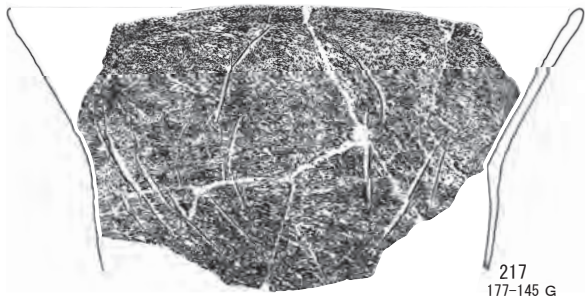
214
180-147 G



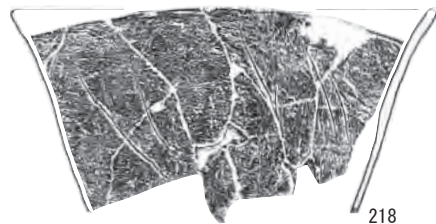
215
169-142 G



216
169-142 G



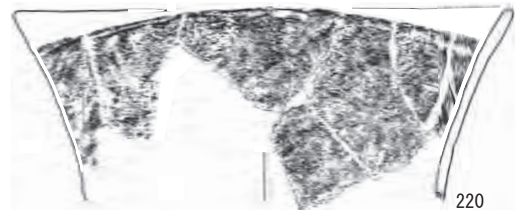
217
177-145 G



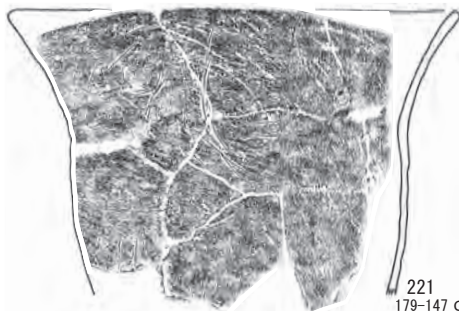
218
179-146 G



219
179-146 G



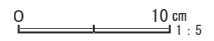
220
179-147 G



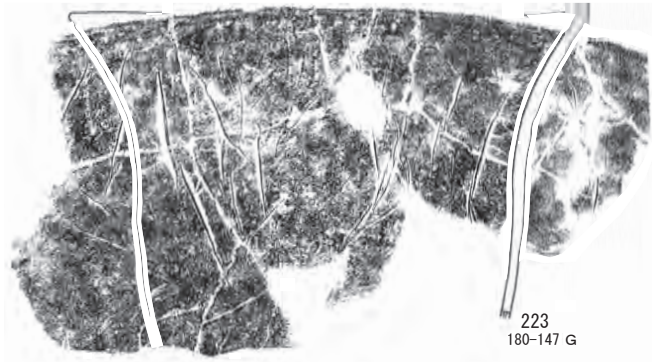
221
179-147 G



222
180-147 G



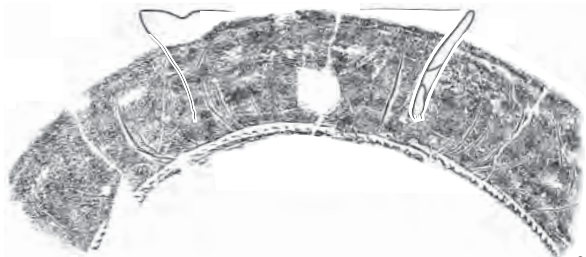
第31図 出土土器 (18)



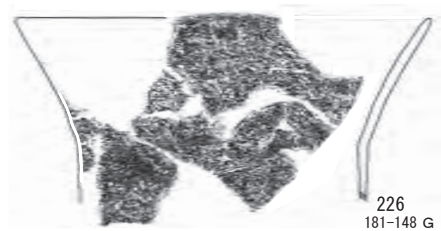
223
180-147 G



224
180-147 G



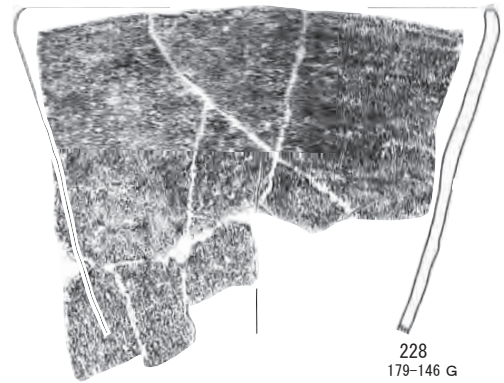
225
181-147 G



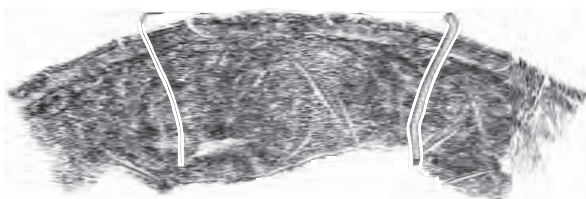
226
181-148 G



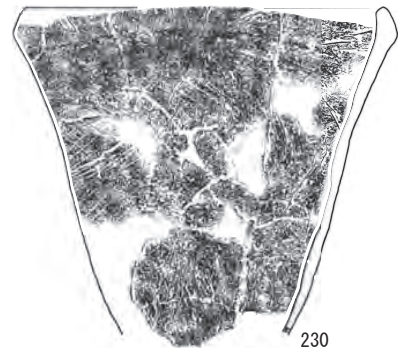
227
174-146 G



228
179-146 G



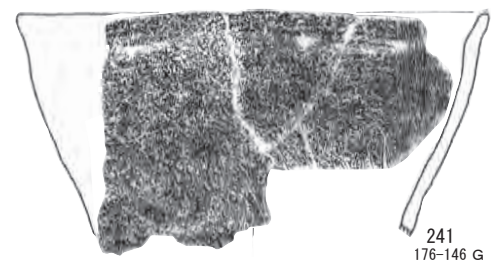
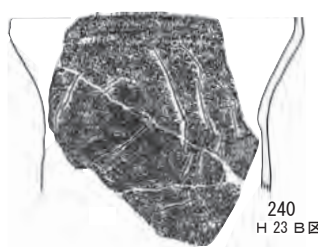
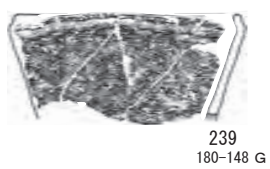
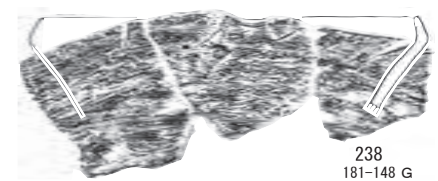
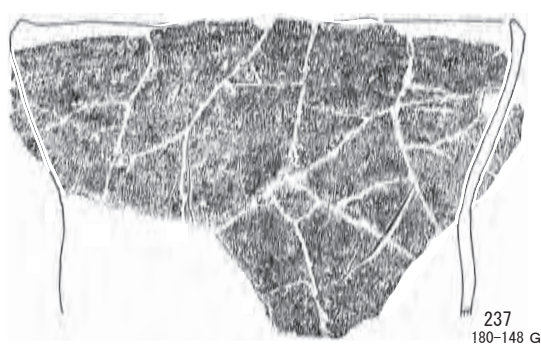
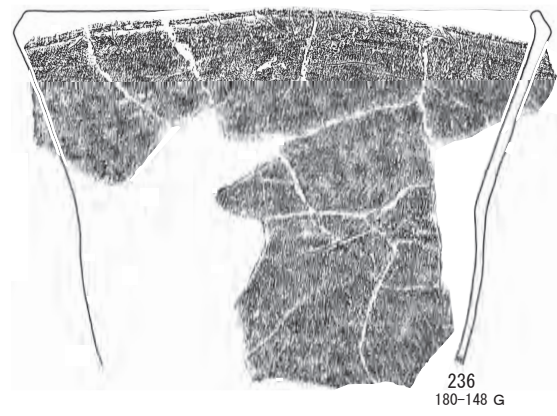
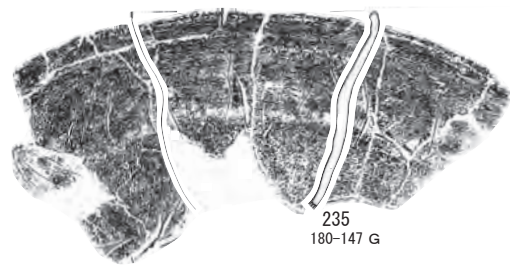
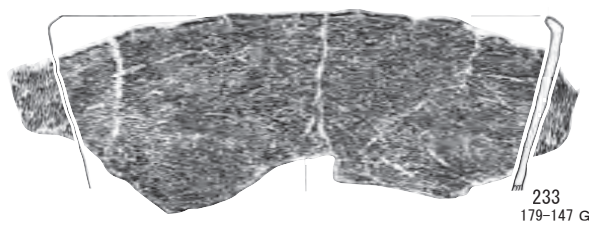
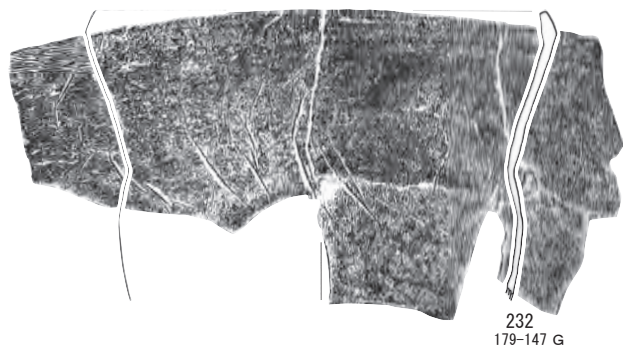
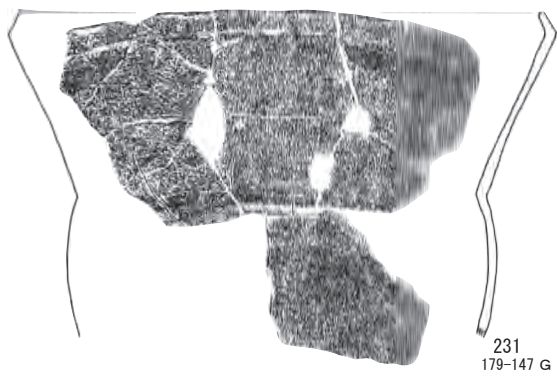
229
178-145 G



230
179-147 G

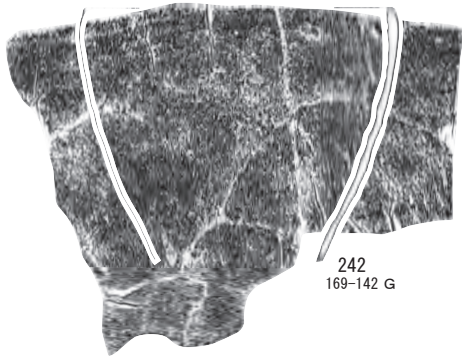
0 10 cm
1 : 5

第32図 出土土器 (19)

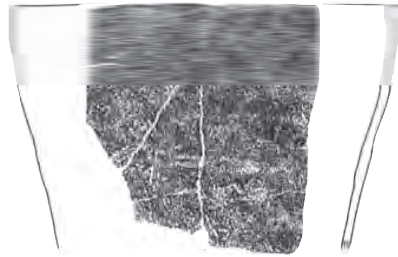


0 10 cm
1:5

第33图 出土土器 (20)



242
169-142 G



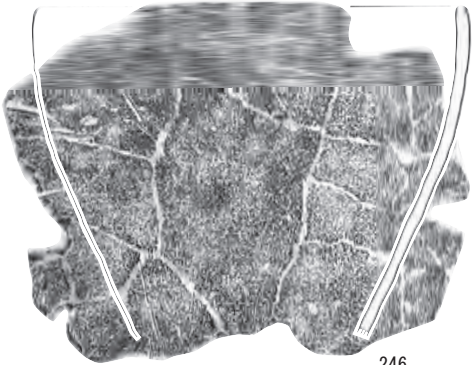
243
176-146 G



244
178-147 G



245
179-148 G



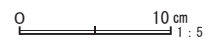
246
179-148 G



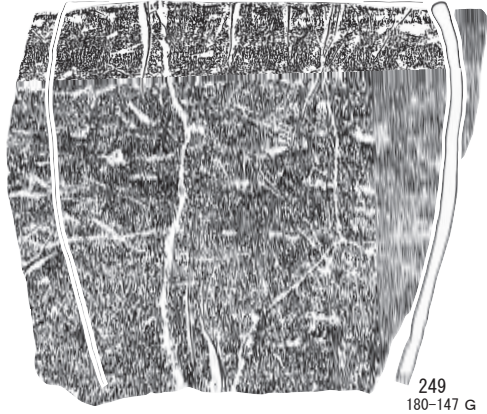
247
180-147 G



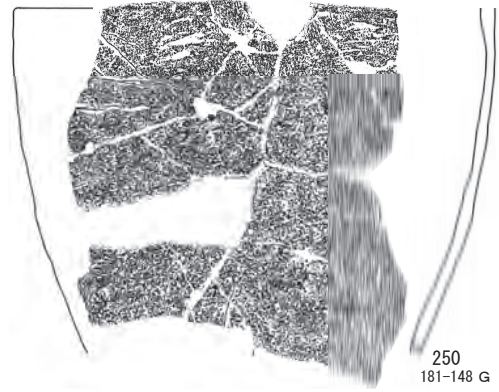
248
180-147 G



第34図 出土土器 (21)



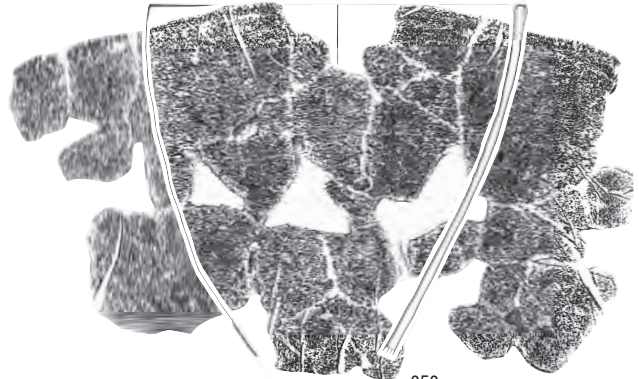
249
180-147 G



250
181-148 G



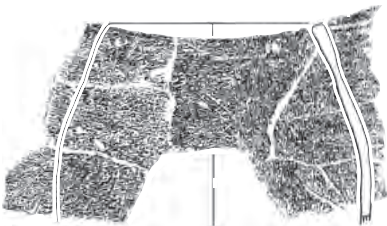
251
181-148 G



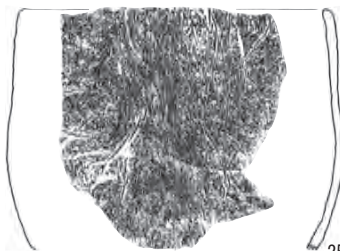
252
182-148 G



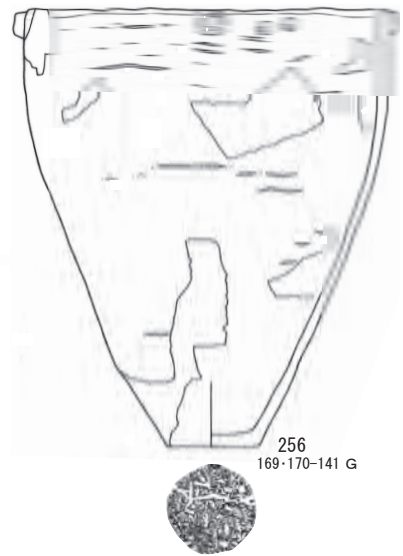
253
180-147 G



254
180-148 G



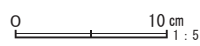
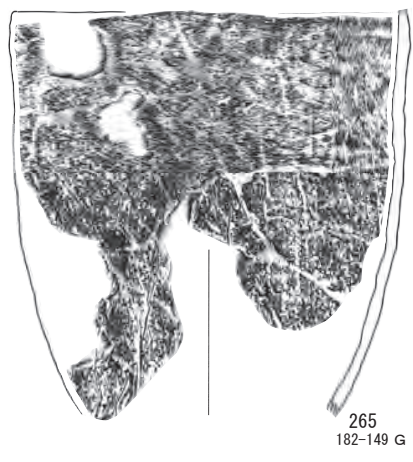
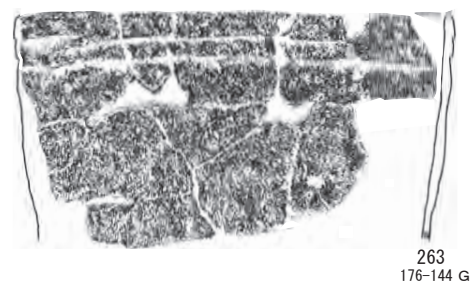
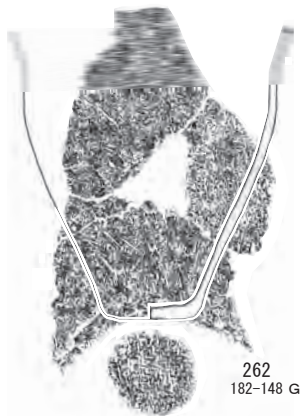
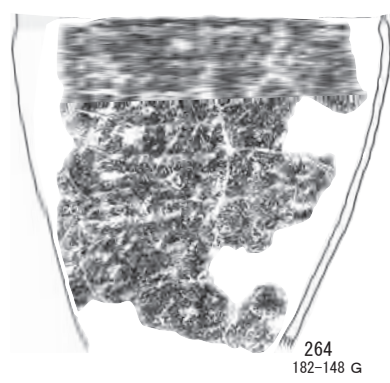
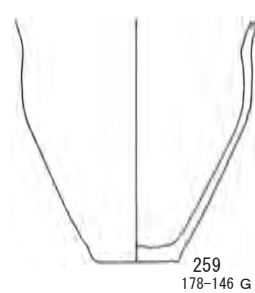
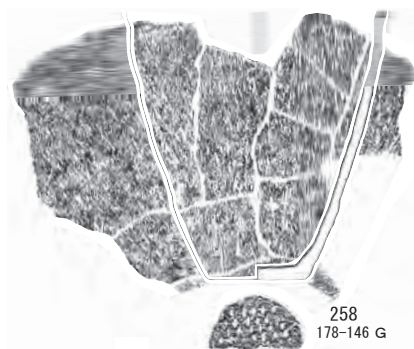
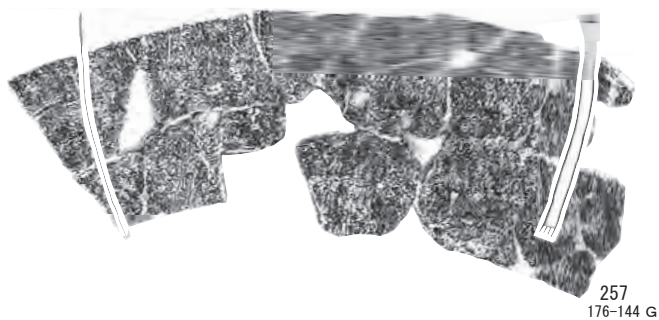
255
182-149 G



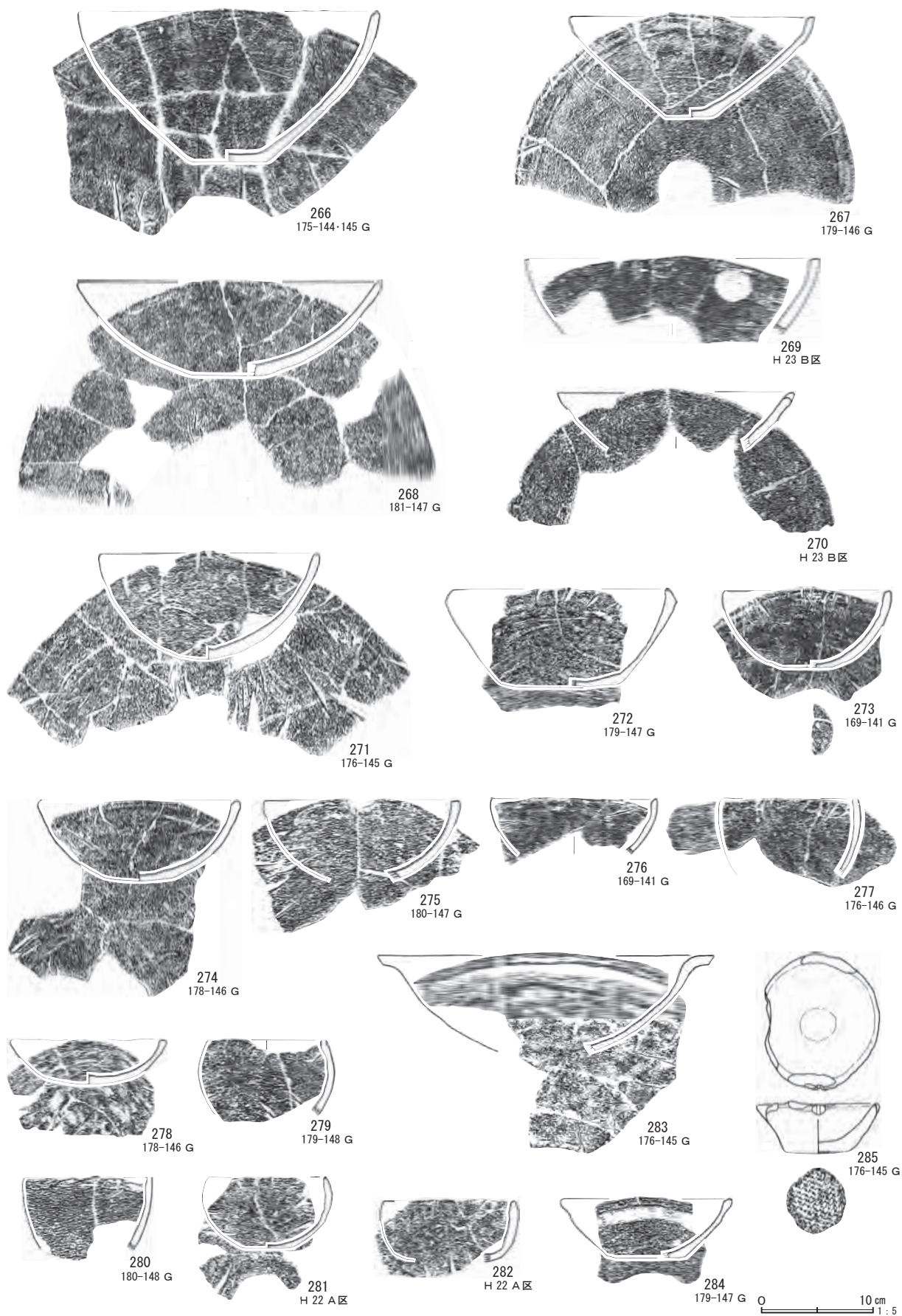
256
169-170-141 G

0 10 cm
1 : 5

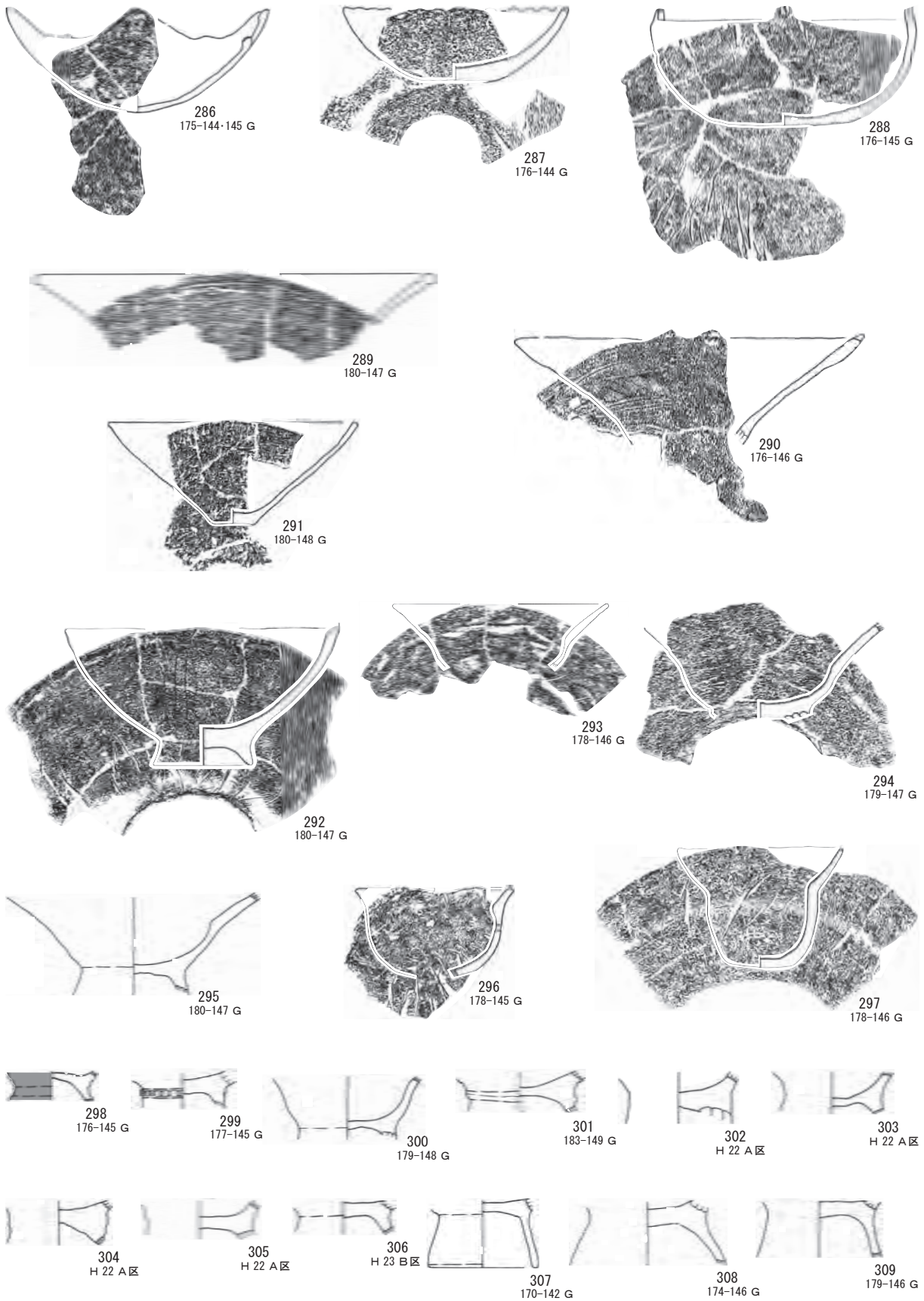
第35図 出土土器 (22)



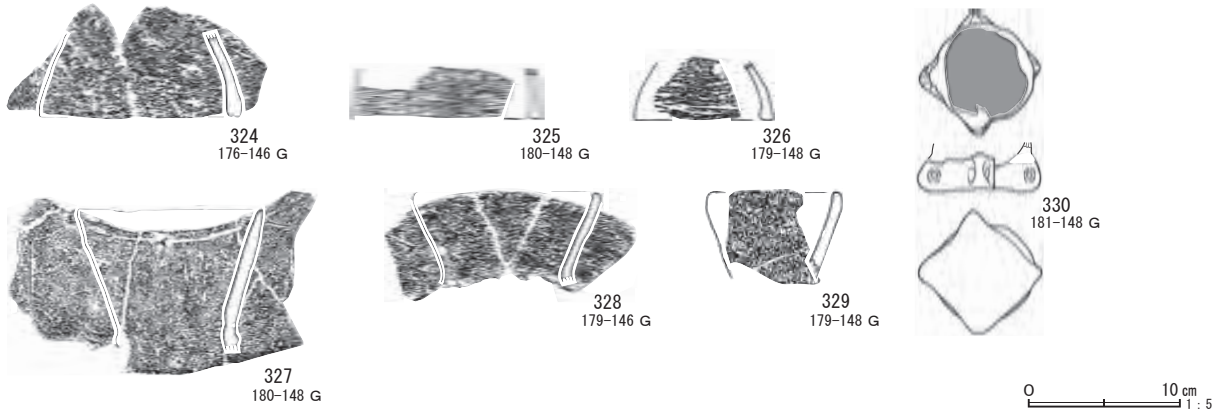
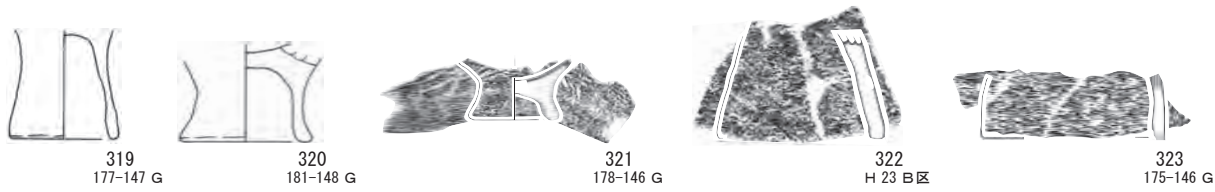
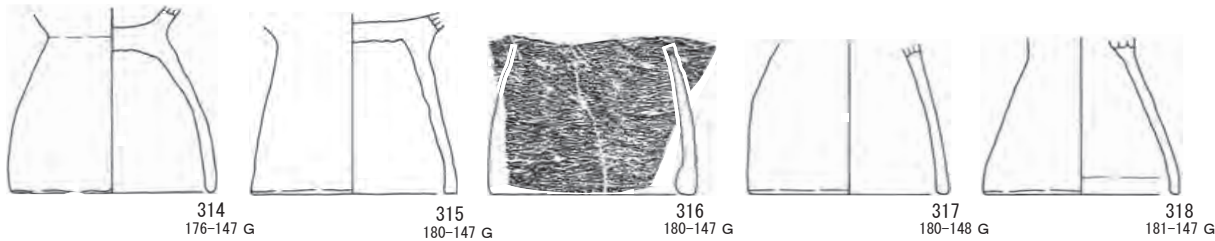
第36図 出土土器 (23)



第37図 出土土器 (24)



第38図 出土土器 (25)



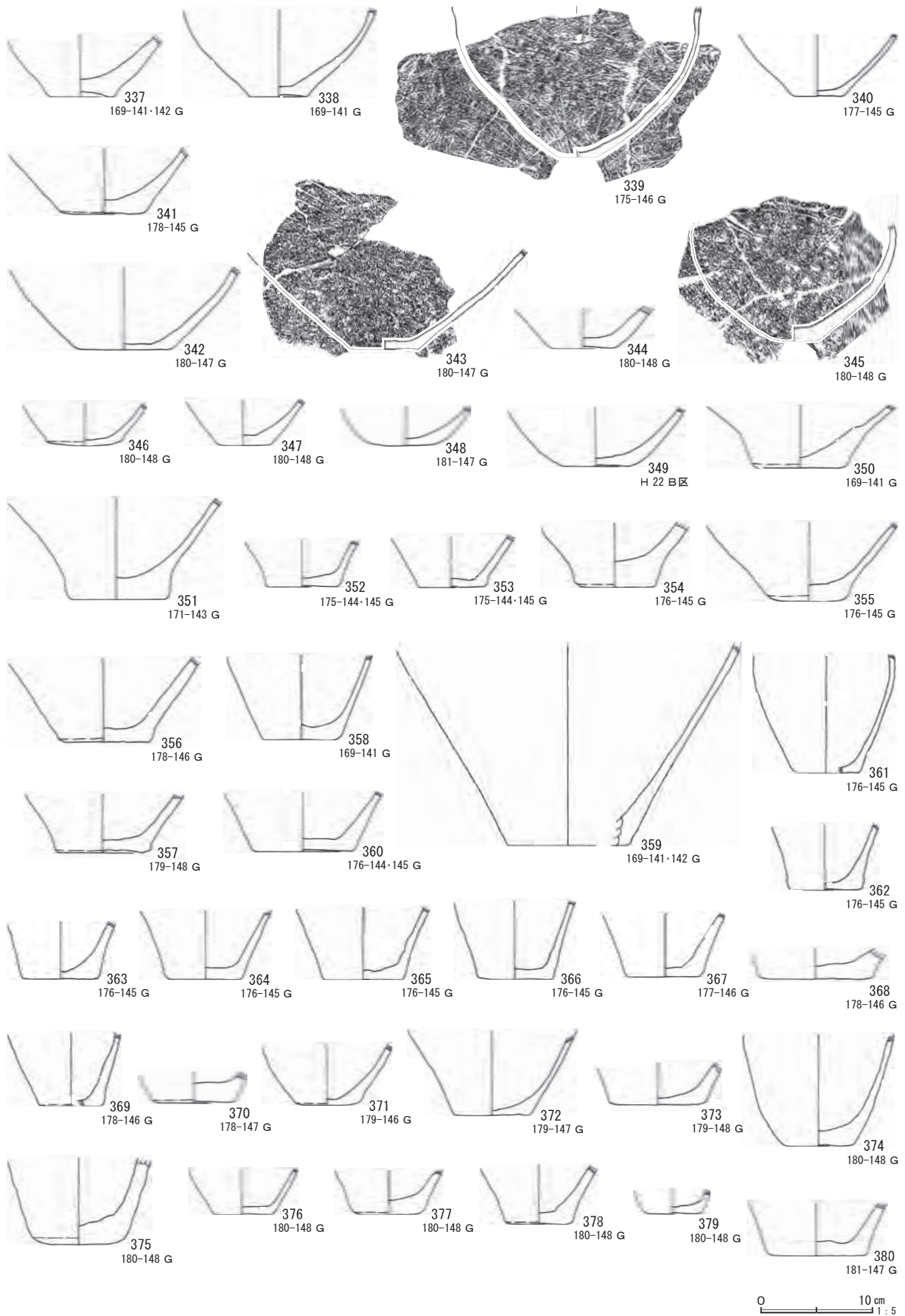
0 10 cm
1 : 5



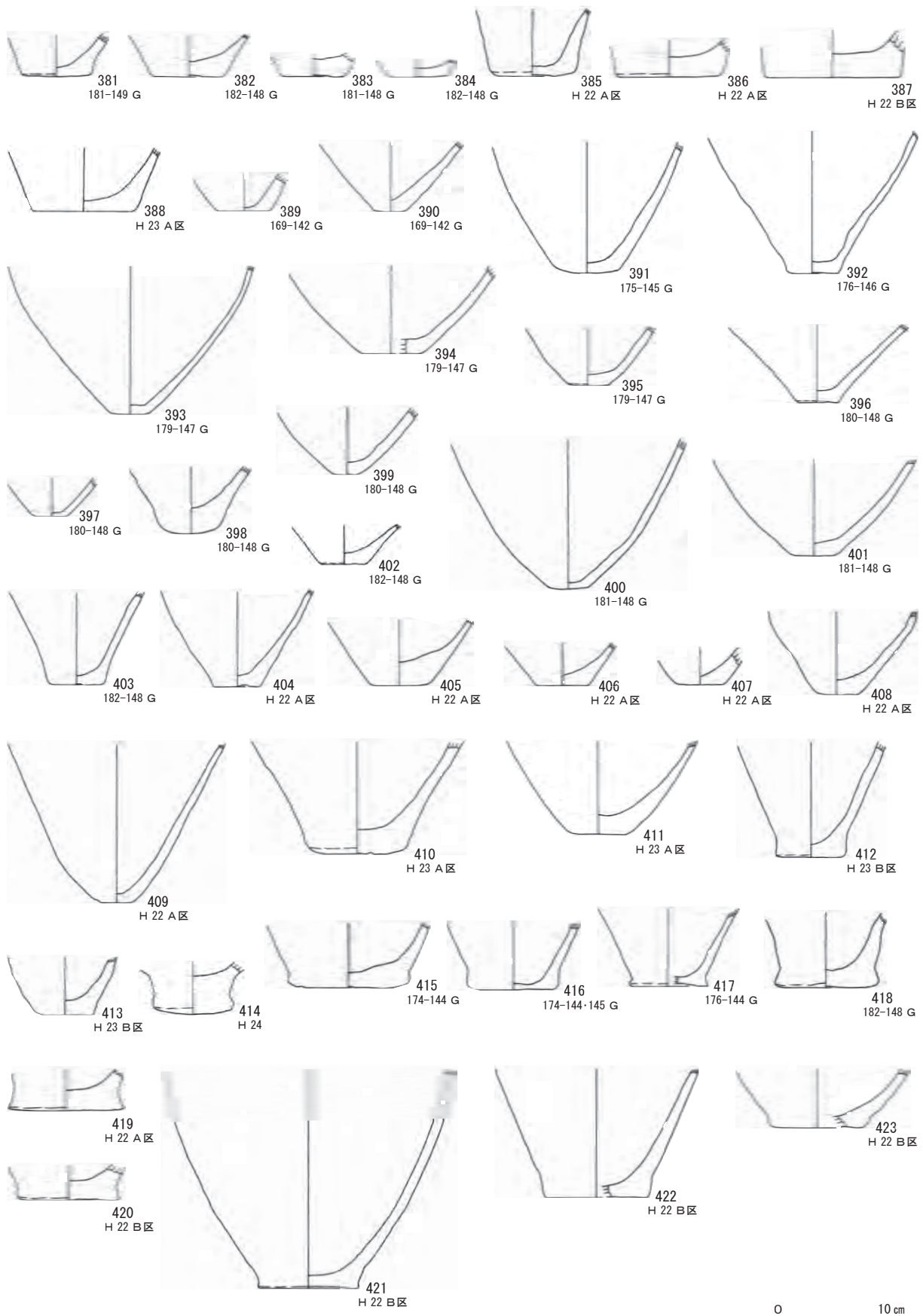
331・335・336: 0 5 cm
1 : 2

332 ~ 334: 0 5 cm
1 : 3

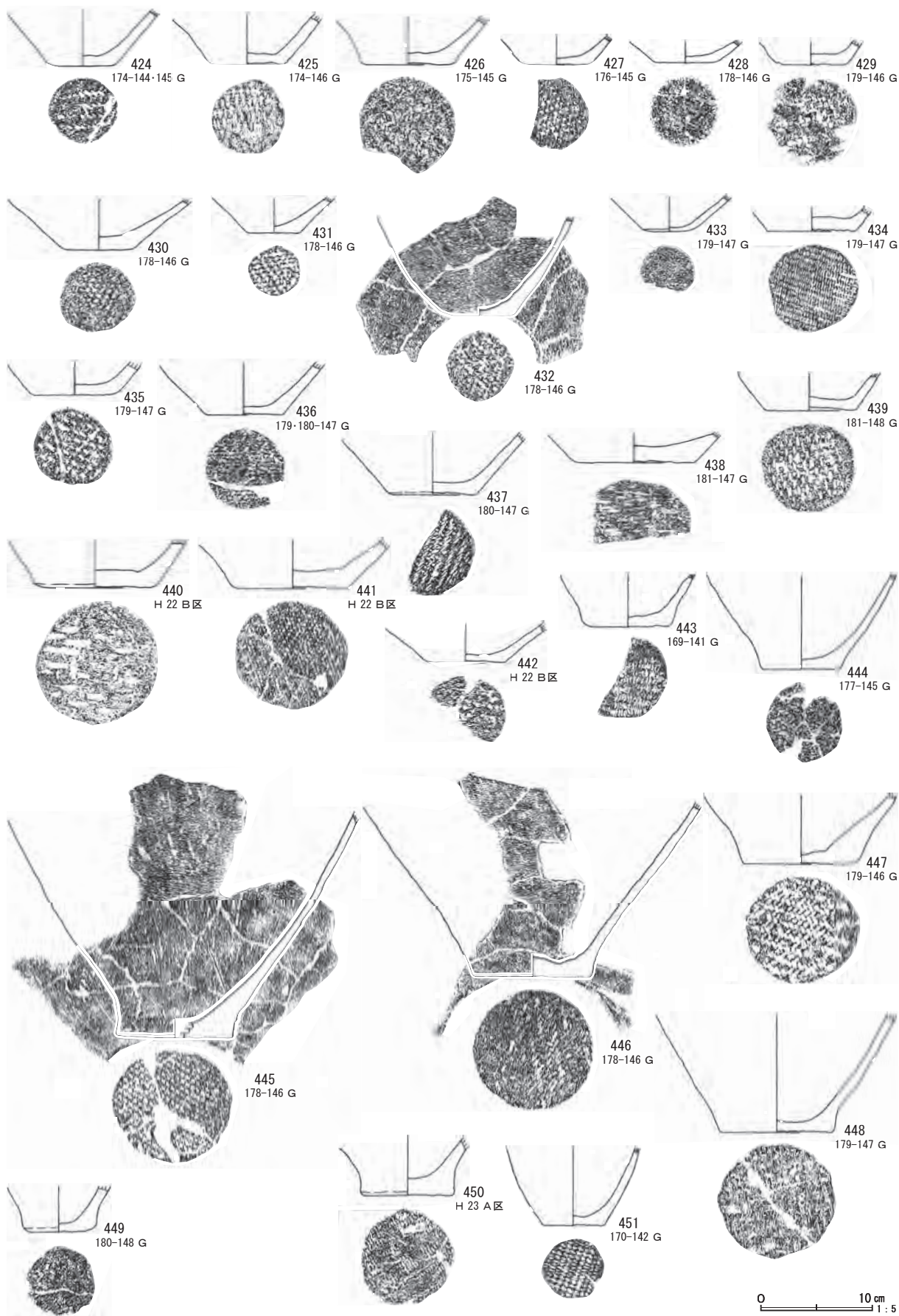
第39図 出土土器 (26)



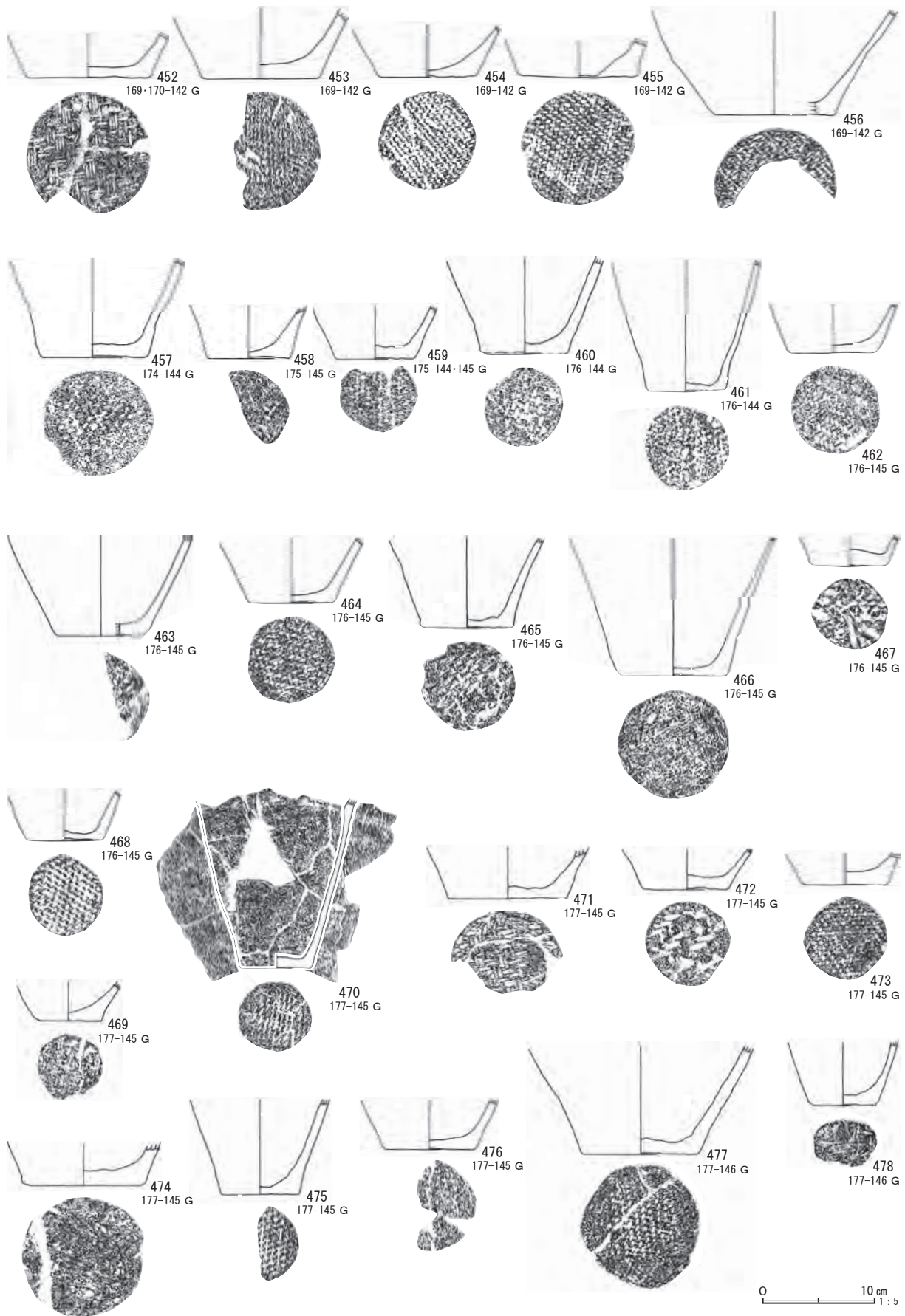
第40図 出土土器 (27)



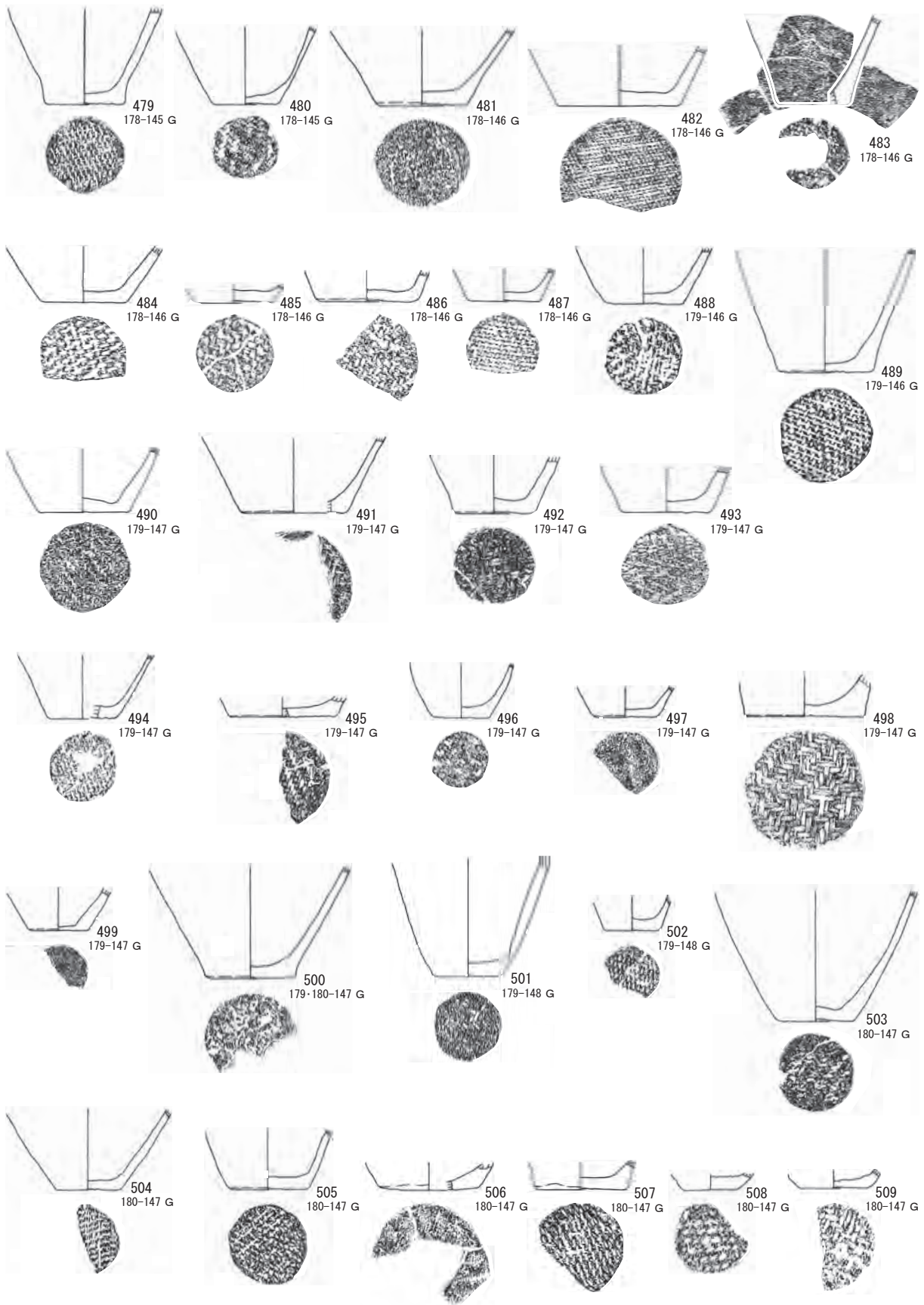
第41图 出土土器 (28)



第42図 出土土器 (29)

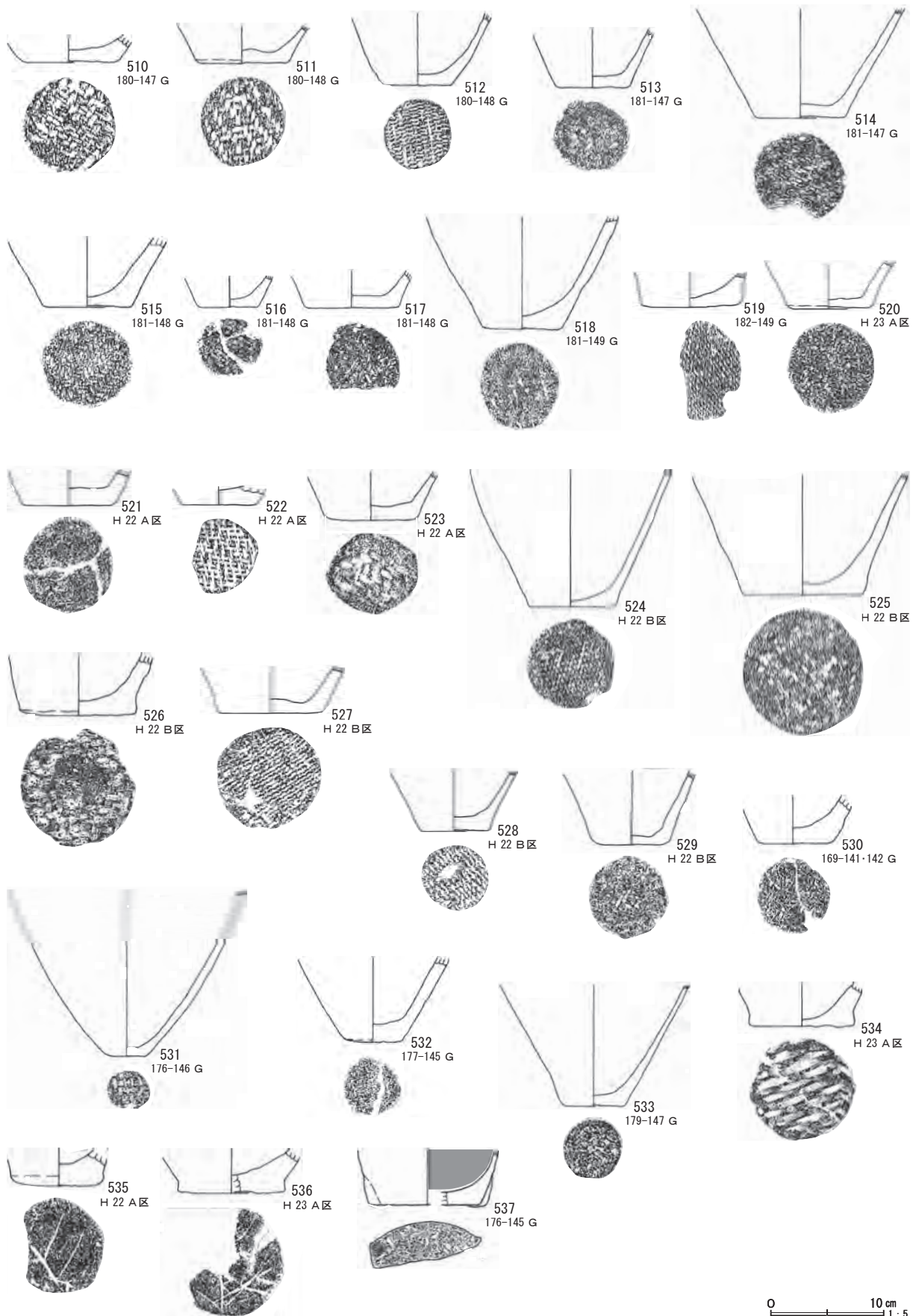


第43図 出土土器 (30)

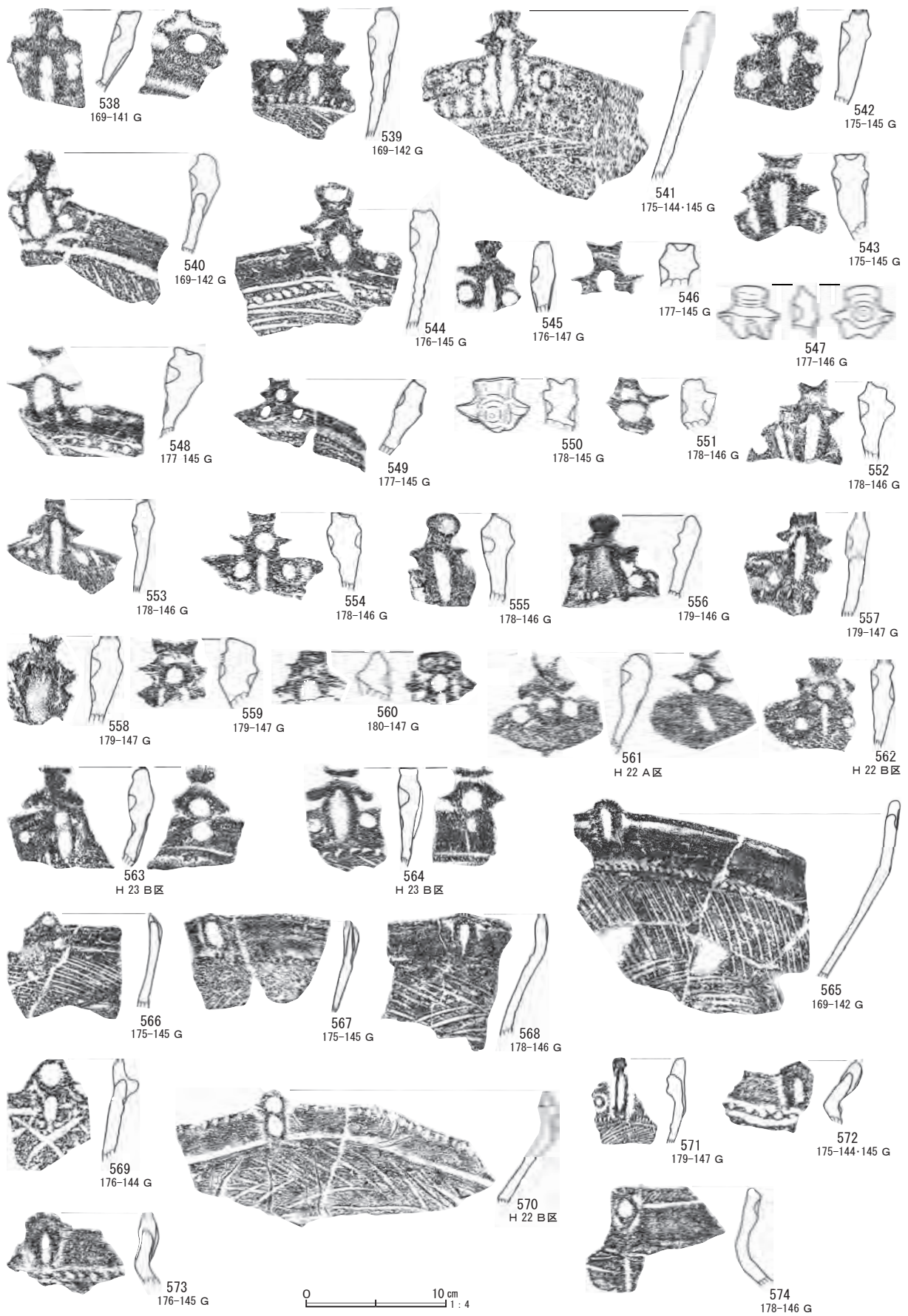


0 10 cm
1 : 5

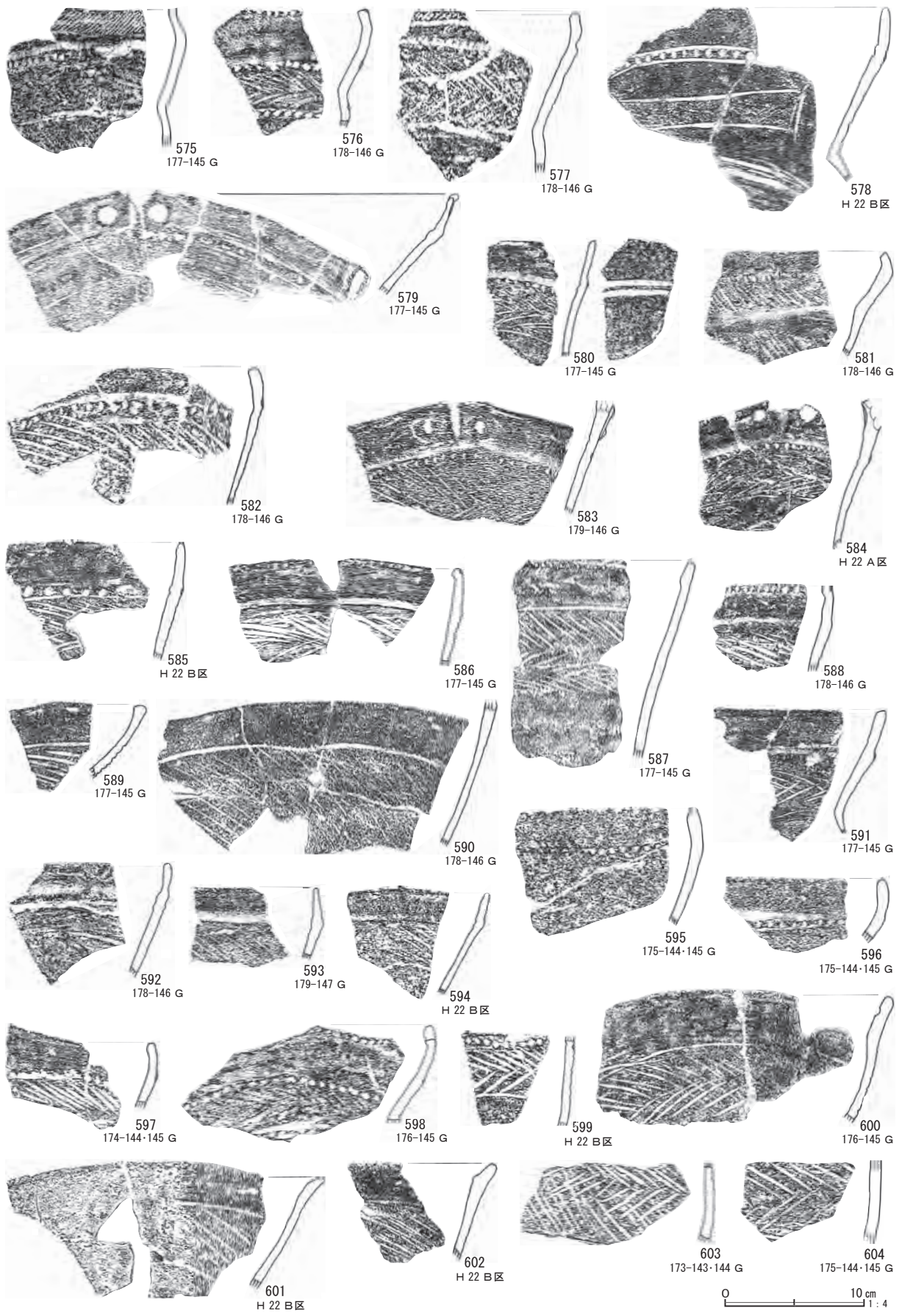
第44図 出土土器 (31)



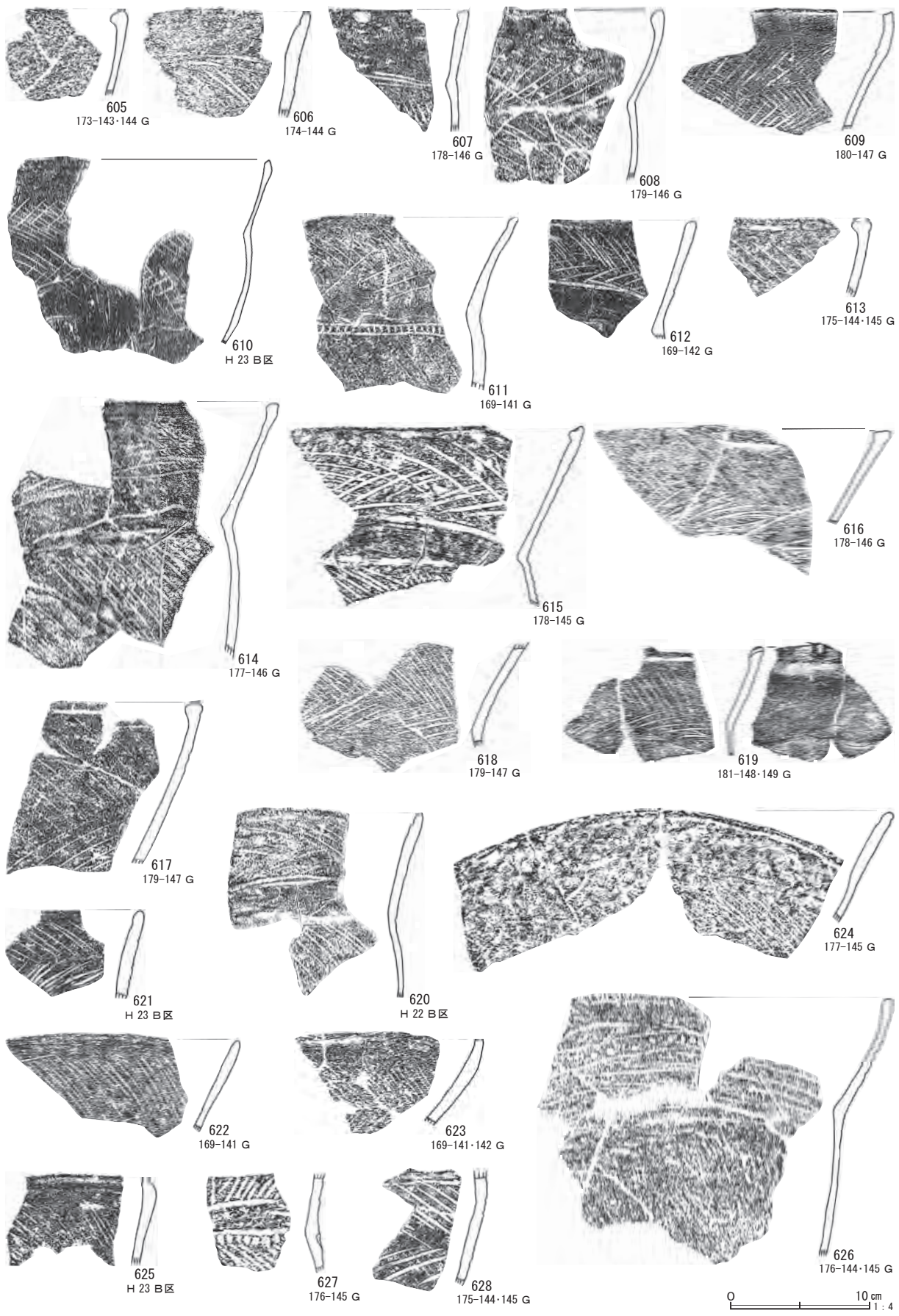
第45図 出土土器 (32)



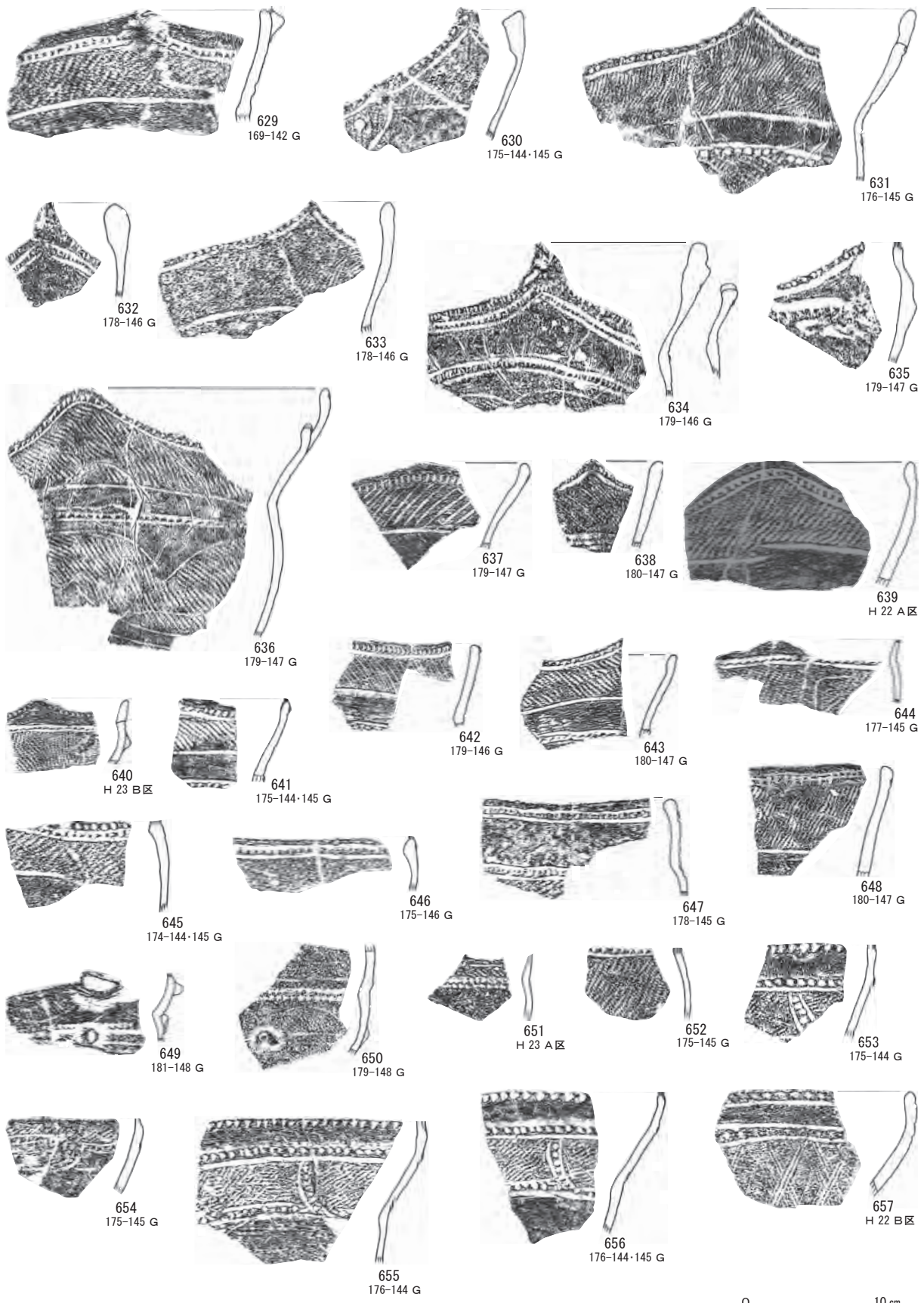
第46图 出土土器 (33)



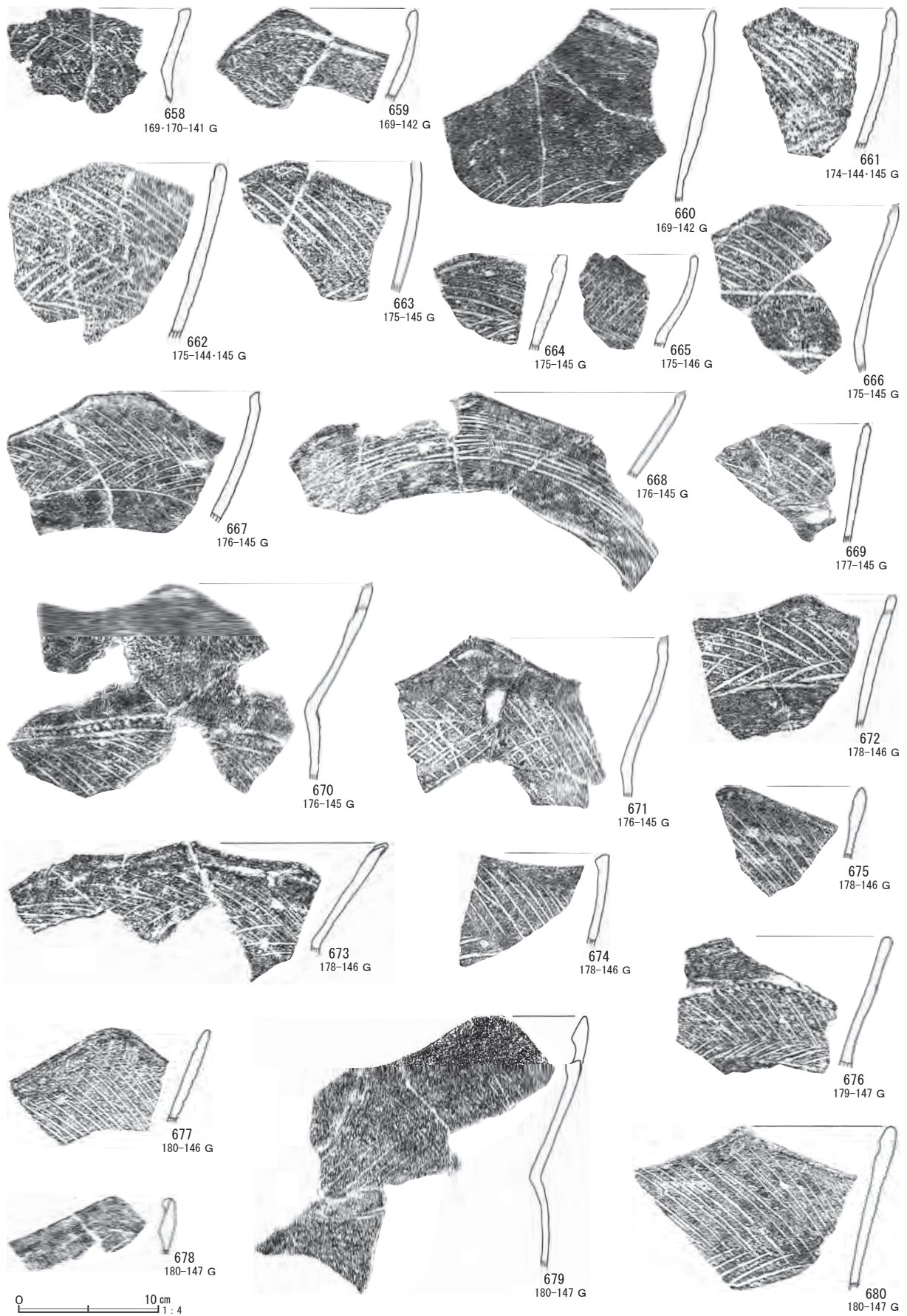
第47图 出土土器 (34)



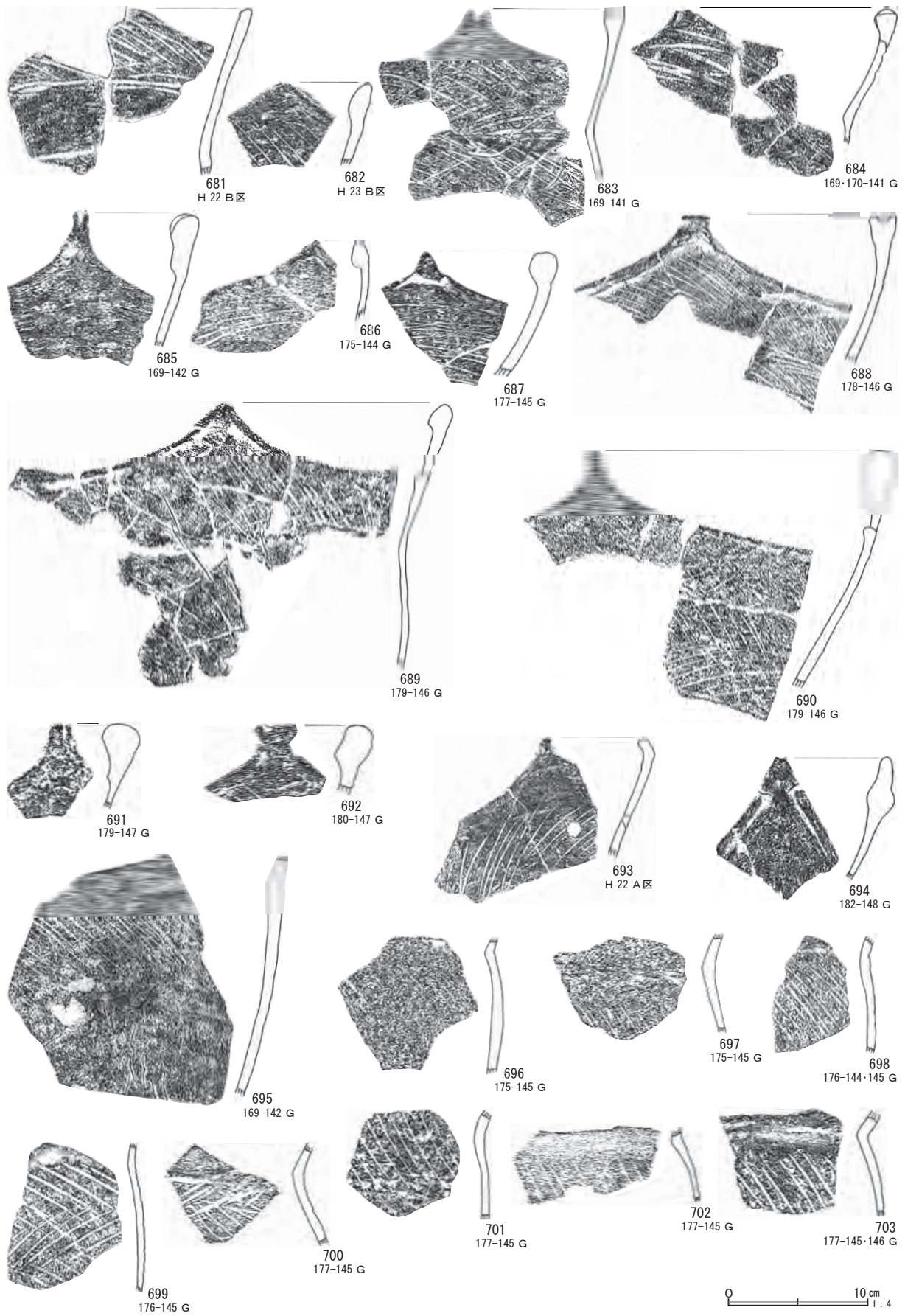
第48图 出土土器 (35)



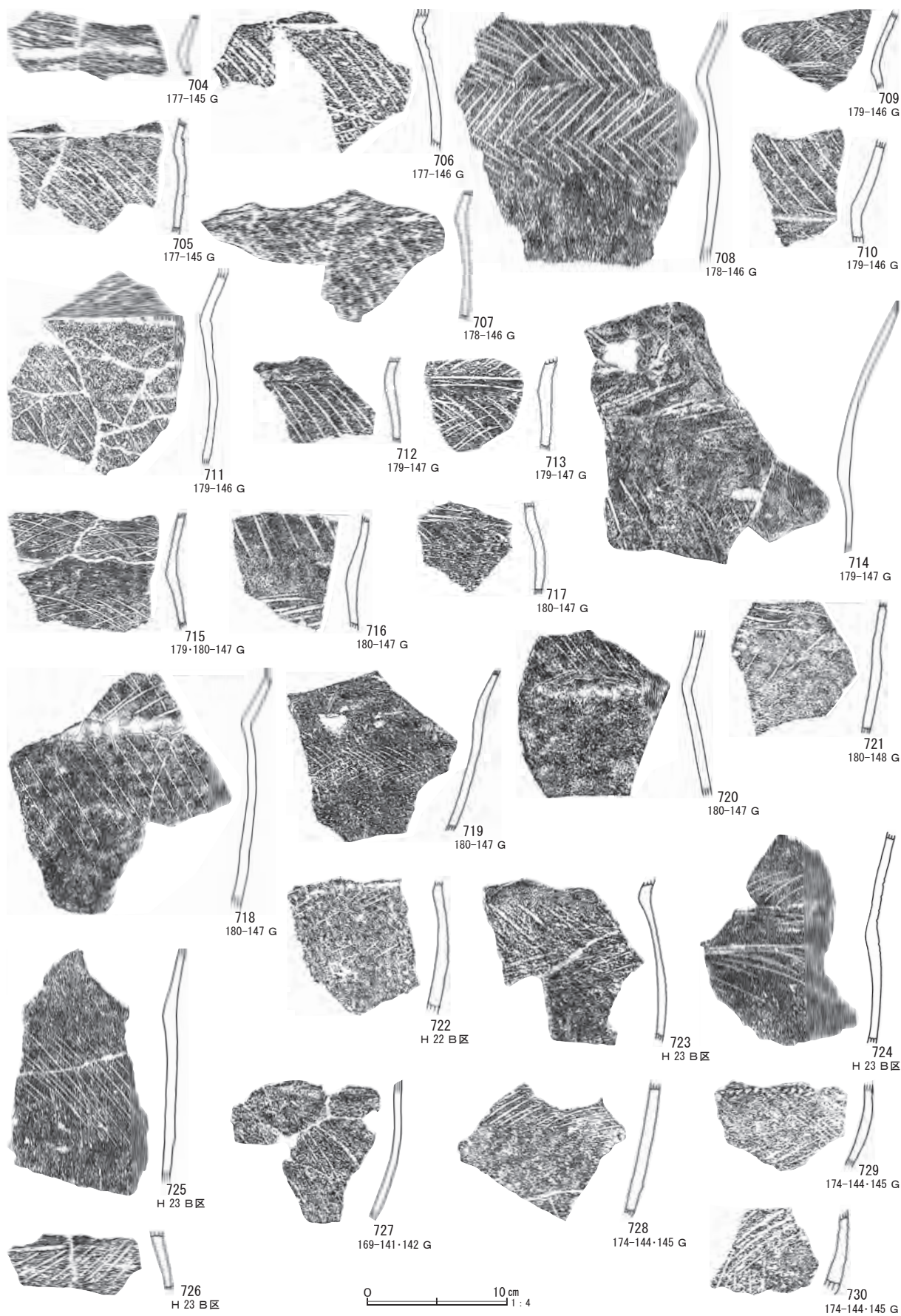
第49図 出土土器 (36)



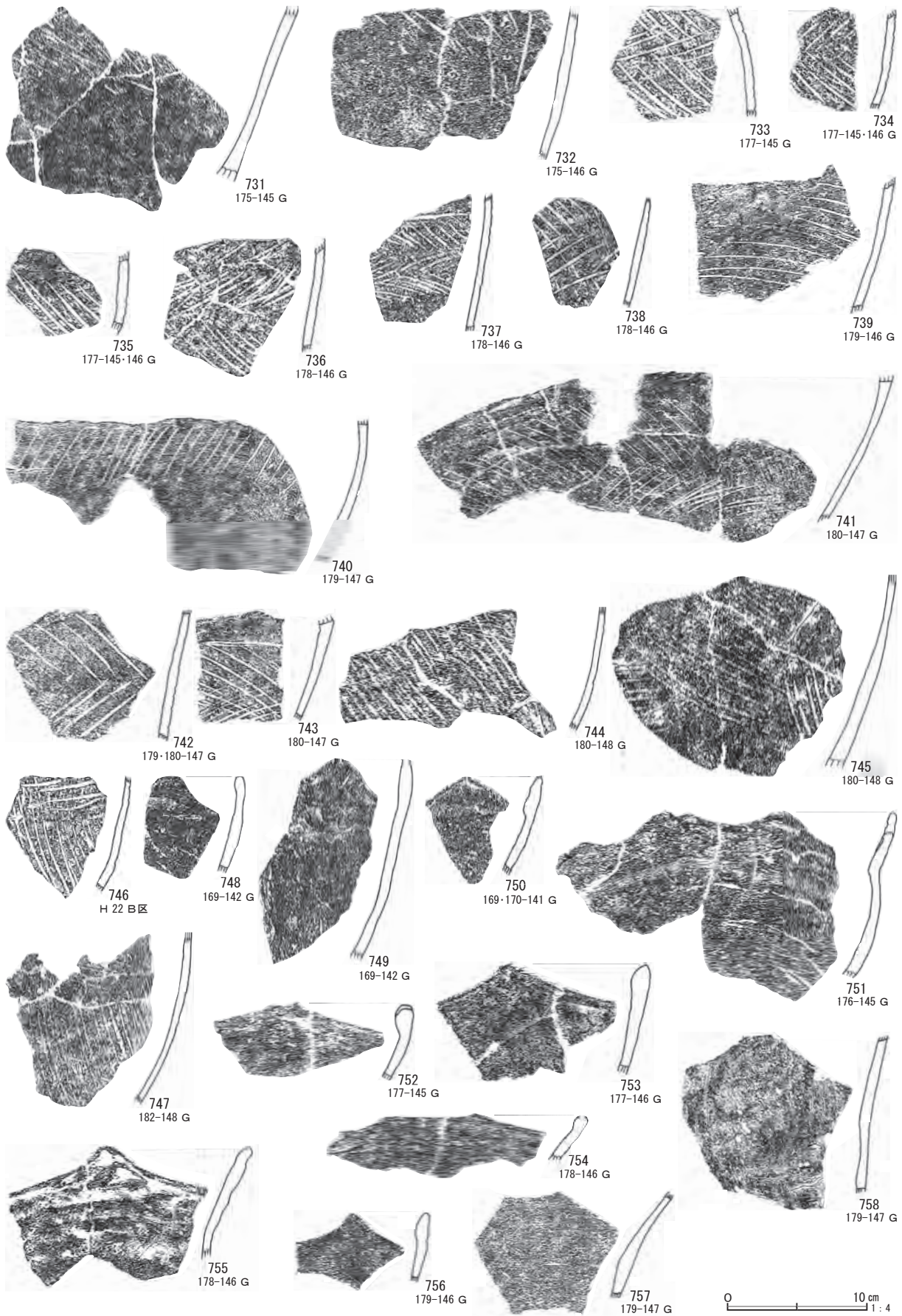
第50図 出土土器 (37)



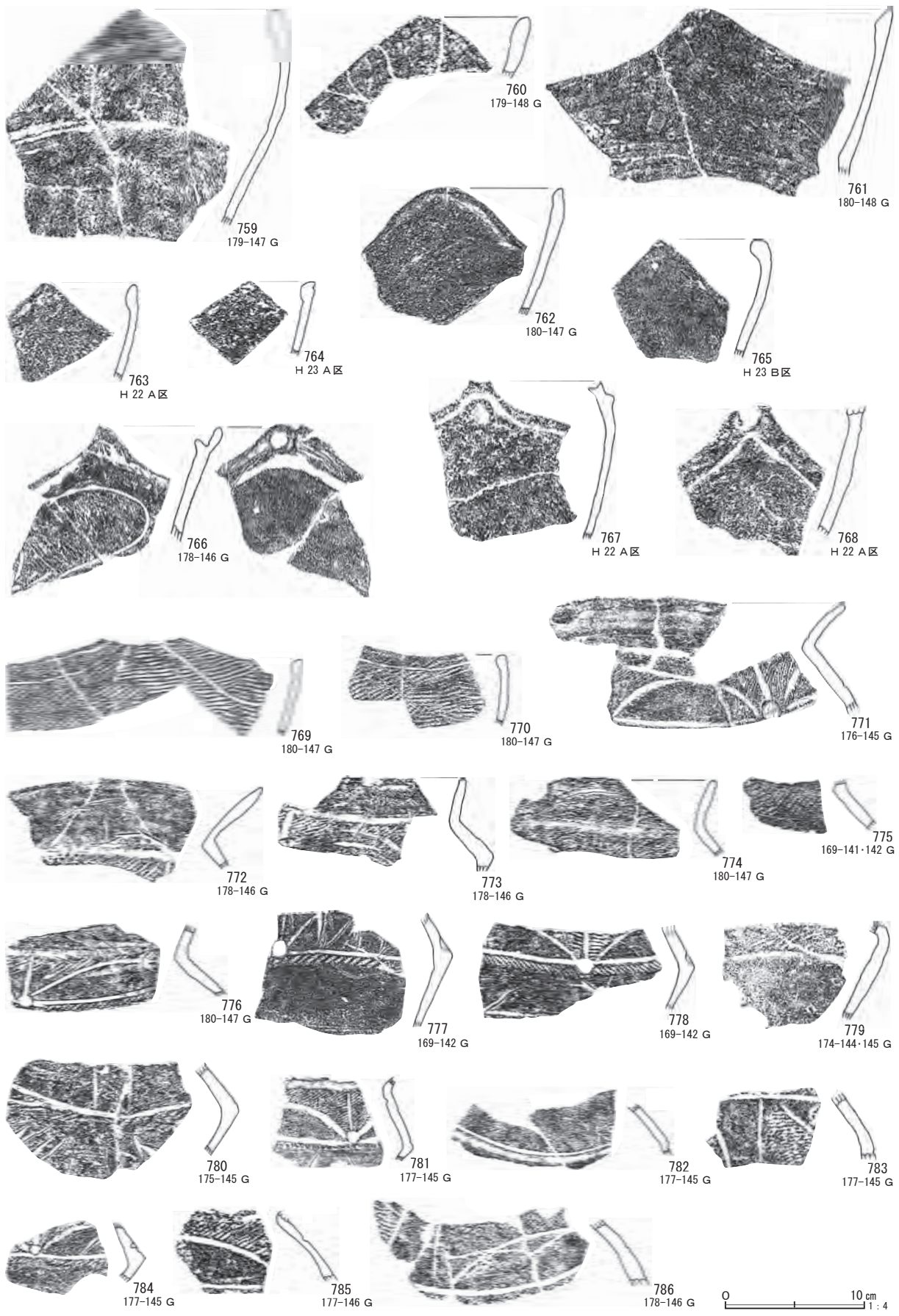
第51图 出土土器 (38)



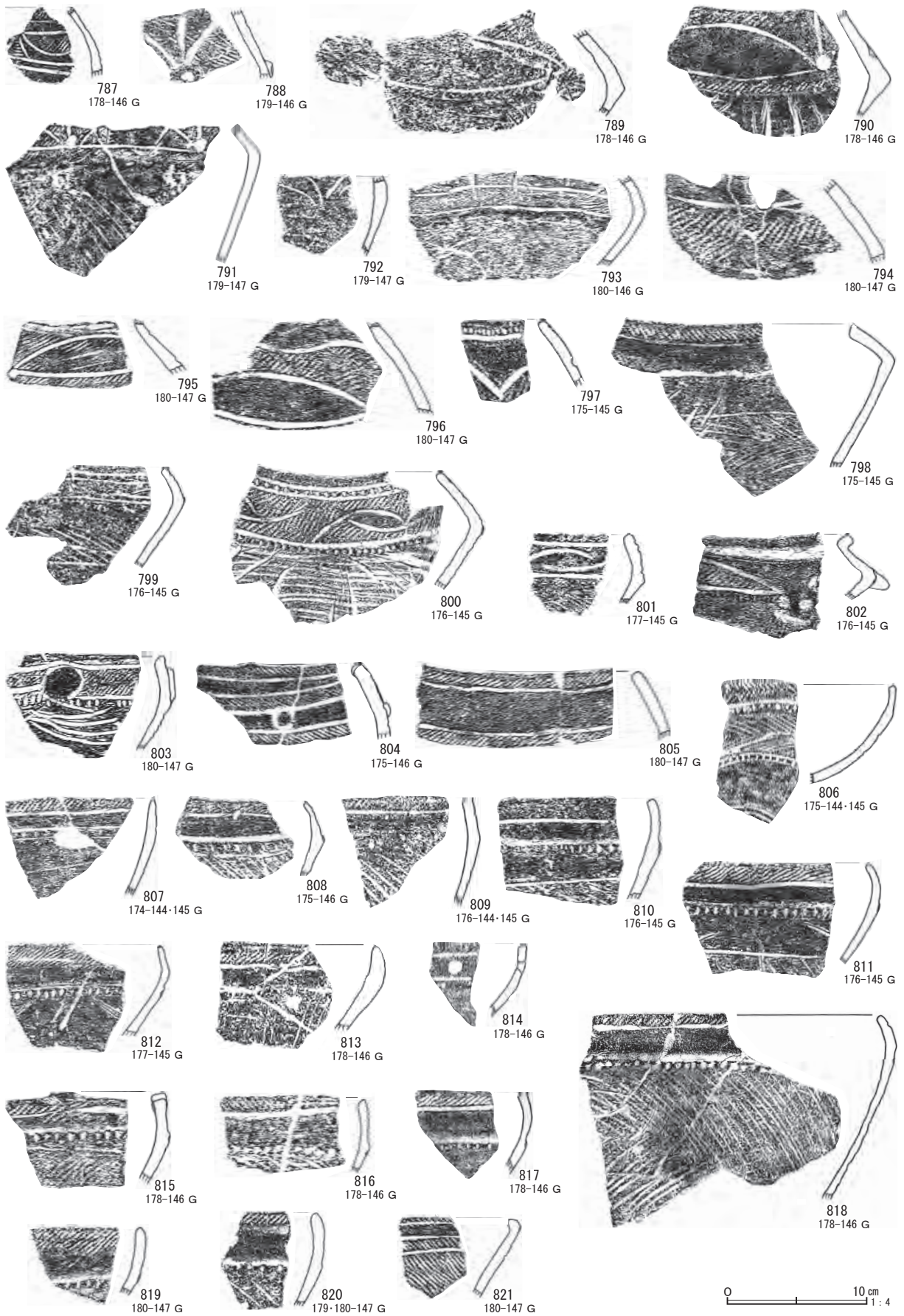
第52図 出土土器 (39)



第53图 出土土器 (40)



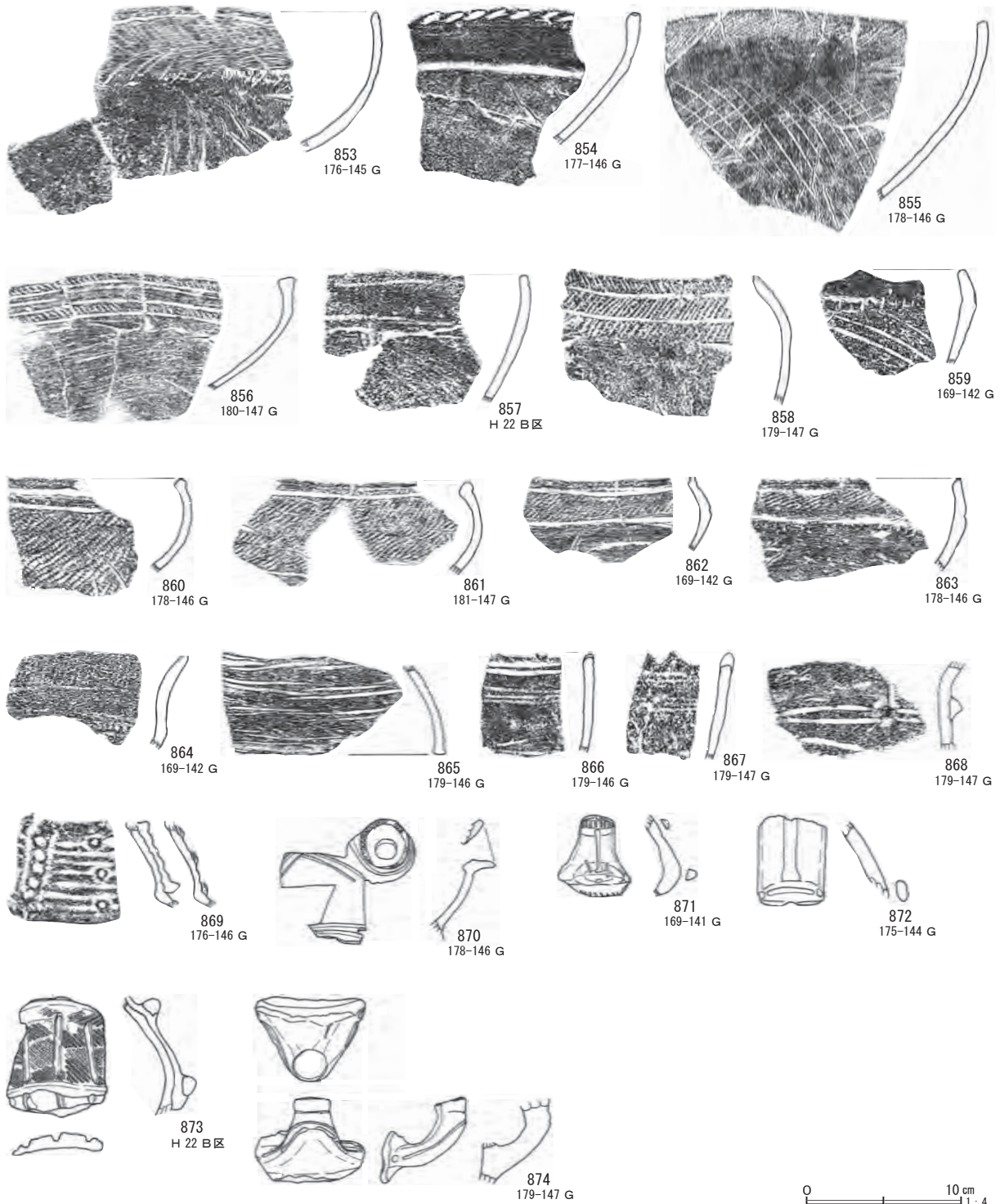
第54图 出土土器 (41)



第55図 出土土器 (42)



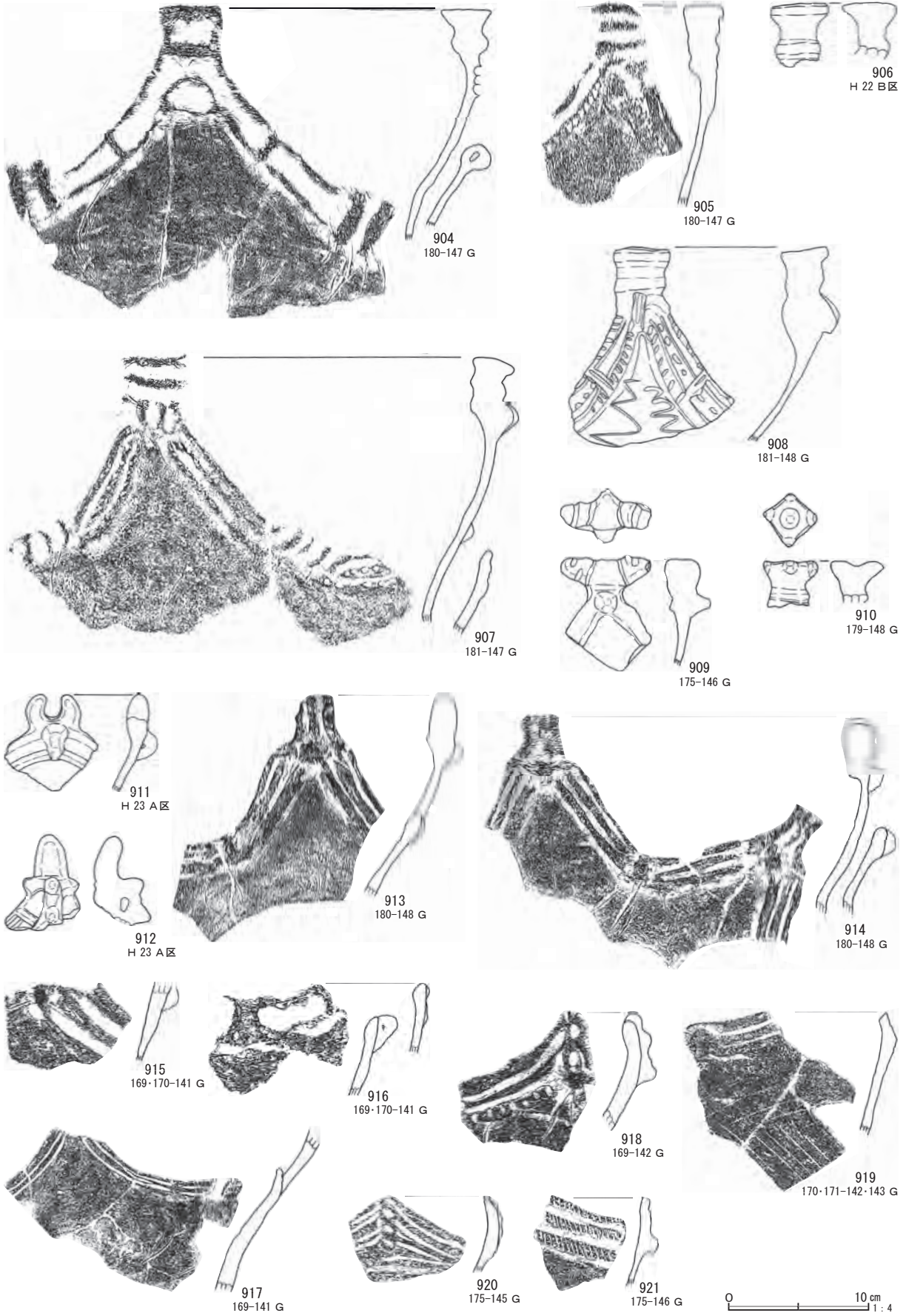
第56图 出土土器 (43)



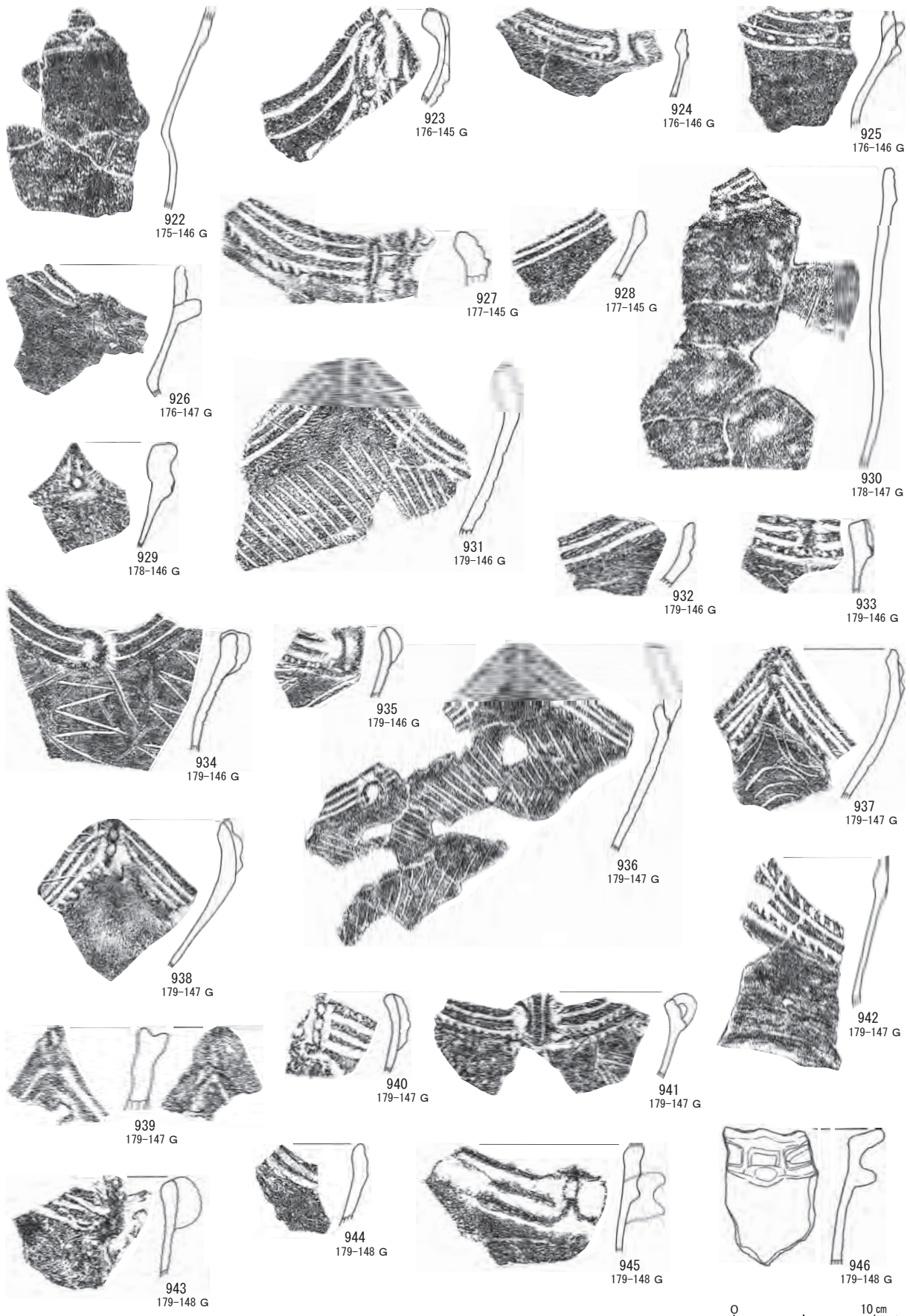
第57图 出土土器 (44)



第58图 出土土器 (45)

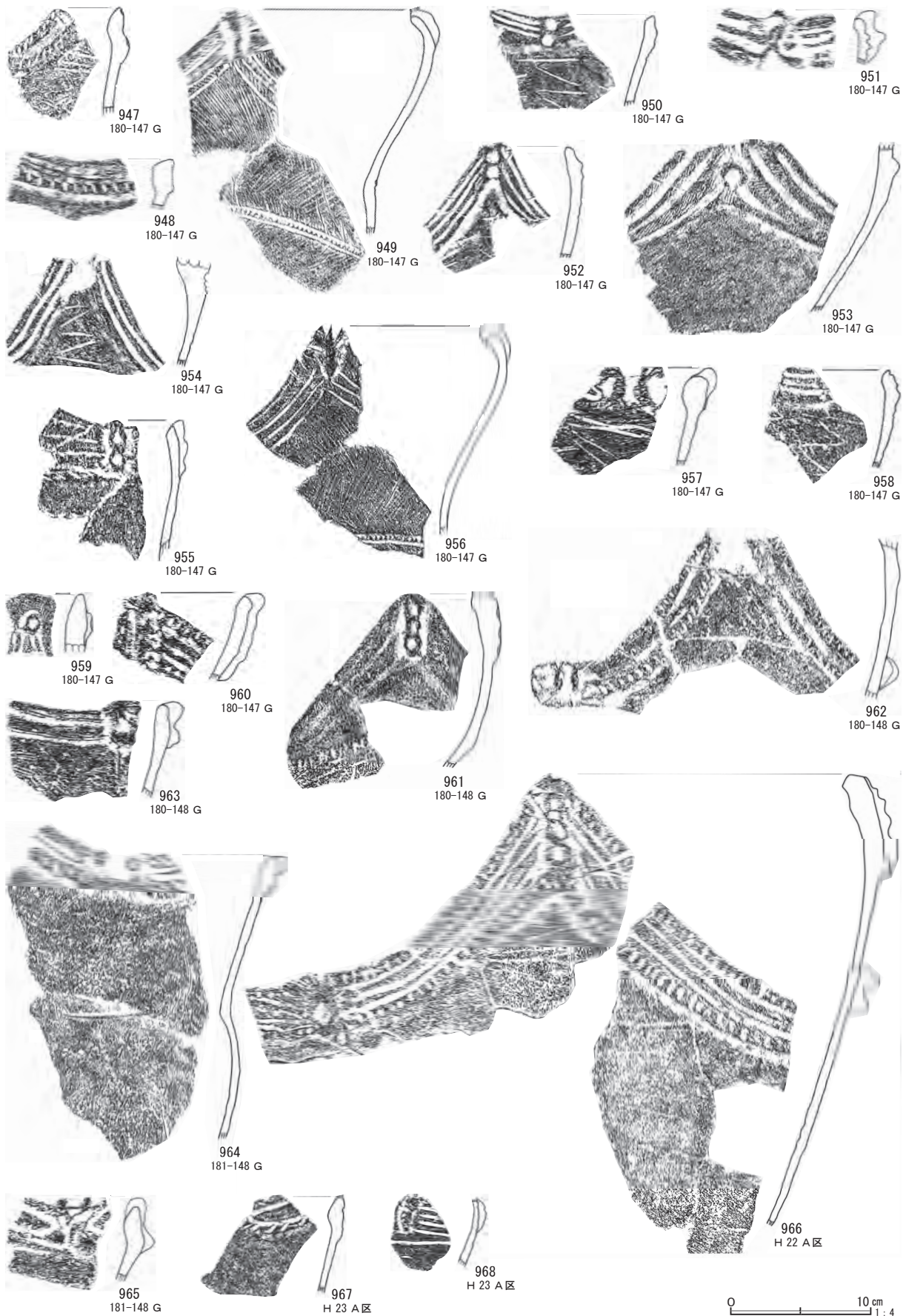


第59图 出土土器 (46)

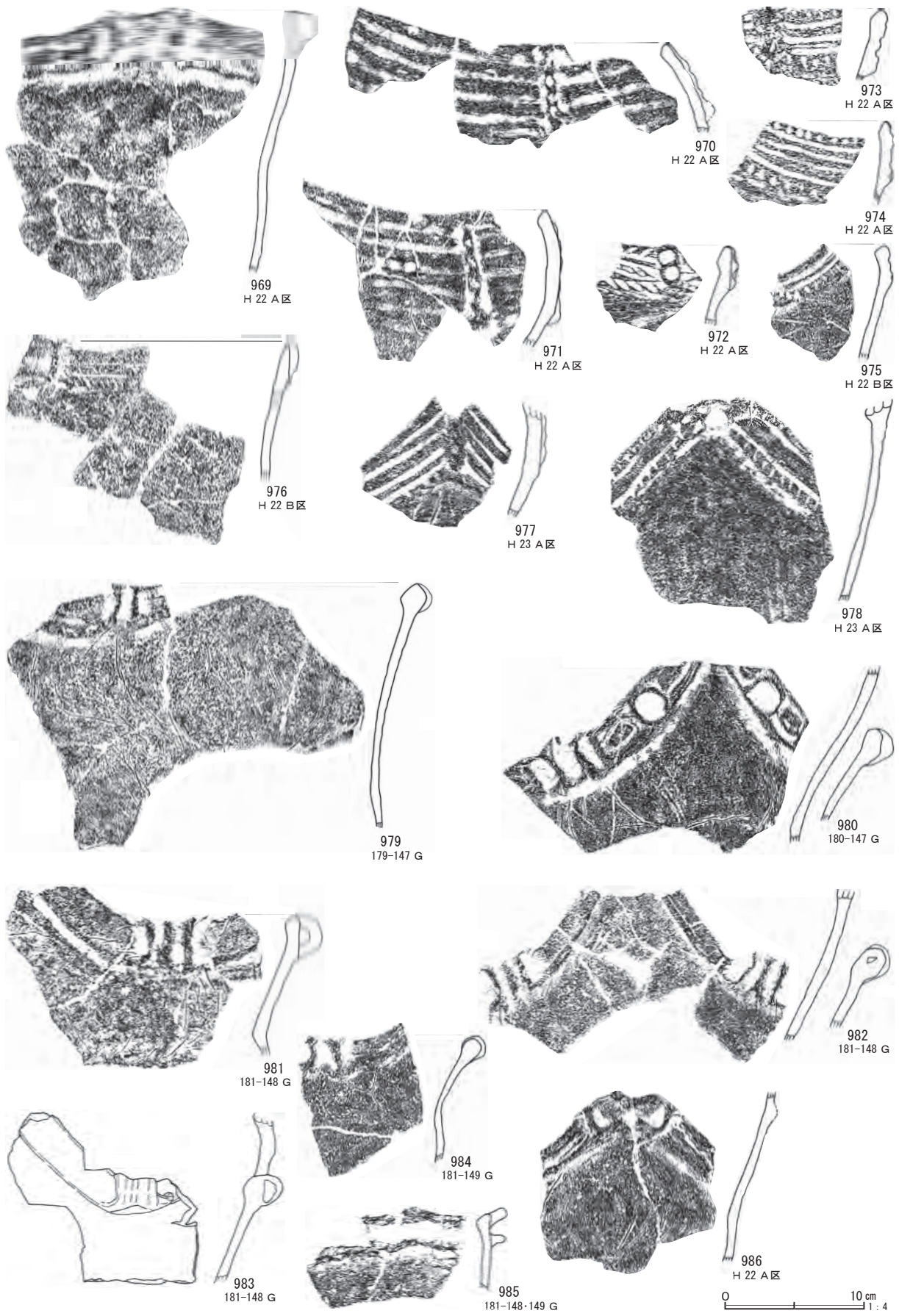


0 10 cm 1:4

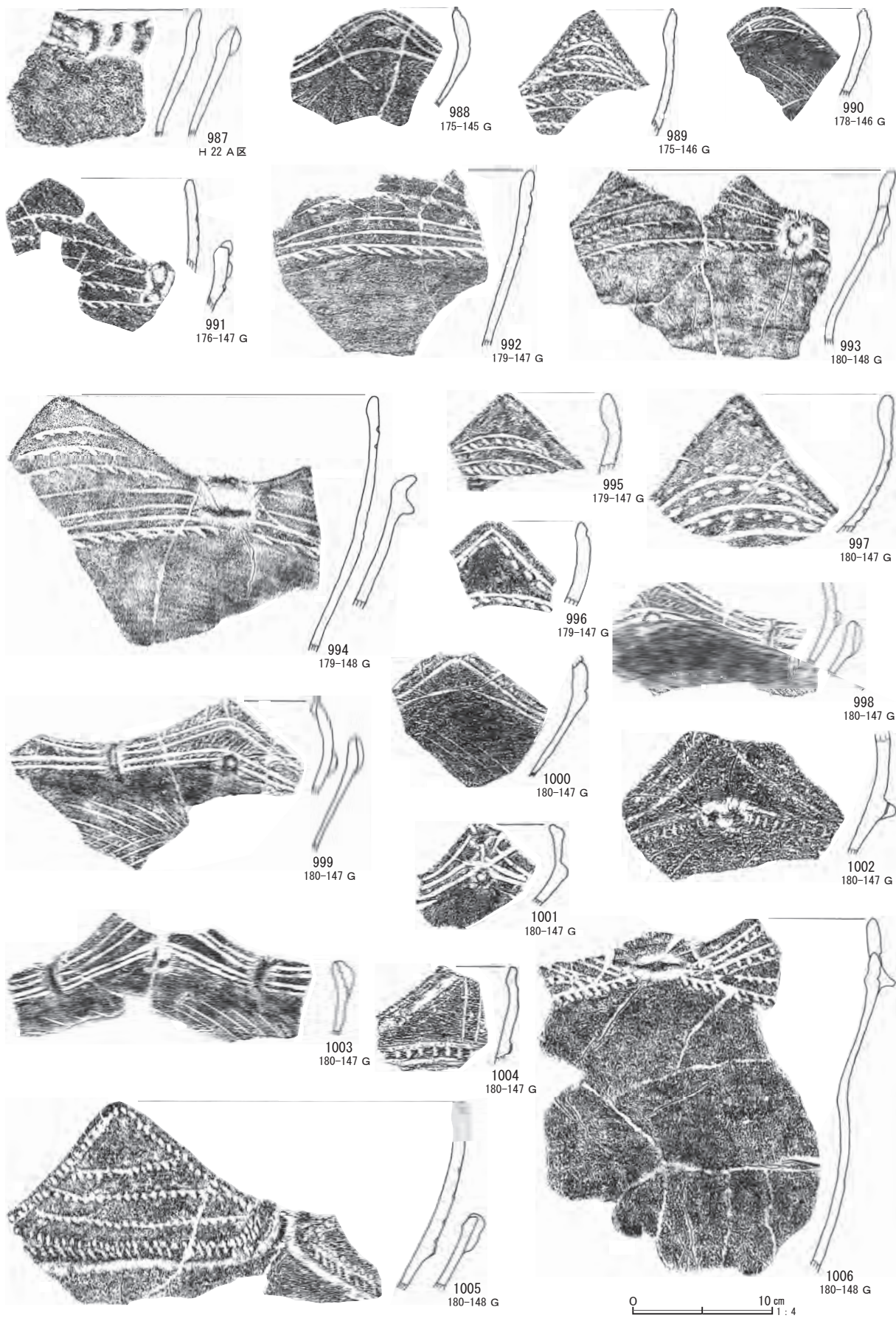
第60图 出土土器 (47)



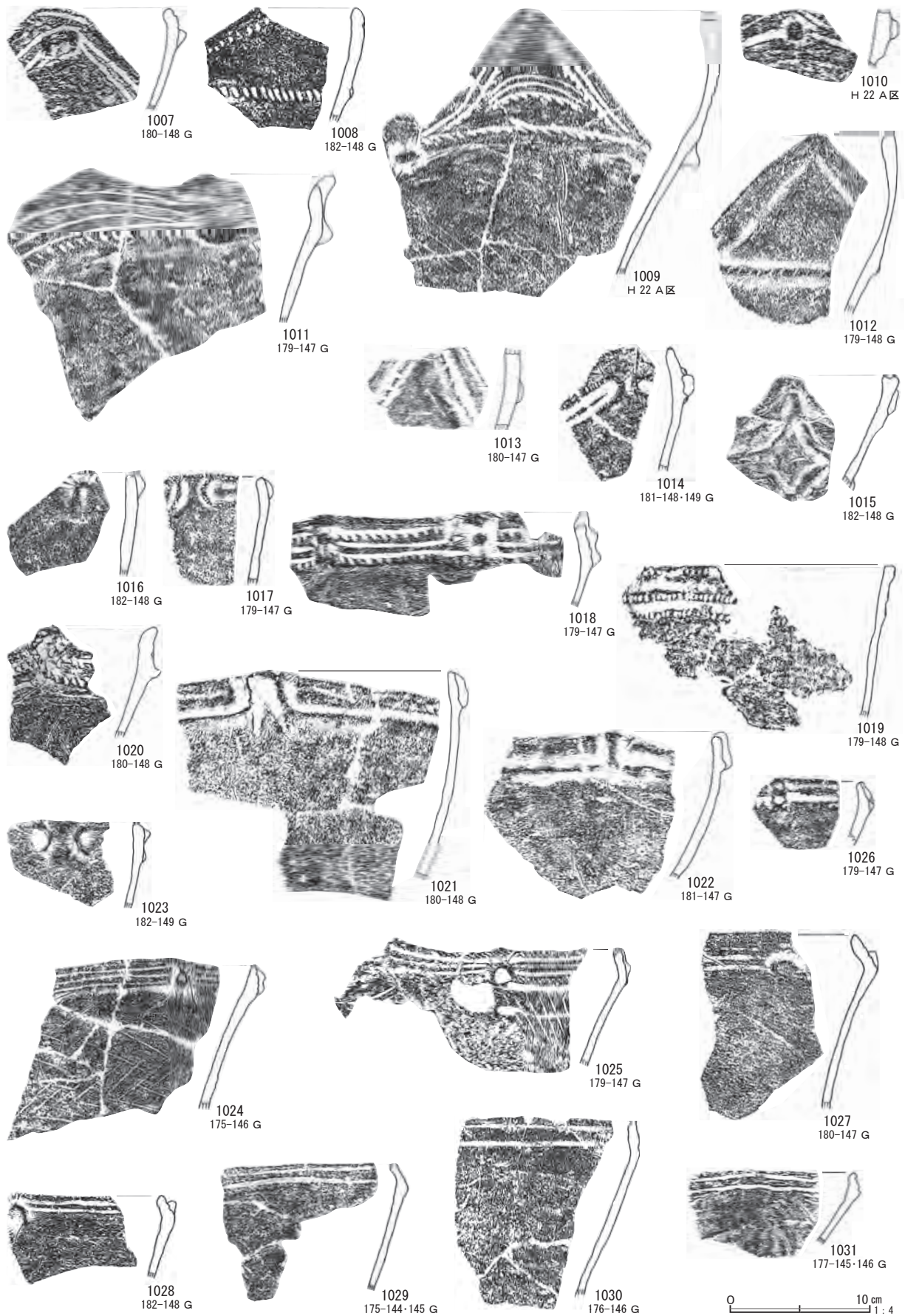
第61图 出土土器 (48)



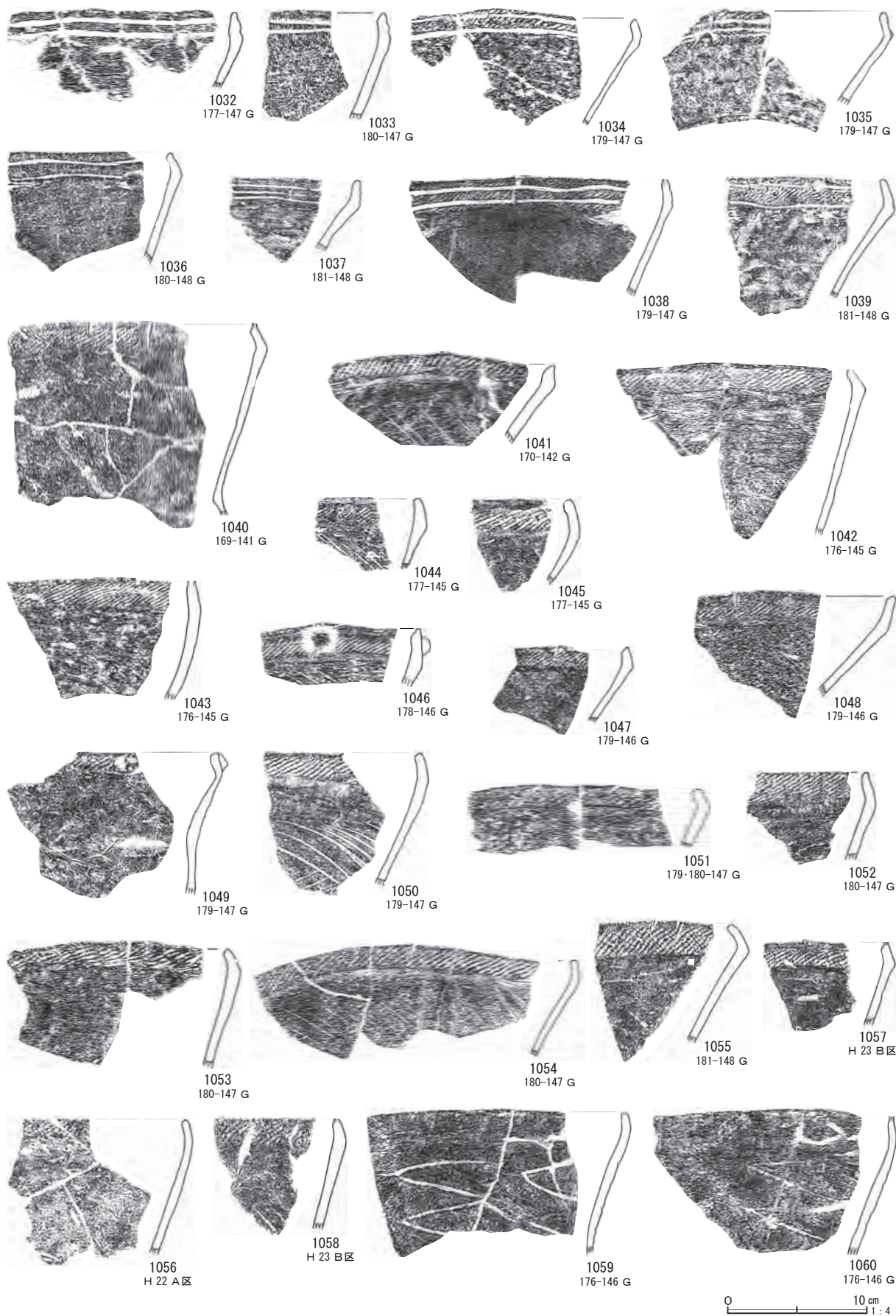
第62図 出土土器 (49)



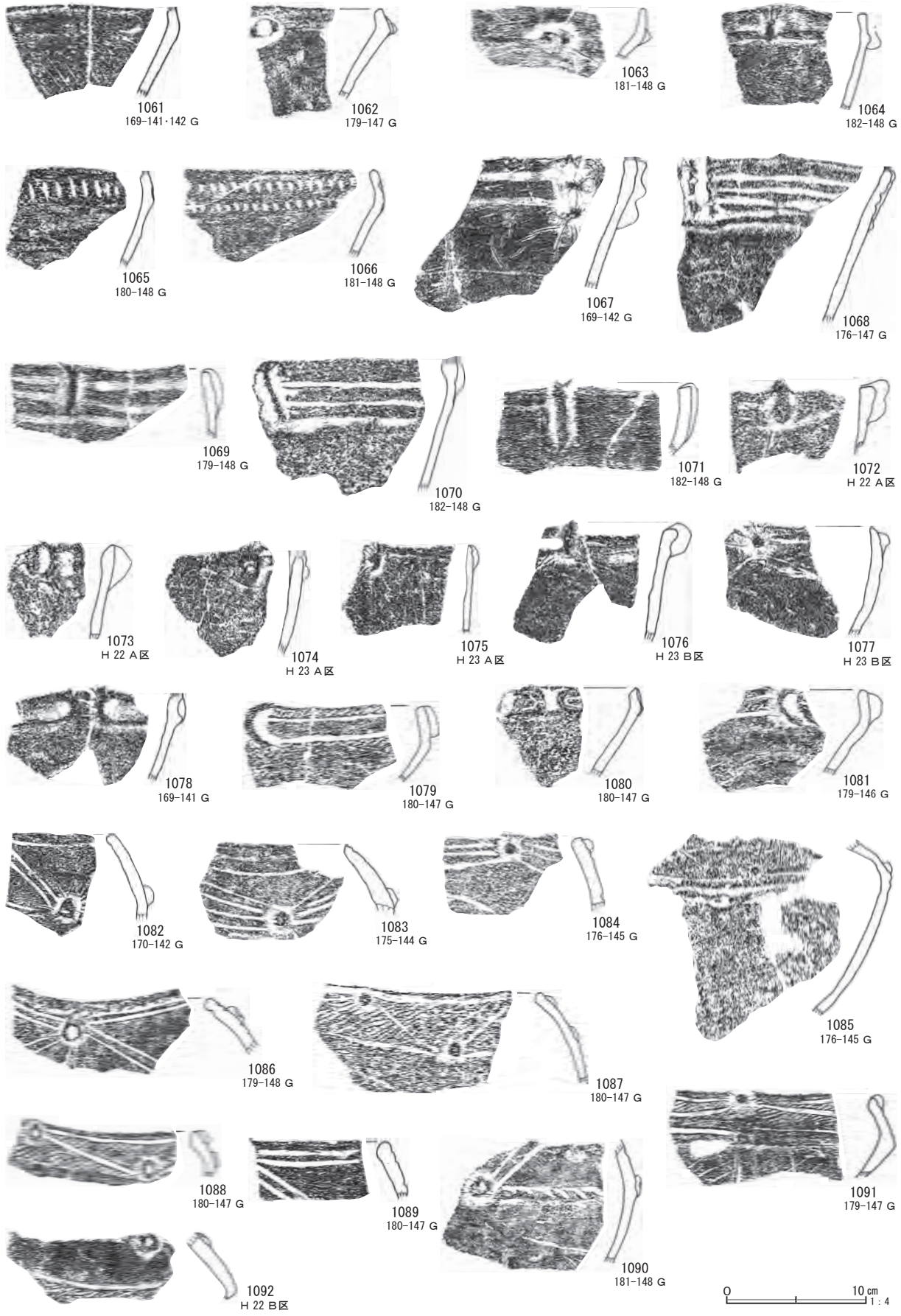
第63图 出土土器 (50)



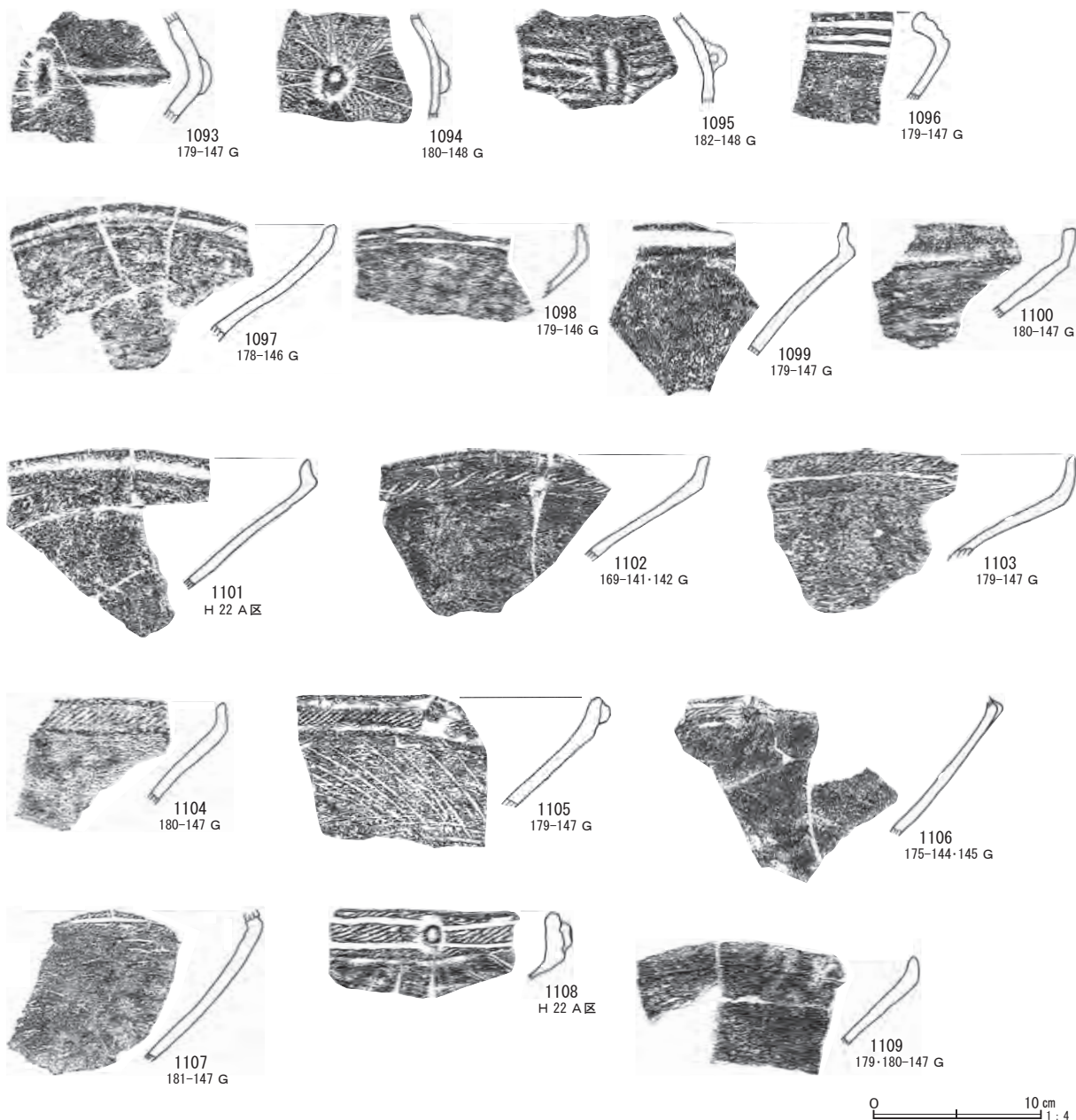
第64图 出土土器 (51)



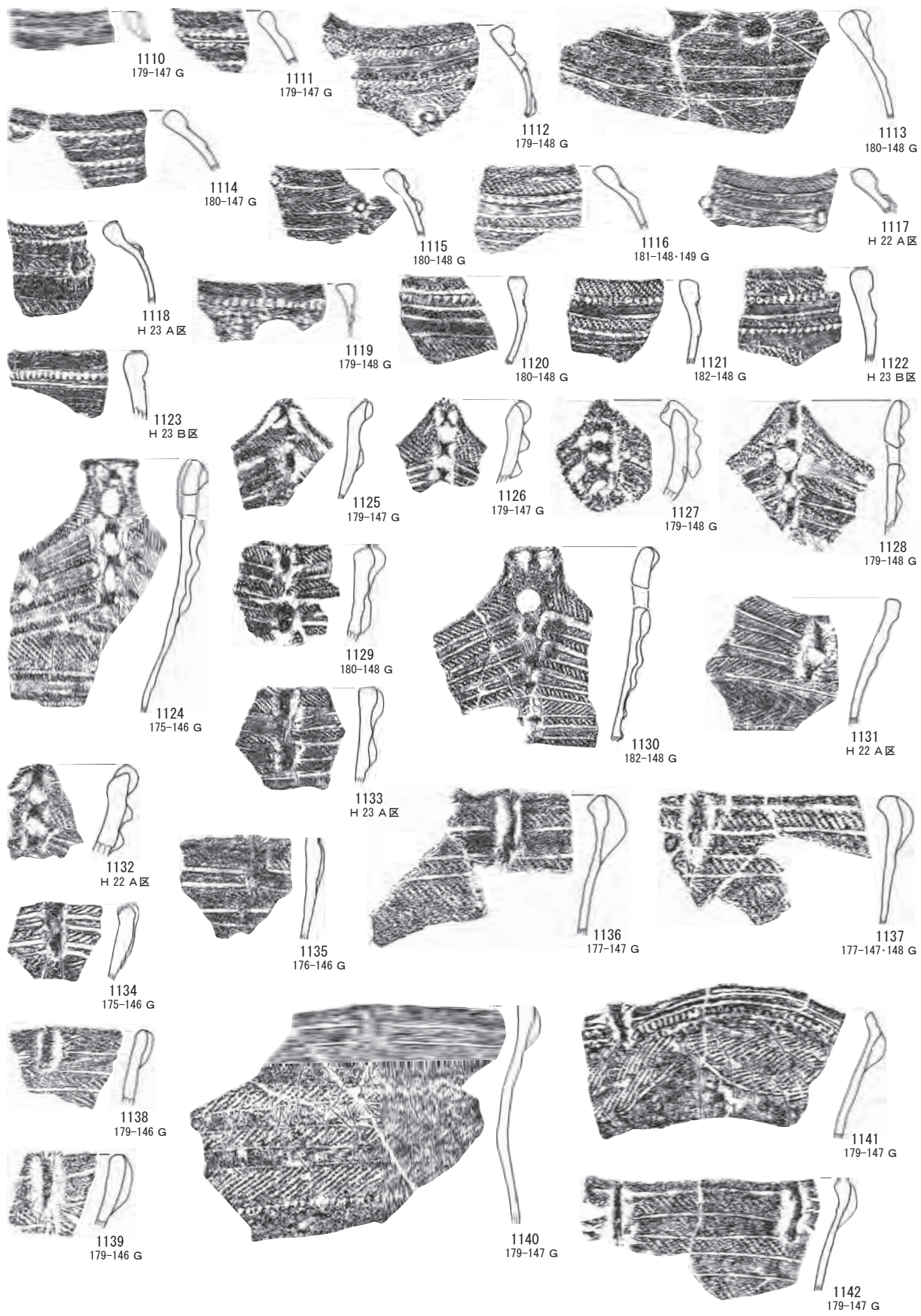
第65図 出土土器 (52)



第66图 出土土器 (53)

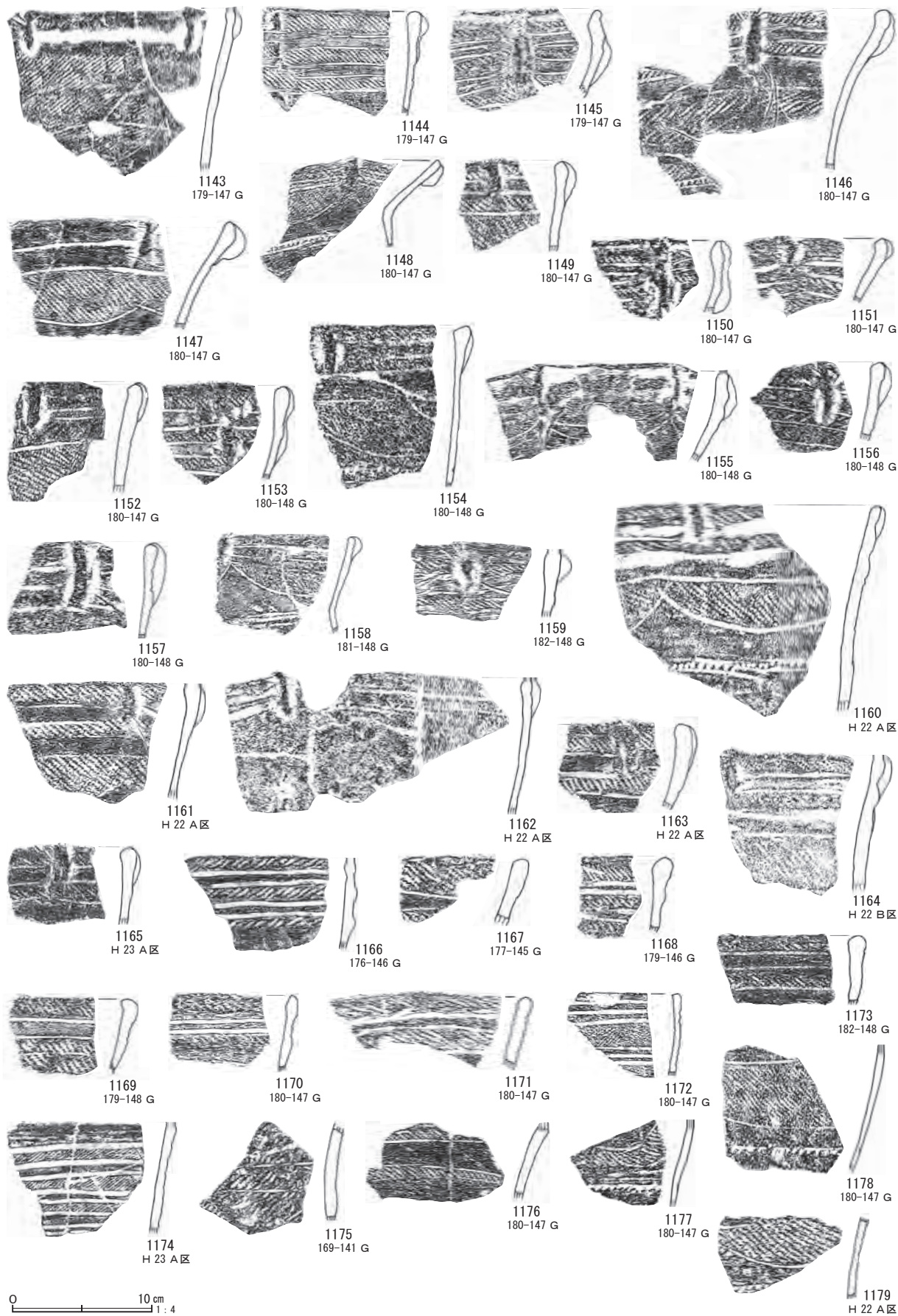


第67图 出土土器 (54)

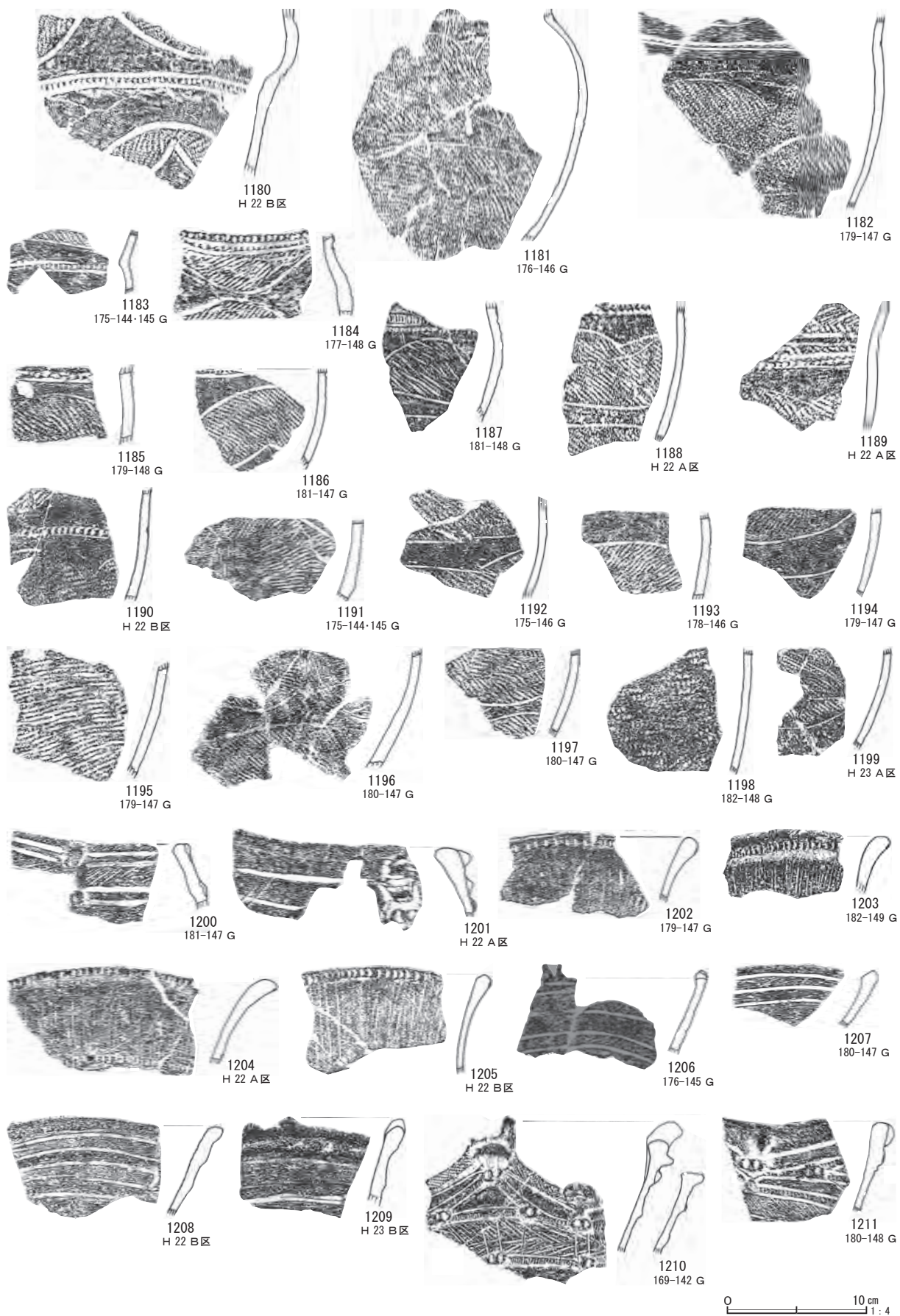


0 10 cm 1:4

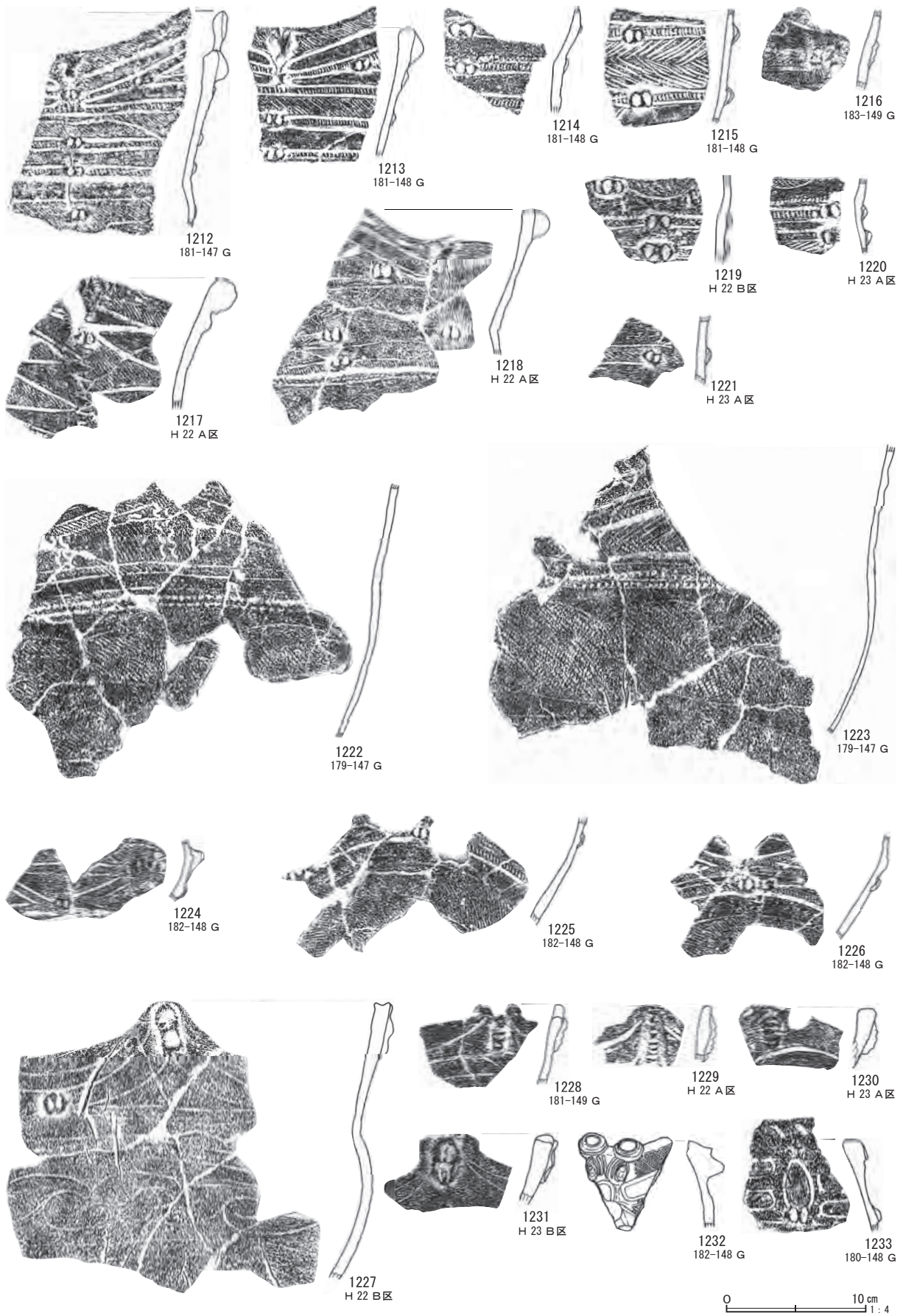
第68图 出土土器 (55)



第69图 出土土器 (56)



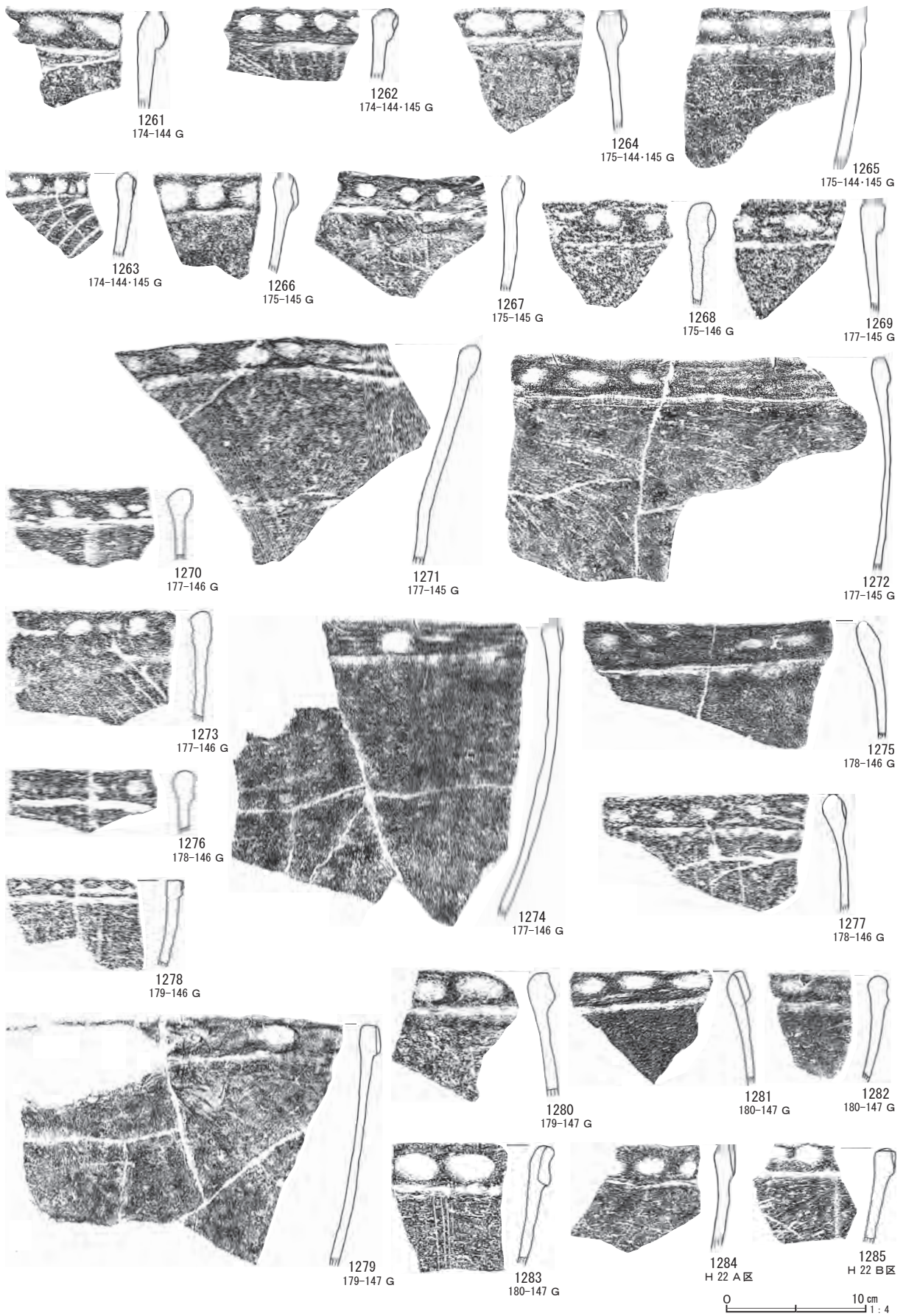
第70图 出土土器 (57)



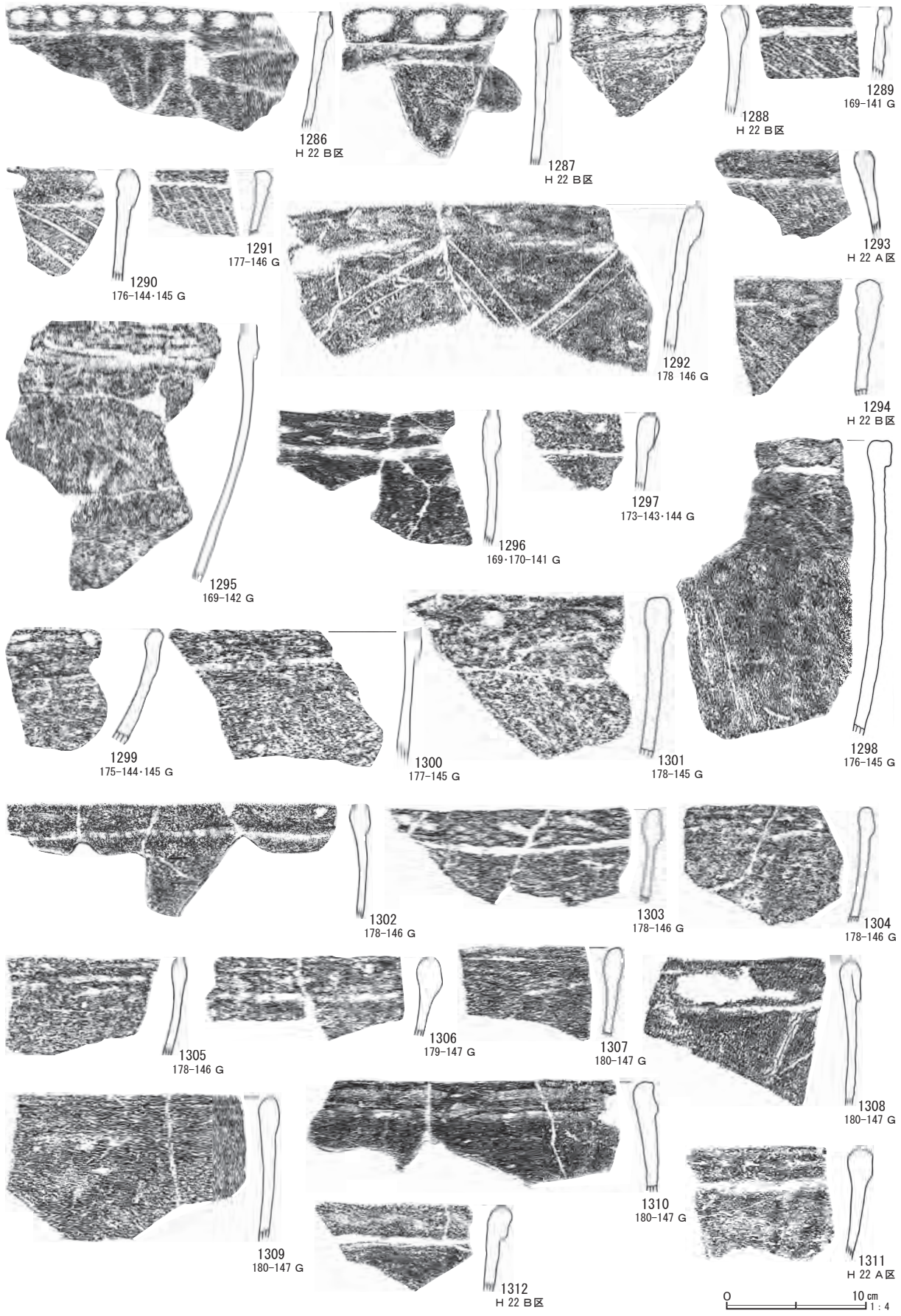
第71图 出土土器 (58)



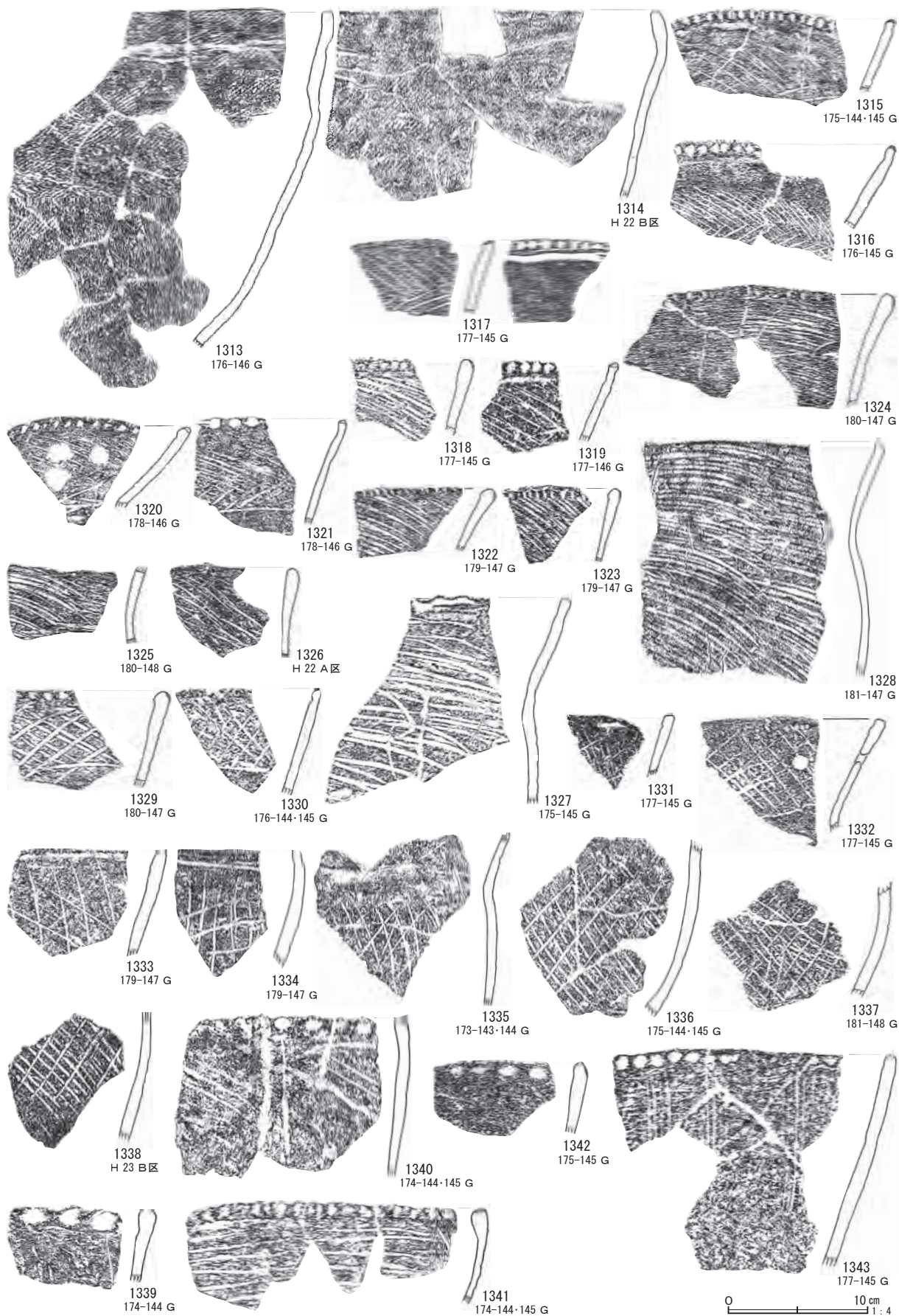
第72图 出土土器 (59)



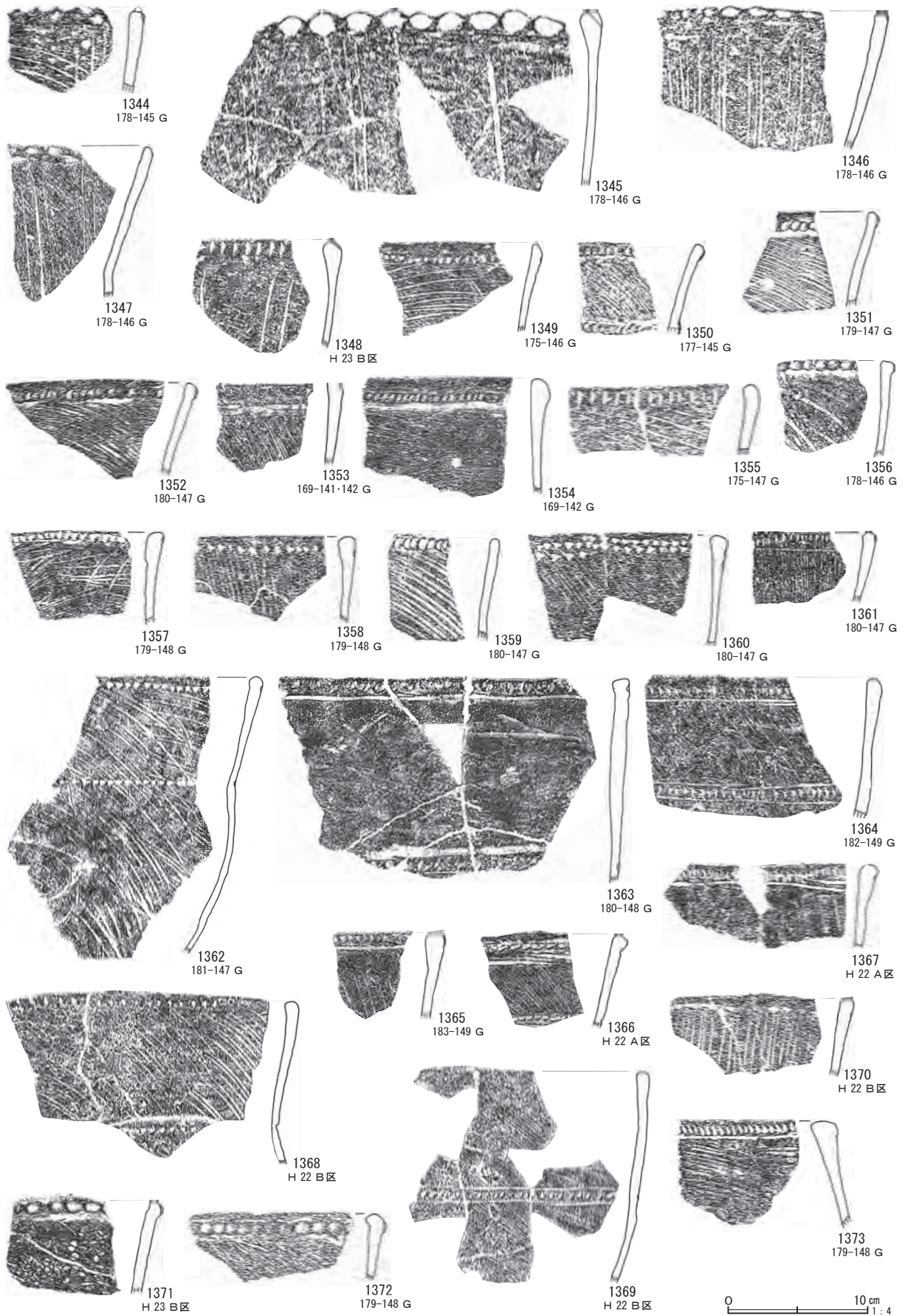
第73図 出土土器 (60)



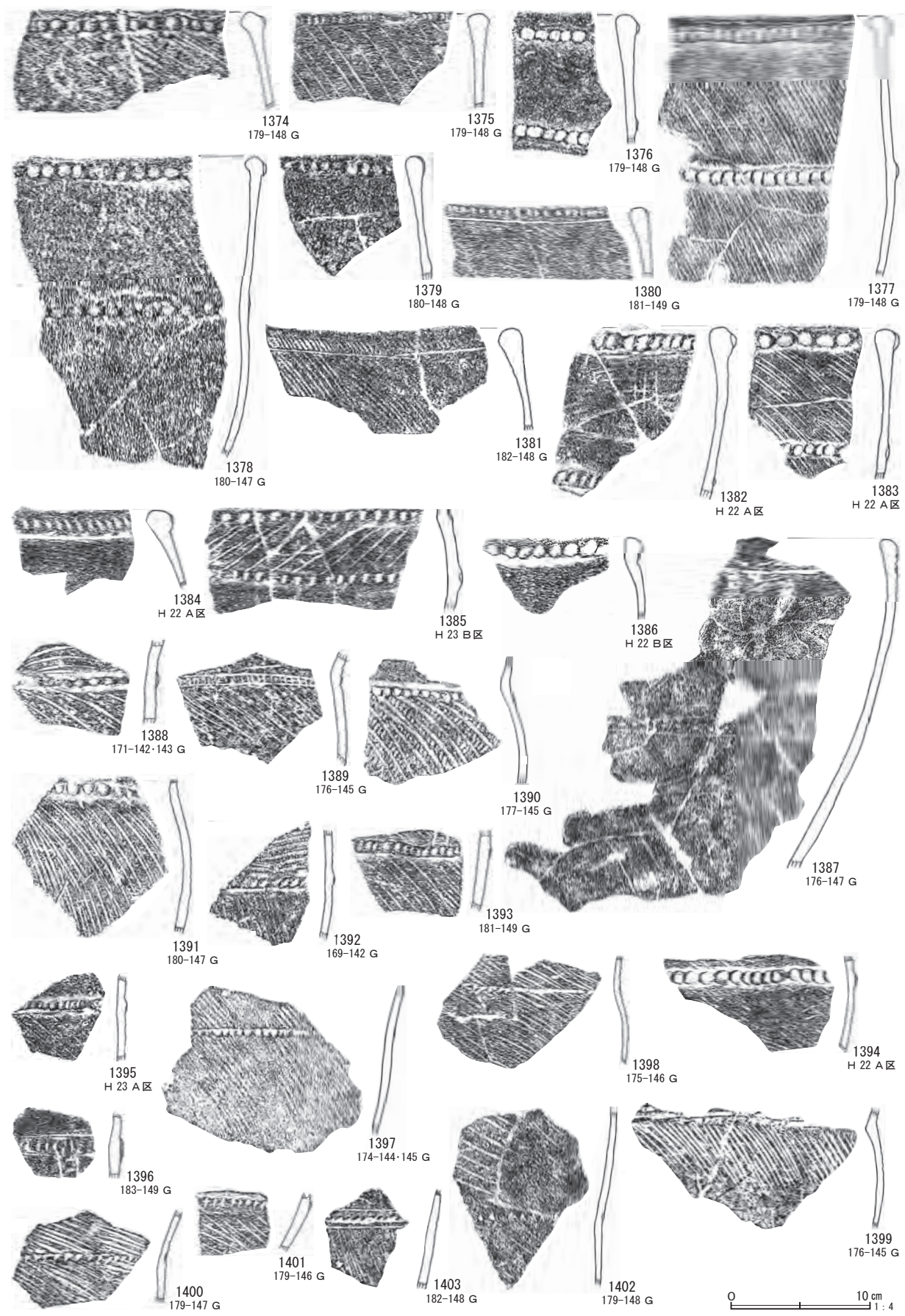
第74図 出土土器 (61)



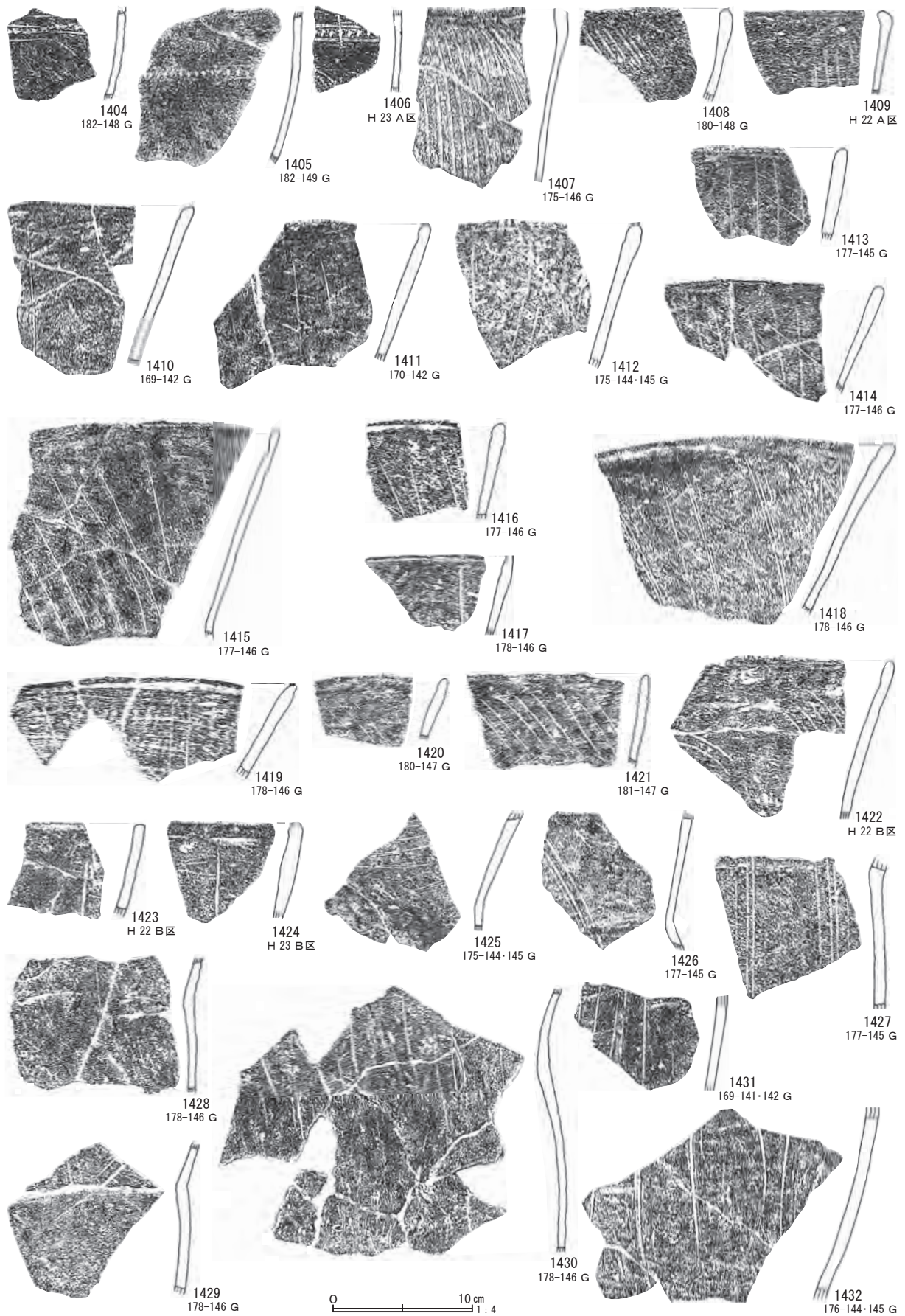
第75图 出土土器 (62)



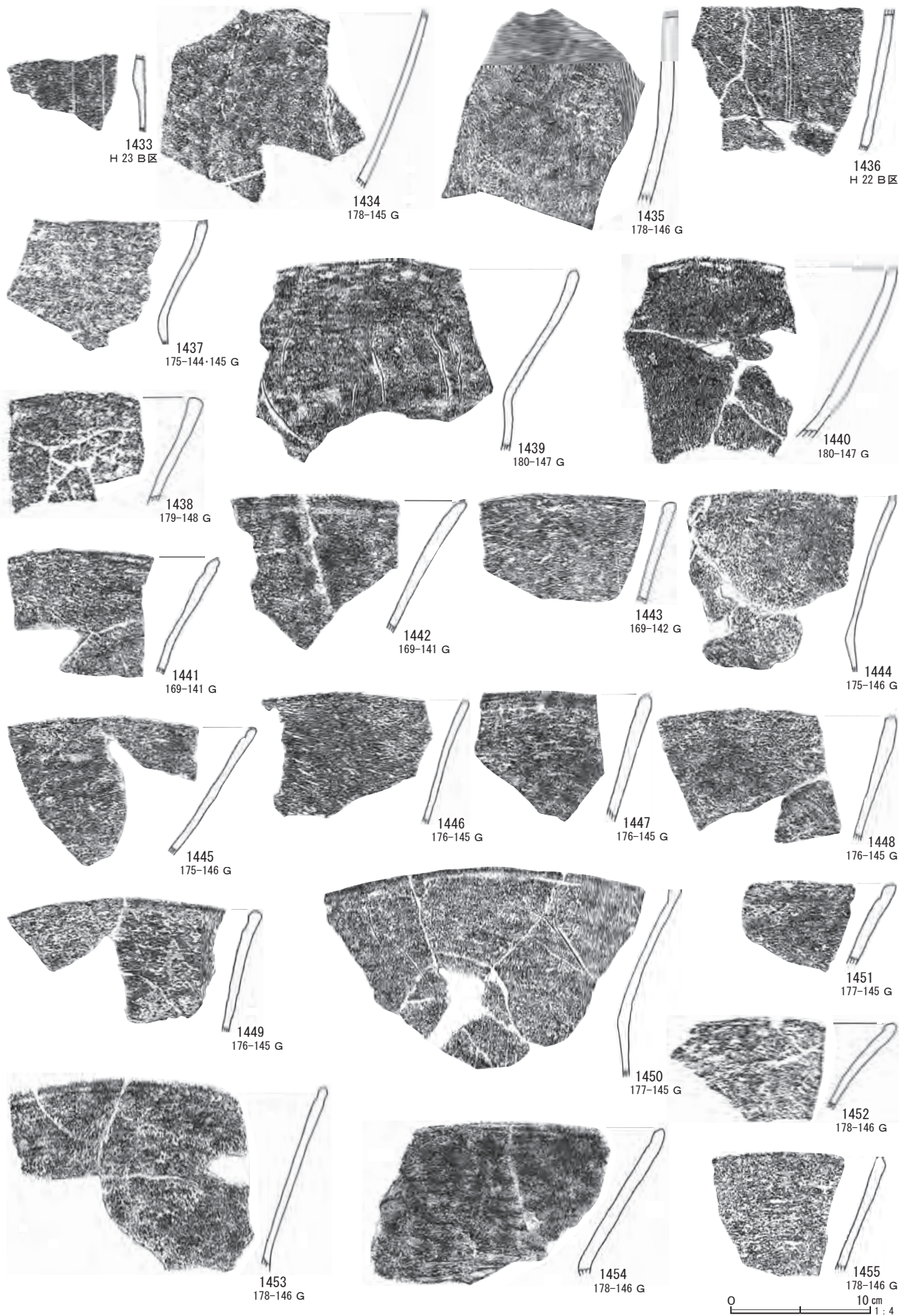
第76图 出土土器 (63)



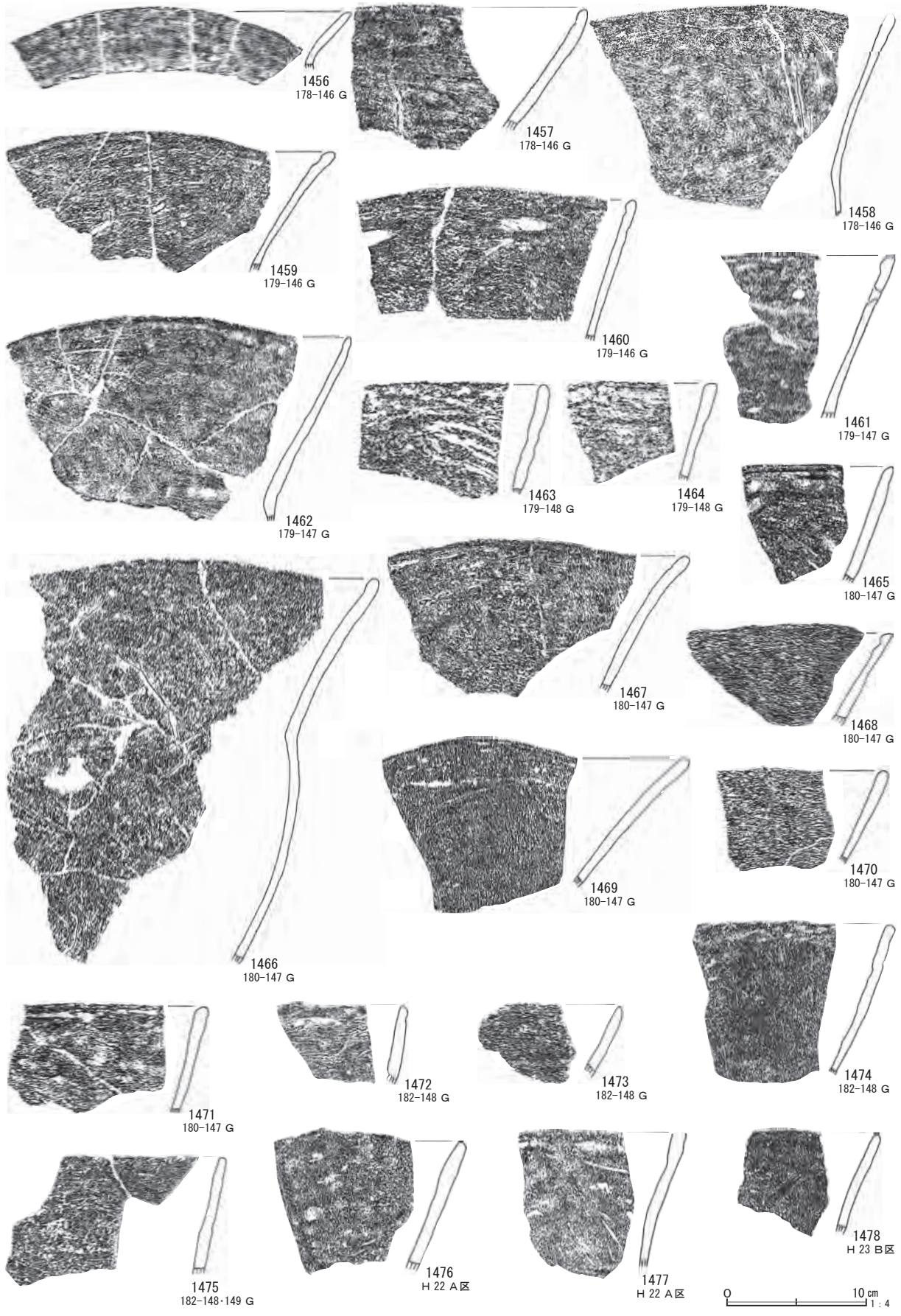
第77图 出土土器 (64)



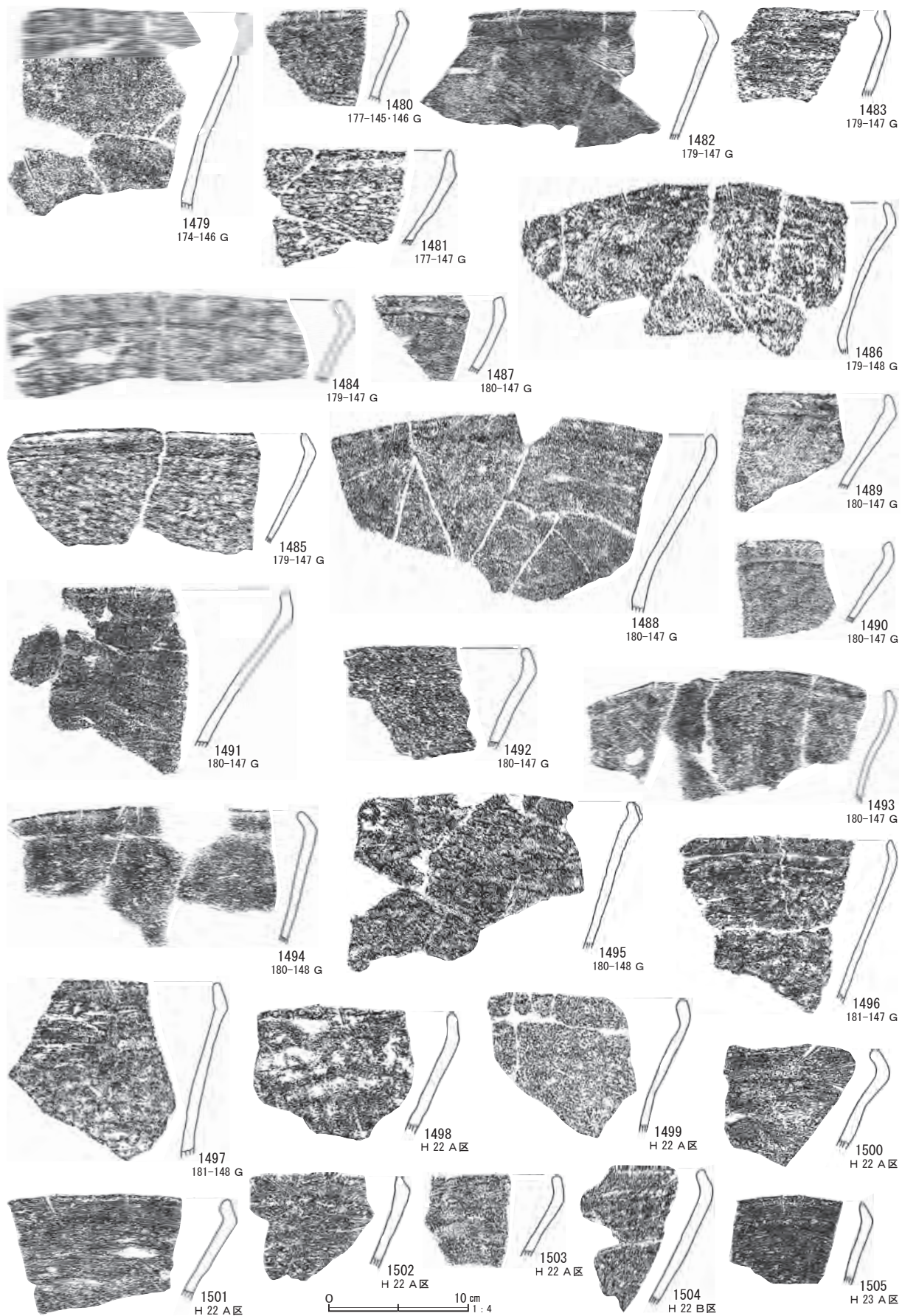
第78图 出土土器 (65)



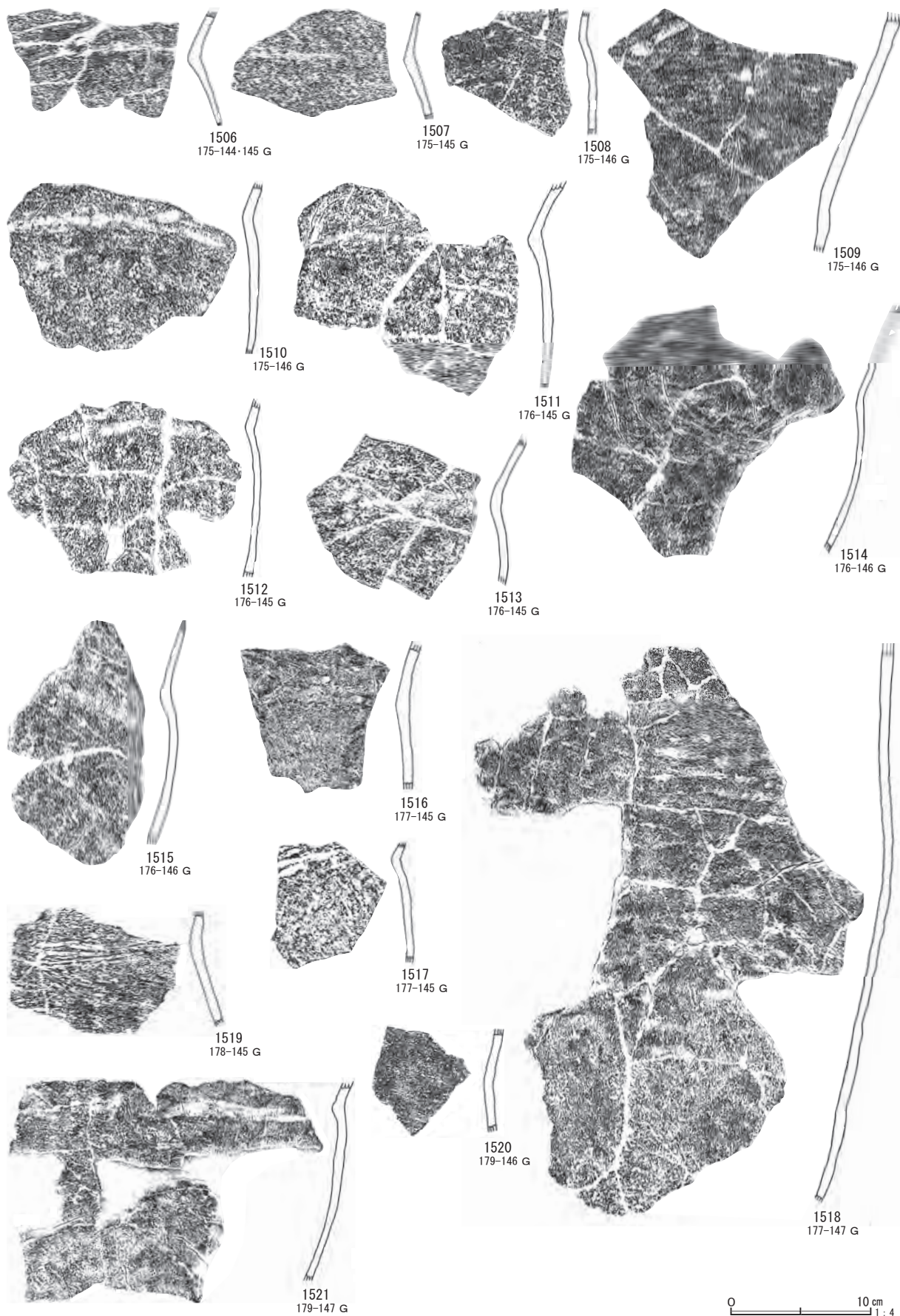
第79図 出土土器 (66)



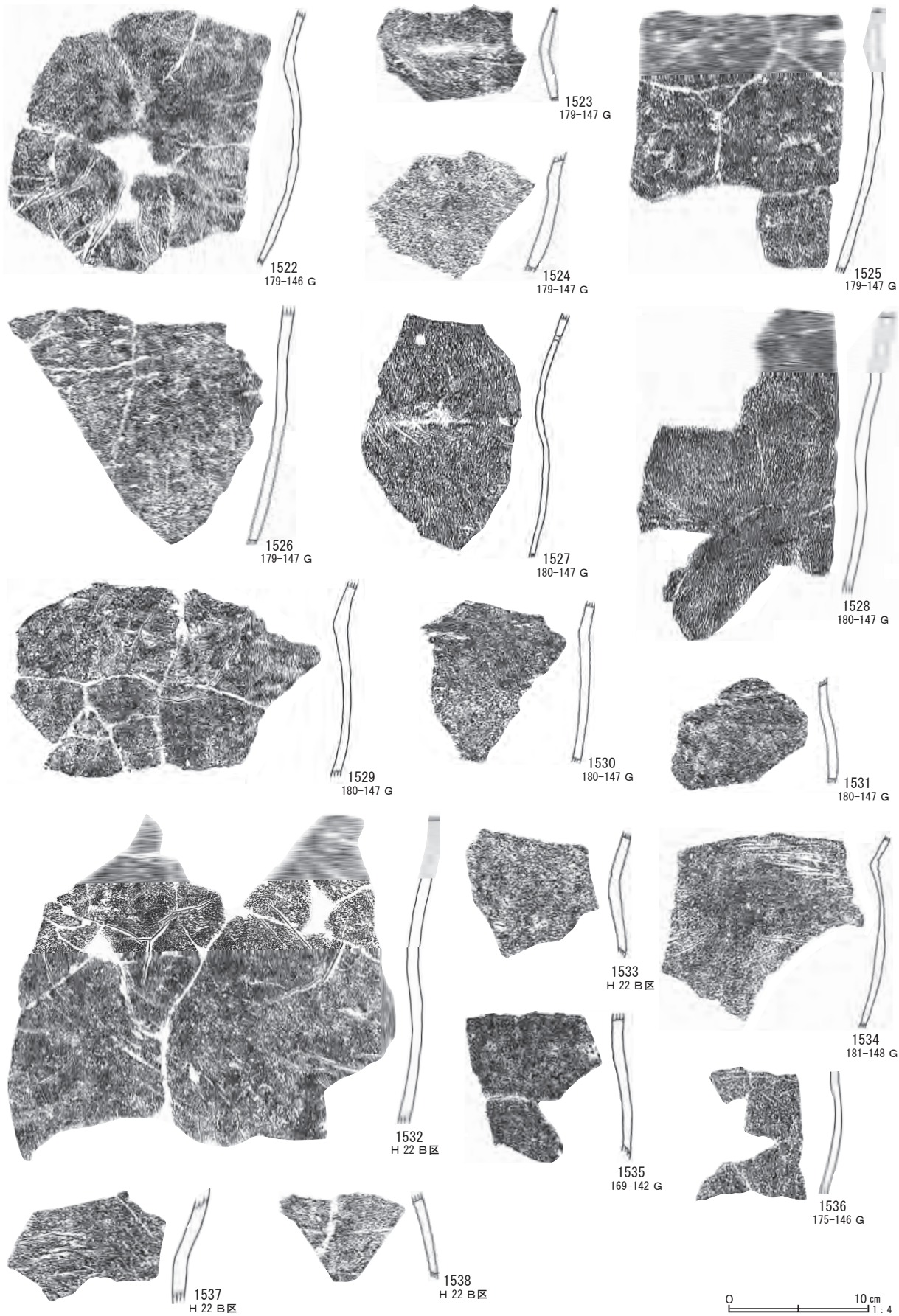
第80図 出土土器 (67)



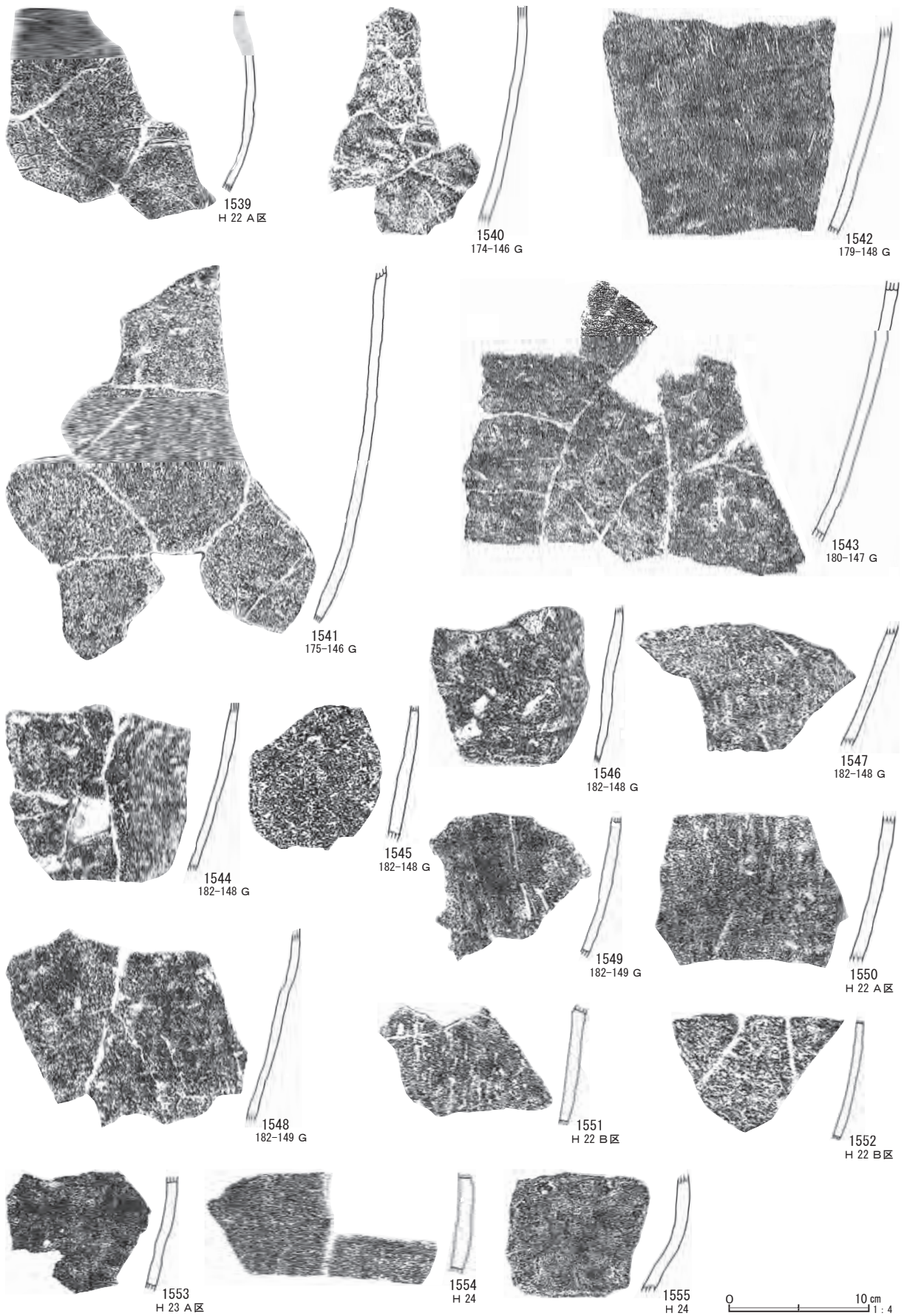
第81图 出土土器 (68)



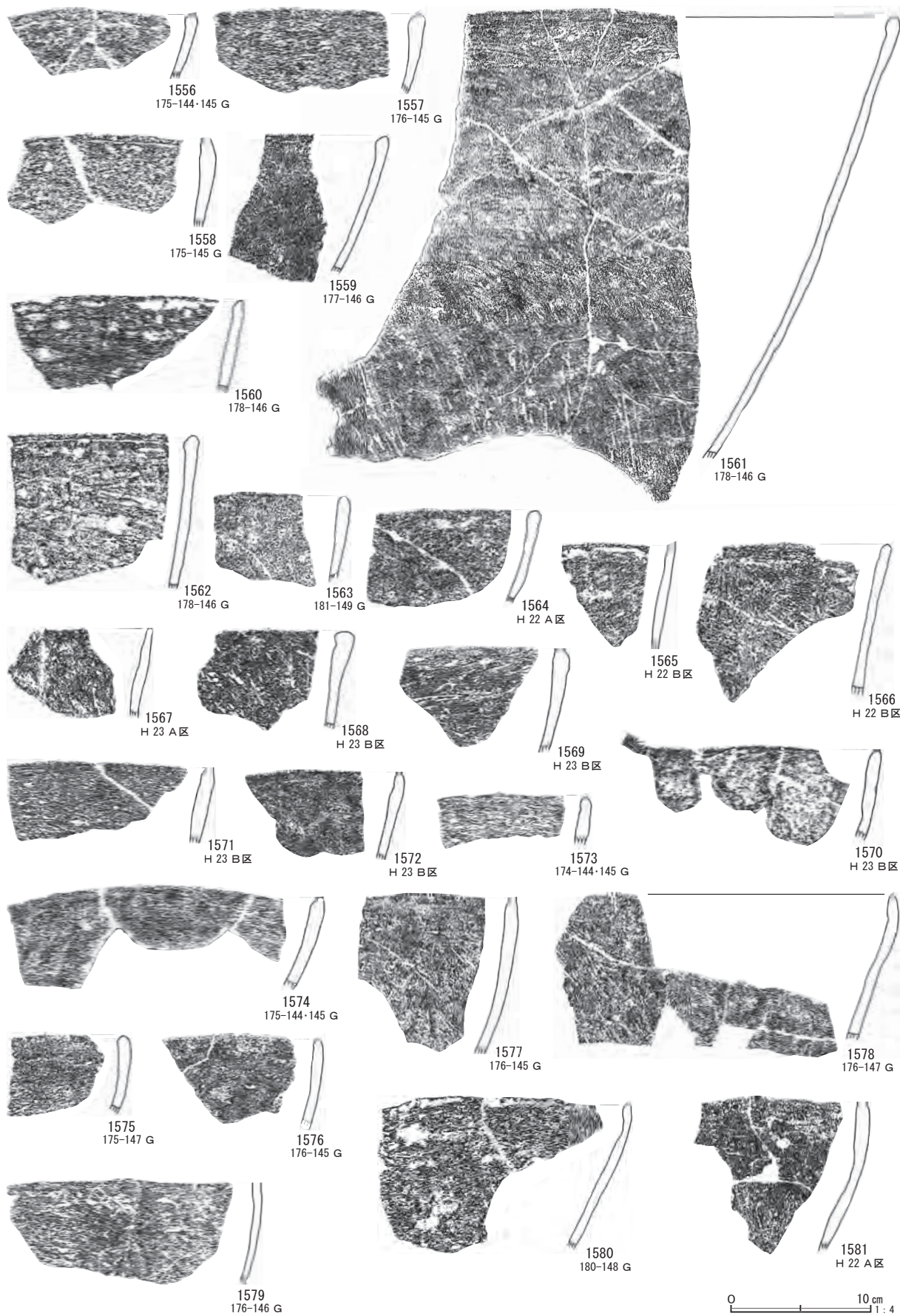
第82図 出土土器 (69)



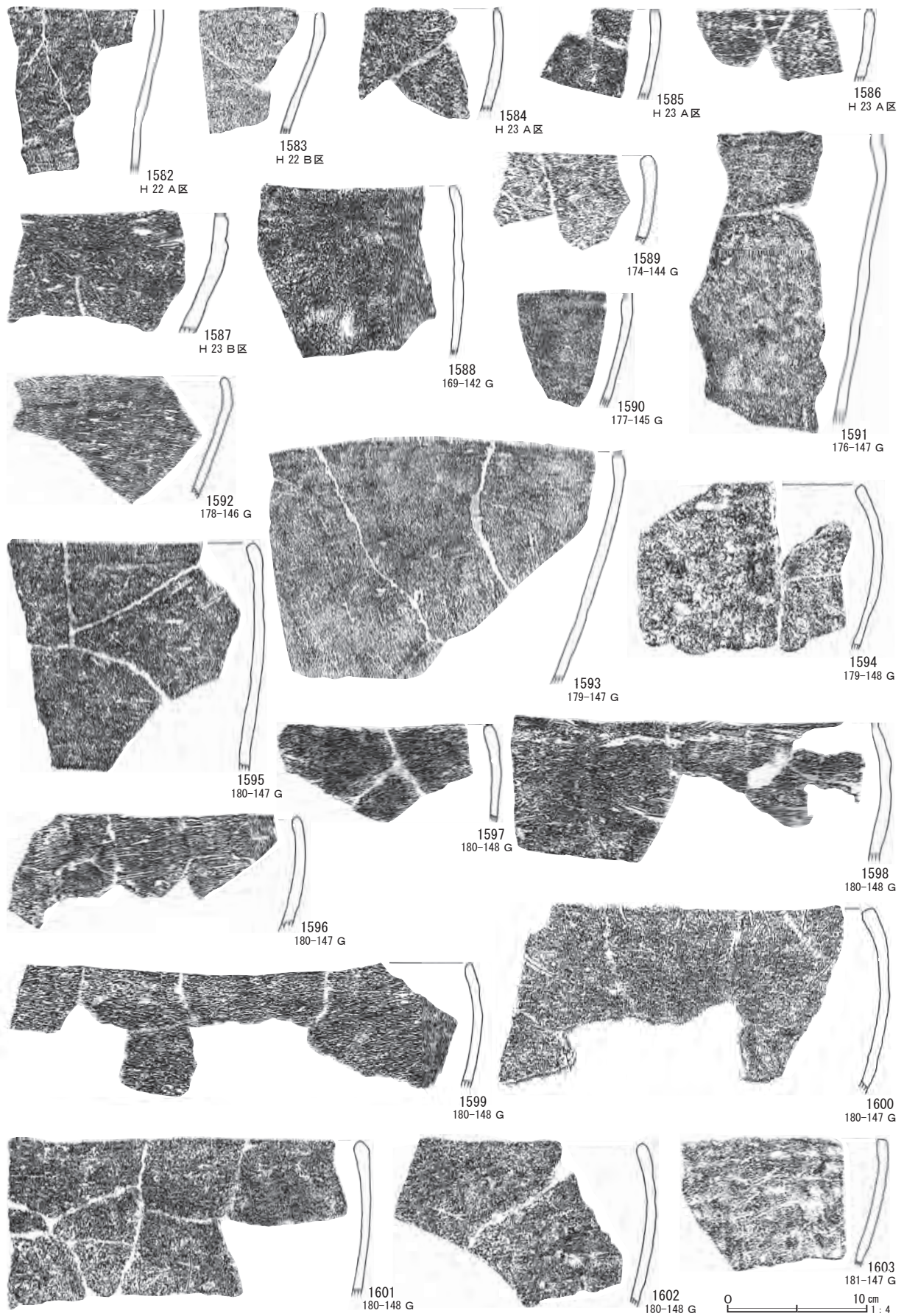
第83图 出土土器 (70)



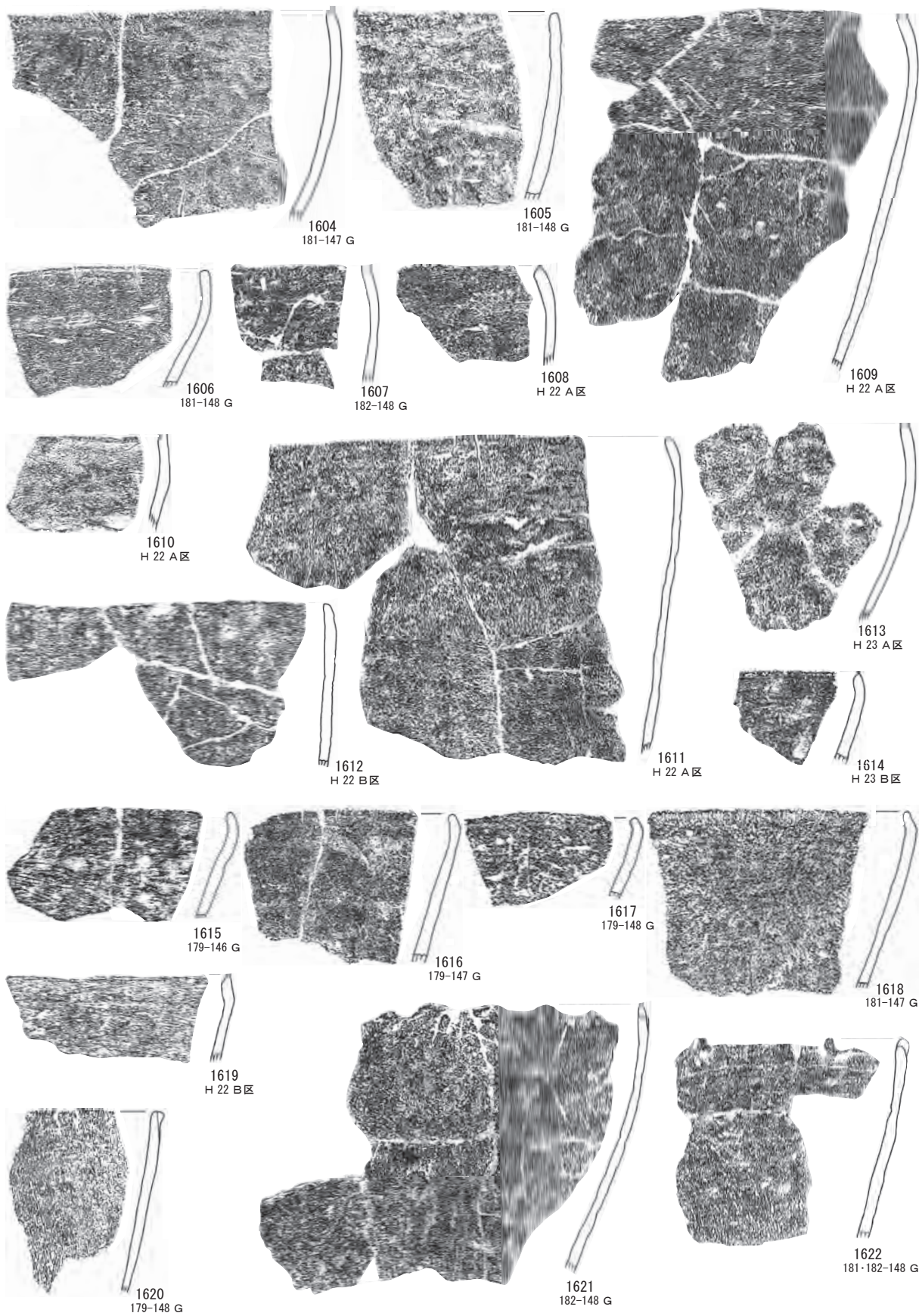
第84图 出土土器 (71)



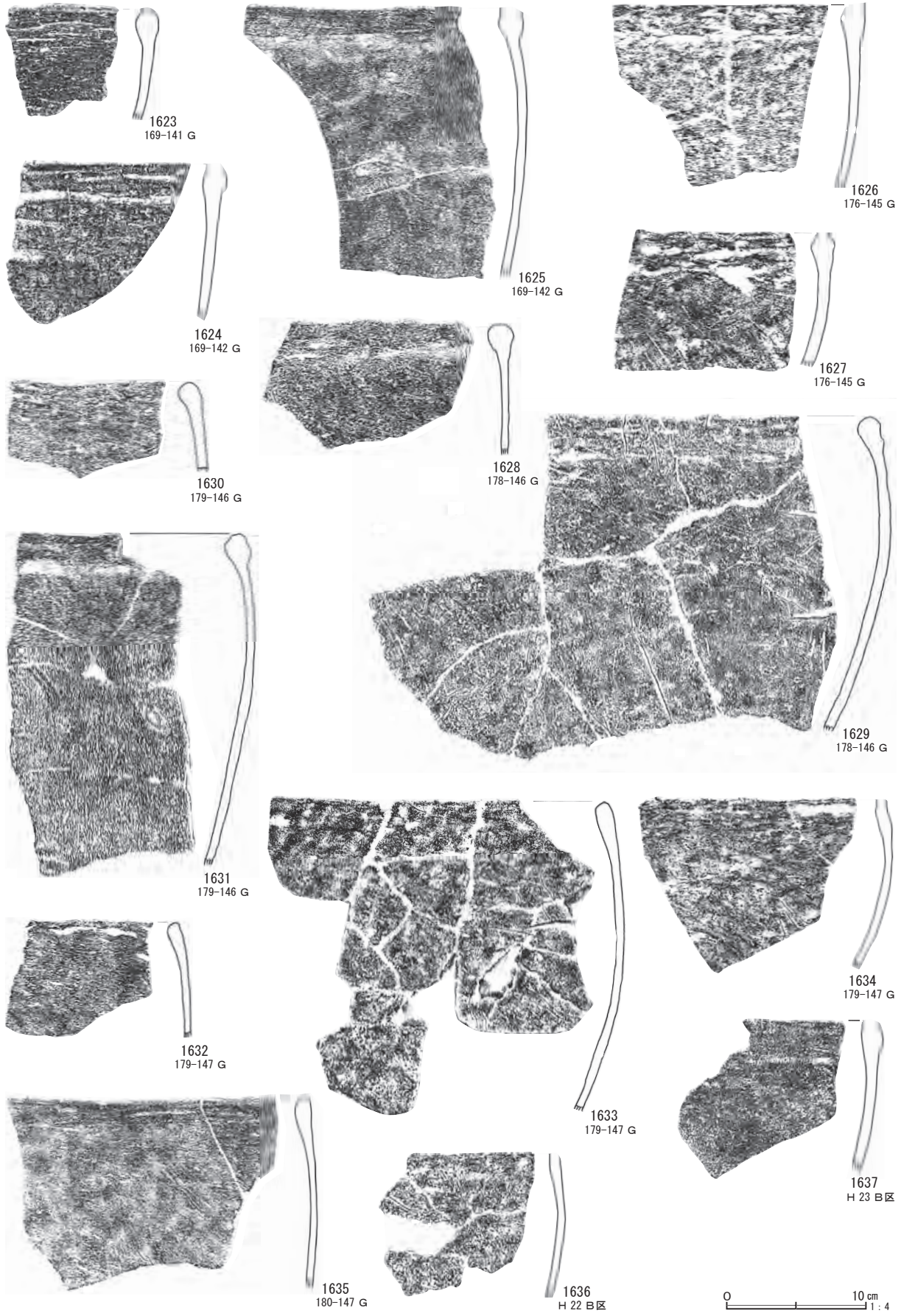
第85図 出土土器 (72)



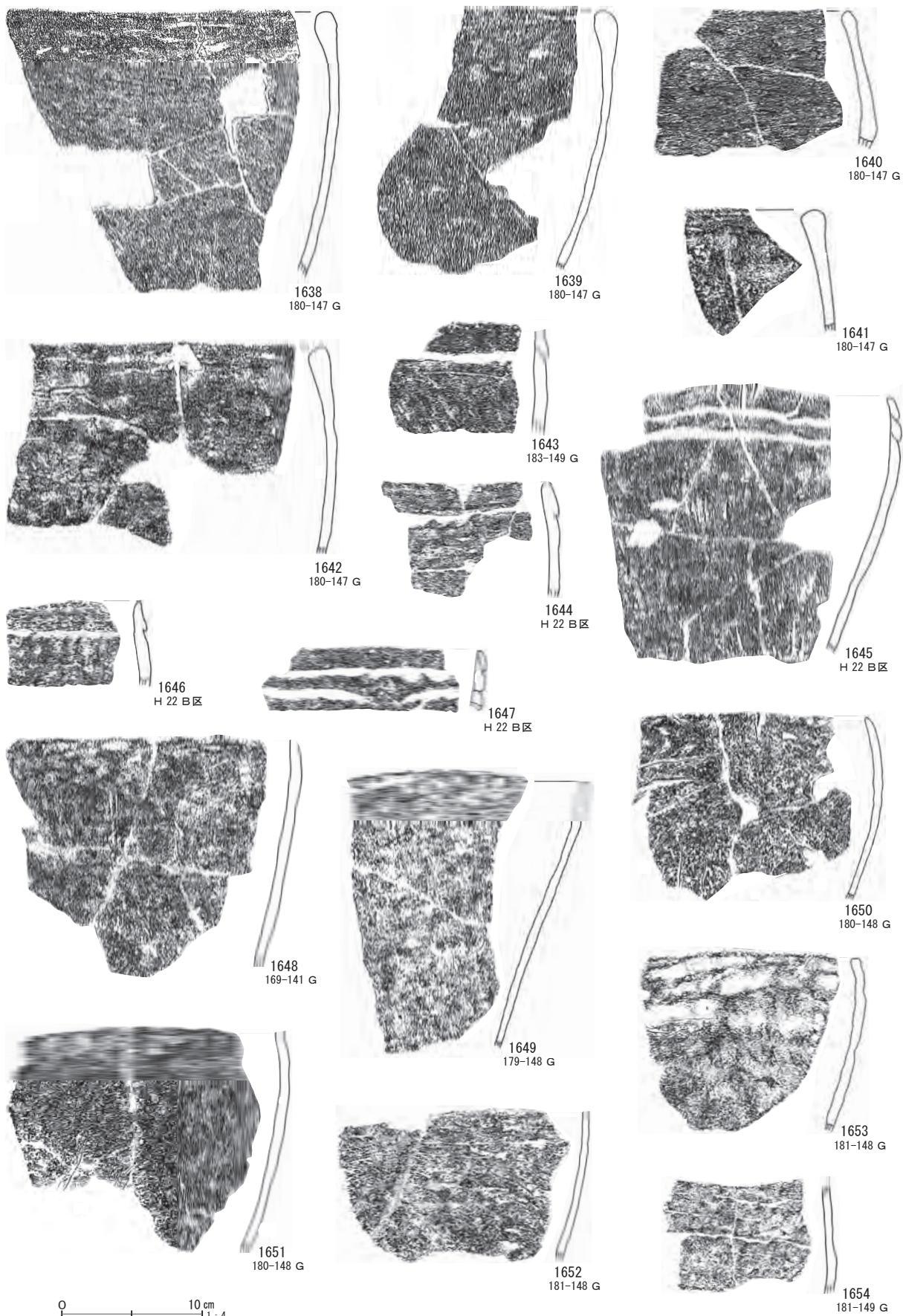
第86図 出土土器 (73)



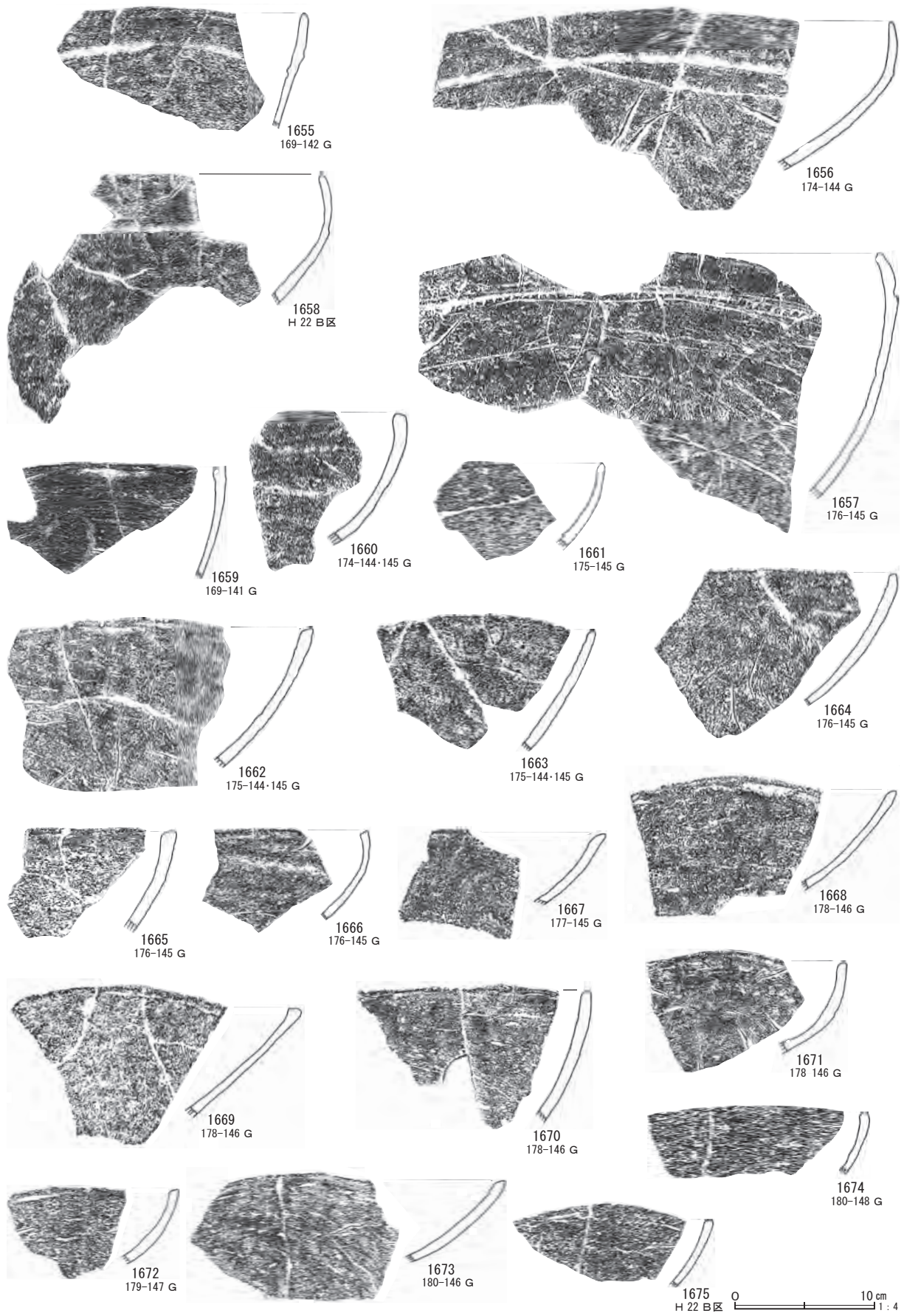
第87図 出土土器 (74)



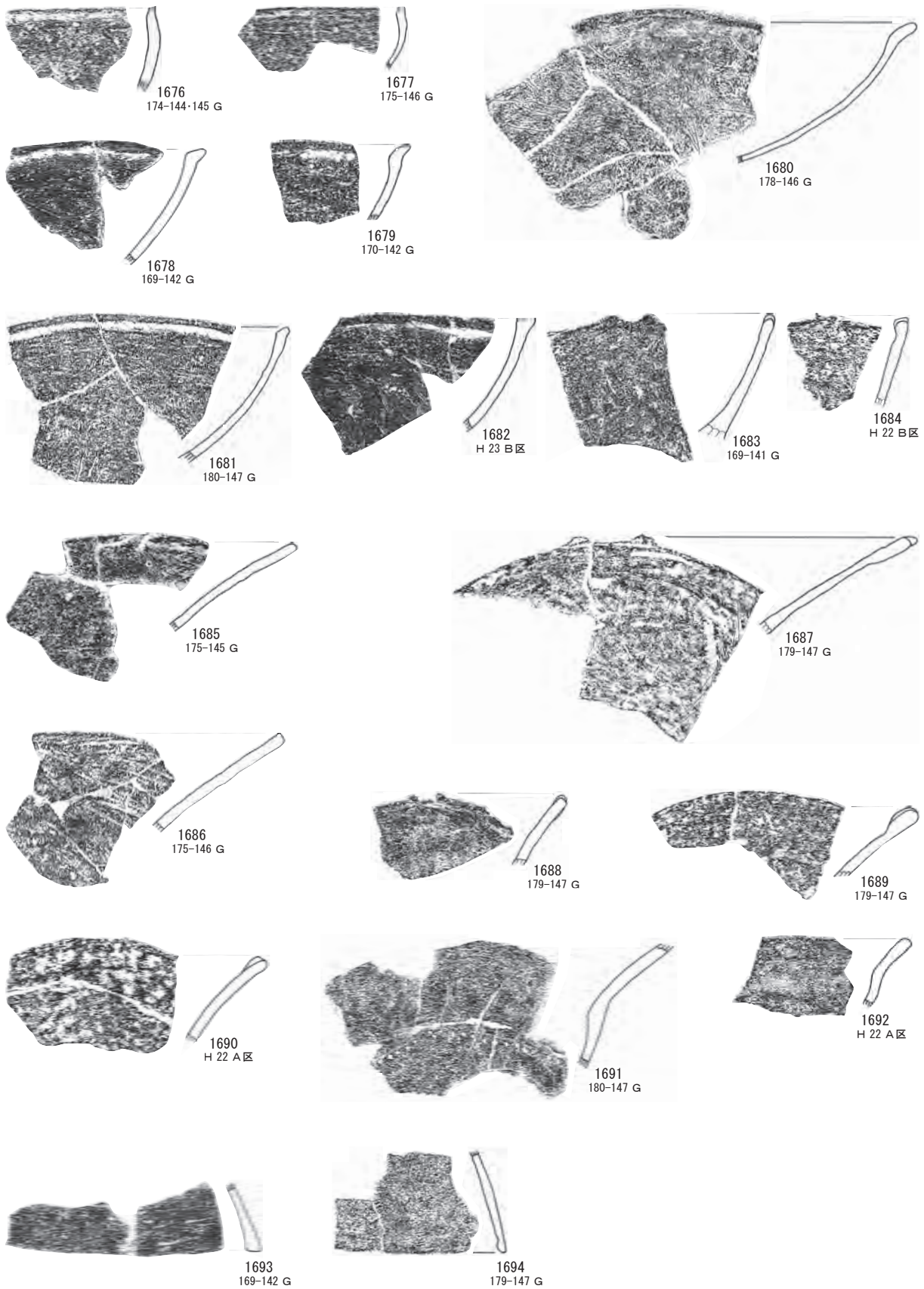
第88図 出土土器 (75)



第89図 出土土器 (76)



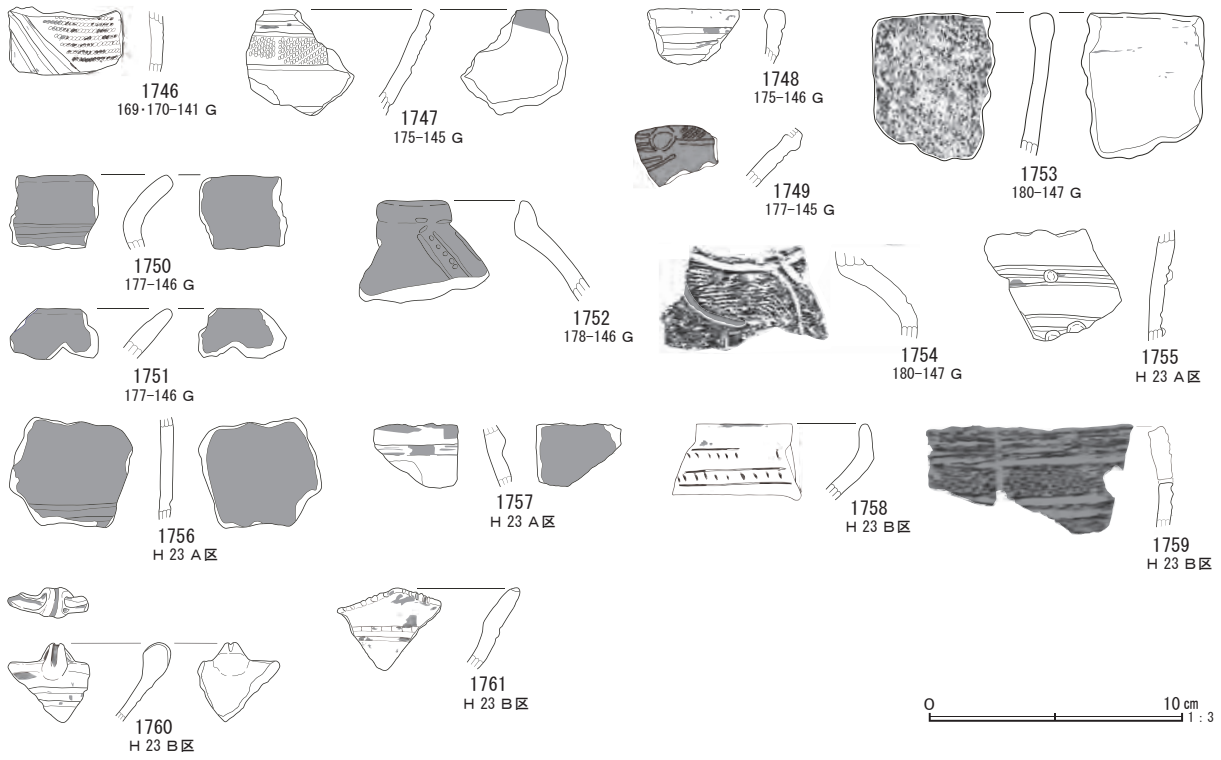
第90図 出土土器 (77)



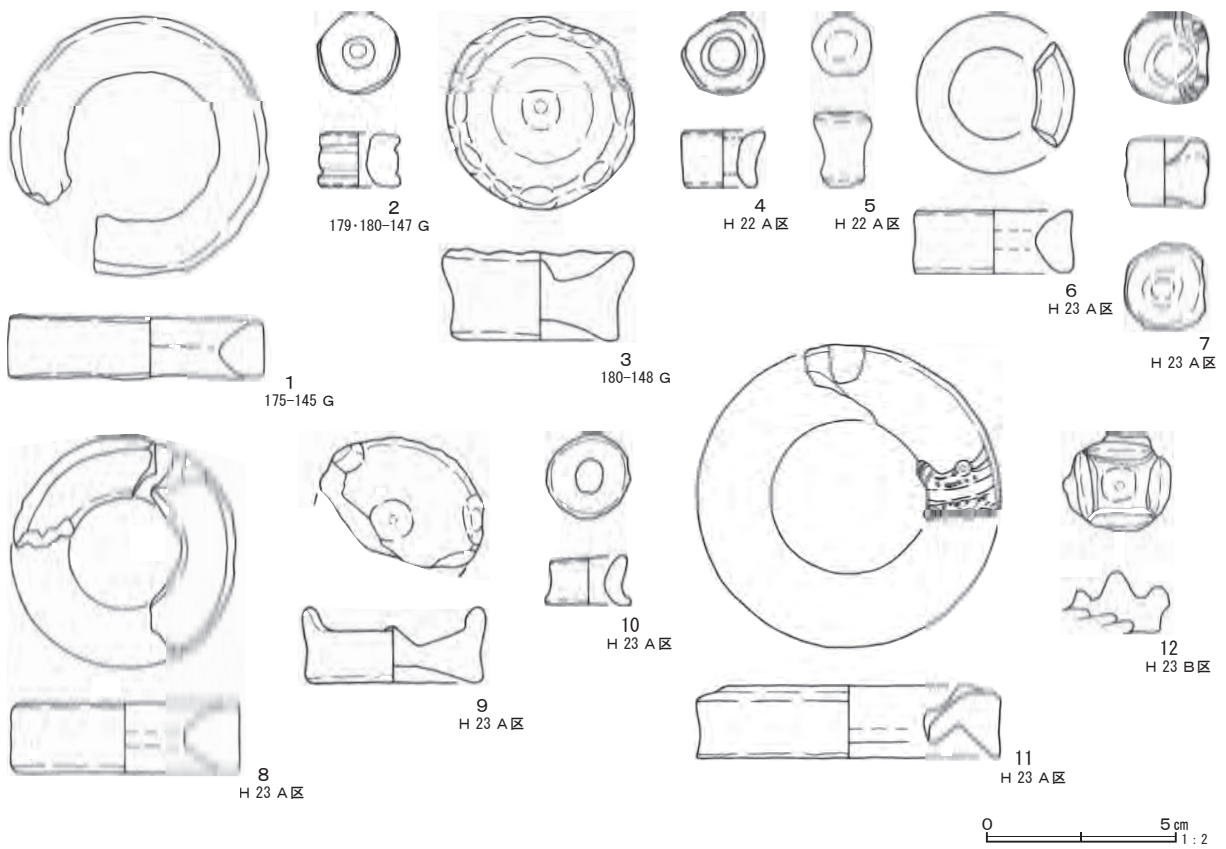
第91図 出土土器 (78)



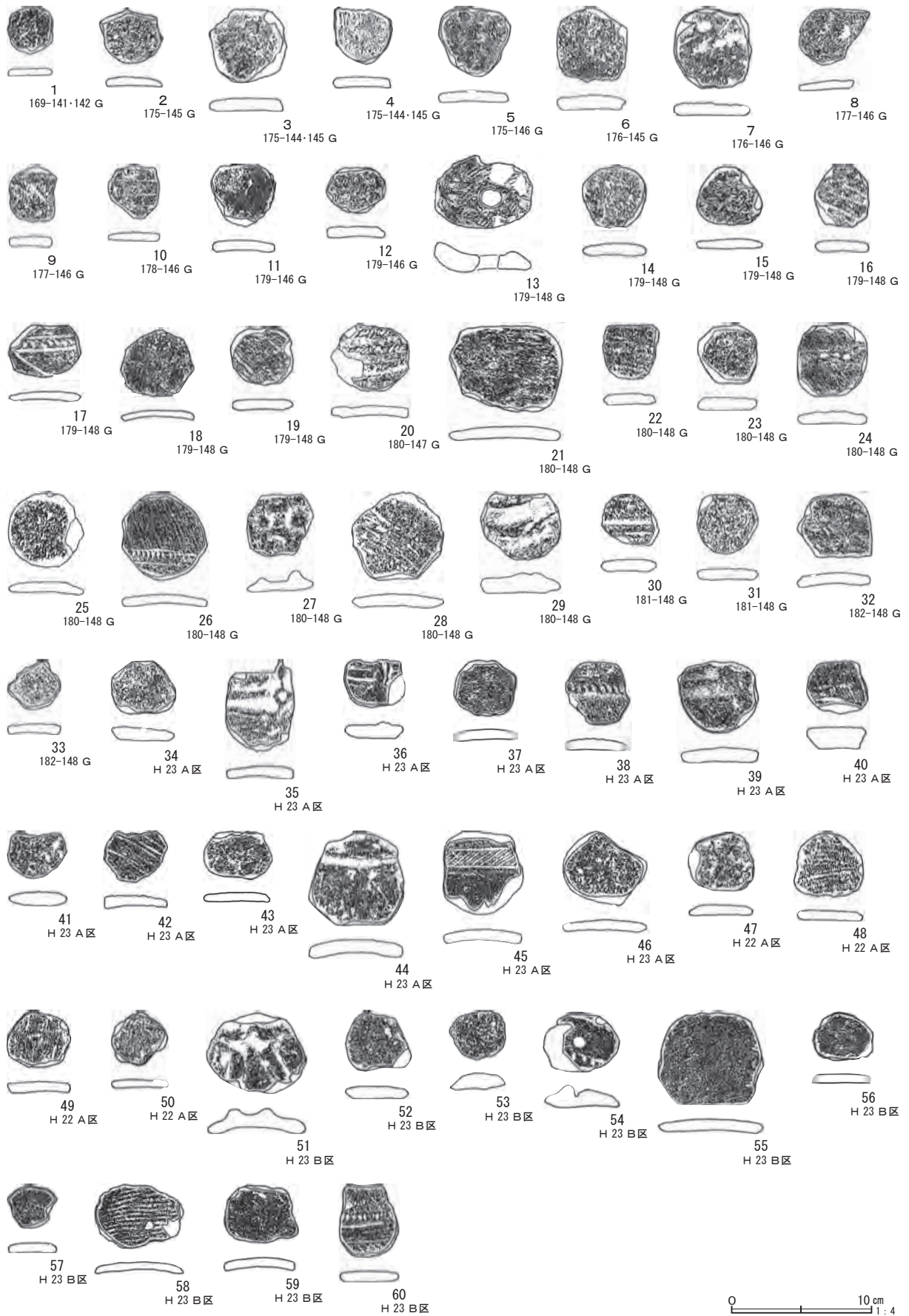
第92图 出土土器 (79)



第93図 赤彩土器



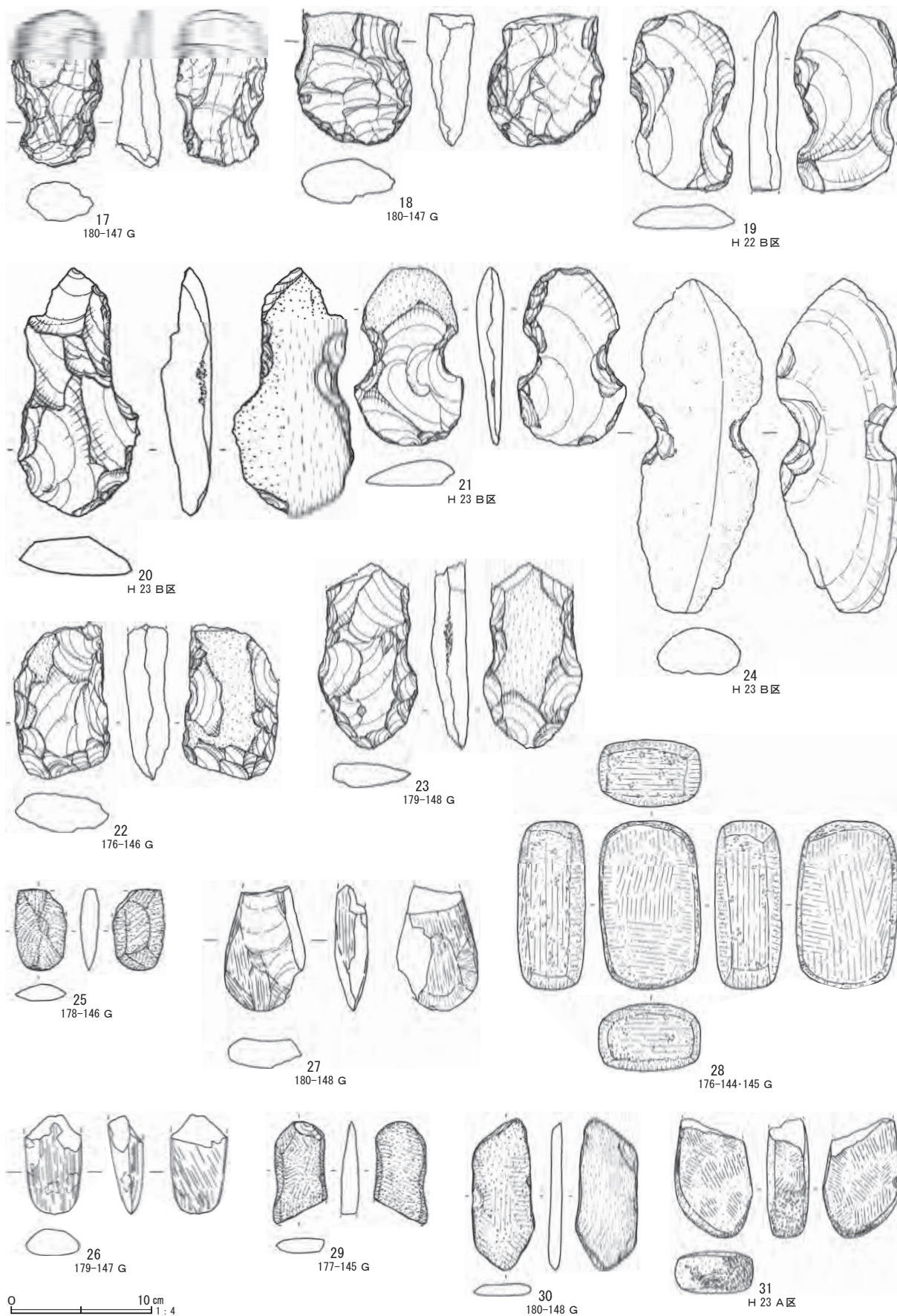
第94図 土製耳飾り



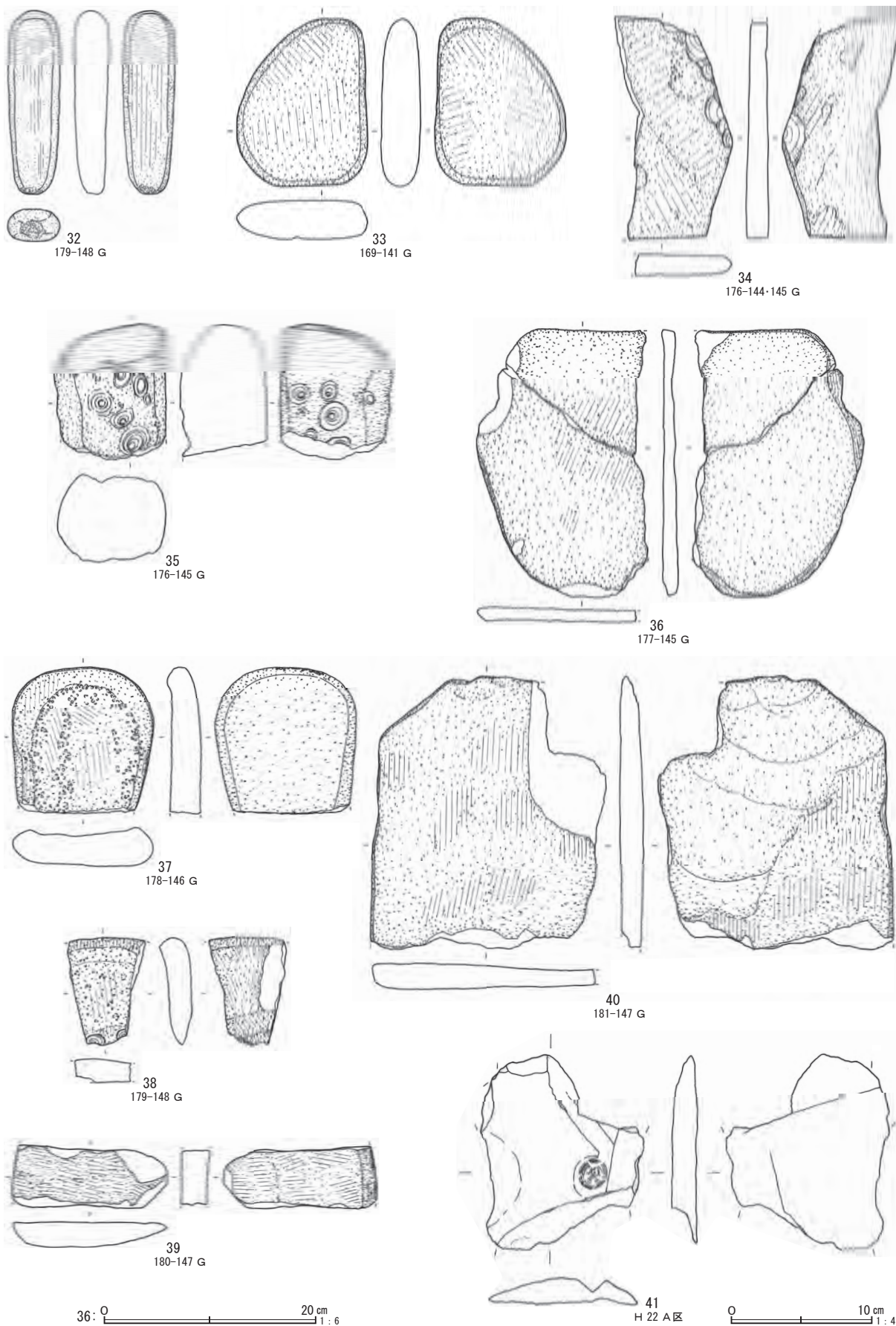
第95図 土製円盤



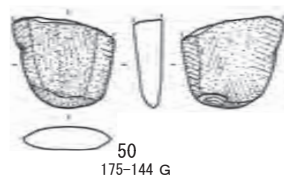
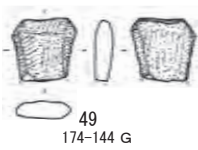
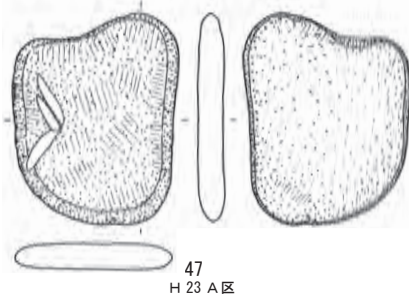
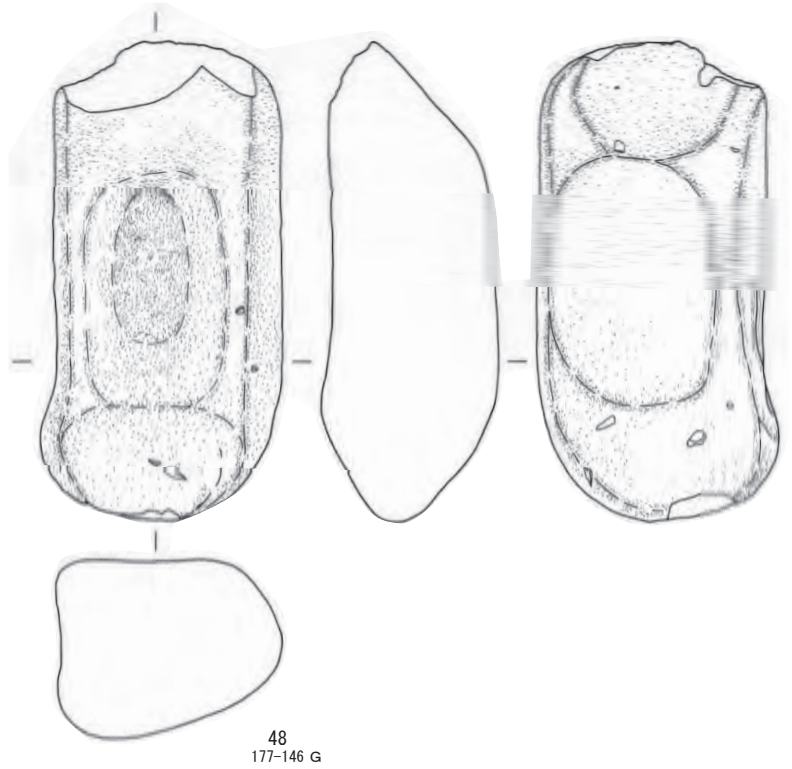
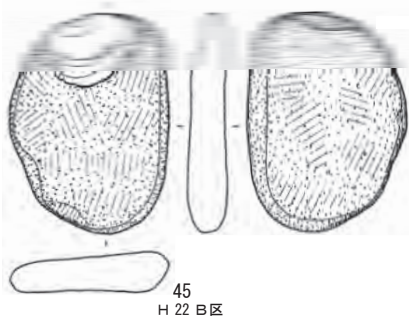
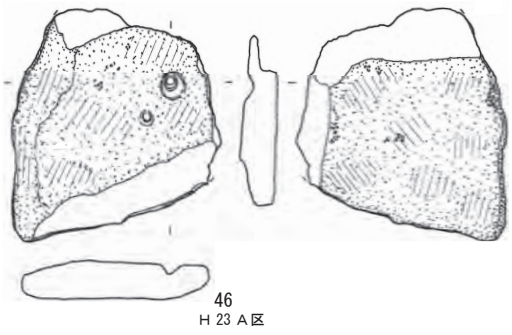
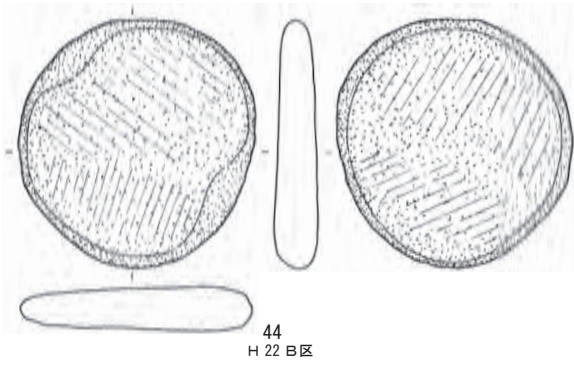
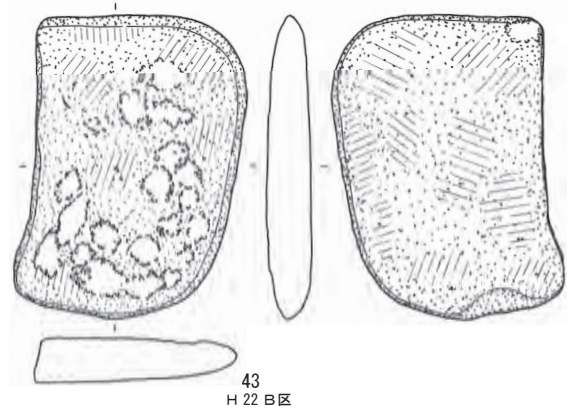
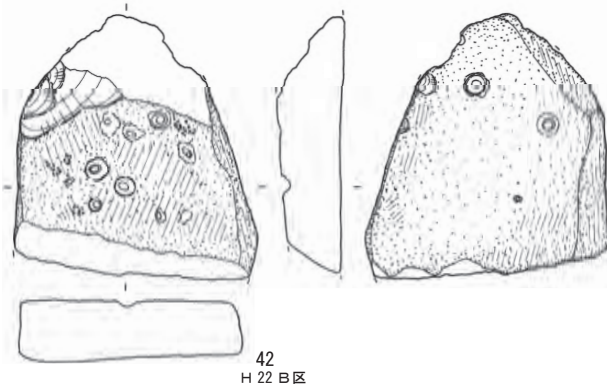
第96図 出土石器・石製品（1）



第97図 出土石器・石製品（2）



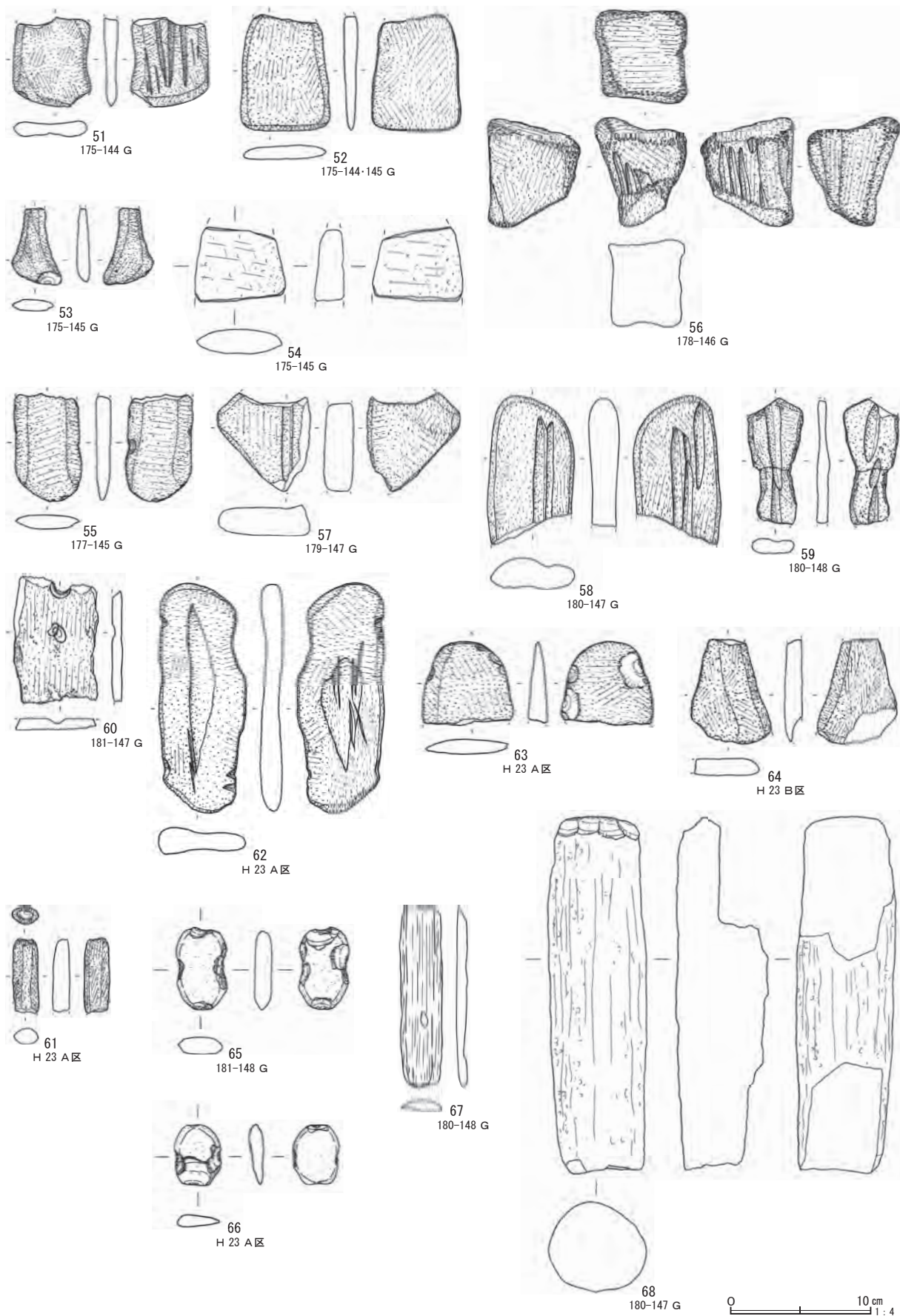
第98図 出土石器・石製品 (3)



0 10 cm 1:4

42・45 ~ 47: 0 20 cm 1:6

第99図 出土石器・石製品 (4)



第100図 出土石器・石製品 (5)

第3表 土製耳飾り観察表

No.	出土位置	種別	最大径(cm)	内径(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	175-145G	土製耳飾り	6.7	4.0	1.65	(38)	一部欠。
2	179・180-147G	土製耳飾り	2.2	0.4	1.4	7	完形。
3	180-148G	土製耳飾り	5.0	—	2.4	54	完形。
4	H22年度A区	土製耳飾り	(2.2)	0.8	1.5	(5)	一部欠。
5	H22年度A区	土製耳飾り	1.6	—	2.15	4	完形。
6	H23年度A区	土製耳飾り	(4.2)	(2.3)	1.8	(5)	大半欠。
7	H23年度A区	土製耳飾り	2.3	—	1.8	9	完形。
8	H23年度A区	土製耳飾り	(5.8)	(2.6)	1.8	(32)	1/3欠。
9	H23年度A区	土製耳飾り	(4.5)	—	(2.0)	(21)	半分欠。
10	H23年度A区	土製耳飾り	2.2	0.9	1.3	5	完形。
11	H23年度A区	土製耳飾り	(8.0)	(4.0)	(1.9)	(22)	大半欠。
12	H23年度B区	土製耳飾り	(2.8)	—	(1.6)	(6)	裏面一部欠。

第4表 土製円盤観察表

No.	出土位置	種別	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	169-141・142G	土製円盤	3.4	3.1	0.5	8	無文。
2	175-145G	土製円盤	4.5	3.8	0.6	12	無文。
3	175-144・145G	土製円盤	5.4	5.4	1.0	27	無文。
4	175-144・145G	土製円盤	4.5	4.1	0.8	16	無文。
5	175-146G	土製円盤	5.1	5.0	0.8	23	無文。
6	176-145G	土製円盤	5.6	5.0	1.1	31	無文。
7	176-146G	土製円盤	6.3	5.4	0.9	34	刺突列施文。
8	177-146G	土製円盤	5.5	3.7	0.55	13	無文。
9	177-146G	土製円盤	4.0	3.0	0.95	13	縄文施文。
10	178-146G	土製円盤	3.8	3.6	0.7	10	斜格子文施文。加曾利B式。
11	179-146G	土製円盤	4.5	4.2	0.7	17	無文。
12	179-146G	土製円盤	4.2	3.5	0.7	13	無文。
13	179-148G	土製円盤	7.1	4.6	1.2	48	縄文、幅広沈線文施文。孔有。安行1式。
14	179-148G	土製円盤	4.5	4.3	0.8	17	無文。
15	179-148G	土製円盤	4.6	4.0	0.7	14	無文。
16	179-148G	土製円盤	4.3	3.3	0.8	16	条線文施文。
17	179-148G	土製円盤	5.1	3.7	0.7	15	紐線文土器。
18	179-148G	土製円盤	5.2	4.7	0.45	15	無文。
19	179-148G	土製円盤	4.6	4.0	0.7	18	条線文施文。
20	180-147G	土製円盤	5.5	4.65	0.8	23	縄文施文、隆帯貼付。高井東式。
21	180-148G	土製円盤	8.0	6.0	0.7	53	無文。
22	180-148G	土製円盤	6.5	3.7	0.95	16	無文。
23	180-148G	土製円盤	4.55	4.05	0.9	19	無文。
24	180-148G	土製円盤	5.7	4.9	0.8	25	紐線文土器。
25	180-148G	土製円盤	5.3	4.9	0.7	22	無文。
26	180-148G	土製円盤	6.2	5.2	0.75	29	紐線文土器。
27	180-148G	土製円盤	5.25	4.05	0.8	20	突起有。加曾利B式？
28	180-148G	土製円盤	6.5	5.7	0.85	40	無文。
29	180-148G	土製円盤	5.8	4.6	1.4	38	隆帯貼付。高井東式。
30	181-148G	土製円盤	4.25	3.2	0.85	12	隆帯貼付。高井東式。
31	181-148G	土製円盤	4.4	4.2	0.85	17	無文。
32	182-148G	土製円盤	5.7	4.8	0.9	24	無文。
33	182-148G	土製円盤	3.8	3.1	0.65	10	無文。
34	H23年度A区	土製円盤	4.5	3.6	0.9	16	無文。
35	H23年度A区	土製円盤	6.65	4.8	1.9	37	突起有、隆帯貼付。高井東式。
36	H23年度A区	土製円盤	4.4	3.1	1.2	16	沈線文施文、隆帯貼付。高井東式。
37	H23年度A区	土製円盤	4.3	3.8	0.7	14	無文。
38	H23年度A区	土製円盤	4.8	4.1	0.8	13	紐線文土器。
39	H23年度A区	土製円盤	5.5	5.0	1.0	31	沈線文施文。突起欠。
40	H23年度A区	土製円盤	4.3	3.7	1.65	26	沈線文施文。
41	H23年度A区	土製円盤	4.2	3.0	1.0	13	無文。
42	H23年度A区	土製円盤	4.4	3.3	0.8	12	条線文施文。
43	H23年度A区	土製円盤	4.7	3.3	0.5	11	無文。
44	H23年度A区	土製円盤	7.2	6.2	0.9	58	突起有。高井東式。

No.	出土位置	種 別	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備 考
45	H23年度A区	土製円盤	5.9	5.5	0.8	33	沈線文、縄文施文。安行1式。
46	H23年度A区	土製円盤	6.0	4.3	0.7	24	無文。
47	H22年度A区	土製円盤	4.7	4.1	0.7	17	無文。
48	H22年度A区	土製円盤	4.7	4.1	0.7	19	条線文施文。
49	H22年度A区	土製円盤	4.5	3.9	0.7	17	無文。
50	H22年度A区	土製円盤	4.0	3.15	0.55	10	無文。
51	H23年度B区	土製円盤	7.0	5.5	0.9	54	隆帯貼付。高井東式。
52	H23年度B区	土製円盤	4.4	3.8	0.9	19	無文。
53	H23年度B区	土製円盤	3.9	3.2	1.1	11	無文。
54	H23年度B区	土製円盤	5.4	4.1	1.55	28	刻み目隆帯貼付。円形刺突有。高井東式。
55	H23年度B区	土製円盤	7.5	6.6	0.8	50	条線文施文。
56	H23年度B区	土製円盤	4.1	3.3	0.6	10	無文。
57	H23年度B区	土製円盤	3.5	2.8	0.65	8	無文
58	H23年度B区	土製円盤	6.3	4.2	0.55	22	縄文施文。安行1～2式。
59	H23年度B区	土製円盤	5.2	4.1	0.6	19	無文
60	H23年度B区	土製円盤	5.0	4.2	0.8	32	刺突列、沈線文、縄文施文。安行1式。

第5表 石器・石製品観察表

No.	出土位置	種 別	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	備 考
1	180-147G	打製石鎌	2.5	1.6	0.6	1.4	黒耀石	完形。
2	179-146G	石匙	8.6	7.3	1.2	74.8	粘板岩	完形。
3	181-147G	スクレイパー	8.7	5.5	1.8	67.8	粘板岩	完形。
4	H23年度A区	スクレイパー	8.1	3.3	0.9	30	粘板岩	完形。
5	176-144G	打製石斧	15.0	6.3	2.9	279.8	粘板岩	完形。
6	176-144G	打製石斧	(8.7)	(7.55)	(2.8)	(203.9)	粘板岩	刃部欠。
7	176-145G	打製石斧	9.25	6.9	2.95	135.4	粘板岩	完形。
8	176-145G	打製石斧	8.8	6.7	1.95	106.3	粘板岩	完形。
9	177-145G	打製石斧	11.4	7.4	2.65	271	粘板岩	完形。
10	177-145G	打製石斧	15.4	6.2	3.25	229.2	粘板岩	基部欠。
11	177-146G	打製石斧	13.1	7.1	2.4	178	粘板岩	完形。
12	179-146G	打製石斧	9.35	7.2	2.0	135.2	粘板岩	完形。
13	179-146G	打製石斧	8.35	5.2	1.2	50.5	粘板岩	完形。
14	179-147G	打製石斧	12.3	7.4	1.3	99.8	ホルンフェルス	完形。
15	179-147G	打製石斧	11.6	6.4	2.1	162.6	粘板岩	完形。
16	180-147G	打製石斧	(11.4)	7.0	2.7	(207.2)	粘板岩	刃部一部欠。
17	180-147G	打製石斧	(11.2)	(6.5)	(3.2)	(202.3)	粘板岩	刃部欠。
18	180-147G	打製石斧	(9.4)	(8.3)	(3.4)	(269.3)	粘板岩	基部欠。
19	H22年度B区	打製石斧	(12.8)	(7.6)	(2.4)	(265.2)	粘板岩	刃部欠。
20	H23年度B区	打製石斧	17.8	8.7	3.6	471.5	ホルンフェルス	完形？
21	H23年度B区	打製石斧	12.8	7.8	2.0	166.5	粘板岩	完形。
22	176-146G	打製石斧	(11.0)	(6.7)	(3.3)	(298.7)	頁岩	基部欠。
23	179-148G	打製石斧	(13.2)	(7.0)	(2.7)	(274.6)	粘板岩	基部欠。
24	H23年度B区	打製石斧	23.8	8.9	3.3	676	粘板岩	未製品？
25	178-146G	磨製石器	5.9	3.7	1.2	(27.8)	砂岩	一部欠。
26	179-147G	磨製石斧	(7.05)	(4.0)	(2.4)	(79)	凝灰岩	基部欠。
27	180-148G	磨製石斧	(8.9)	(5.7)	(2.3)	(155)	蛇紋岩	基部欠。
28	176-144・145G	磨 石	12.0	7.2	4.85	740	閃緑岩	完形。全面使用。
29	177-145G	磨 石	(7.4)	(4.0)	(1.3)	(33.2)	砂岩	片端欠。両面使用。
30	180-148G	磨 石	10.9	4.5	1.0	72.6	凝灰岩	完形。両面使用。
31	H23年度A区	磨 石	(8.4)	(5.5)	(3.0)	(252)	蛇紋岩	片端欠。全面使用。
32	179-148G	磨石・敲石	13.0	3.7	2.3	188	片岩	完形。全面使用。片端敲打痕有。
33	169-141G	石 皿	11.9	9.3	2.8	512.6	閃緑岩	完形。両面使用。
34	176-144・145G	石 皿	(16.1)	(8.4)	(1.7)	(275)	砂岩	半分？欠。両面使用。
35	176-145G	石 皿	(9.8)	(8.0)	(6.3)	(558.2)	安山岩	片端欠。両面使用。
36	177-145G	石 皿	(28.6)	(18.3)	(1.7)	(1,194.3)	雲母片岩	片側欠。片面使用。
37	178-146G	石 皿	(10.5)	(10.1)	(2.9)	(400.3)	砂岩	片端欠。片面使用。
38	179-148G	石 皿	(7.6)	(5.5)	(2.3)	(97)	砂岩	大半欠。片面使用。
39	180-147G	石 皿	(4.5)	(11.2)	(2.1)	(165.1)	緑泥片岩	大半欠。片面使用。両面使用。
40	181-147G	石 皿	(19.5)	(16.8)	(1.9)	(953.1)	緑泥片岩	大半欠。両面使用。
41	H22年度A区	石 皿	(13.95)	(11.55)	(1.9)	(331)	緑泥片岩	大半欠。片面使用。

No.	出土位置	種 別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
42	H22年度B区	石 皿	(21.1)	(19.6)	(5.5)	(3,099.5)	緑泥片岩	両端欠。両面使用。
43	H22年度B区	石 皿	16.2	12.4	2.4	830.9	凝灰岩	完形。両面使用。
44	H22年度B区	石 皿	13.3	12.5	2.3	638.6	閃緑岩	完形。両面使用。
45	H22年度B区	石 皿	17.6	12.7	3.2	(1,058.9)	閃緑岩	一部欠。両面使用。
46	H23年度A区	石 皿	(18.5)	(16.7)	(2.9)	(1,373.3)	閃緑岩	大半欠。両面使用。
47	H23年度A区	石 皿	16.9	13.4	2.1	698.6	砂岩	完形。片面使用。
48	177-146G	台 石	(15.5)	(12.9)	(9.8)	(4,800)	砂岩	片端欠。片面使用。
49	174-144G	砥 石	(3.4)	(3.5)	(1.0)	(10.5)	砂岩	片端欠。両面使用。
50	175-144G	砥 石	(4.9)	(5.5)	(1.5)	(35.8)	凝灰岩	片端欠。両面使用。
51	175-144G	砥 石	(6.5)	(5.6)	(1.1)	(40.6)	凝灰岩	片端欠。両面使用。
52	175-144・145G	砥 石	(8.4)	(6.4)	(1.2)	(69.6)	凝灰岩	片端欠。両面使用。
53	175-145G	砥 石	(5.6)	(3.6)	(1.0)	(13.6)	凝灰岩	片端欠。両面使用。
54	175-145G	砥 石	(5.25)	(6.4)	(2.1)	(32)	軽石	両端欠。両面使用。
55	177-145G	砥 石	(7.8)	(4.9)	(1.2)	(47.4)	砂岩	片端欠。両面使用。
56	178-146G	砥 石	7.8	6.7	6.4	291.6	砂岩	完形。全面使用。
57	179-147G	砥 石	(7.1)	(6.7)	(2.3)	(110.7)	砂岩	大半欠。両面使用。
58	180-147G	砥 石	(10.7)	(6.2)	(2.3)	(165.9)	砂岩	片端欠。両面使用。
59	180-148G	砥 石	(9.1)	(4.1)	(1.2)	(38.9)	砂岩	両端欠。両面使用。
60	181-147G	砥 石	(9.1)	(6.1)	(0.8)	(74.5)	緑泥片岩	両端欠。両面使用。
61	H23年度A区	砥 石	(5.5)	(2.0)	(1.3)	(13.7)	砂岩	片端欠。両面使用。
62	H23年度A区	砥 石	16.4	6.3	1.9	228.1	花崗岩	完形。両面使用。
63	H23年度A区	砥 石	(6.0)	(6.7)	(1.5)	(54.3)	凝灰岩	片端欠。両面使用。
64	H23年度B区	砥 石	(7.5)	(5.8)	(1.4)	(55.4)	凝灰岩	両端欠。両面使用。
65	181-148G	石 錘	5.8	3.5	1.2	3.7	砂岩	完形。
66	H23年度A区	石 錘	4.3	3.3	1.0	18	粘板岩	完形。
67	180-148G	磨製石剣?	(12.75)	(3.0)	(1.0)	(52)	粘板岩	半分欠。
68	180-147G	石 棒	(25.2)	(7.1)	(6.4)	(1,665)	雲母片岩	所々欠。

V 調査のまとめ

中西遺跡は、縄文時代後・晩期から弥生時代中期後半、古墳時代前期、奈良・平安時代まで続く複合遺跡である。本調査地点の成果のうち、遺構と遺構出土遺物、そして、縄文時代後・晩期の土偶については報告済みであり、今回は縄文時代後・晩期の遺物包含層と出土遺物について報告した二分冊目となる。

調査のまとめとして、ここでは、まず本報告分の縄文時代後・晩期遺物包含層と出土遺物について総括し、次に遺物包含層と報告済の遺構・土偶との関係について検討し、最後に周辺遺跡との関係について簡単に述べてみたい。

縄文時代後・晩期遺物包含層と出土遺物について

本報告における縄文時代は、出土土器から後期中葉の加曾利B式を出現期として、後期後葉の高井東式、後期後葉～末の安行1・2式、晩期初頭～中葉の安行3a～3d式まで絶え間なく続くことが判明した。今回報告する遺物包含層は、第三章でも述べたとおり、平成22年度B区の調査に制約があったが、主に遺構が分布する箇所以外で確認されている。

遺物包含層の各時期の出土状況については、精製土器を中心に見ていくと、まず出現期となる後期中葉の加曾利B式期は、遺物包含層が確認された箇所ほぼ全面から多数出土している。このうち、調査区中央からやや南西の177・178-145・146グリッド付近が最も多く出土している。土器は、全時期通してみられる深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器の他に、異形台付土器や香炉形土器などの特殊土器も出土しており、当期と思われる粗製土器も含め、器種・出土量ともに最も多く出土している。出土位置は、深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器がほぼ全面で出土しているが、注口土器と特殊土器は、出土位置が限定される。これらの土器は、加曾利B式でも最も新しいB3式が多いが、B2式も若干みられることから出現期は、加曾利B2式期とみて良いであろう。

後期後葉の高井東式期も遺物包含層ほぼ全面から土器が出土しているが、調査区南西の179・180-147グリッド付近での出土が最も多く、中心が加曾利B式期からやや南西に移る。器種は、深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器があり、数が少ないことにも拠るが、注口土器のみ出土位置が限定される。なお、土製円盤は、計60点中、無文のものが約半分あり、有文のものは少ない。しかし、時期の分かるものは、年度別の一括も含め、当期のものが多く出土しており、精製土器出土位置の中心と概ね合致する。当期の出土数は、土製円盤や粗製土器を含めても加曾利B式期に比べると減少する。

縄文時代後期後葉～末の安行1・2式も遺物包含層ほぼ全面から出土しているが、高井東式期と同じく、調査区南西の179-181-147・148グリッド付近での出土が多い。器種は、深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器があり、深鉢形土器はほぼ全面から出土しているが、鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器は、調査区南西での出土が多い。当期の出土数は、土製円盤や粗製土器を含めても高井東式期よりさらに減少する。

縄文時代晩期初頭～中葉の安行3a～3d式期は、出土数自体少ないが、調査区ほぼ中央の175-144グリッド付近と南西の181・182-148グリッド付近で確認されている。器種は、深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、注口土器があり、深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器は、両グリッド付近から出土しているが、注口土器は、南西端の182-148・149グリッドに限定される。当期の出土数は、粗製土器を含め

でも、後期安行式よりさらに減少する。

以上、本報告における縄文時代後・晩期遺物包含層の各時期の様相について簡単に述べた。出現期となる加曾利B式期は、B2式期から小規模に始まり、B3式期に最盛期を迎えるが、高井東式期以降は徐々に減少していき、晩期安行3d式期をもって終息することが確認された。ただし、このことは、遺跡全体に当てはまることなのか、または本調査地点のみのことなのか、今後の課題となる。

縄文時代後・晩期の遺構・土偶との関係について

本調査地点で検出された縄文時代後・晩期の遺構は、竪穴建物跡が3軒（第1～3号）、溝跡が2条（第2・3号）、土坑が7基（第3～8・11号）である（第5図：熊谷市教育委員会2018）。これらの遺構については報告済みであり、溝跡2条と土坑の一部（第7・8・11号）は時期が特定されているが、その他は時期にやや幅を持たせている。従って、ここでは、竪穴建物跡3軒と土坑4基（第3～6号）について遺物包含層と照らし合わせて、その時期を検討してみたい。

検出された竪穴建物跡の時期は、すべて「縄文時代後期後半～晩期前半」と報告されている。

第1号竪穴建物跡は、調査区南西端の182・183-149・150グリッドに位置する。本建物跡の北側では、遺物が密に分布する包含層が確認されており、精製土器は高井東式と後・晩期安行式、粗製土器は第1・7・9・11群土器が出土している。本建物跡は、数少ない出土土器に「縄文時代後期後半～晩期前半」のものがあるが、遺物包含層出土土器の時期別による出土状況や本建物跡の平面プランが隅丸長方形を呈することなどを考慮すると、本建物跡の時期は、安行2～3a式期と考えるのが妥当と思われる。

第2号竪穴建物跡は、調査区南西の180・181-149・150グリッドに位置する。本建物跡も北側に遺物包含層があり、精製土器は加曾利B式から晩期安行式まで、粗製土器もほぼ全群が出土している。また、本建物跡出土土器も加曾利B式以外、全時期検出されていることから時期の特定は困難なように思われる。しかし、遺物包含層出土土器の時期別による出土状況、そして、何よりも第1号竪穴建物跡の西側約5mに軸を揃えて同規模に構築されていることを重視すると、本建物跡の時期は、第1号竪穴建物跡と同じく、安行2～3a式期と考えて良いのではないか。

第3号竪穴建物跡は、調査区中央からやや南西の177・178-146・147グリッドに位置する。本建物跡は、主に北側を囲むように遺物包含層が確認されており、精製土器は加曾利B式から後期安行式まで、粗製土器は第1・5・7～9・12群土器が出土している。また、本建物跡出土遺物も加曾利B式から晩期安行式まで出土しているが、出土数としては、遺物包含層が加曾利B式、本建物跡は加曾利B式及び高井東式が多い。本建物跡の時期については、平面プランが不整楕円形を呈し、軸も含めて第1・2号竪穴建物跡と異なること、また出土土器の割合などから加曾利B式～高井東式期としておきたい。なお、本建物跡は、その形状や付属施設の内容などから竪穴状遺構とした方が良いかもしれない。

検出された土坑のうち、第3～6号については、「縄文時代後期後半以降」と報告されている。すべて調査区南西に位置しており、第2号竪穴建物跡と重複している。

第3号土坑は、調査区南西の181-149グリッドに位置する。第2号竪穴建物跡と重複しており、土層断面の観察から本土坑が新しいことが判明している。当グリッドの遺物包含層からは、精製土器が高井東式と後期安行式、粗製土器は第1・8・11群土器が出土しており、本土坑からは高井東式～後期安行式の粗製土器が出土している。出土土器は、高井東式と後期安行式が目立つが、遺物包含層出土粗製土

器には、晩期安行式期と思われる第1群土器⑥や第11群土器が出土している。これらと重複する第2号竪穴建物跡が安行2～3 a式期であることを基準に考慮すると、本土坑の時期は、晩期安行3 a式以降と考えるのが妥当と思われる。

第4号土坑も調査区南西の181-149グリッドに位置する。第3号土坑と同じく、第2号竪穴建物跡と重複し、本土坑が新しいことが判明している。遺物包含層出土遺物は、第3号土坑と同じであるが、本土坑では遺物が出土していない。本土坑の時期は、遺物包含層出土土器に晩期安行式と思われる粗製土器があることや第2号竪穴建物跡より新しいことを考慮して、第3号土坑と同じく、晩期安行3 a式以降としたい。

第5号土坑は、調査区南西の180-149・150グリッドに位置する。本土坑も第2号竪穴建物跡と重複し、本土坑が新しいことが判明している。遺物包含層は周囲に見られず、また本土坑も第4号土坑と同じく、遺物が出土していない。本土坑の時期も第3・4号土坑と同じく、第2号竪穴建物跡との重複関係を考慮して晩期安行3 a式以降としたい。

第6号土坑は、調査区南西の180・181-149グリッドに位置する。本土坑も第2号竪穴建物跡と重複し、本土坑が新しいことが判明している。第5号土坑と同じく、遺物包含層は周囲で確認されていないが、本土坑からは高井東式～後期安行式が出土している。出土土器の時期とは合わないが、本土坑の時期も他と同じく、第2号竪穴建物跡との重複関係から晩期安行3 a式以降としたい。

次に遺物包含層と土偶の関係について述べる。詳細については、報告済であることから、ここでは土偶の出土位置とその時期を遺物包含層に照らし合わせてみたい。

土偶は、遺構と遺物包含層を含め、計51点が出土しており、時期が特定できるものは49点である。縄文時代後期中葉から晩期中葉まで段階的に確認されており、遺物包含層出土土器の時期と合致する。時期別では、加曽利B式期が10点、高井東式期が34点、後期末が2点、晩期安行3 a式期が1点、3 d式期が2点あり、高井東式期が最も多く出土している。

出土位置は、7点が遺構出土、5点が年度別の一括、その他の39点が遺物包含層出土である。遺構出土のものは、第3号竪穴建物跡出土の3点と第7号土坑出土の1点以外は、他の時代の遺構から出土している。遺物包含層出土は、加曽利B式期が9点である。遺物包含層が確認されたほぼ全面から出土しているが、調査区中央の175-146グリッドで3点と多く出土している。当グリッドは、加曽利B式精製土器出土位置の中心ではないが、出土範囲と重なる。最も多く検出されている高井東式期は26点である。調査区中央から南西端までの遺物包含層ほぼ全面から出土しているが、特に178-146グリッドで3点、179-147グリッドで4点、182-148グリッドで5点出土している。これらのグリッドのうち、前二者は精製土器出土位置のほぼ中心、後者はその周辺と重なる。後期末は2点あり、調査区中央の175-146グリッドと南西の180-147グリッドから出土している。いずれも後期安行式精製土器出土位置の中心ではないが、出土範囲と重なる。晩期安行3 a式期は1点のみであり、調査区南西の181-149グリッドから出土している。出土位置は、当期の精製土器と重ならないが、すぐ北のグリッドで出土していることから単独出土とは言いがたい。晩期安行3 d式期も1点のみ調査区北東から出土しているが、これについては他と異なり、単独出土である。土偶の出土位置については、加曽利B式から晩期安行3 a式期までは、概ね精製土器と重なるが、晩期安行3 d式期のみ単独で出土している状況が読み取れた。

本遺跡の縄文時代後・晩期は、土器は加曾利B式期、土偶は高井東式期が最も多く出土しているが、遺構としては後・晩期安行式期が目立つ。ただし、遺物包含層と同じく、このことが遺跡全体に当てはまることなのか、または本調査地点のみのことなのか、今後の課題としたい。

周辺遺跡との関係について

第Ⅱ章でも述べたとおり、縄文時代後期以降の遺跡は、低地でも確認されるようになる。市内では、後期初頭の称名寺式期から遺跡が確認されているが、本遺跡と同時期で距離的に最も近い遺跡に諏訪木遺跡と古宮遺跡がある。

諏訪木遺跡は、本遺跡の東約1kmに位置する。縄文時代の遺構・遺物は、主に遺跡範囲北側で確認されている。時期は、本遺跡と同じく、後期中葉の加曾利B式期から晩期中葉の安行3d式期までである(熊谷市遺跡調査会2001)(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002・2007)。後期後葉の高井東式期までは、遺構の存在は明確でなく、遺物包含層が中心となるが、後期安行1式期から遺構が確認されている。そして、晩期の安行3a式期に集落の最盛期を迎えるが、徐々に衰退し、安行3d式期には終息する。なお、諏訪木遺跡と中西遺跡の間には、弥生時代を中心とした大規模な集落である前中西遺跡が位置する。遺跡範囲南東部では、高井東式の精製深鉢形土器が1点のみ出土しているが、この土器は後世の遺構から出土したものであり、前中西遺跡では縄文時代の遺構は皆無である。このことを考慮すると、諏訪木遺跡と中西遺跡は、約1kmと近い距離にあるが、別々の遺跡であることは間違いない。

古宮遺跡は、本遺跡の北東約2.5kmに位置し、縄文時代晩期前葉～中葉に限定された遺物包含層が確認されている(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2004)。土器は、安行3b式から3d式までの短期間に収まり、このうち3c式が最も多く検出されており、群馬県域に分布する天神原式土器も検出されている。縄文時代晩期でも前葉～中葉に限定される遺跡は、非常に稀有な存在と言える。

中西遺跡と諏訪木遺跡は、規模に違いがあると思われるが、継続期間は同じであり、ともに晩期中葉安行3d式期には終息する。古宮遺跡は、晩期前葉に出現するが、上記二遺跡と同じく、晩期中葉には終息してしまう。本遺跡周辺では、縄文時代後期中葉に初めて人々の暮らした痕跡が認められるが、晩期後葉以降は途絶えてしまい、再びその痕跡が確認されるようになるのは、本格的な稲作が展開される弥生時代中期中葉を待つこととなる。

以上、紙数に限りもあるため、簡単に述べた。本遺跡の報告については、発掘調査終了から6年もの年月を費やしてしまった。十分な報告が出来たとは言い難いが、本書が今後、熊谷市の埋蔵文化財資料として活用していただけたら幸いである。

引用・参考文献

- 関東弥生文化研究会・埼玉弥生土器観会 2014 『考古学リーダー 熊谷市前中西遺跡を語る～弥生時代の大規模集落～』
六一書房
- 熊谷市遺跡調査会 2001 『諏訪木遺跡』
2013 『上之古墳群・諏訪木遺跡』
2016 『前中西遺跡X』
- 熊谷市教育委員会 1979 『中条条里遺跡調査報告書I』

- 1983 『めづか』
- 1999 『横間栗遺跡』
- 2002 『前中西遺跡Ⅱ』
- 2003 『前中西遺跡Ⅲ』
- 2007 『諏訪木遺跡Ⅱ・上之古墳群第2号墳』
- 2008 『藤之宮遺跡』
- 2009 『前中西遺跡Ⅳ』
- 2010 『西城切通遺跡』
- 2010 『前中西遺跡Ⅴ』
- 2011 『前中西遺跡Ⅵ』
- 2012 『前中西遺跡Ⅶ』
- 2013 『前中西遺跡 西別府館跡 王子西遺跡 立野遺跡』
- 2013 『前中西遺跡Ⅷ』
- 2016 『前中西遺跡Ⅹ』
- 2017 『諏訪木遺跡Ⅲ』
- 2018 『中西遺跡Ⅰ』
- 2018 『前中西遺跡Ⅺ』
- 熊谷市前中西遺跡調査会 1999 『前中西遺跡』
- 2014 『前中西遺跡Ⅸ』
- 埼玉県遺跡調査会 1971 『横塚山古墳』
- 埼玉県教育委員会 1984 『池守・池上』
- 1988 『埼玉の中世城館跡』
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982 『池上西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第21集
- 1991 『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
- 1993 『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集
- 2002 『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第278集
- 2002 『池上／諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集
- 2003 『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集
- 2004 『北島Ⅷ／田谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第292集
- 2004 『古宮／中条条里／上河原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第298集
- 2007 『諏訪木遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第336集
- 2008 『諏訪木遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第351集
- 埼玉考古学会 2003 『埼玉考古学会シンポジウム 北島式土器とその時代－弥生時代の新展開－』埼玉考古別冊7

写 真 图 版



調査区全景（北東から H22年度A区）



調査区全景（上が北西 H23年度調査）



調査区全景（南西から H22年度A区）



調査区遠景（北東方向 H23年度調査）



調査区遠景（南西方向 H23年度調査）

図版 2



調査区全景（上が北西 H23年度B区）



調査区全景（南西から H24年度調査）



調査区全景（南西から H22年度B区）



調査区全景（上が北西 H23年度A区）



177～181-145～148G遺物
出土状況（H22年度A区）



180-148G付近遺物出土状況
（H22年度A区）



181-148・149G遺物出土状況
（H22年度A区）

図版 4



178-146G遺物出土状況
(H22年度A区)



175・176-146・147G遺物
出土状況 (H22年度B区)



176-144・145G遺物出土状
況 (1) (H22年度B区)



176-144・145G遺物出土状況(2)(H22年度B区)



181・182-148・149G遺物出土状況(H23年度A区)



169・170-141・142G遺物出土状況(H23年度B区)

图版 6



176-145 GNo.65出土状况 (H22年度 B区)



176-145 GNo.178出土状况 (H22年度 B区)



176-145 GNo.66出土状况 (H22年度 B区)



178-145 GNo.229出土状况 (H22年度 A区)



180-148 GNo.81出土状况 (H22年度 A区)



181-148 GNo.251出土状况 (H22年度 A区)



180-148 GNo.139出土状况 (H22年度 A区)



178-148 GNo.297出土状况 (H22年度 A区)



出土土器 (1) 第14图1



出土土器 (1) 第14图5



出土土器 (1) 第14图2



出土土器 (1) 第14图7



出土土器 (1) 第14图3



出土土器 (1) 第14图8



出土土器 (1) 第14图4

图版 8



出土土器 (1) 第14图9



出土土器 (2) 第15图12



出土土器 (1) 第14图10



出土土器 (2) 第15图13



出土土器 (1) 第14图11



出土土器 (2) 第15图14



出土土器 (2) 第15图15



出土土器 (2) 第15图18



出土土器 (2) 第15图16



出土土器 (2) 第15图19

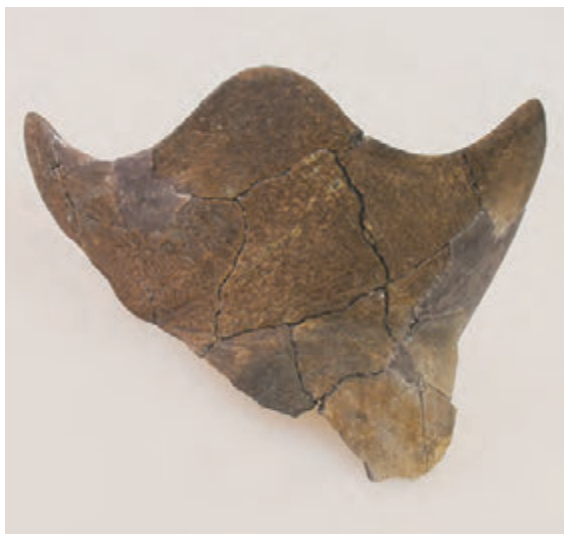


出土土器 (2) 第15图17



出土土器 (2) 第15图20

图版 10



出土土器 (2) 第15图21



出土土器 (3) 第16图25



出土土器 (2) 第15图23



出土土器 (3) 第16图26



出土土器 (3) 第16图24



出土土器 (3) 第16图28



出土土器 (3) 第16图29



出土土器 (3) 第16图32



出土土器 (3) 第16图30



出土土器 (3) 第16图34



出土土器 (3) 第16图31



出土土器 (3) 第16图35



出土土器 (4) 第17图36

图版 12



出土土器 (4) 第17图37



出土土器 (4) 第17图41



出土土器 (4) 第17图38



出土土器 (4) 第17图42



出土土器 (4) 第17图39



出土土器 (4) 第17图43



出土土器 (4) 第17图40



出土土器 (4) 第17图44



出土土器 (4) 第17图45



出土土器 (5) 第18图49



出土土器 (4) 第17图46



出土土器 (5) 第18图50



出土土器 (5) 第18图47



出土土器 (5) 第18图52



出土土器 (5) 第18图48



出土土器 (5) 第18图53

图版 14



出土土器 (5) 第18图54



出土土器 (5) 第18图58



出土土器 (5) 第18图55



出土土器 (5) 第18图59



出土土器 (5) 第18图56



出土土器 (5) 第18图62



出土土器 (5) 第18图57



出土土器 (5) 第18图63



出土土器 (5) 第18図64



出土土器 (5) 第18図67



出土土器 (5) 第18図65



出土土器 (5) 第18図67裏



出土土器 (5) 第18図66



出土土器 (5) 第18図68



出土土器 (5) 第18図66裏



出土土器 (5) 第18図69

图版 16



出土土器 (6) 第19图72



出土土器 (6) 第19图75



出土土器 (6) 第19图76



出土土器 (6) 第19图73



出土土器 (6) 第19图77



出土土器 (6) 第19图74



出土土器 (6) 第19图78



出土土器 (6) 第19图79



出土土器 (7) 第20图82



出土土器 (6) 第19图80



出土土器 (7) 第20图83



出土土器 (7) 第20图84



出土土器 (7) 第20图81



出土土器 (7) 第20图85

图版 18



出土土器 (7) 第20图86



出土土器 (7) 第20图89



出土土器 (7) 第20图87



出土土器 (7) 第20图90



出土土器 (7) 第20图88



出土土器 (8) 第21图91



出土土器 (8) 第21图93



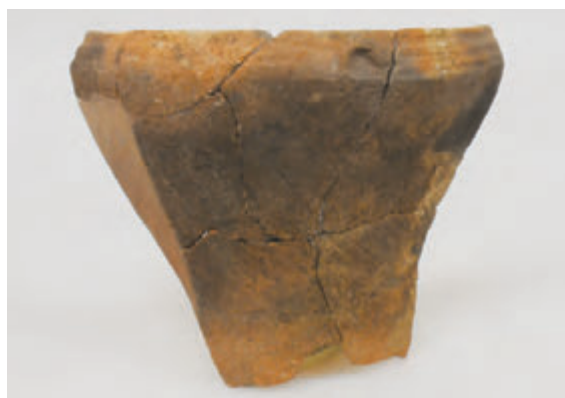
出土土器 (8) 第21图97



出土土器 (8) 第21图94



出土土器 (8) 第21图98



出土土器 (8) 第21图95



出土土器 (8) 第21图99



出土土器 (8) 第21图96



出土土器 (8) 第21图100

图版 20



出土土器 (9) 第22图102



出土土器 (9) 第22图105



出土土器 (9) 第22图106



出土土器 (9) 第22图107



出土土器 (9) 第22图108



出土土器 (9) 第22图109



出土土器 (9) 第22图110



出土土器 (9) 第22図111



出土土器 (10) 第23図114



出土土器 (9) 第22図112



出土土器 (10) 第23図115



出土土器 (10) 第23図113



出土土器 (10) 第23図116



出土土器 (10) 第23図117

图版 22



出土土器 (10) 第23图118



出土土器 (10) 第23图122



出土土器 (10) 第23图119



出土土器 (10) 第23图123



出土土器 (10) 第23图120



出土土器 (10) 第23图124



出土土器 (10) 第23图121



出土土器 (11) 第24图126



出土土器 (11) 第24图128



出土土器 (11) 第24图131



出土土器 (11) 第24图129



出土土器 (11) 第24图132



出土土器 (11) 第24图130



出土土器 (11) 第24图133

图版 24



出土土器 (11) 第24图134



出土土器 (11) 第24图135



出土土器 (11) 第24图136



出土土器 (12) 第25图138



出土土器 (12) 第25图139



出土土器 (12) 第25图140



出土土器 (12) 第25图141



出土土器 (12) 第25图142



出土土器 (12) 第25图147



出土土器 (12) 第25图143



出土土器 (13) 第26图152



出土土器 (12) 第25图144



出土土器 (13) 第26图153



出土土器 (12) 第25图145



出土土器 (13) 第26图154

图版 26



出土土器 (13) 第26图155



出土土器 (13) 第26图161



出土土器 (13) 第26图156



出土土器 (13) 第26图162



出土土器 (13) 第26图158



出土土器 (13) 第26图163



出土土器 (13) 第26图164



出土土器 (13) 第26图165



出土土器 (14) 第27图168



出土土器 (13) 第26图166



出土土器 (14) 第27图169



出土土器 (13) 第26图167



出土土器 (14) 第27图170

图版 28



出土土器 (14) 第27图171



出土土器 (14) 第27图172



出土土器 (14) 第27图173



出土土器 (14) 第27图175



出土土器 (15) 第28图177



出土土器 (15) 第28图178



出土土器 (15) 第28図179



出土土器 (15) 第28図182



出土土器 (15) 第28図180



出土土器 (15) 第28図184



出土土器 (15) 第28図181



出土土器 (15) 第28図185

图版 30



出土土器 (15) 第28图186



出土土器 (16) 第29图190



出土土器 (15) 第28图187



出土土器 (16) 第29图191



出土土器 (16) 第29图188



出土土器 (16) 第29图192



出土土器 (16) 第29图189



出土土器 (16) 第29图193



出土土器 (16) 第29図194



出土土器 (17) 第30図203



出土土器 (16) 第29図196



出土土器 (17) 第30図204



出土土器 (16) 第29図197



出土土器 (17) 第30図205

图版 32



出土土器 (17) 第30图206



出土土器 (17) 第30图210



出土土器 (17) 第30图207



出土土器 (17) 第30图211



出土土器 (17) 第30图209



出土土器 (17) 第30图213



出土土器 (18) 第31图214



出土土器 (18) 第31图217



出土土器 (18) 第31图215



出土土器 (18) 第31图218



出土土器 (18) 第31图216



出土土器 (18) 第31图219



出土土器 (18) 第31图220

图版 34



出土土器 (18) 第31图221



出土土器 (19) 第32图225



出土土器 (18) 第31图222



出土土器 (19) 第32图227



出土土器 (19) 第32图223



出土土器 (19) 第32图224



出土土器 (19) 第32图228



出土土器 (19) 第32図229



出土土器 (20) 第33図234



出土土器 (19) 第32図230



出土土器 (20) 第33図235



出土土器 (20) 第33図232



出土土器 (20) 第33図233



出土土器 (20) 第33図236

图版 36



出土土器 (20) 第33图237



出土土器 (21) 第34图242



出土土器 (21) 第34图244



出土土器 (21) 第34图246



出土土器 (21) 第34图245



出土土器 (21) 第34图247



出土土器 (22) 第35図249



出土土器 (22) 第35図252



出土土器 (22) 第35図250



出土土器 (22) 第35図253



出土土器 (22) 第35図251



出土土器 (22) 第35図254



出土土器 (22) 第35图256



出土土器 (23) 第36图265



出土土器 (23) 第36图263



出土土器 (24) 第37图266



出土土器 (23) 第36图264



出土土器 (24) 第37图267



出土土器 (24) 第37图268



出土土器 (24) 第37图270



出土土器 (24) 第37图283



出土土器 (24) 第37图271



出土土器 (24) 第37图285



出土土器 (24) 第37图274



出土土器 (25) 第38图287



出土土器 (24) 第37图278



出土土器 (25) 第38图288



出土土器 (24) 第37图281



出土土器 (25) 第38图292

图版 40



出土土器 (25) 第38图296



出土土器 (26) 第39图330内面



出土土器 (25) 第38图297



出土土器 (26) 第39图331



出土土器 (26) 第39图327



出土土器 (26) 第39图331内面



出土土器 (26) 第39图328



出土土器 (26) 第39图333



出土土器 (26) 第39图330



出土土器 (26) 第39图334



出土土器 (33) 第46図538~574



出土土器 (34) 第47図575~604

图版 42



出土土器 (35) 第48图605~628



出土土器 (36) 第49图629~657



出土土器 (37) 第50図658~680



出土土器 (38) 第51図681~703

图版 44



出土土器 (39) 第52图704~730



出土土器 (40) 第53图731~758



出土土器 (41) 第54図759~786



出土土器 (42) 第55図787~821



出土土器 (43) 第56图822~852



出土土器 (44) 第57图853~874



出土土器 (45) 第58図875~903



出土土器 (46) 第59図904~921

図版 48



出土土器 (47) 第60図922~946



出土土器 (48) 第61図947~968



出土土器 (49) 第62図969~986



出土土器 (50) 第63図987~1006

図版 50



出土土器 (51) 第64図1007~1031



出土土器 (52) 第65図1032~1060



出土土器 (53) 第66図1061~1092



出土土器 (54) 第67図1093~1109



出土土器 (55) 第68图1110~1142



出土土器 (56) 第69图1143~1179



出土土器 (57) 第70図1180~1211



出土土器 (58) 第71図1212~1233



出土土器 (59) 第72图1234~1260



出土土器 (60) 第73图1261~1285



出土土器 (61) 第74図1286~1312



出土土器 (62) 第75図1313~1343



出土土器 (63) 第76图1344~1373



出土土器 (64) 第77图1374~1403



出土土器 (65) 第78図1404~1432



出土土器 (66) 第79図1433~1455



出土土器 (67) 第80图1456~1478



出土土器 (68) 第81图1479~1505



出土土器 (69) 第82図1506~1521



出土土器 (70) 第83図1522~1538

图版 60



出土土器 (71) 第84图1539~1555



出土土器 (72) 第85图1556~1581



出土土器 (73) 第86図1582~1603



出土土器 (74) 第87図1604~1622



出土土器 (75) 第88图1623~1637



出土土器 (76) 第89图1638~1654



出土土器 (77) 第90図1655~1675



出土土器 (78) 第91図1676~1694

図版 64



出土土器 (79)
第92図1697・1700・1702・1708
1715・1716・1721・1724
1735・1742



赤彩土器 第93図1746~1761



土製耳飾り 第94図1~12

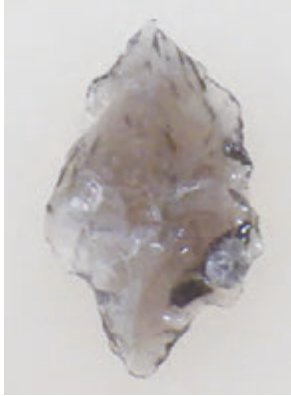


土製円盤 第95図1～32



土製円盤 第95図33～60

図版 66



出土石器・石製品 (1)
第96図1



出土石器・石製品 (1) 第96図2～4



出土石器・石製品
(1)
第96図5～12



出土石器・石製品
(1)
第96図13～16
出土石器・石製品
(2)
第97図17～21



出土石器・石製品
(2)
第97図22~24



出土石器・石製品
(2)
第97図25~27



出土石器・石製品
(2)
第97図28~31
出土石器・石製品
(3)
第97図32



出土石器・石製品
(3)
第98図33~39

図版 68



出土石器・石製品
(3)
第98図40・41
出土石器・石製品
(4)
第99図42~47



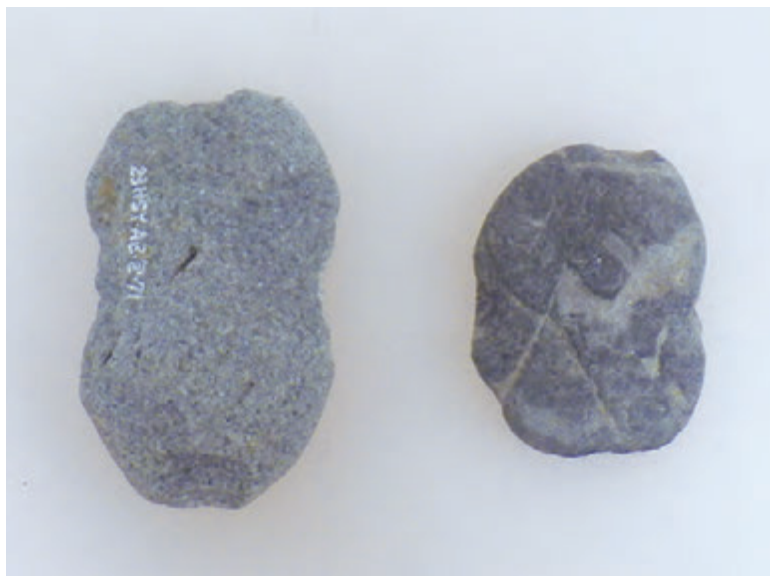
出土石器・石製品
(4)
第99図49・50
出土石器・石製品
(5)
第100図51~57



出土石器・石製品
(5)
第100図58~64



出土石器・石製品 (4) 第99図48



出土石器・石製品 (5) 第100図65・66



出土石器・石製品 (5) 第100図67



出土石器・石製品 (5) 第100図68



遺物包含層出土辰砂

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかにしいせきに							
書名	中西遺跡Ⅱ							
副書名	熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅺ							
巻次	—							
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第34集							
編集者名	松田 哲							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2019（平成31）年3月22日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(°′″)	(°′″)		(㎡)	
なかにしいせき 中西遺跡	熊谷市中西四丁目 2400番1、2400番9、 2401番地1地先ほか	11202	114	36° 8′ 57″	139° 23′ 45″	第1次 20110104 ～ 20110331 第2次 20120115 ～ 20120330 第3次 20130201 ～ 20130329	1,330	区画整理 街路築造 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中西遺跡	集落跡 墓 遺物包含層	縄文時代後 ・晩期	遺物包含層	縄文土器・土 製耳飾り・土 製円盤・石器・ 石製品		縄文時代後期中葉から晩期中 葉まで絶え間なく続くことが確 認された。		

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第34集

中西遺跡Ⅱ

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅱ－

平成31年3月22日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／巧和工芸印刷株式会社